上野原市埋蔵文化財調査報告書　第１集

山梨県上野原市
市内遺跡発掘調査報告書

２００６

上野原市教育委員会

上野原市埋蔵文化財調査報告書　第１集

山梨県上野原市
市内遺跡発掘調査報告書

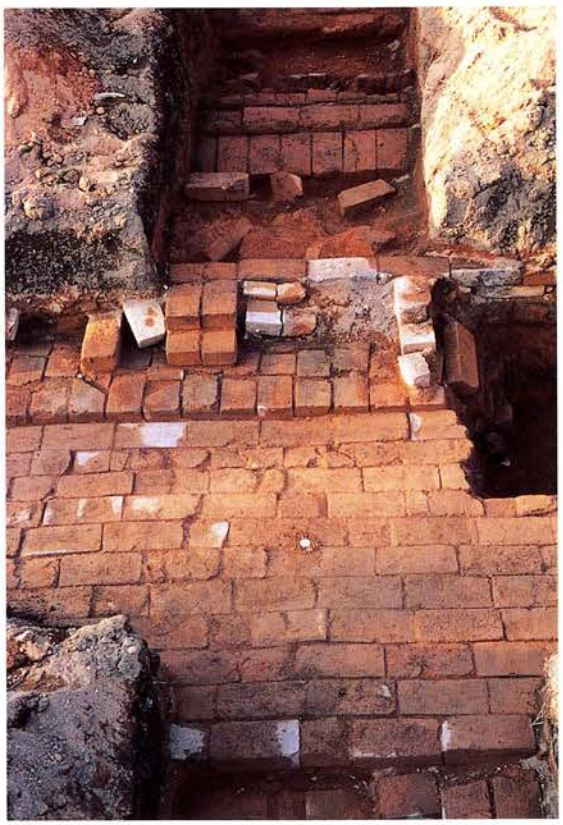
2006

上野原市教育委員会

西ノ原古墳石室全景

牧野遺跡出土の煉瓦焼成窯全景（南から）

窯中段（西から）



窯床面状況（南から）

序

上野原市は、平成17年２月に上野原町と秋山村が合併して誕生した新市であり、緑豊かな山々と清流に恵まれ、山梨県東の玄関口として大きな役割を担っています。

上野原市には有形無形の文化財が数多く知られています。周知の埋蔵文化財包蔵地と呼ばれる遺跡の数は162ヶ所にのぼり、さらに未知の遺跡も推測されています。旧上野原町、及び上野原市教育委員会は、こうした遺跡の内容を把握するとともに遺跡保護と開発工事との調整を図るため、国・県から補助金を受けて試掘調査を実施してまいりました。

本書は、この調査結果をまとめた記録報告書です。この中には、縄文時代の集落跡から明治時代の煉瓦焼成窯に至るまで貴重な調査成果が収められており、先人たちが歩んでこられた数千年の歴史の一端を垣間見ることができます。幸いなことに、これら遺跡の一部は、関係者のご努力で現地に保存されることとなりました。

最後に、これまでの調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関並びに調査・整理作業に携われた多くの方々に厚くお礼を申し上げるとともに、今後とも埋蔵文化財保護に関し市民の皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成18年３月

上野原市教育委員会
教育長　網野清治

例　言

1．本書は、山梨県旧上野原町及び上野原市内で実施された埋蔵文化財に係る調査報告書である。
2．調査は、文化庁・山梨県の補助金を受け、平成６年度～平成17年度まで実施された。
3．調査は、平成16年度まで上野原町教育委員会が実施し、平成17年２月13日以降は町村合併によって誕生した上野原市教育委員会が実施した。調査組織は次頁に記した。
4．本書の執筆・編集は社会教育課社会教育担当の小西直樹が行った。
5．調査に当たり、地元区長を始めとする住民や地権者、関係事業者の方々からご協力をいただいた。
6．調査から本書の作成までを通して、つぎの機関・諸氏のご指導・ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同、職名は調査時）
山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、帝京大学山梨文化財研究所、坂本美夫・森原明廣（山梨県埋蔵文化財センター）、宮澤公雄・平野　修（帝京大学山梨文化財研究所）、北村真一（山梨大学）、奈良泰史（山梨県都留市役所）、杉本正文・福田正人（山梨県大月市教育委員会）、室伏徹（山梨県勝沼町教育委員会）、国見　徹（神奈川県大磯町教育委員会）、松崎元樹（東京都埋蔵文化財センター）、小野田滋（財団法人鉄道総合技術研究所）、田宮美弘（株式会社第三開発）、清野利明（東京都日野市教育委員会）、金子祐正（全国赤煉瓦協会）、中村三郎（陶芸家）
7．本書に掲載した遺跡の調査成果は、これまでに各種の刊行物他において報告がなされてきたが、本書の内容と相違がある場合は本書をもって現時点での最終報告とする。
8．本書にかかわる出土品・記録図面等は、一括して上野原市教育委員会が保管している。

凡　例

1．本書に転載した地図はつぎのとおりである。
遺跡位置図：国土地理院発行の５万分の１地形図
調査地点図：昭和56年国土地理院の承認を得て調製した５千分の１地形図
第58図：明治43年陸地測量部発行の５万分の１地形図（上野原）
2．遺構・遺物図版
⑴　遺構の縮尺は図版スケールに明記した。
⑵　遺構図の「240m」といった数値は標高を示す。
⑶　遺物の縮尺は下記を基本とし、図版スケールに明記した。
土器・石器・鉄製品１／３。大型石器１／６。小型石器２／３。煉瓦１／４。
3．試掘溝の土層断面図は模式図である。
4．表
⑴　石器の法量のうち、長さ・幅については実測図の縦・横で計測したが、横刃形石器・石匙のみ実測図の縦を幅、横を長さとして計測した。いずれも最大値を示している。
⑵　表中の法量で（　）内の数値は残存値を示す。
⑶　色調の判別には「新版標準土色帖」（日本色彩研究所色票監修　1988）を利用した。

調査組織

調査主体	上野原町教育委員会 （～平成17年２月12日）	上野原市教育委員会
事務局	教育長　遠藤　諦三（平成６年10月～10年10月） 水上　和男（10年10月～12年10月） 水越　偉成（12年10月～17年２月） 社会教育課長　久島　啓（7年4月～8年9月・11年4月～12年3月） 水越　辰巳（８年10月～11年３月） 臼井　和文（12年４月～16年３月） 酒井　信俊（16年４月～17年２月） 係長　片伊木卓男（３年８月～８年９月） 高橋　武久（８年10月～12年３月）課長補佐 梅原　秀雄（12年４月～15年３月） 織田　隆義（15年４月～17年２月） 担当者　小西　直樹	教育長　網野　清治 社会教育課長　小笠原徳喜 社会教育担当リーダー 織田　隆義 担当者　小西　直樹
参加者	加藤　文宣　関口　和男　長田　貞夫　太葉田孝一 富田　寔　杉本　征男　会津　一　網野　広明 網野　君子　桑原　昭三　片伊木由香　大久保寛俊 大久保直人　水越　数男　白鳥　晴一　大久保　実 白鳥　茂男　鷹取　民子　水越　悦子　石田　里枝 一宮　富子　小山田延章　白鳥　芳亀　加藤　正久 加藤　垣子　安藤　猛夫　和智　瑞江　上条　文子 船木　令子　会津　源　桑原　福寿　村島　敬一 中川　仁　武原　孝之　奈良　春雄　小俣　和男 志村　節子　宇津木映子　里吉　昭子　築地　文博 臼井　茂美　河野　彰夫　権藤みどり　高倉　礼子 湯川　光徳　水野　俊雄　網野　一　石井　延子 佐渡　順子　降矢　本正　中川　愛子　森山　一 冨岡ます美　安藤　寿恵　富田　初江　志村　尚美 古根村典子　小俣　幸男　草間　正彦　安藤　宇平 出羽　和男	加藤　文宣　富田　寔 小俣　和男　冨岡ます美 古根村典子

（敬称略・順不同）

目　次

序　　例言　　凡例

第Ⅰ章　上野原市の埋蔵文化財……1

第Ⅱ章　遺跡調査

1　関山遺跡……4
2　野田尻Ⅰ遺跡……6
3　大野字上ノ久保地点……10
4　桐原字向山地点……12
5　田代遺跡……14
6　狐原Ⅰ遺跡……16
7　狐原Ⅱ遺跡……18
8　塚場古墳群……20
9　沢渡Ⅱ遺跡……22
10　桐坪遺跡……24
11　新井遺跡……26
12　原・郷原遺跡……30
13　牧野遺跡……34
14　根本山遺跡……56
15　黒ノ木遺跡……64
16　西ノ原古墳……66
17　山風呂遺跡……72
18　用竹神戸遺跡……74
19　中群遺跡……76
20　大間々遺跡……78
21　東大野遺跡……82
22　裏大越路遺跡……84
23　寺畑遺跡……88
24　当月遺跡……94
25　荻野遺跡……102
26　上野原字大道地点……104
27　桐原字井太家地点……106
28　上野原字エビ沢地点……108
29　上野原字下新町地点……110
30　東区遺跡……112

挿図目次

第１図　上野原市の位置 …… 1
第２図　調査地点分布図 …… 3
第３図　関山遺跡位置図 …… 4
第４図　同調査地点 …… 4
第５図　同調査区平面・土層図 …… 5
第６図　野田尻Ⅰ遺跡位置図 …… 6
第７図　同調査地点 …… 6
第８図　同調査区平面・土層図 …… 7
第９図　同調査区土層図 …… 8
第10図　同出土遺物 …… 9
第11図　大野字上ノ久保地点位置図 ……10
第12図　同調査地点 ……10
第13図　同調査区平面・土層図 ……11
第14図　桐原字向山地点位置図 ……12
第15図　同調査地点 ……12
第16図　同調査区平面・土層図 ……13
第17図　田代遺跡位置図 ……14
第18図　同調査地点 ……14
第19図　同調査区平面・土層図 ……15
第20図　狐原Ⅰ遺跡位置図 ……16
第21図　同調査地点 ……16
第22図　同調査区平面・土層図 ……17
第23図　狐原Ⅱ遺跡位置図 ……18
第24図　同調査地点 ……18
第25図　同調査区平面・土層図 ……19
第26図　塚場古墳群位置図 ……20
第27図　同調査地点 ……20
第28図　同調査区平面・土層図 ……21
第29図　沢渡Ⅱ遺跡位置図 ……22
第30図　同調査地点 ……22
第31図　同調査区平面・土層図 ……23
第32図　桐坪遺跡位置図 ……24
第33図　同調査地点 ……24
第34図　同調査区平面・土層図 ……25
第35図　新井遺跡位置図 ……26
第36図　同調査地点 ……26
第37図　同調査区平面・土層図 ……27
第38図　新井遺跡出土遺物 ……29
第39図　原・郷原遺跡位置図 ……30
第40図　同調査地点 ……30
第41図　同第１地点調査区平面図 ……31
第42図　同第１地点調査区土層図 ……32
第43図　同第２地点調査区平面・土層図、
　　出土遺物 ……33
第44図　牧野遺跡位置図 ……34
第45図　同調査地点 ……34
第46図　同第１～２地点調査区平面・土層図 ……35
第47図　同第３地点調査区平面・土層図、
　　出土遺物 ……37
第48図　煉瓦窯全体図 ……39
第49図　煉瓦刻印 ……41
第50図　煉瓦窯土層図 ……44
第51図　煉瓦窯平面・断面図(1) ……45
第52図　煉瓦窯平面・断面図(2) ……47
第53図　煉瓦窯土層図 ……49
第54図　煉瓦実測図(1) ……52
第55図　煉瓦実測図(2) ……53
第56図　煉瓦実測図(3)・鉄製品 ……54
第57図　煉瓦の形状と種類 ……55
第58図　中央線沿線図 ……55
第59図　根本山遺跡位置図 ……56
第60図　同調査地点 ……56
第61図　同第１地点調査区平面・土層図 ……57
第62図　同第１地点遺構平面・土層断面図 ……59
第63図　同第１地点出土遺物 ……61
第64図　同第２～４地点調査区平面・土層図、
　　出土遺物 ……63
第65図　黒ノ木遺跡位置図 ……64
第66図　同調査地点 ……64
第67図　同調査区平面・土層図 ……65
第68図　西ノ原古墳位置図 ……66
第69図　同調査地点 ……66
第70図　同調査区平面図、出土遺物 ……67
第71図　西ノ原古墳平面・断面図 ……70

第72図　西ノ原古墳展開図 ……71
第73図　山風呂遺跡位置図 ……72
第74図　同調査地点 ……72
第75図　山風呂遺跡調査区平面・土層図 ……73
第76図　用竹神戸遺跡位置図 ……74
第77図　同調査地点 ……74
第78図　同調査区平面・土層図 ……75
第79図　中群遺跡位置図 ……76
第80図　同調査地点 ……76
第81図　同調査区平面・土層図 ……77
第82図　大間々遺跡位置図 ……78
第83図　同調査地点 ……78
第84図　同調査区平面図 ……79
第85図　同調査区土層図 ……80
第86図　同出土遺物 ……81
第87図　東大野遺跡位置図 ……82
第88図　同調査地点 ……82
第89図　同調査区平面・土層図、出土遺物 ……83
第90図　裏大越路遺跡位置図 ……84
第91図　同調査地点 ……84
第92図　同調査区平面図 ……85
第93図　同調査区土層図、倒木痕土層図 ……86
第94図　同遺構平面・土層断面図、出土遺物 ……87
第95図　寺畑遺跡位置図 ……88
第96図　同調査地点 ……88
第97図　同調査区平面・土層図 ……89
第98図　同遺構平面・土層断面図 ……90
第99図　同出土土器 ……92
第100図　同出土石器 ……93
第101図　当月遺跡位置図 ……94
第102図　同調査地点 ……94
第103図　同調査区平面・土層図 ……95
第104図　同遺構平面・土層断面図 ……98
第105図　同出土遺物(1) ……99
第106図　同出土遺物(2) ……100
第107図　同出土遺物(3) ……101
第108図　荻野遺跡位置図 ……102
第109図　同調査地点 ……102
第110図　同調査区平面・土層図 ……103
第111図　上野原字大道地点位置図 ……104
第112図　同調査地点 ……104
第113図　同調査区平面・土層図 ……105
第114図　桐原字井太家地点位置図 ……106
第115図　同調査地点 ……106
第116図　同調査区平面・土層図 ……107
第117図　上野原字エビ沢地点位置図 ……108
第118図　同調査地点 ……108
第119図　同調査区平面・土層図 ……109
第120図　上野原字下新町地点位置図 ……110
第121図　同調査地点 ……110
第122図　同調査区平面・土層図、出土遺物 ……111
第123図　東区遺跡位置図 ……112
第124図　同調査地点 ……112
第125図　同調査区平面・土層図 ……113

表目次

第１表　埋蔵文化財調査一覧 …… 2
第２表　野田尻Ⅰ遺跡出土遺物集計表 …… 8
第３表　新井遺跡出土遺物集計表 ……28
第４表　原・郷原遺跡・第１地点出土遺物
集計表 ……32
第５表　牧野遺跡・第３地点出土遺物集計表 ……36
第６表　煉瓦観察表 ……51
第７表　根本山遺跡・第１地点出土遺物集計表 …60
第８表　大間々遺跡出土遺物集計表 ……81
第９表　寺畑遺跡出土遺物集計表 ……89
第10表　同出土石器一覧表 ……91
第11表　当月遺跡出土遺物集計表 ……96
第12表　同出土石器一覧表 ……97

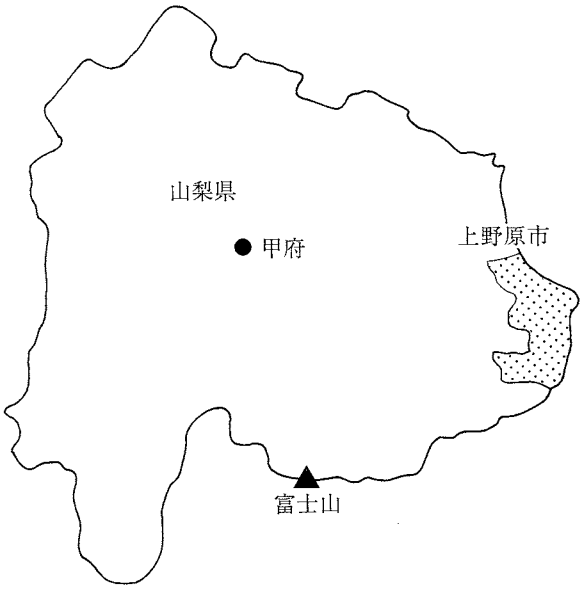
第Ⅰ章　上野原市の埋蔵文化財

第１節　上野原市の位置と遺跡

上野原市は山梨県東端の県境に位置し、平成17年に上野原町と秋山村が合併して誕生した新市である。

市域は関東山地や丹沢山塊に囲まれ、面積の約８割が山林で占められる。市の中央部を桂川（相模川）が流れ、支流の鶴川・秋山川の沿岸に狭小な河岸段丘地形が点在する。桂川と鶴川の合流地点に市内最大の段丘面があり、国道20号（旧甲州街道）を中心に市街地化されている。

市の東側が東京都檜原村や神奈川県津久井郡に接する地理的要因から、古来より関東地方との関係が強い。近世には江戸・甲府・信州を結ぶ甲州街道の宿場が４宿置かれ、桂川の水運とともに東西交通の要衝地として栄えた。



第１図　上野原市の位置

市内の遺跡は河川沿いの段丘面や緩斜面地に多く分布しており、現在までに162ヵ所が確認されている。遺跡の時期は縄文時代が最も多く、弥生時代は極めて少ないが、続く古墳～奈良・平安時代にかけて多く見られる。中世の城館や砦跡も比較的多く分布している。

第２節　調査状況

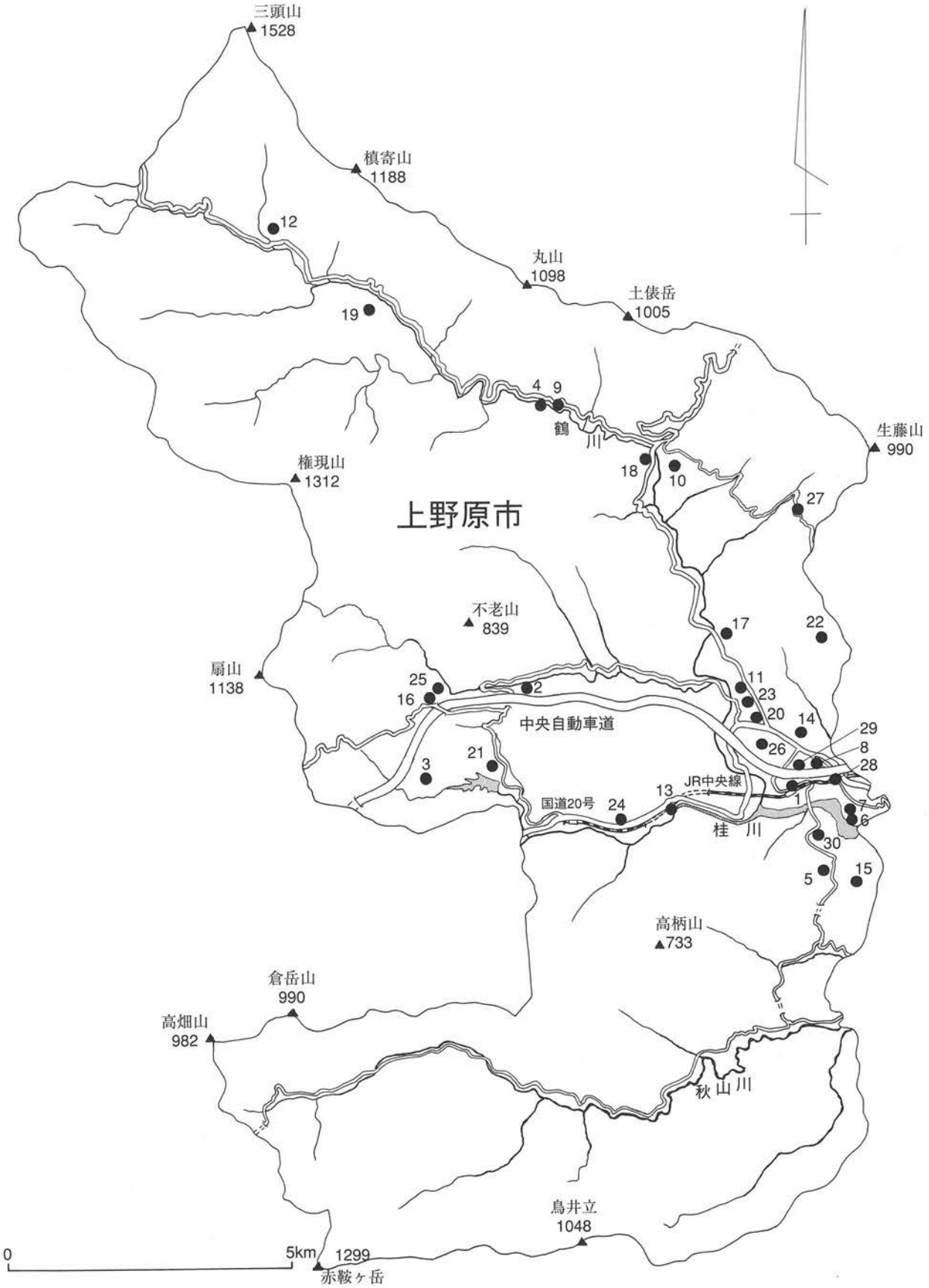
上野原市は首都60km 圏内に位置し、JR 中央線や国道20号・中央自動車道などの交通網が発達している。こうした交通の利便性による民間開発に加え、生活環境や農林業の基盤整備など種々の要因によって開発工事の件数は多い。遺跡調査の大半は、このような工事の事前調査として実施されている。

旧上野原町においては、平成６年度以降、国・県費の補助による遺跡試掘調査を実施し、遺跡の状況を早期に把握することで開発工事との調整を図った。また、1,000m²を越える大規模開発については、工事予定地における遺跡の有無や範囲を把握するための試掘調査を実施し、遺跡の取扱いに万全を期した。こうしたシステムは新市に引き継がれている。

上野原市の遺跡台帳は、過去の分布調査（旧上野原町域は昭和47年実施、旧秋山村域は平成３年実施）をもとに作られ随時更新されている。旧秋山村域の場合、平成３年度の村誌編纂事業に伴う遺跡分布調査で、遺跡数が従来知られていた数の２倍を越え、39遺跡の存在が明らかになっている。市内全域においては、いまだ知られていない遺跡が相当数あるものと考えられることから、試掘を含めた遺跡の確認調査を今後も積極的に推進する必要がある。

番号	遺跡名・地点名	所　在　地	原　　因	調査期間	調査内容	調査後の取扱い
1	関山遺跡・第１地点	上野原字関山823－4	個人事務所建設	6.9.1～２	試掘	工事実施
	関山遺跡・第２地点	上野原字関山823－5	個人住宅建設	8.8.28	試掘	工事実施
2	野田尻Ⅰ遺跡	野田尻字背戸378他	個人住宅建設	6.9.19～10.1	試掘	本調査(記録保存)
3	大野字上ノ久保地点	大野字上ノ久保6053他	埋立て	8.3.26	試掘	工事実施
4	椰原字向山地点	椰原字向山13893他	県立自然の里建設	8.7.29～8.1	試掘	工事実施
5	田代遺跡・第１地点	鶴島字田代3034	個人住宅建設	8.11.21～22	試掘	工事実施
	田代遺跡・第２地点	鶴島字田代3107－1他	給水用配水池建設	16.11.16	試掘	工事実施
6	狐原Ⅰ遺跡	新田69－5	携帯電話基地局	17.12.12	試掘	工事実施
7	狐原Ⅱ遺跡	新田22－1他	町道建設	8.12.4～6、9.1.28	試掘	本調査(記録保存)
8	塚場古墳群	上野原字塚場1002	集合住宅建設	8.12.9	試掘	工事実施
9	沢渡Ⅱ遺跡	椰原字沢渡10737他	県道改良	9.5.6～７	試掘	工事実施
10	桐坪遺跡	椰原字桐坪6116他	農道改良	9.9.1～２	試掘	工事実施
11	新井遺跡	上野原字新井4511他	宅地造成	9.9.18～22	試掘	現地保存
12	原・郷原遺跡・第１地点	西原4666他	農道改良	9.10.6～13	試掘	本調査(記録保存)
	原・郷原遺跡・第２地点	西原字向井4399－1他	携帯電話基地局	11.2.24～25	試掘	工事実施
13	牧野遺跡・第１地点	四方津字ノジノジ795	個人住宅建設	10.9.8	試掘	工事実施
	牧野遺跡・第２地点	四方津字牧野道下424－2他	大型店舗建設	11.2.22	試掘	工事実施
	牧野遺跡・第３地点	四方津字牧野道下407他	大型店舗建設	12.11.2～12.15	試掘	現地保存のうえ工事
14	根本山遺跡・第１地点	上野原字新町1364－1他	分譲宅地造成	10.10.2～11.13	試掘	現地保存のうえ工事
	根本山遺跡・第２地点	上野原字新町1391他	道路建設	11.6.29、7.1	試掘	工事実施
	根本山遺跡・第３地点	上野原字新町1334－2他	分譲宅地造成	13.11.26	試掘	工事実施
	根本山遺跡・第４地点	上野原字新町1435－1他	個人住宅建設	14.5.13	試掘	工事実施
15	黒ノ木遺跡	鶴島字黒ノ木3283－12	会社保養所建設	10.12.24	試掘	工事実施
16	西ノ原古墳・第１地点	大野字西ノ原5372	不時発見	11.4.26～6.22	現況確認	現地保存(史跡指定)
	西ノ原古墳・第２地点	大野字西ノ原5404	分布調査	12.2.21～28	試掘	現地保存
17	山風呂遺跡	上野原字山風呂原5354－1他	住宅取付け道路建設	11.7.28	試掘	工事実施
18	用竹神戸遺跡	椰原2367－9	役場支所建設	12.3.9	試掘	工事実施
19	中群遺跡	西原1159他	林道改良	12.9.6	試掘	工事実施
20	大間々遺跡	上野原字大間々3832－1他	新庁舎等建設	12.10.30～11.6	試掘	本調査(記録保存)
21	東大野遺跡	大野字熊野前1341－1	集会所建設	13.12.17	試掘	工事実施
22	裏大越路遺跡	上野原字裏大越路7806他	老人介護施設建設	15.3.3～６	試掘	工事実施
23	寺畑遺跡	上野原字寺畑4014－7他	分譲宅地造成	15.9.16～18	試掘	現地保存のうえ工事
24	当月遺跡	四方津字当月979－1他	店舗建設	15.9.29～10.1	試掘	現地保存のうえ工事
25	荻野遺跡	大野字下ノ原5422他	給水用減圧槽建設	15.12.8	試掘	工事実施
26	上野原字大道地点	上野原字大道2391－1	分譲宅地造成	15.12.15	試掘	工事実施
27	椰原字井太家地点	椰原字井太家3966他	県道改良	16.6.16	試掘	工事実施
28	上野原字エビ沢地点	上野原字エビ沢360他	分譲宅地造成	16.9.22	試掘	工事実施
29	上野原字下新町地点	上野原字下新町654他	分譲宅地造成	17.8.18	試掘	工事実施
30	東区遺跡	鶴島字反保1855－3	個人住宅建設	17.9.2	試掘	工事実施

第１表　埋蔵文化財調査一覧

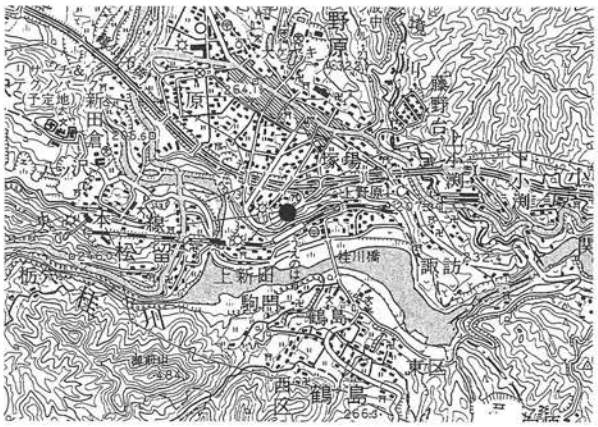

三頭山
1528
槙寄山
1188
丸山
1098
土俵岳
1005
生藤山
990
権現山
1312
上野原市
不老山
839
扇山
1138
中央自動車道
JR中央線
国道20号
桂川
鶴川
高柄山
▲733
倉岳山
990
高畑山
982
秋山川
鳥井立
1048
1299
赤鞍ヶ岳
0
5km
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

第２図　調査地点分布図

1　関山（せきやま）遺跡

関山遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置する。昭和62年の発掘調査で、縄文時代早期の集石１基、及び中期後葉の竪穴住居址１軒、配石１基などが検出された他(1)、時期不明の土坑や小穴列が数基検出されている(2)。今回報告する調査地点は２ヶ所で、いずれも遺跡北側の畑地に位置する。

(1)山梨県埋蔵文化財センター調査報告第36集『関山遺跡Ⅰ』山梨県教育委員会1988。(2)上野原町埋蔵文化財調査報告書第２集『川合遺跡・関山遺跡』上野原町教育委員会1989



第３図　遺跡位置

第１地点

調査目的　個人事務所建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字関山823－4

調査期間　平成６年９月１日・２日

調査面積　８m²（対象面積146m²）

概　　要

建設予定地に２m 四方の試掘坑を２ヶ所設定し、深さ1.2m のローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

第２地点

調査目的　個人住宅建設に伴う試掘調査

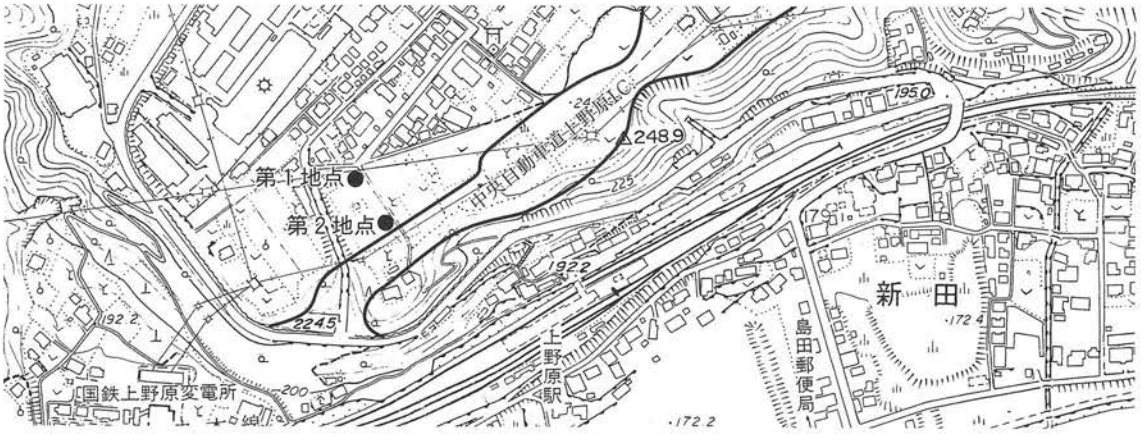
調 査 地　上野原市上野原字関山823－5

調査期間　平成８年８月28日

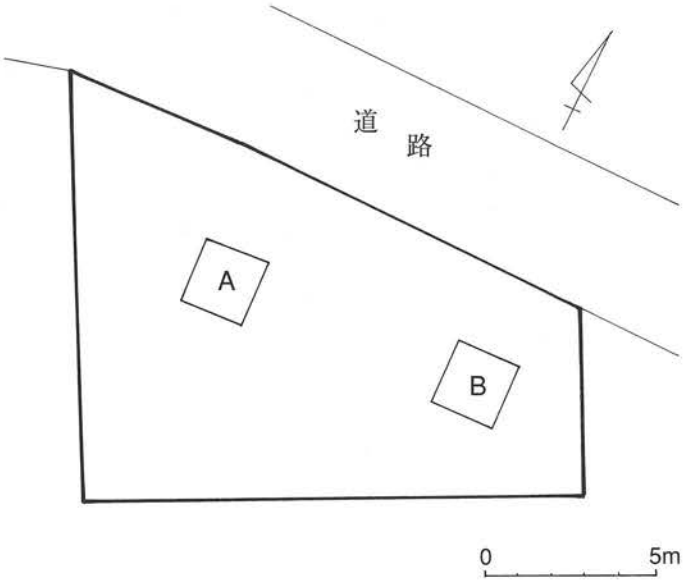
調査面積　８m²（対象面積375m²）

概　　要

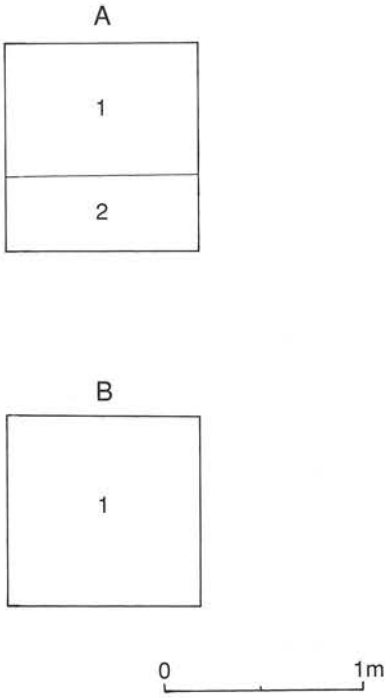
建設予定地に２m 四方の試掘坑を２ヶ所設定し、深さ0.7m のローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



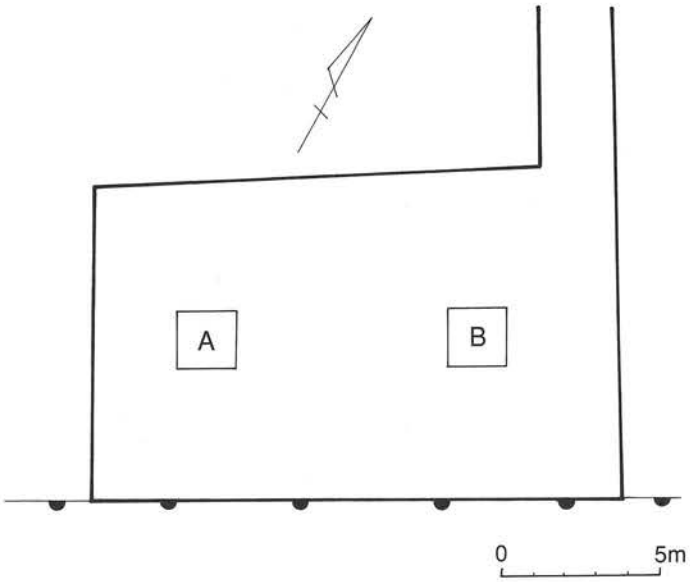
第４図　調査地点



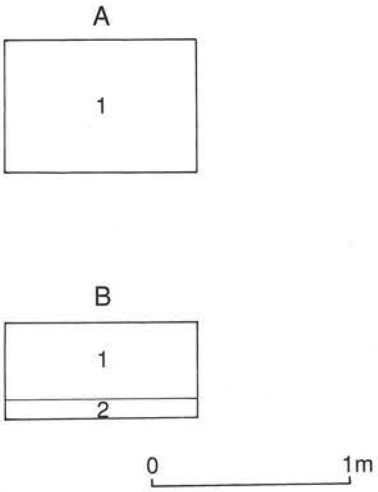
第１地点



関山遺跡第１地点土層
1　表土　　客土。ローム塊を多く含む。
2　暗褐色土　粘性・締まり弱い。



第２地点

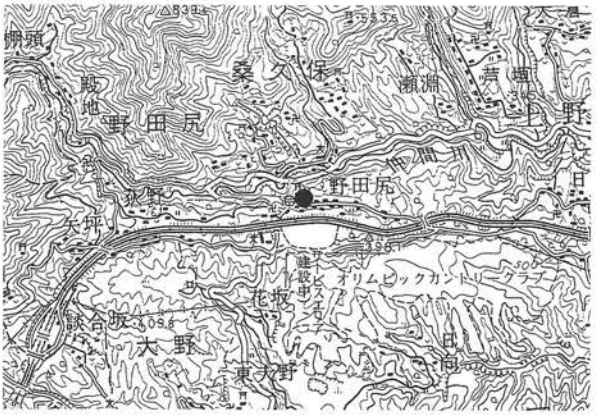


関山遺跡第２地点土層
1　表土　　耕作土。
2　暗褐色土

第５図　調査区平面・土層図

2　野田尻（のたじりいち）Ⅰ遺跡

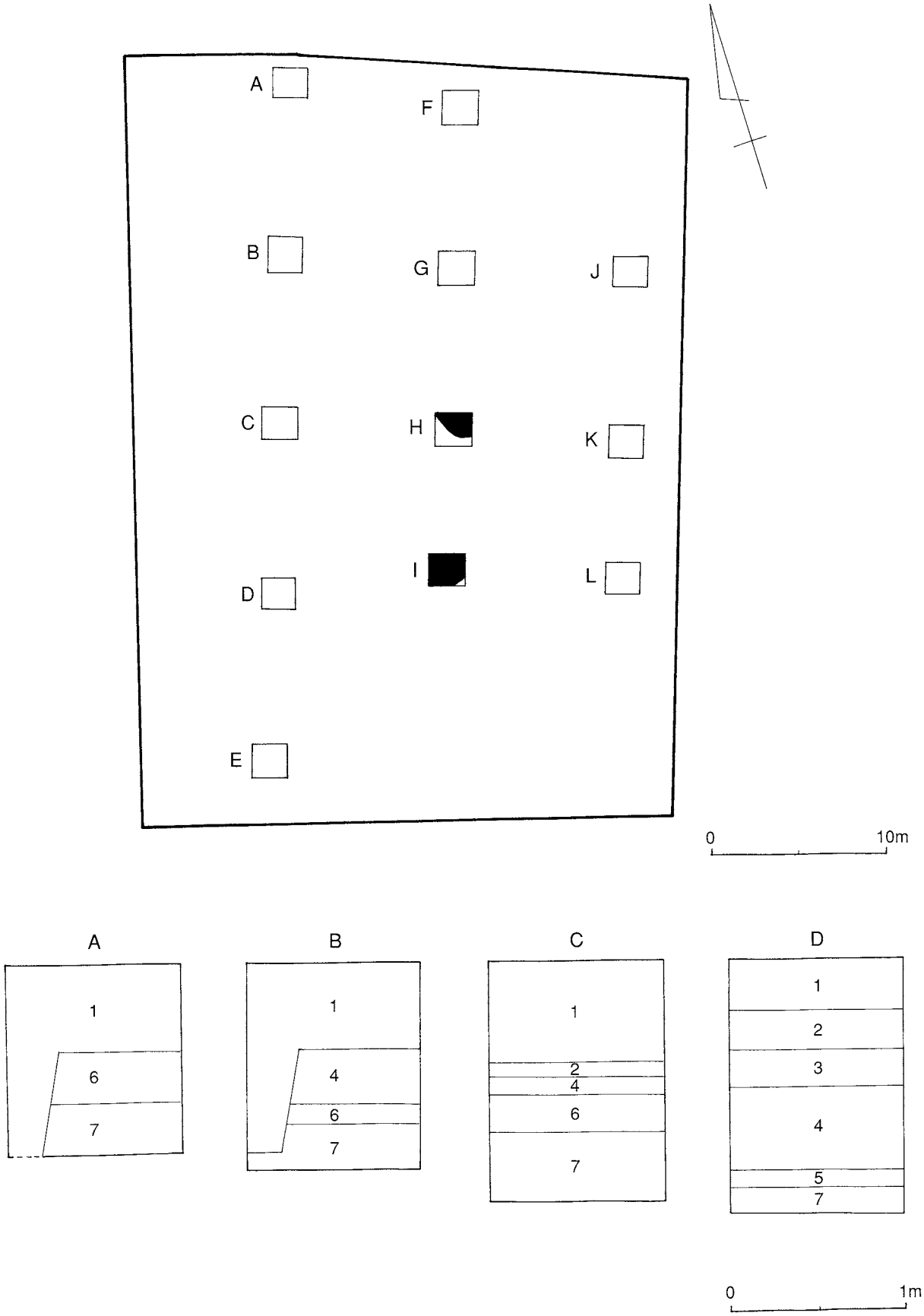
調査目的　個人住宅建設に伴う試掘調査
調 査 地　上野原市野田尻字背戸378他
調査期間　平成６年９月19日～10月１日
調査面積　48m²（対象面積1,570m²）
概　　要



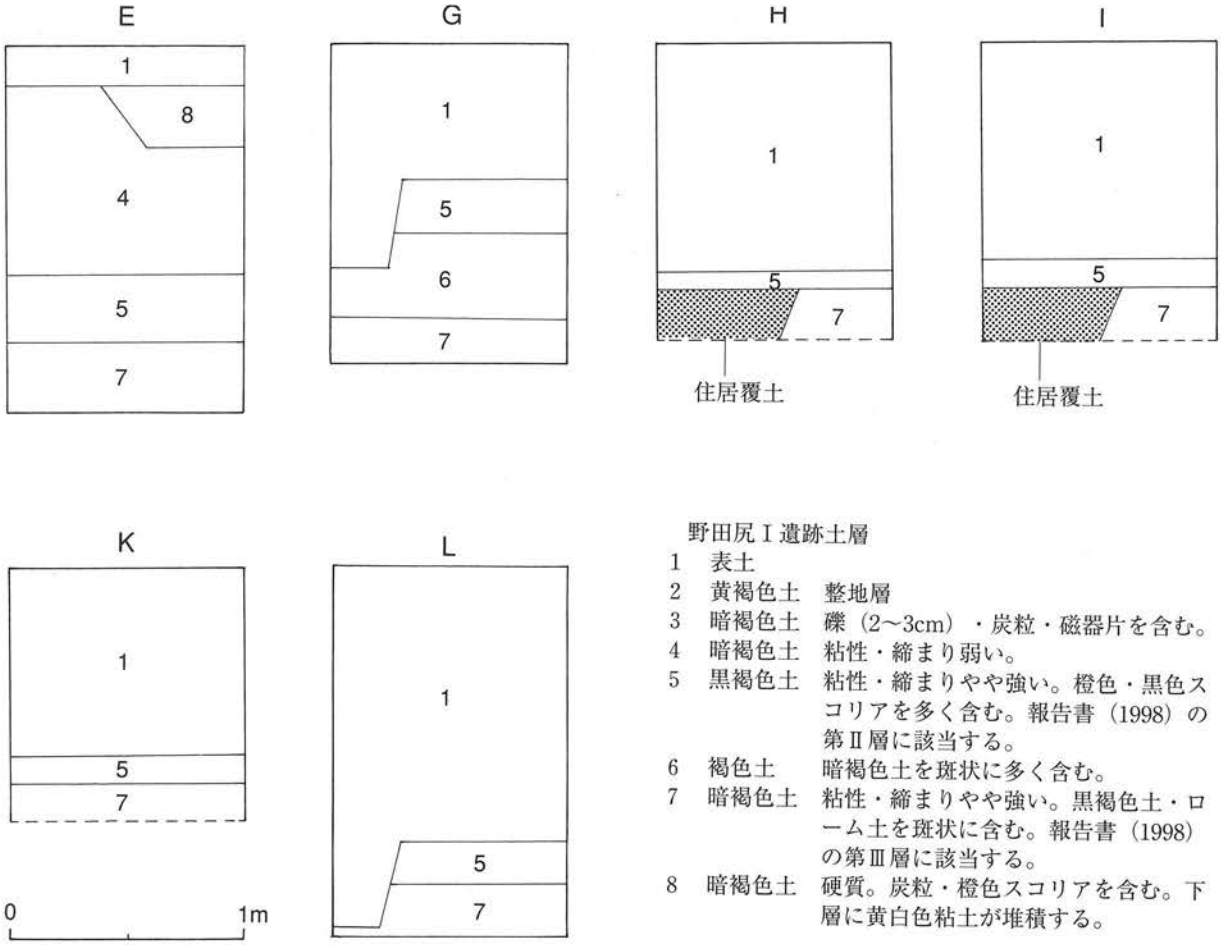
第６図　遺跡位置

野田尻Ⅰ遺跡は仲間川南岸の河岸段丘面に位置し、縄文・弥生・平安時代の遺物散布地である。調査地点は遺跡西側の畑地に位置する。建設予定地に２ｍ四方の試掘坑を12ヶ所設定し、最深1.2ｍのローム面まで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、基本層序は表土・黒褐色土・暗褐色土・ローム層であった。遺構は縄文時代の竪穴住居址２軒が暗褐色土中で確認された。遺物は遺構を中心に多数の縄文土器・石器が出土した。このため、翌平成７年度に発掘調査を実施した（上野原町埋蔵文化財調査報告書第７集『野田尻Ⅰ遺跡』上野原町教育委員会1998）。

第７図　調査地点



第8図　調査区平面・土層図



野田尻Ⅰ遺跡土層

1　表土
2　黄褐色土　整地層
3　暗褐色土　礫（2～3cm）・炭粒・磁器片を含む。
4　暗褐色土　粘性・締まり弱い。
5　黒褐色土　粘性・締まりやや強い。橙色・黒色スコリアを多く含む。報告書（1998）の第Ⅱ層に該当する。
6　褐色土　暗褐色土を斑状に多く含む。
7　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。黒褐色土・ローム土を斑状に含む。報告書（1998）の第Ⅲ層に該当する。
8　暗褐色土　硬質。炭粒・橙色スコリアを含む。下層に黄白色粘土が堆積する。

第９図　調査区土層図

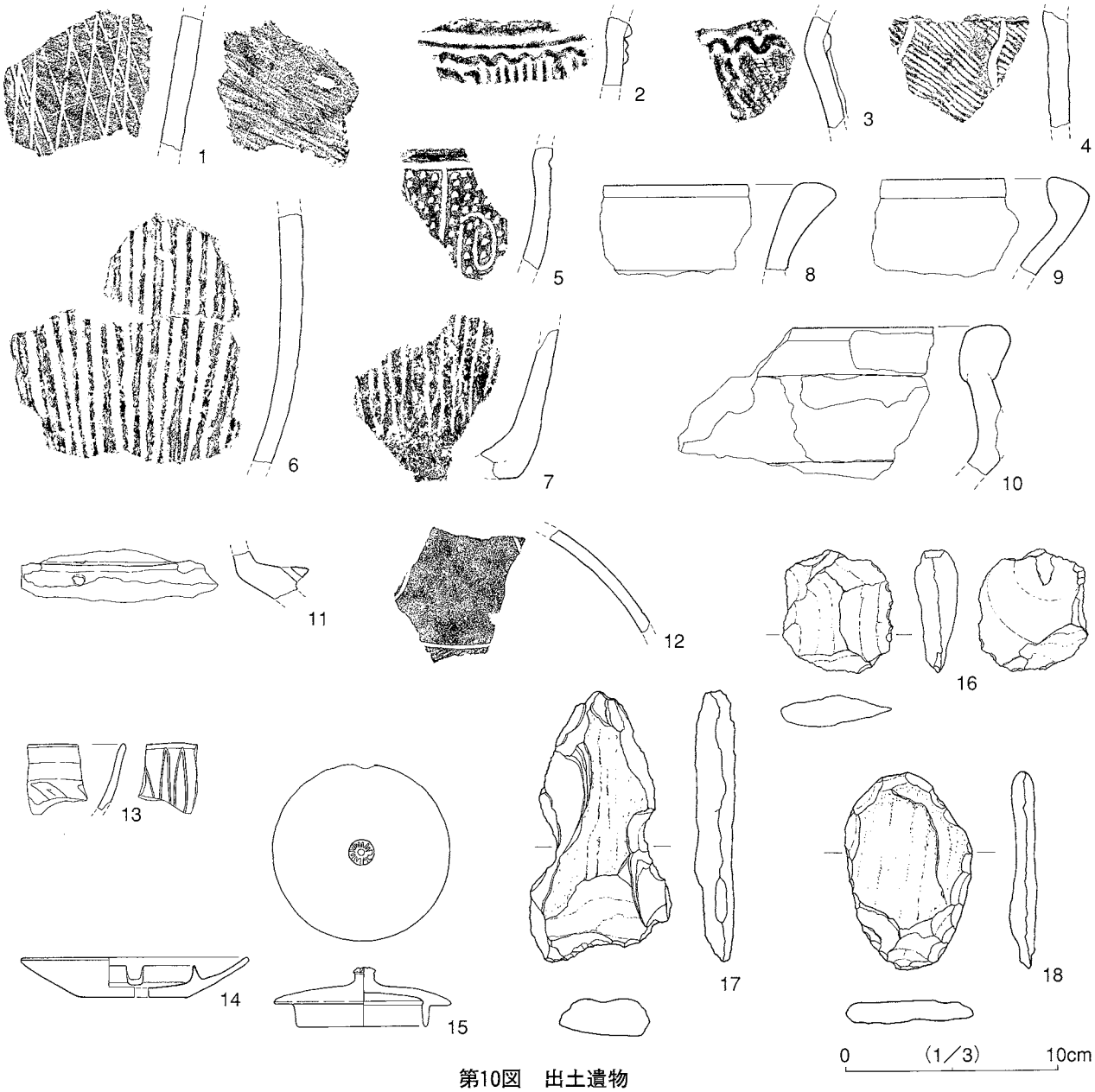
試掘坑	縄文時代		奈良・平安時代	近世以降
	土　器	石　器		
A	3（早期１・中期２）	2（スクレイパー・チャート剥片）	1（土師器）	
B		1（打製石斧）		
C	3（中期２・後期１）	3（打製石斧）		
D		1（打製石斧）		3（陶磁器）
E	2（中期１・後期１）			6（陶磁器）
F				5（陶磁器）
G	1（中期）			1（陶磁器）
H	3（中期）			3（陶磁器）
I	59（中期58・後期１）	6（打製石斧）		3（陶磁器２・瓦１）
J				
K	1（中期）		1（土師器）	3（陶磁器２・鉄釘１）
L	5（中期）			2（陶磁器１・鉄鎌１）
合計	77	13	2	26

第２表　野田尻Ⅰ遺跡出土遺物集計表　　（　　）は内訳

出土遺物（第10図・図版１）

１～12は縄文土器。１、外面に沈線文、内面に条痕文、胎土に多量の繊維痕。早期後半・鵜ヶ島台式。２～11は中期後半・曽利式に比定される。２、条線地に波状貼付文。３、縄文地に波状貼付文。４、沈線区画の縄文地に沈線文が垂下する。５、沈線区画の刺突文地に縦位・曲線的な沈線文。６・７、条線地。器面は黄褐色で、内面は吸炭のため黒褐色を呈する。８・９は深鉢の無文口縁で、８は頸部に沈線。10、浅鉢。内外面は丁寧に磨かれ、一部に赤彩が残る。11、壺型の有孔鍔付土器。12、注口土器と思われ、胴部は球状を呈する。内外面は丁寧に磨かれ、沈線区画の帯縄文が施される。縄文後期・堀之内２式。13は平安時代の土師器で、いわゆる甲斐型坏である。内面に放射状暗文。14～15は近世以降の土器。14は灯明皿。15は蓋で、外面に緑色釉。

16～18は縄文時代の石器。16、スクレイパー。長さ5.6cm・幅5.3cm・厚さ２cm・重さ35g。緑色凝灰岩。17、打製石斧。長さ12.0cm・幅6.7cm・厚さ1.7cm・重さ177g。泥岩。18、打製石斧。長さ9.3cm・幅5.9cm・厚さ1.2cm・重さ82g。泥岩。



第10図　出土遺物

3　大野字上ノ久保地点

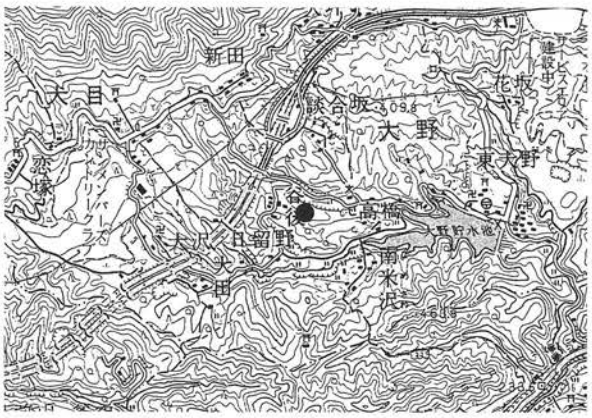
調査目的　埋め立て工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市大野字上ノ久保6053他

調査期間　平成８年３月26日

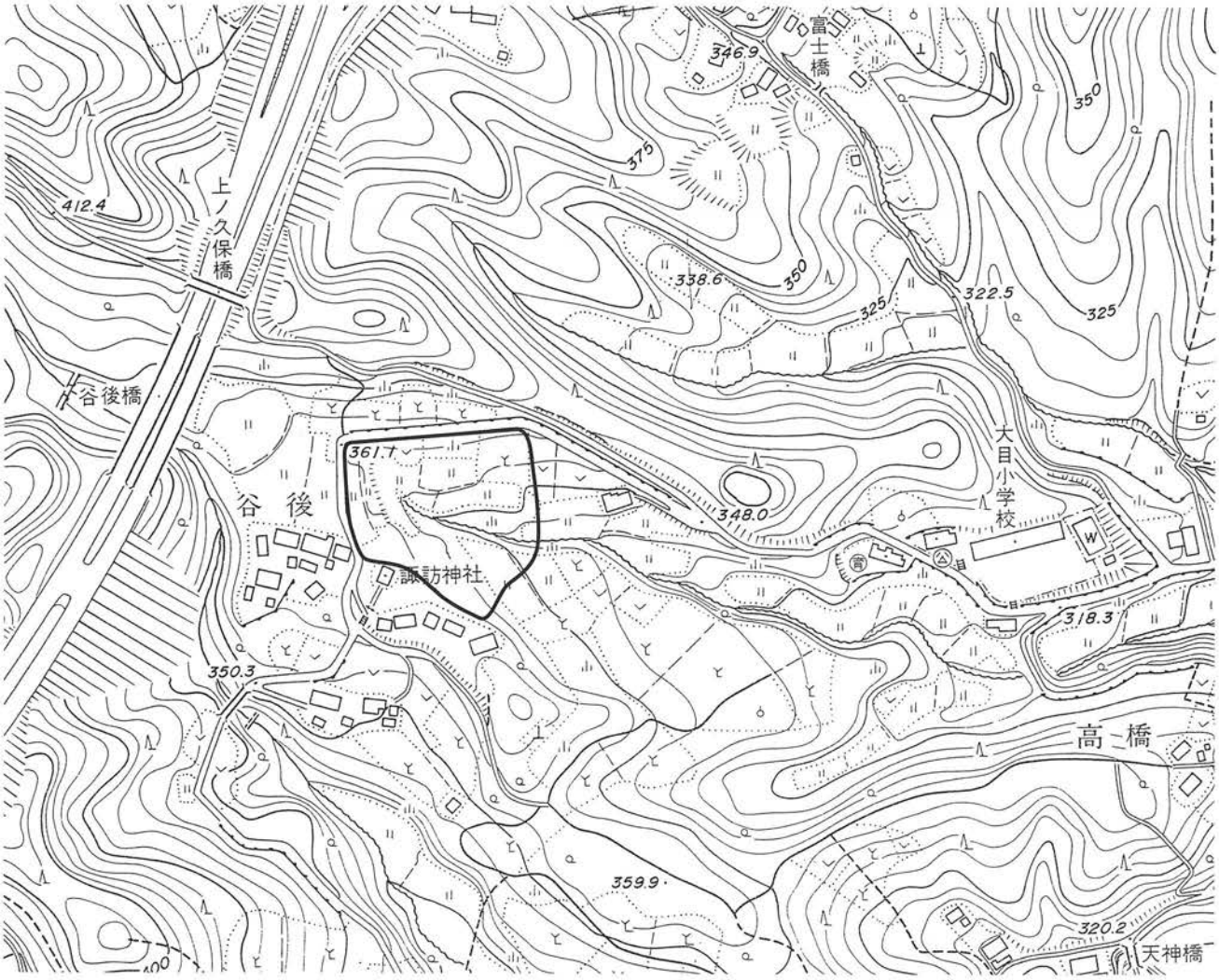
調査面積　16m²（対象面積1,000m²）

概　　要

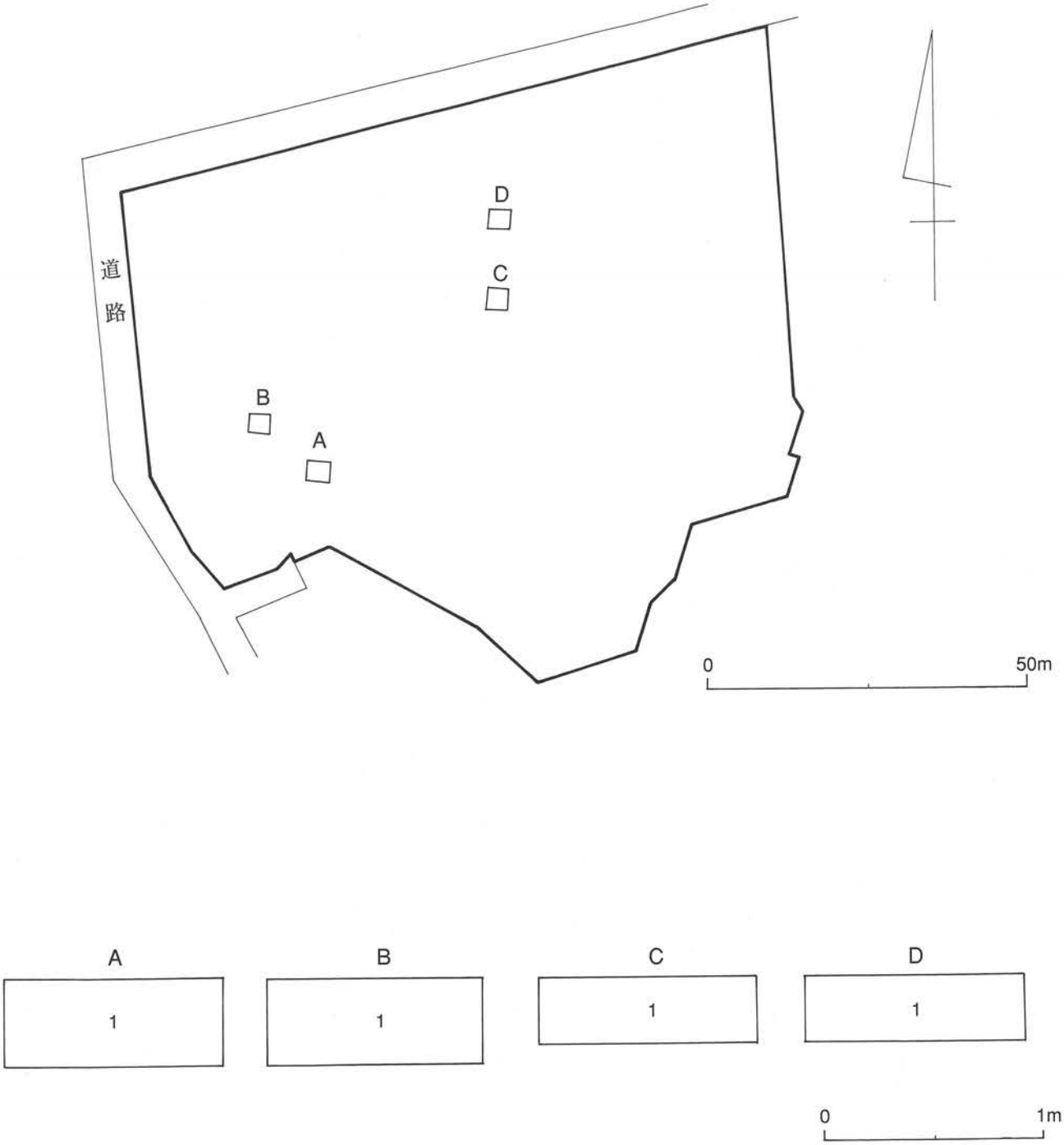


第11図　調 査 地

調査地点は扇山（1,137.8m）南東麓で、沢沿いの緩やかな斜面地に当たる。下流の台地に谷後遺跡があり、縄文時代の遺物散布地として知られている。調査は工事予定地の休耕田で実施し、２ｍ四方の試掘坑を４ヵ所設定し最深0.4mまで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土（旧耕作土）・ローム層で、遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第12図　調査地点



大野字上ノ久保地点土層
1　表土（旧耕作土）

第13図　調査区平面・土層図

4　桐原字向山地点

ゆずりはらあざむこうやま

調査目的　県立青少年自然の里建設に伴う試掘調査

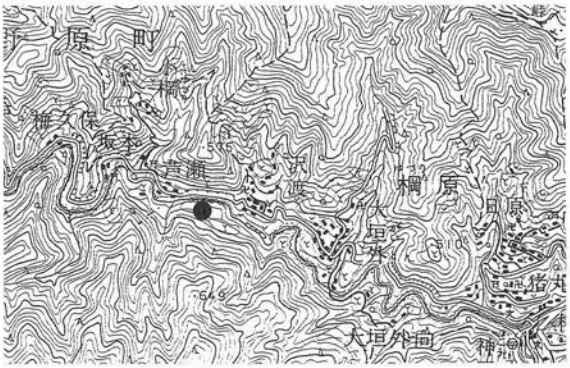
調 査 地　上野原市桐原字向山13893他

調査期間　平成８年７月29日～８月１日

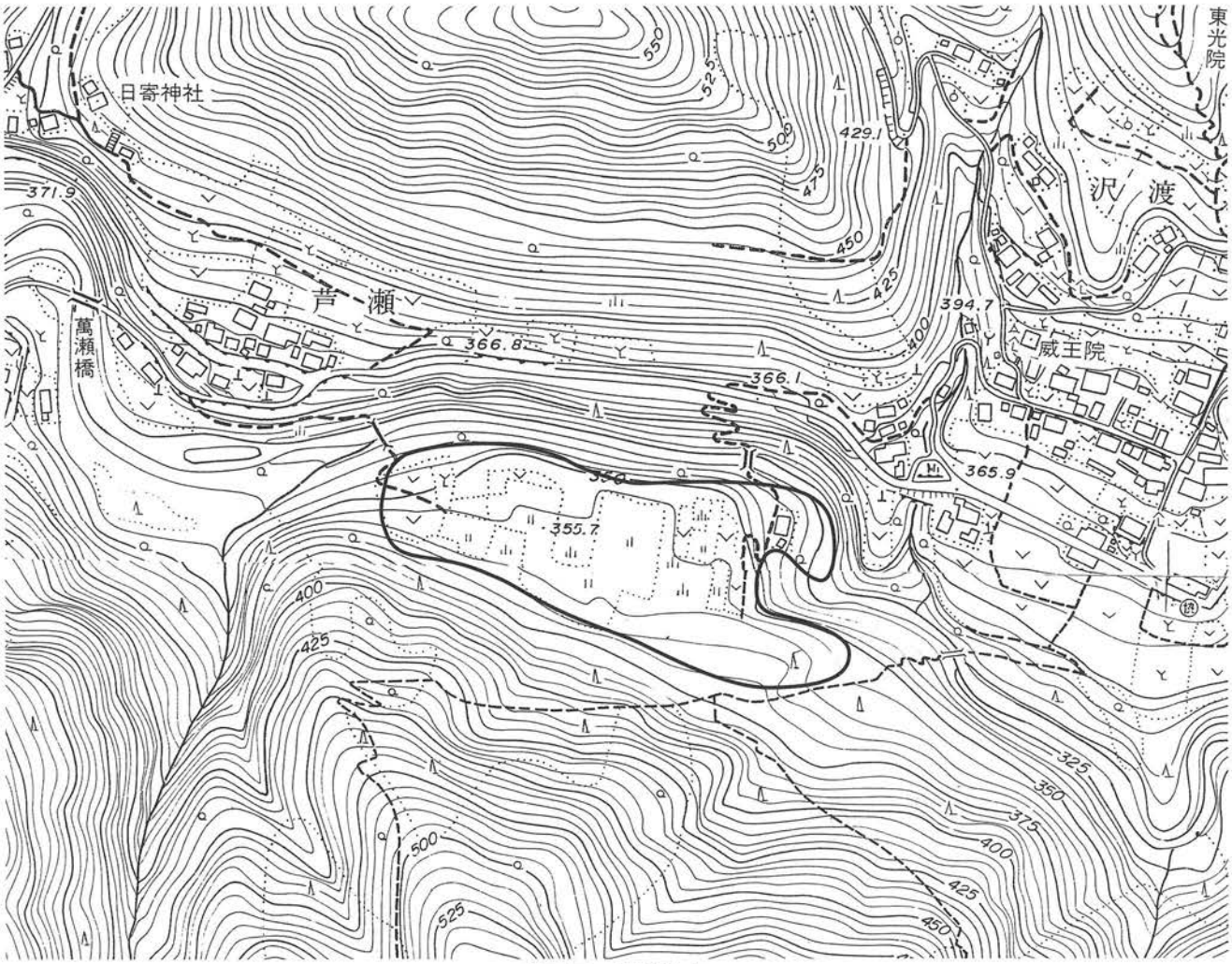
調査面積　20m²（対象面積30,000m²）

概　　要

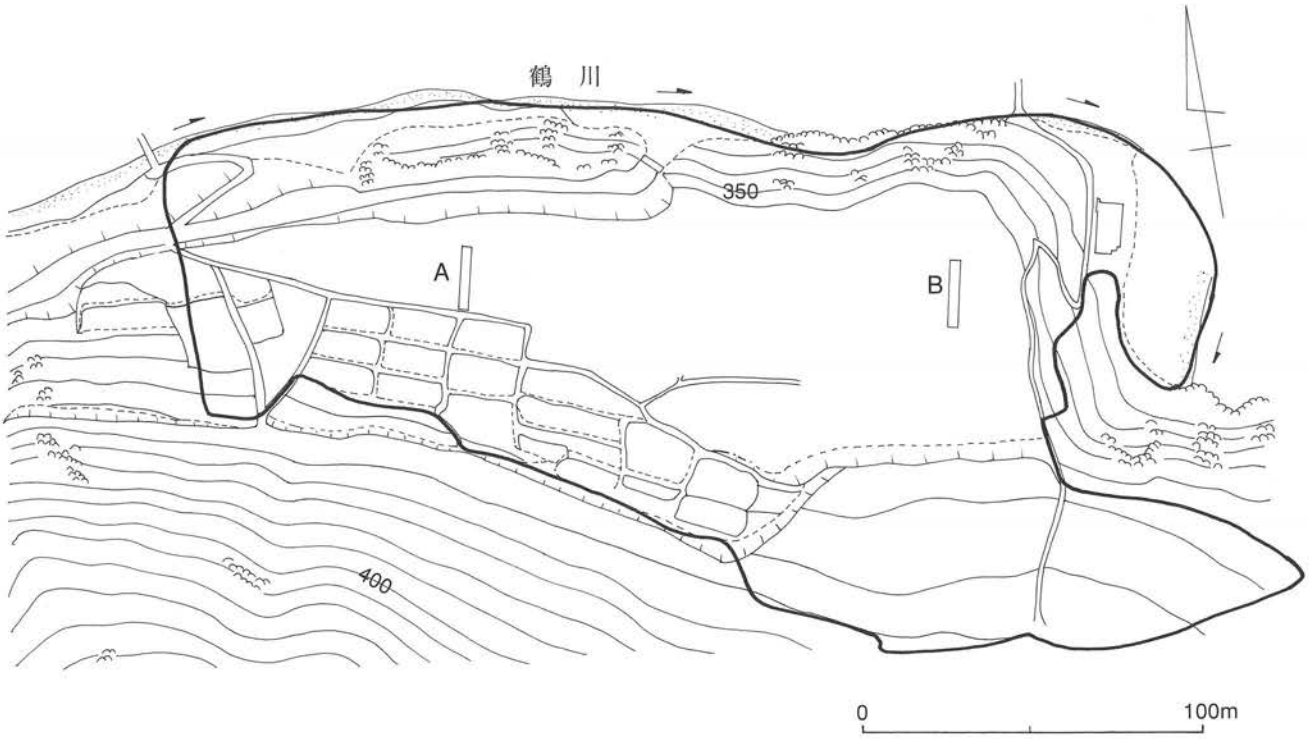
調査地は鶴川西岸の河岸段丘面に位置する。建設予定地の休耕田に巾１m・長さ10mの試掘溝を２ヵ所設定し、最深1.5mまで人力で掘削した。この結果、表土下で旧河床と思われる砂礫層が検出され、さらに下層まで続く状況であった。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

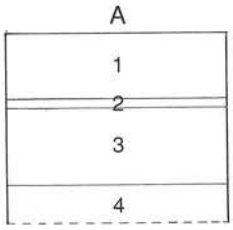


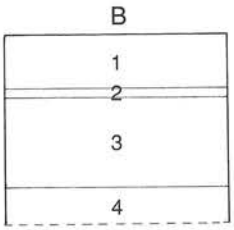
第14図　調 査 地



第15図　調査地点







桐原字向山地点土層
1　表土
2　赤褐色土　旧水田床土。
3　暗褐色土　礫（70cm以下）多く含む。
4　褐色土　　礫（70cm以下）・砂粒を多く含む。

0　1m

第16図　調査区平面・土層図

5　田代（たしろ）遺跡

田代遺跡は桂川南岸の河岸段丘面に位置する。平成４年の試掘調査では縄文土器（早期、前期、中期）、石器（石皿・凹石・磨石類・打製石斧）が出土している。今回報告の調査地点は２ヶ所で、いずれも段丘背後の山際にあたる。

第17図　遺跡位置

第１地点

調査目的　個人住宅建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市鶴島字田代3034

調査期間　平成８年11月21日・22日

調査面積　16m²（対象面積350m²）

概　　要

建設予定地の荒蕪地に２ｍ四方の試掘坑を４ヶ所設定し、最深1.2ｍのローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

第２地点

調査目的　給水用配水池建設に伴う試掘調査

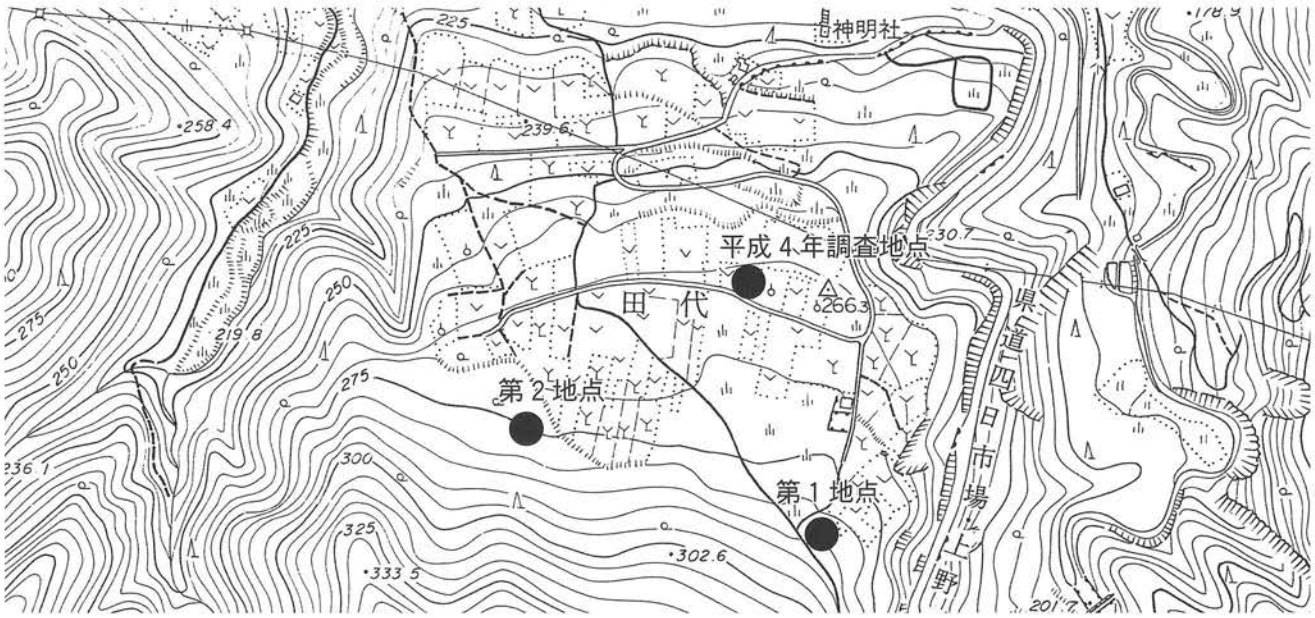
調 査 地　上野原市鶴島字田代3107－１他

調査期間　平成16年11月16日

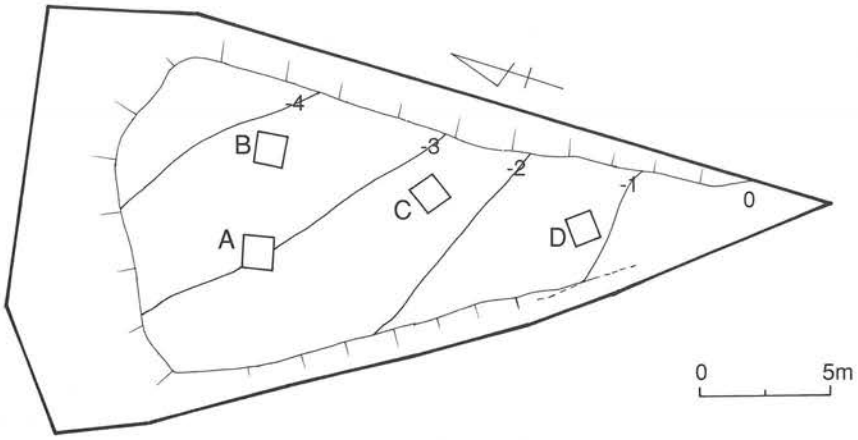
調査面積　８m²（対象面積303m²）

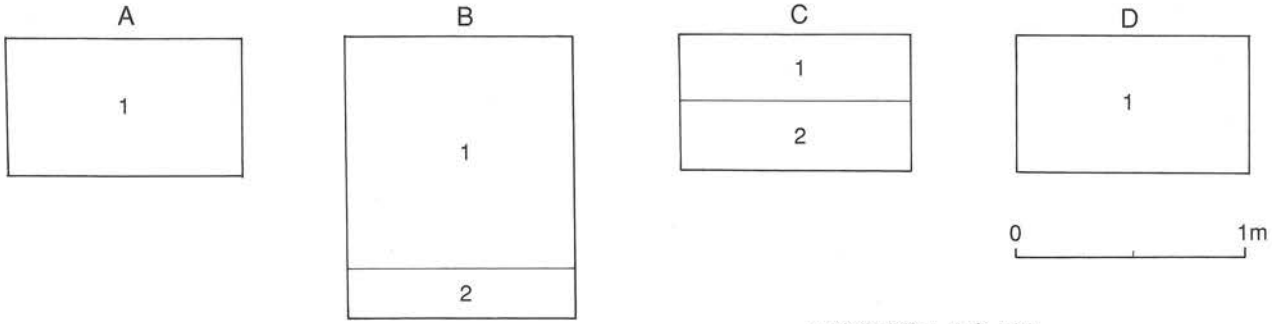
概　　要

建設予定地の山林に２ｍ四方の試掘坑を２ヶ所設定し、深さ0.4ｍのローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



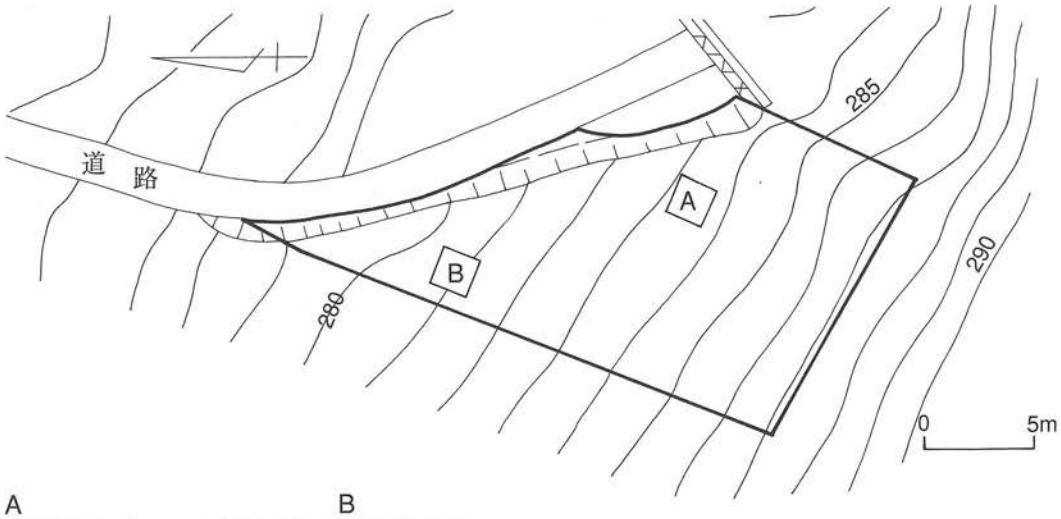
第18図　調査地点

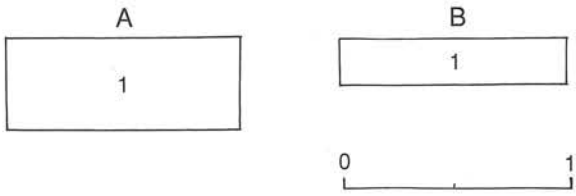




第１地点

田代遺跡第１地点土層
1　表土　　草木根が多く混じる。
2　暗褐色土





第２地点

田代遺跡第２地点土層
1　表土　　草木根が多く混じる。

第19図　調査区平面・土層図

6　狐原Ⅰ遺跡（きつねはらいち）

調査目的　携帯電話基地局建設工事に伴う試掘調査

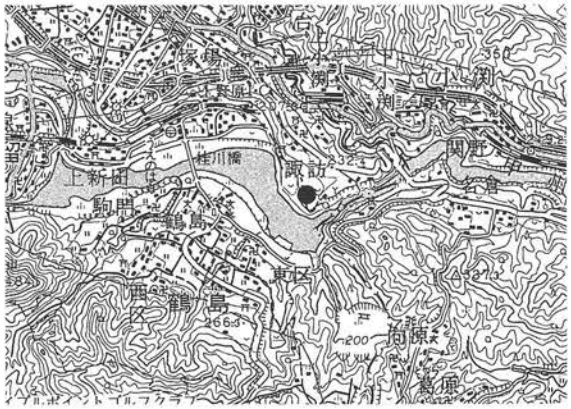
調 査 地　上野原市新田69－5

調査期間　平成17月12月12日

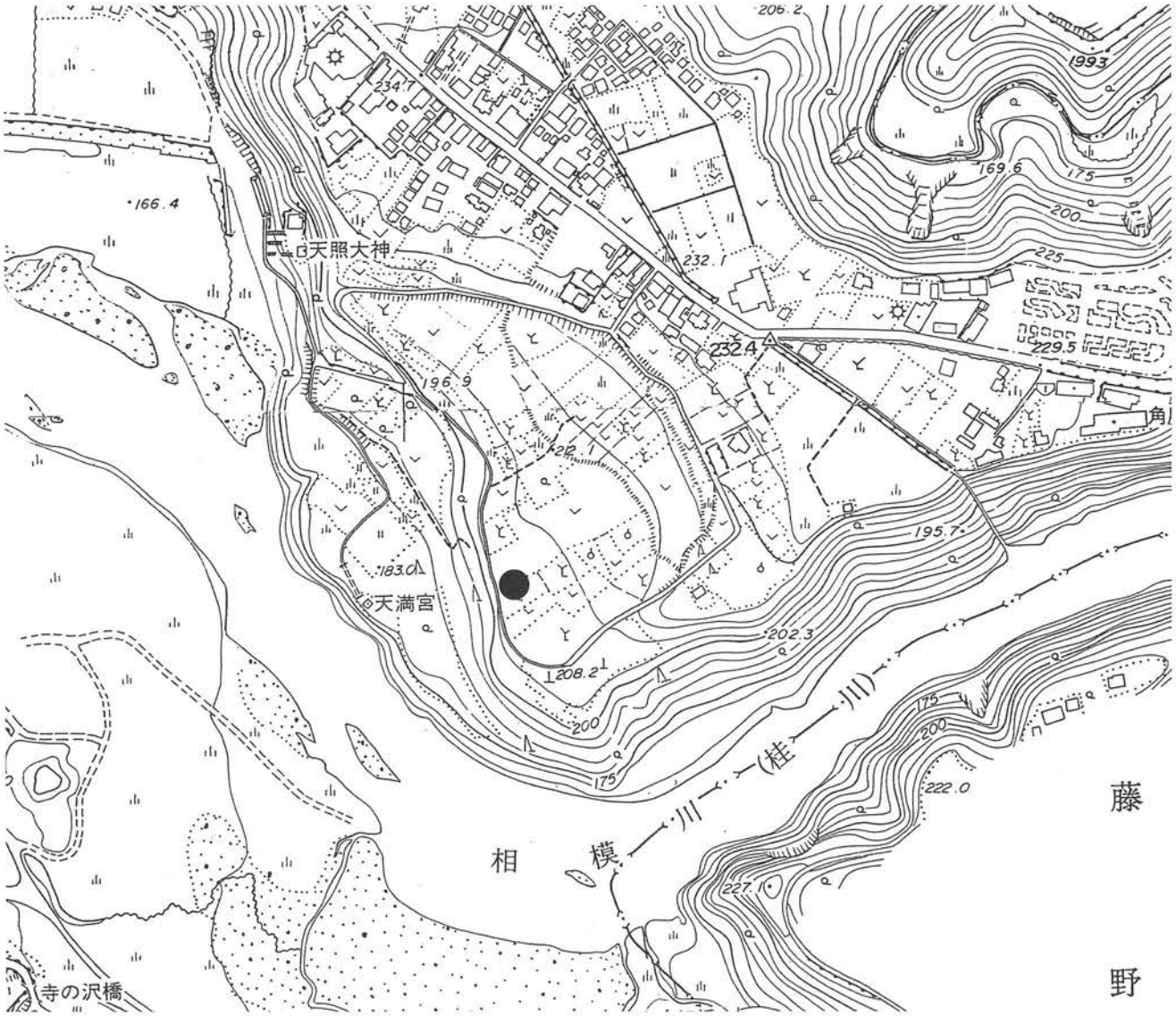
調査面積　12m²（対象面積190m²）

概　　要

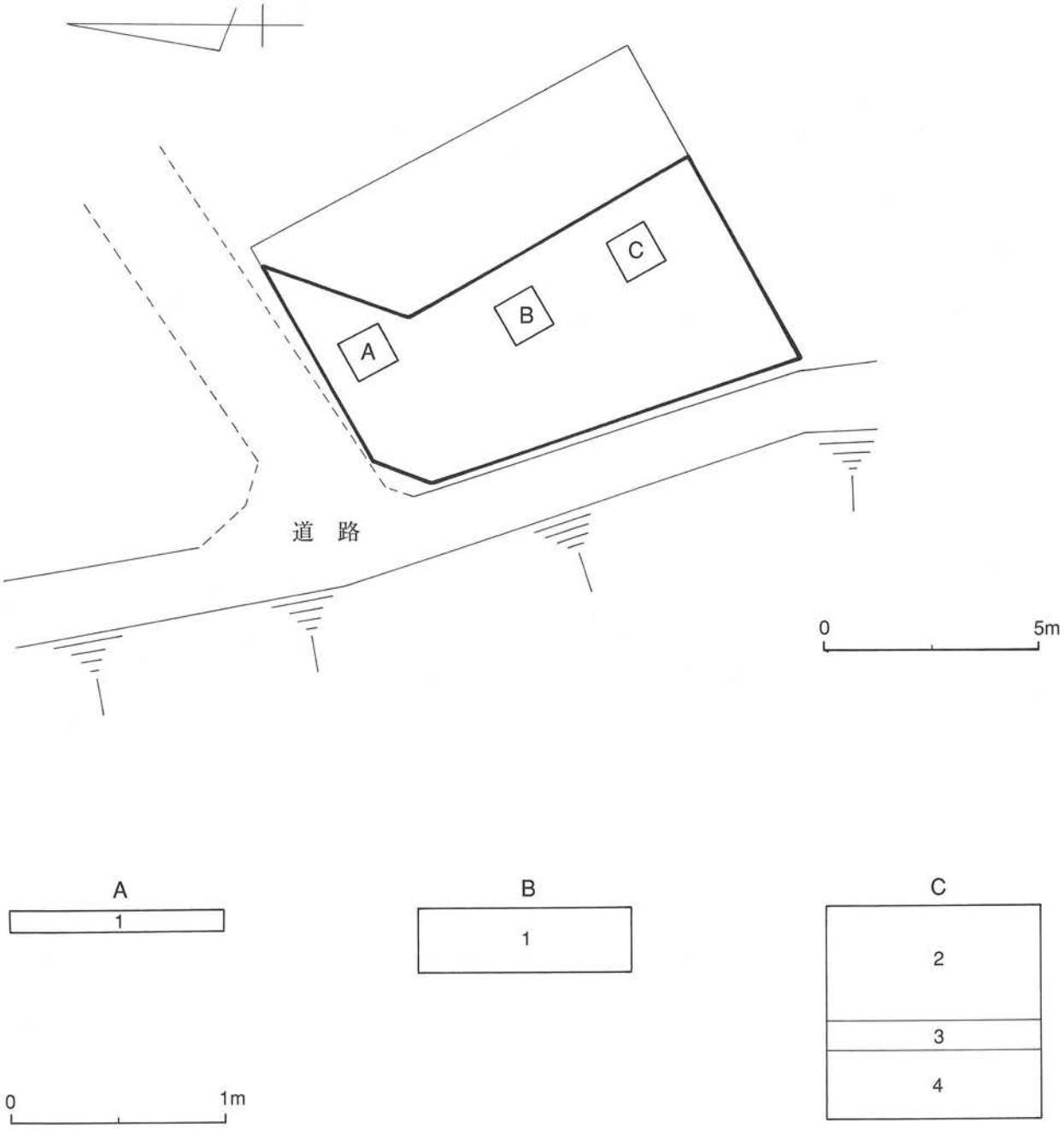
狐原Ⅰ遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置し、縄文～平安時代の遺物散布地である。段丘端部の緩斜地において、２ｍ四方の試掘坑を３ヶ所設定し、最深0.7ｍのローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第20図　遺跡位置



第21図　調査地点



狐原Ⅱ遺跡土層
1　表土　　砕石・ローム土塊含む。
2　表土　　旧耕作土
3　褐色土
4　暗褐色土

第22図　調査区平面・土層図

7　狐原Ⅱ遺跡（きつねはらに）

調査目的　町道建設工事に伴う試掘調査

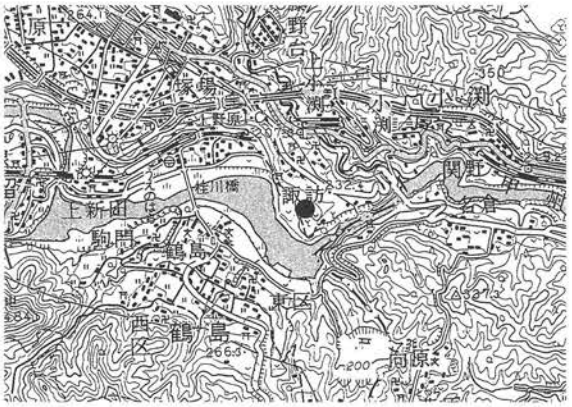
調 査 地　上野原市新田22－1他

調査期間　平成８年12月４日・６日、平成９年１月28日

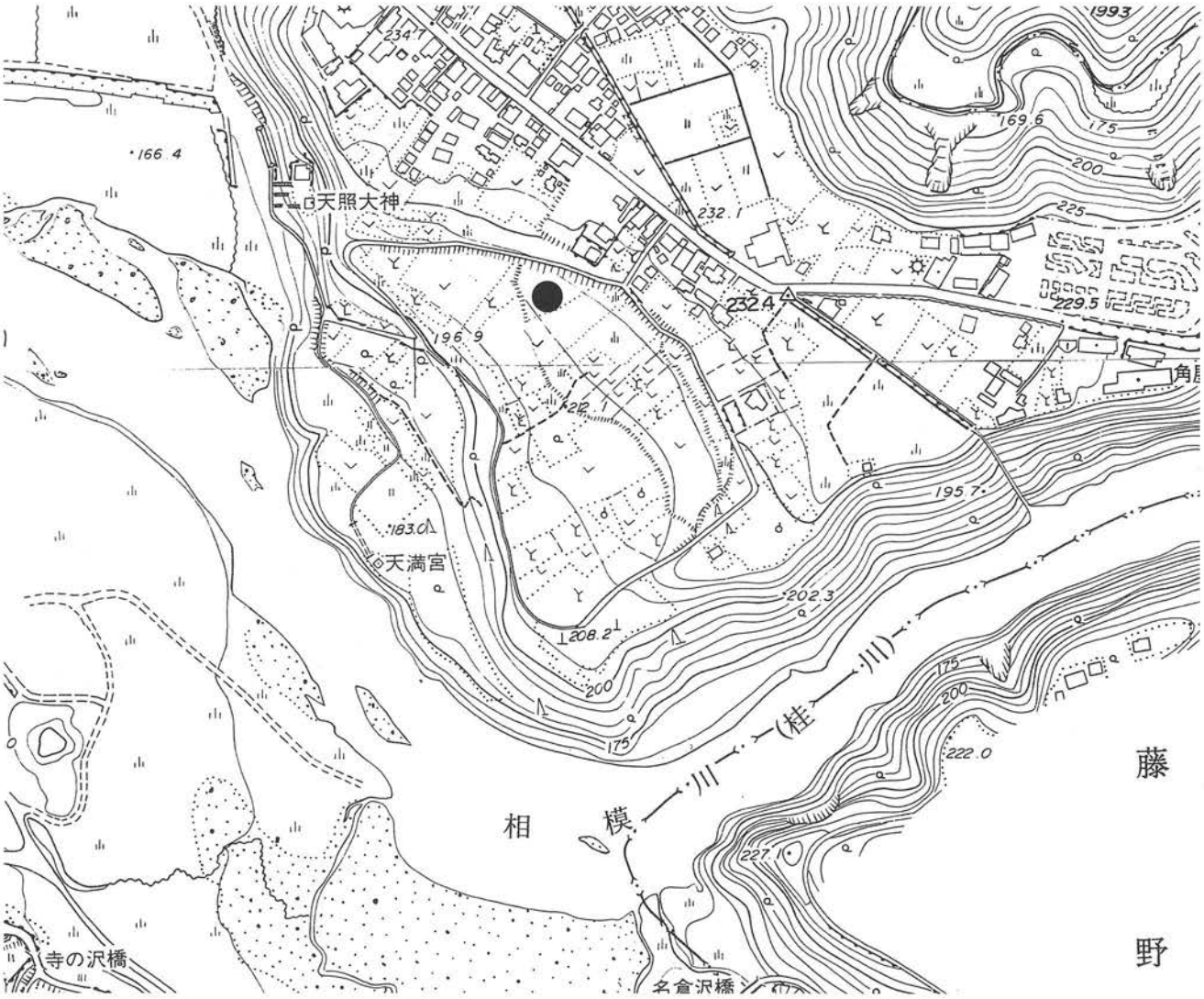
調査面積　80m²（対象面積374m²）

概　　要

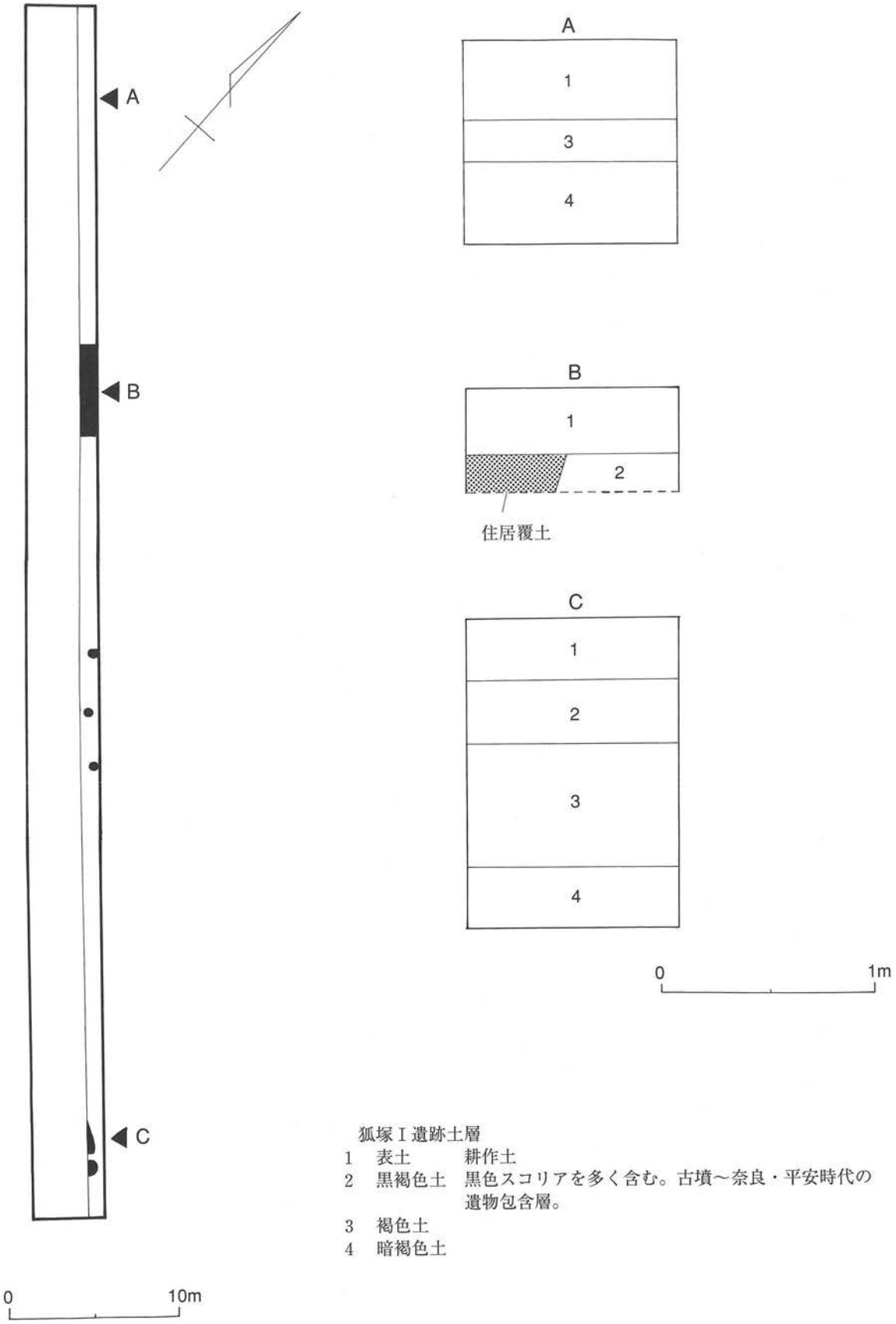
狐原Ⅱ遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置し、縄文～平安時代の遺物散布地である。工事予定地に巾１m・総延長80mの試掘溝を設定し、最深1.0mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、表土下で奈良時代の竪穴住居址１軒、掘立柱建物跡１棟を確認した。遺物は土師器・須恵器片が出土した。このため、同年に発掘調査を実施した。



第23図　遺跡位置



第24図　調査地区



狐塚Ⅰ遺跡土層

1　表土　　耕作土
2　黒褐色土　黒色スコリアを多く含む。古墳～奈良・平安時代の遺物包含層。
3　褐色土
4　暗褐色土

第25図　調査区平面・土層図

8　塚場（つかば）古墳群

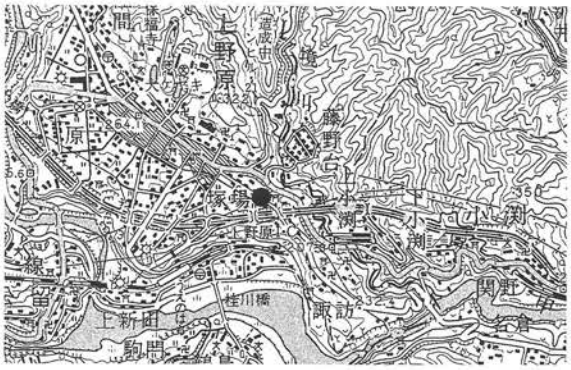
調査目的　集合住宅建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字塚場1002

調査期間　平成８年12月９日

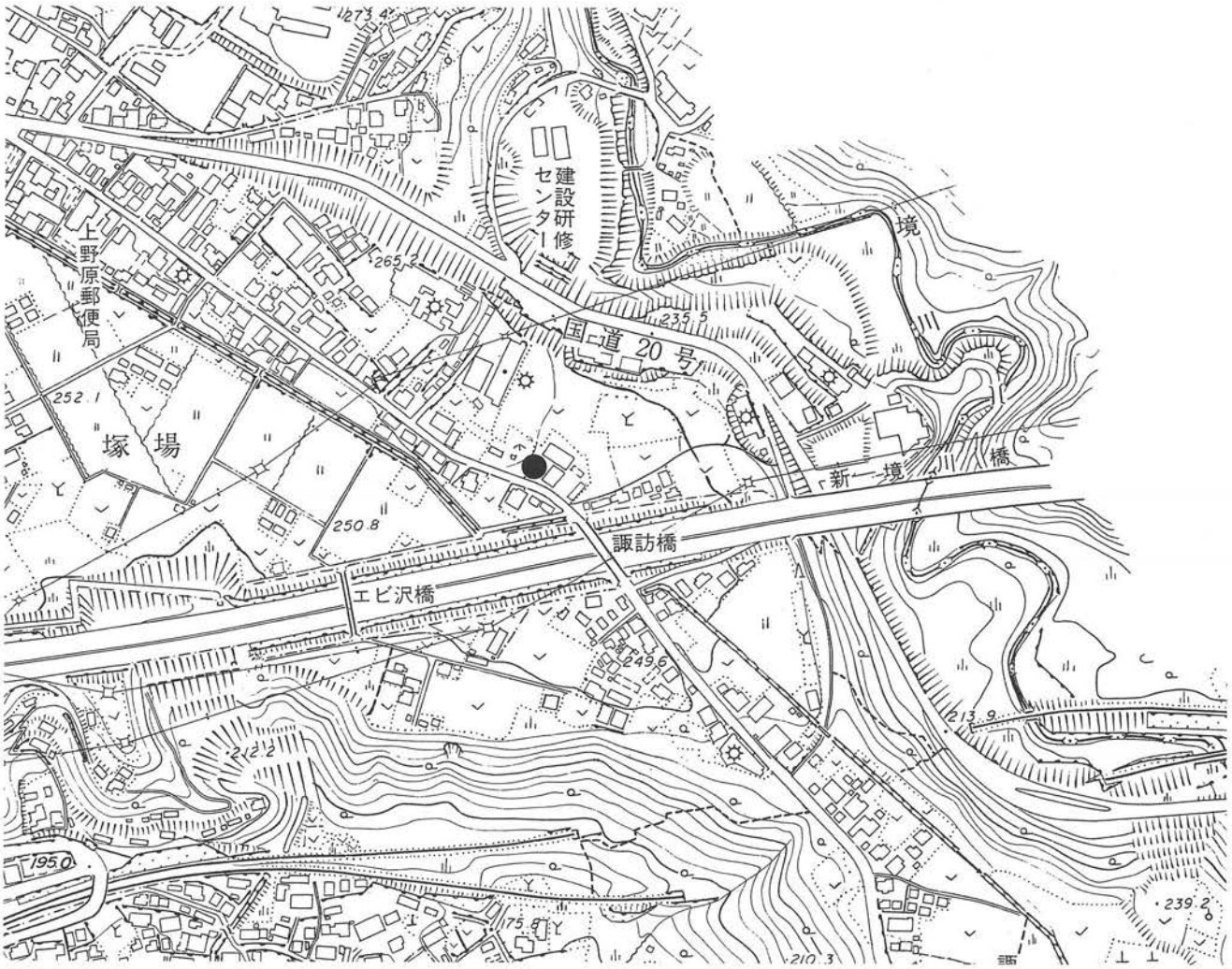
調査面積　10m²（対象面積253m²）

概　　要

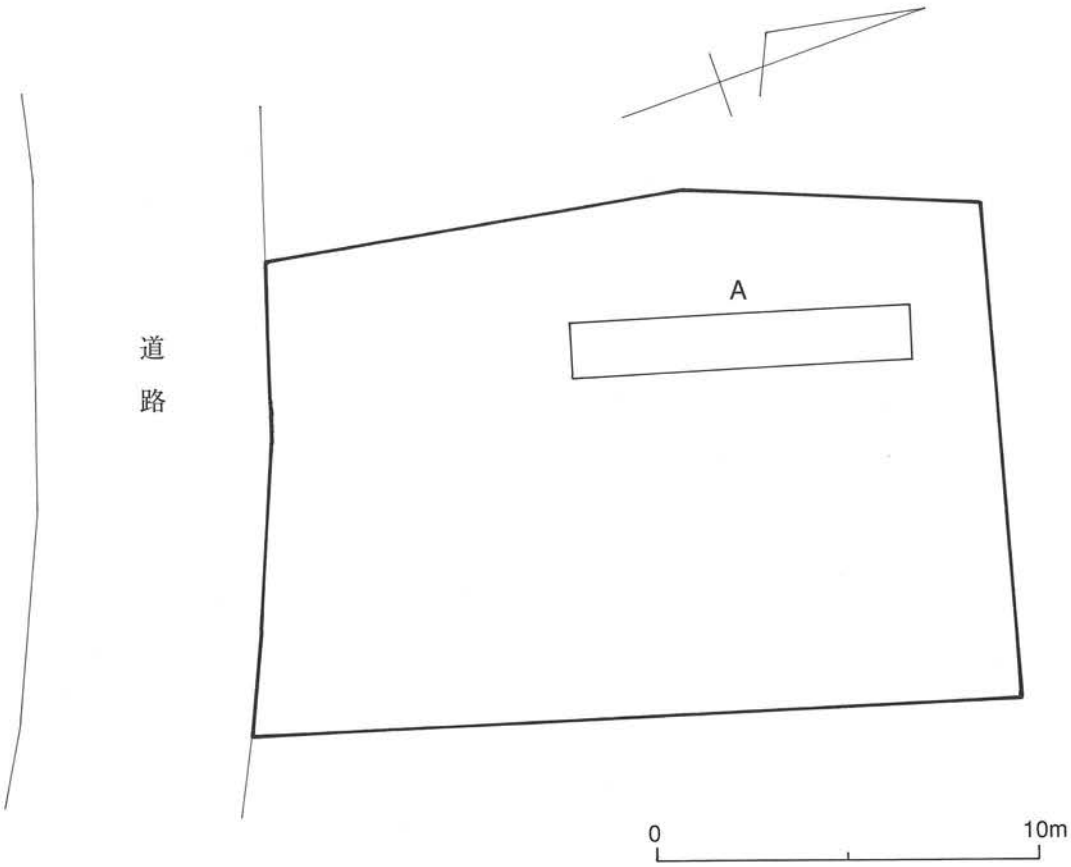


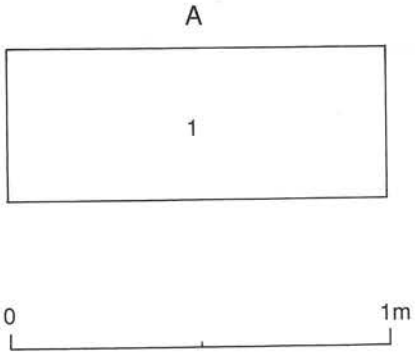
第26図　遺跡位置

塚場古墳群（上野原古墳群）は桂川北岸の河岸段丘面に位置する。３基程度の古墳から構成されていたと伝えられるが、周辺の開発が進み詳細は不明である。このうち、疱瘡神社の裏手に小型の円墳１基（直径９ｍ・高さ２ｍ）がある（一説では旧甲州街道の一里塚）。この円墳に隣接した宅地の一角に巾１ｍ・長さ10ｍの試掘溝を設定し、深さ0.4ｍまで人力で掘削した。この結果、表土（整地層）直下がハードローム層で、土木工事による撹乱を受けていることが確認された。遺構・遺物は検出されなかった。このため、遺跡の可能性は低いものと判断された。



第27図　調査地点





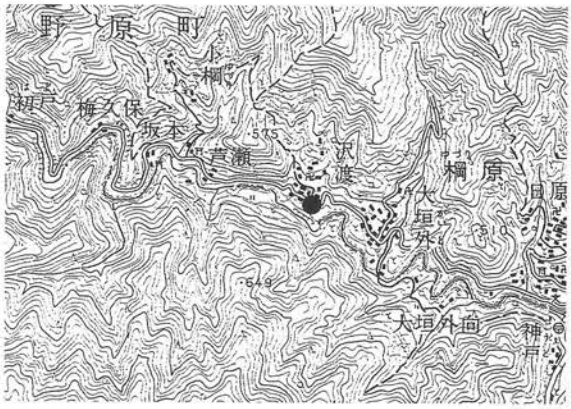
塚場古墳群土層
1　表土　整地層

第28図　調査区平面・土層図

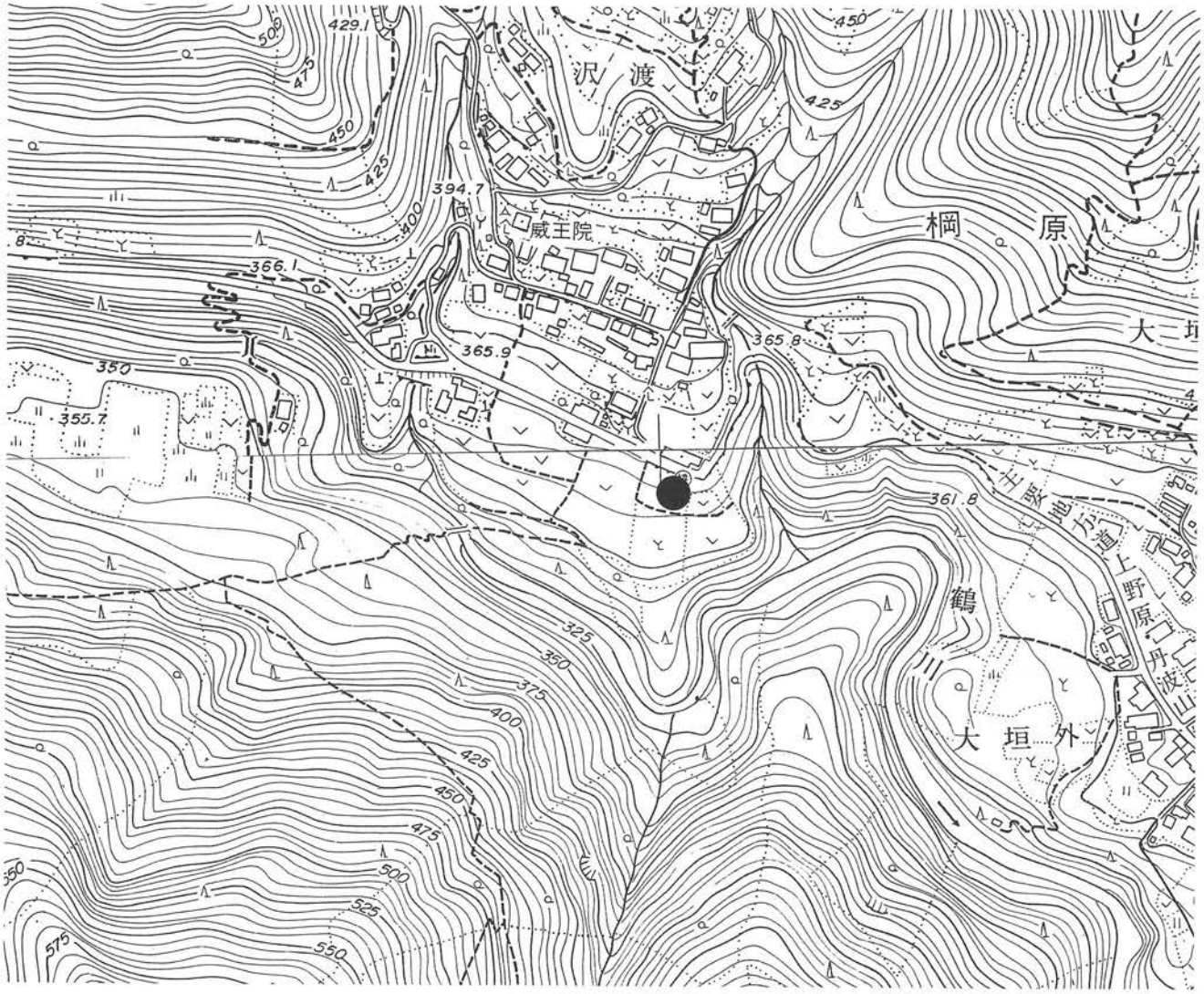
9　沢渡（さわわたりに）Ⅱ遺跡

調査目的　県道上野原丹波山線道路改良工事に伴う試掘調査
調 査 地　上野原市桐原字沢渡10737他
調査期間　平成９年５月６日・７日
調査面積　14m²（対象面積3,228m²）
概　　要

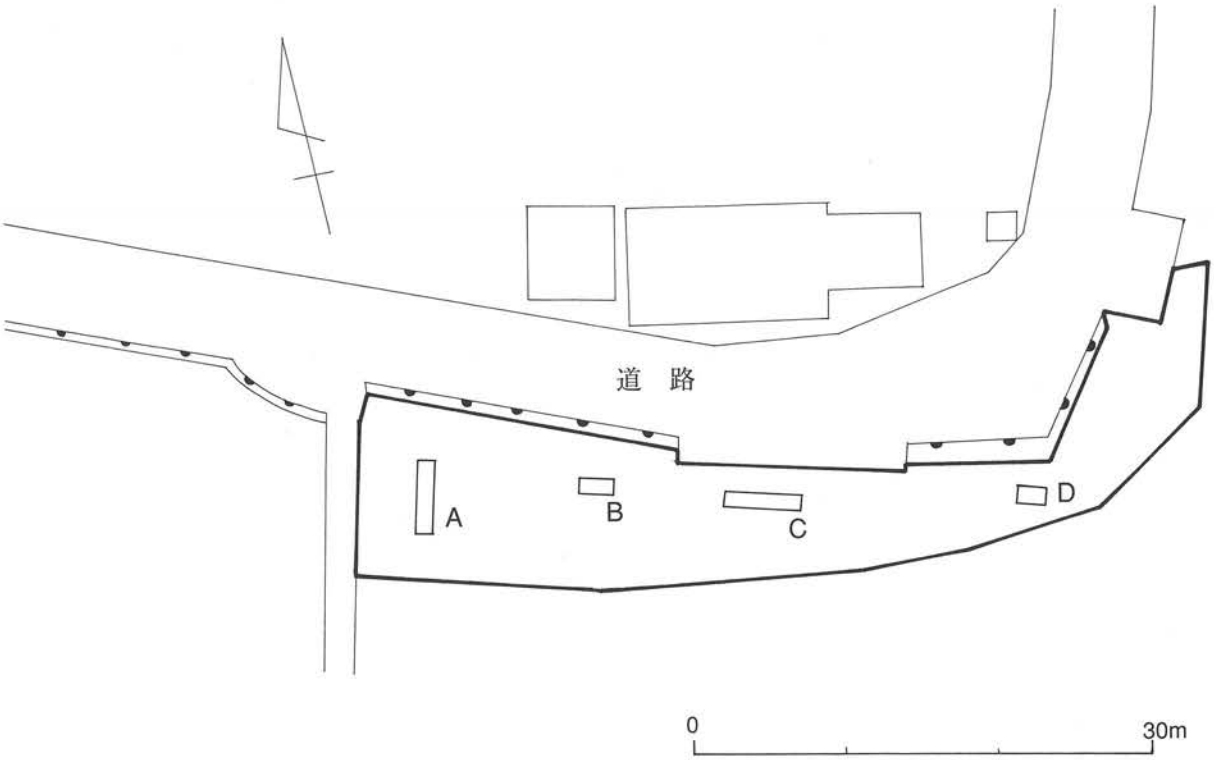
沢渡Ⅱ遺跡は鶴川北岸の斜面地に位置し、縄文時代の遺物散布地である。道路拡幅予定地の畑に巾１m・長さ２～５mの試掘溝を４ヶ所設定し、最深1.2mまで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土・礫混じりのローム層で、一部に過去の道路工事に伴う客土が見られた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、工事予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

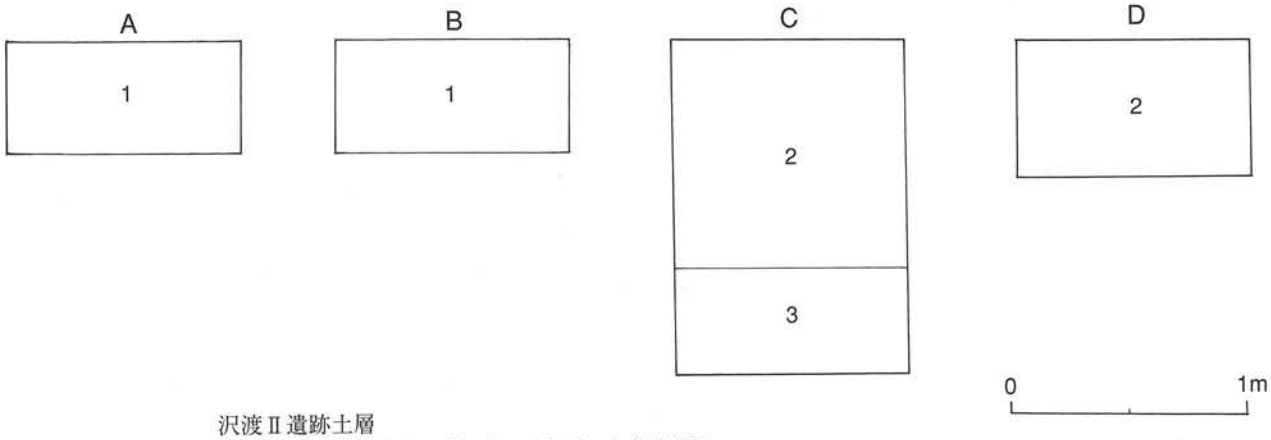


第29図　遺跡位置



第30図　調査地点





沢渡Ⅱ遺跡土層
1　暗褐色土　耕作土。礫（3cm以下）を多く含む。
2　暗褐色土　客土。砂礫を含む。
3　暗褐色土　旧耕作土

第31図　調査区平面・土層図

10　桐坪（きりつぼ）遺跡

調査目的　農道桐坪線道路改良工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市桐原字桐坪6116他

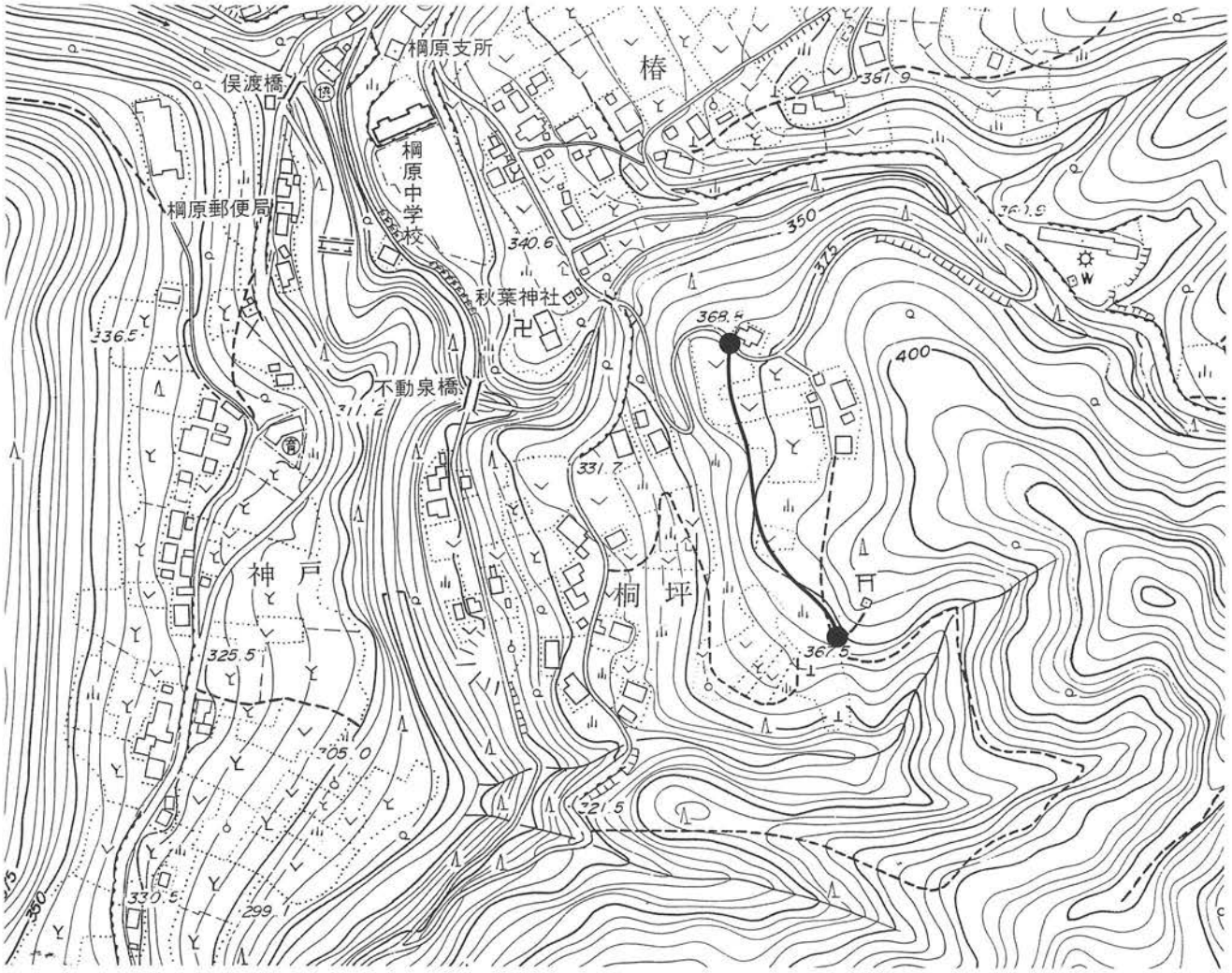
調査期間　平成９年９月１日・２日

調査面積　30m²（対象面積720m²）

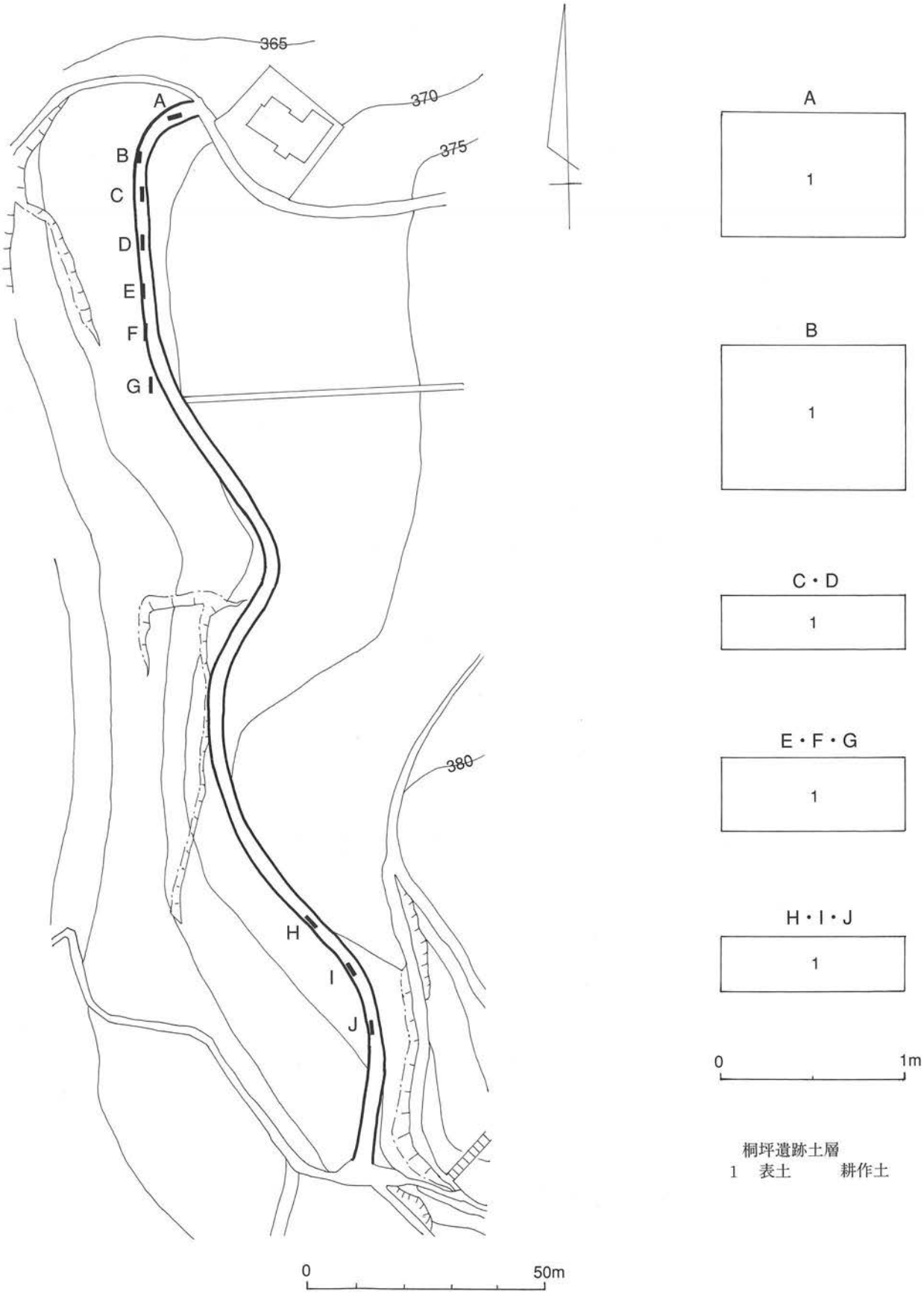
概　　要

第32図　遺跡位置

桐坪遺跡は鶴川東岸の斜面地に位置し、縄文時代の遺物散布地である。調査地は遺跡北端に当たり、山際斜面地から崖縁を経て比較的平坦な畑地に到るルートである。調査は、工事予定地のうち崖縁を除いた畑地および荒蕪地で実施し、巾１m・長さ２～３mの試掘溝を10ヶ所設定し、最深0.8mまで人力で掘削した。この結果、全般に表土（耕作土）直下がハードローム層で、耕作による撹乱を受けていた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、工事予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第33図　調査地点



第34図　調査区平面・土層図

11　新井（あらい）遺跡

調査目的　宅地造成工事に伴う試掘調査

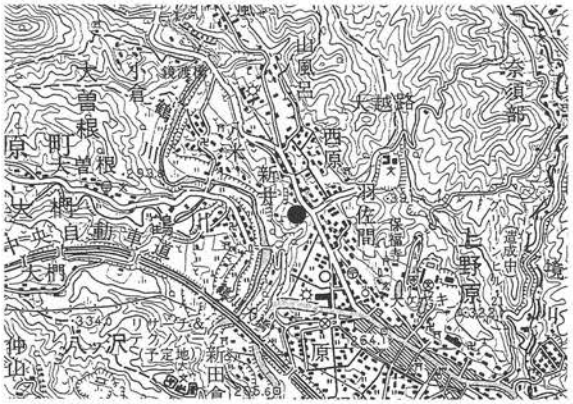
調 査 地　上野原市上野原字新井4511他

調査期間　平成９年９月18日～22日

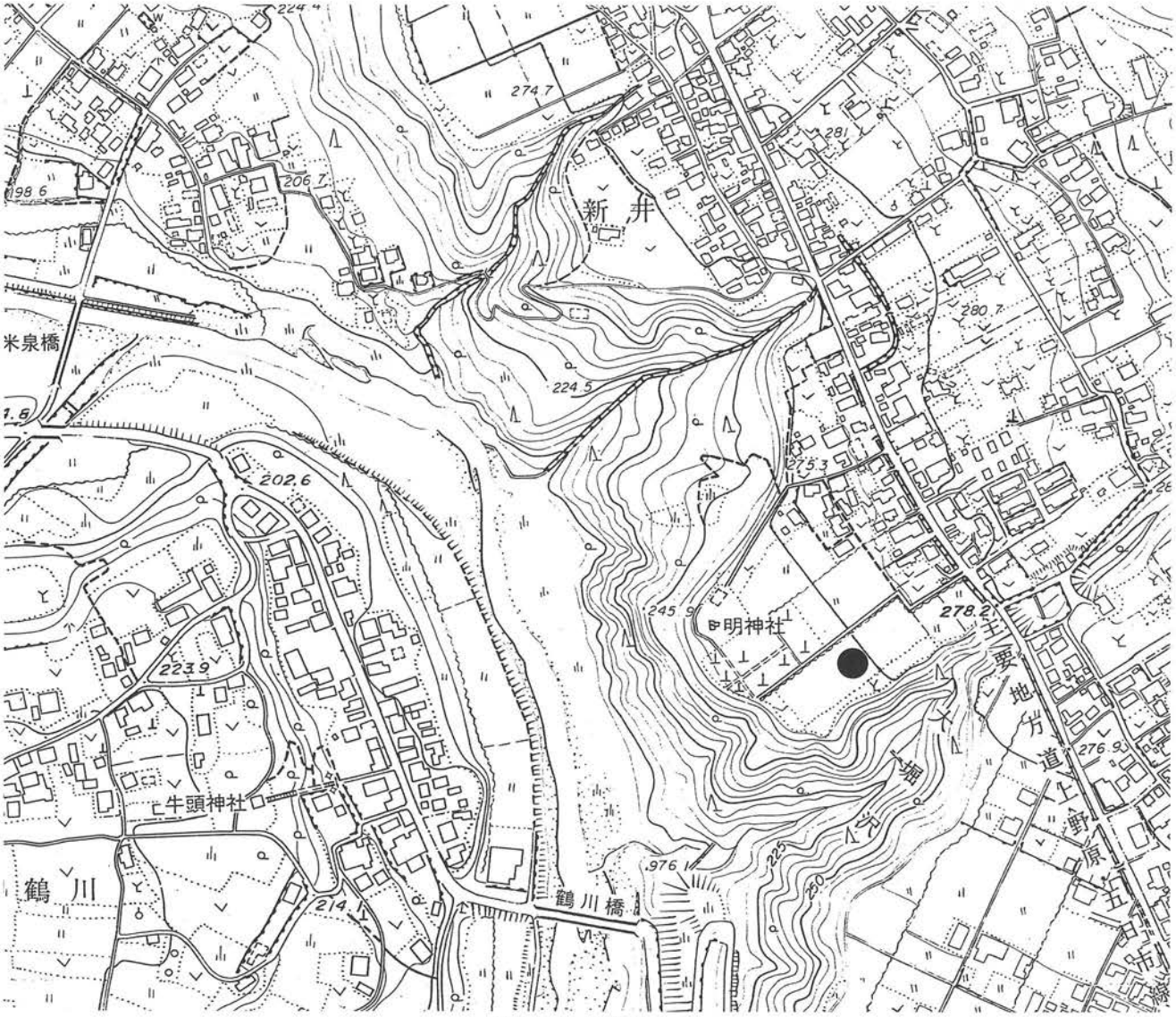
調査面積　59m²（792m²）

概　　要

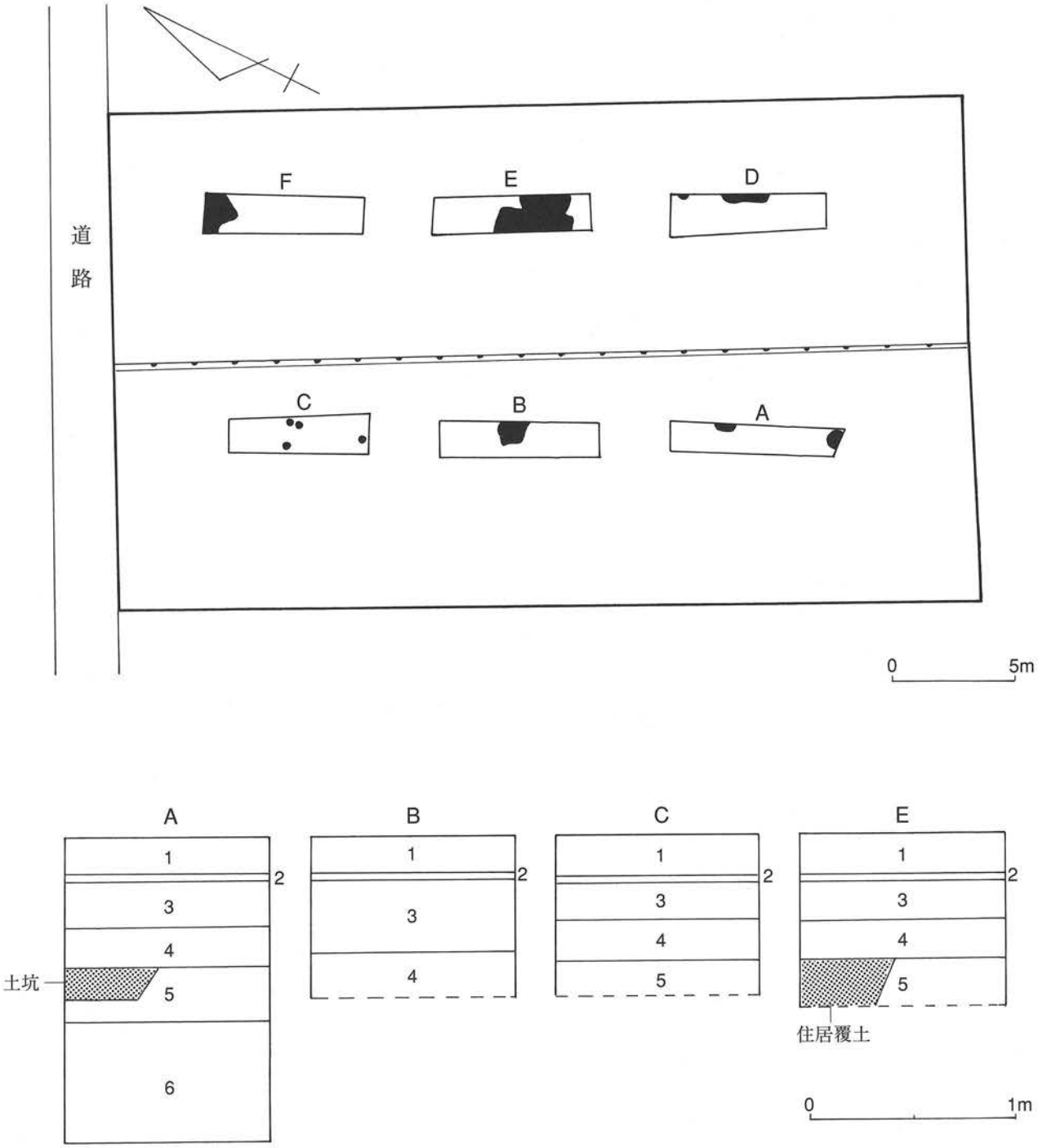
新井遺跡は鶴川東岸の河岸段丘面に位置し、縄文時代の遺物散布地である。工事予定地の休耕田に巾1.5m・長さ６～７ｍの試掘溝６ヵ所を設定し、重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、すべての試掘溝で平安時代に比定される遺構が確認された。掘り下げは遺構の確認面に止め、一部で深掘りを行いローム層までの層序を調査した。



第35図　遺跡位置



第36図　調査地点



新井遺跡土層

1　表土　　旧耕作土
2　赤褐色土　旧水田床土
3　褐色土
4　黒褐色土　黒色スコリアを多く含む。平安時代の遺物包含層。
5　暗褐色土　細粒の橙色スコリアを多く含む。
6　褐色土　　締まり強い。

第37図　調査区平面・土層図

(1) 基本層序

表土（旧耕作土）・褐色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土・ローム層で、表土直下に旧水田の床土が介在する。以上のうち、黒褐色土は平安時代の遺物包含層であり、同期の遺構覆土の基調となっている。

(2) 遺構と遺物

発見された遺構は平安時代に比定され、竪穴住居と思われる方形プラン２基、土坑あるいは柱穴と思われる円形プラン１基・方形プラン１基、小穴６基、焼土２基である。焼土は白色粘土を含むことから、住居に伴うカマドの可能性もある。確認面はすべて暗褐色土上面であった。

遺物は平安時代と縄文時代に分類される。平安時代では土師器甕・坏、須恵器坏、高台付坏が出土し、すべて小片である。大半が黒褐色土中から出土した。縄文時代では土器片、黒曜石片の他、多数の礫が出土した。礫は拳大で、被熱し破損したものが多い。いずれも暗褐色土中から出土した。

試掘坑	縄文時代		平安時代	近世以降	礫
	土器	石器			
A	3（早期１）				10
B			1（土師器）		
C	1（早期）		6（土師器５・須恵器１）		5
D	2	1（黒曜石剥片）	1（須恵器）		2
E			6（土師器）	1（陶磁器）	10
F	2	1（黒曜石剥片）			1
合計	8	2	14	1	28

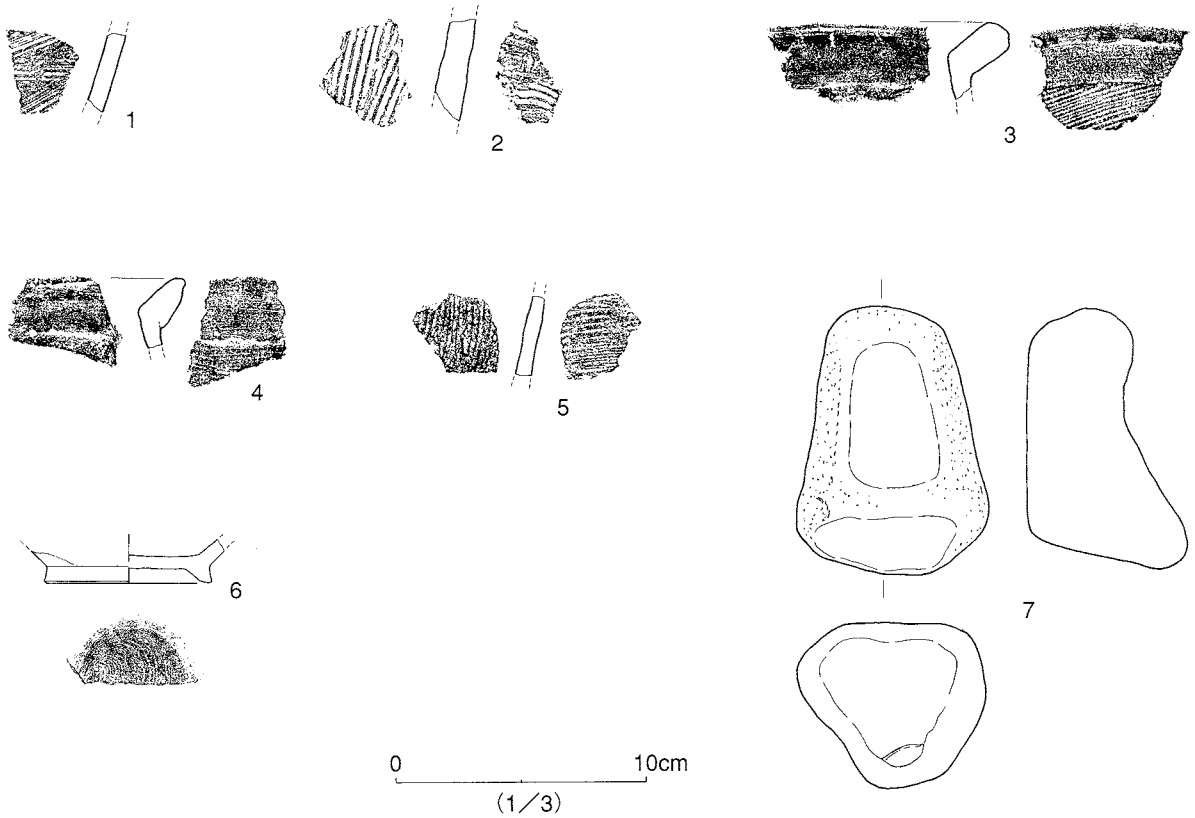
第３表　新井遺跡出土遺物集計表　（　）は内訳

出土遺物（第38図）

１～２は縄文土器。１、条線文が斜位に交差する。器厚は７mmで、色調はくすんだ褐色を呈する。早期前半・沈線文系土器。２、内外面に条痕文。胎土に繊維痕が見られる。器厚は11mmで、色調は褐色を呈する。早期後半・条痕文系土器。

３～６は平安時代の土器。３～５、土師器の甕で、いわゆる甲斐型。６、須恵器の高台付坏。底面に回転糸切痕が残る。

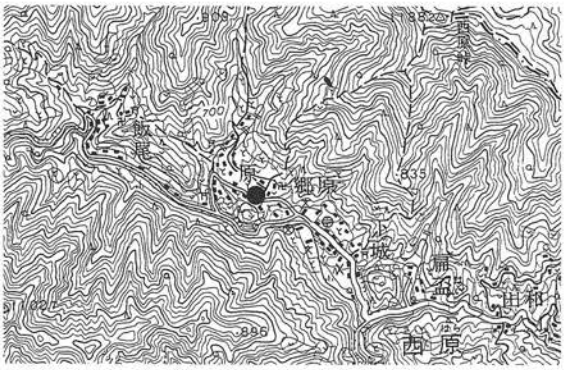
７、縄文時代の石器。磨石類。側面・端部に平滑な磨面を有し、端部には敲打痕も認められる。長さ10.3cm・幅7.3cm・厚さ6.2cm・重さ475g。砂岩。



第38図　出土遺物

12　原（はら）・郷原（ごうはら）遺跡

原・郷原遺跡は鶴川北側の斜面地に位置し、縄文時代の遺物散布地である。今回報告する調査地点は２ヵ所である。



第39図　遺跡位置

第１地点

調査目的　農道原・郷原線道路改良工事に伴う試掘調査

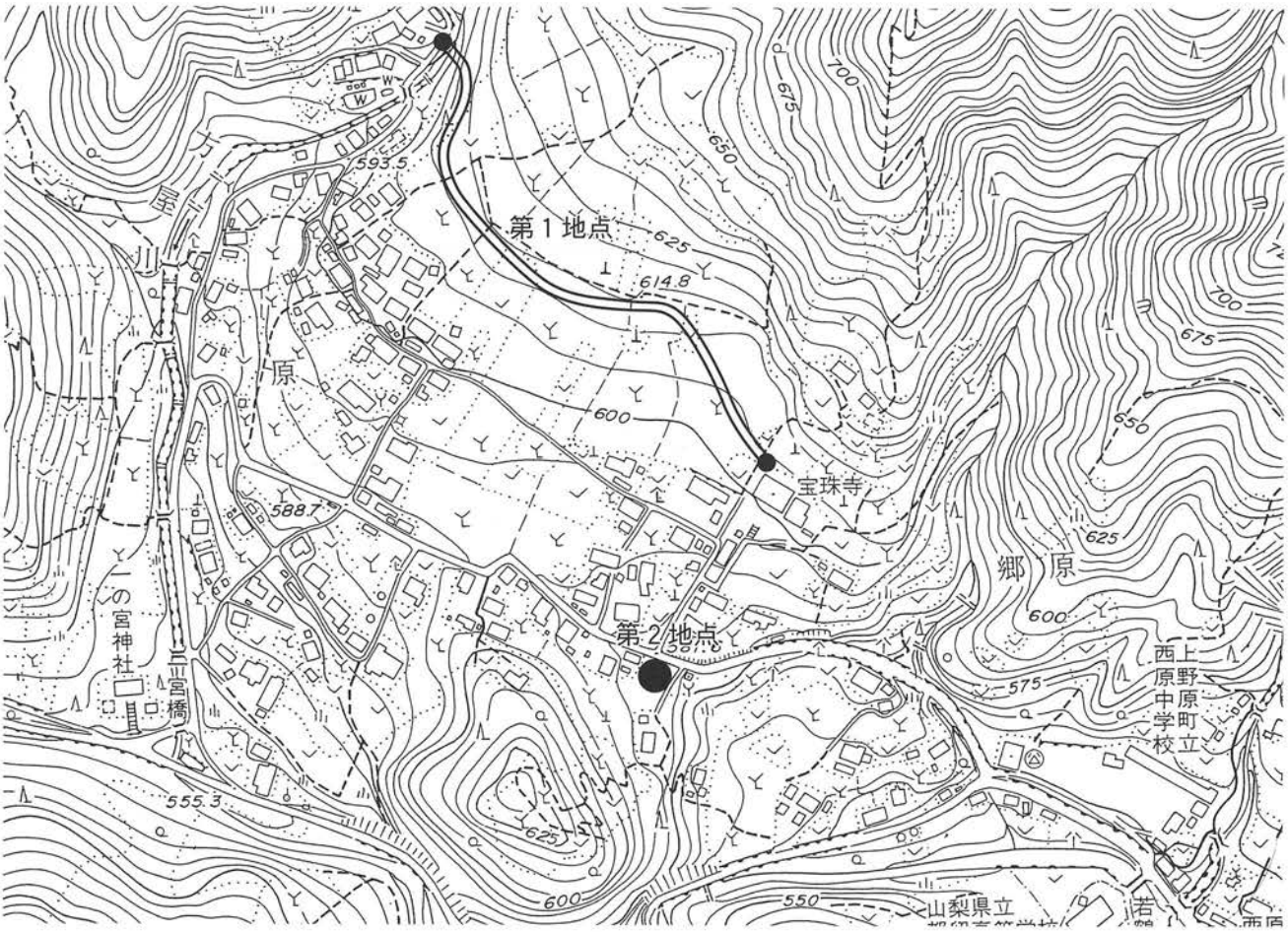
調 査 地　上野原市西原4666他

調査期間　平成９年10月６日～13日

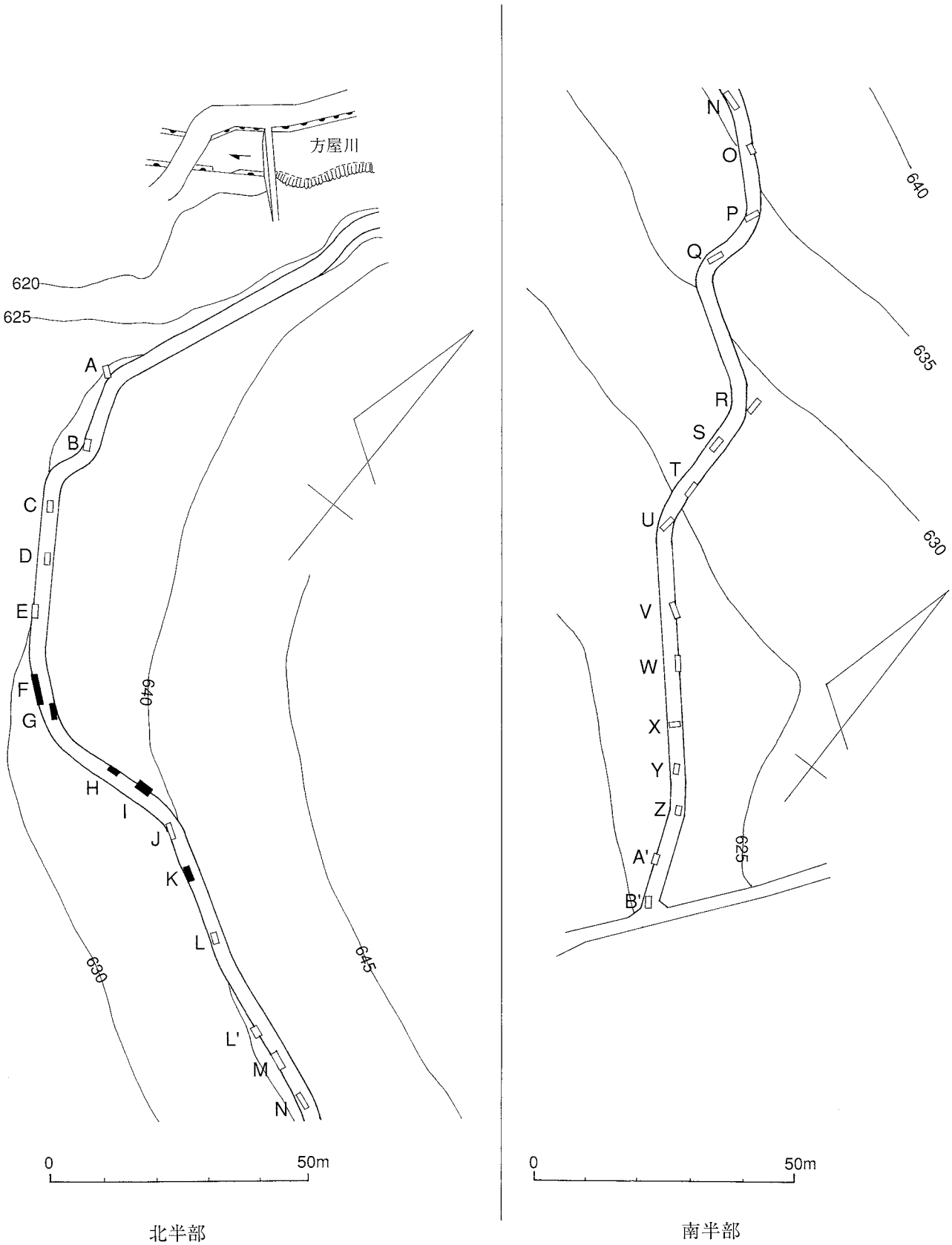
調査面積　77m²（対象面積900m²）

概　　要

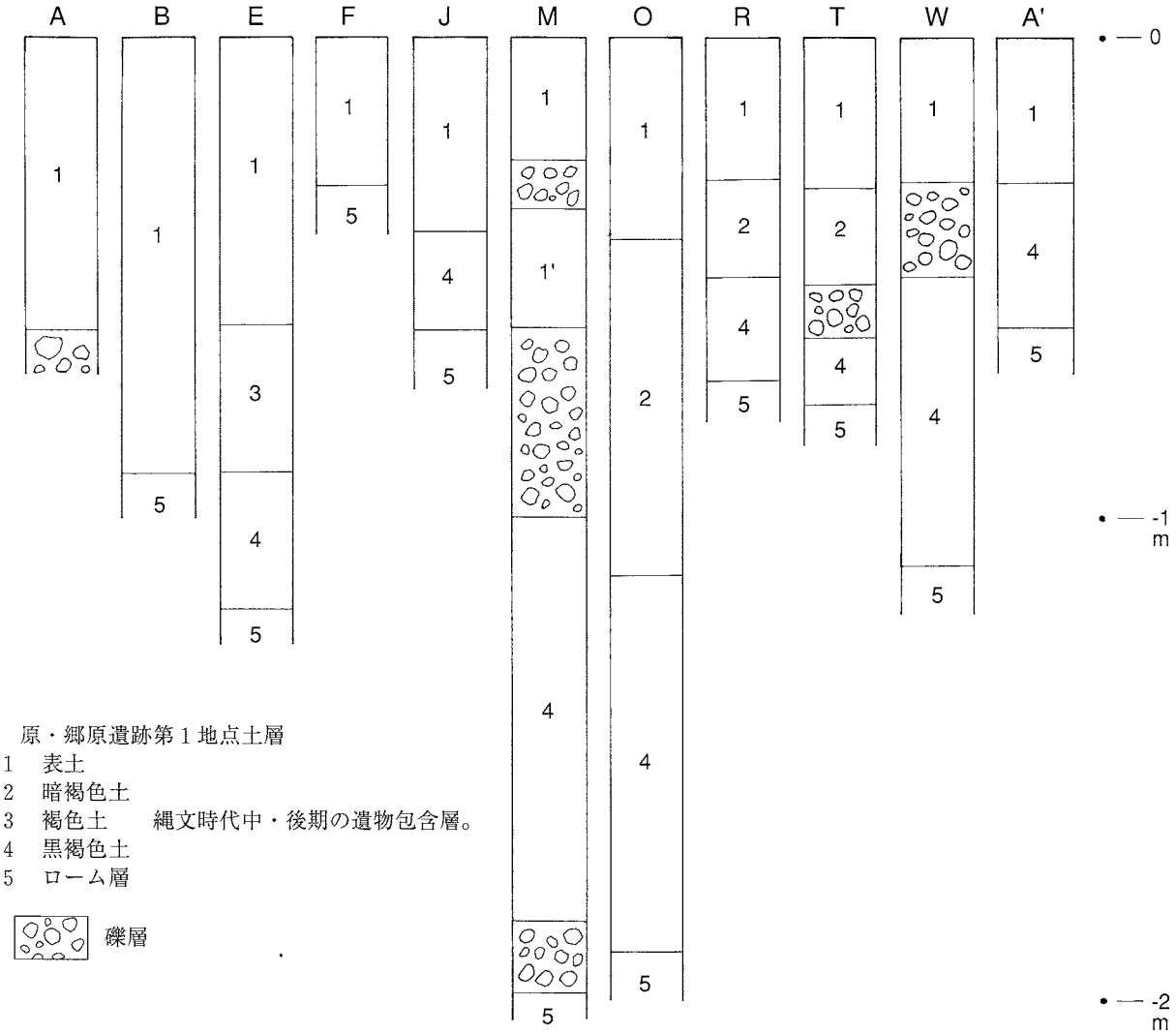
工事予定地は山側斜面の畑を横断するルートであり、このうち方屋川沿いの急傾斜地を除く約900m²で調査を実施した。調査は、巾１ｍ・長さ２～６ｍの試掘溝を29ヶ所設定し、最深２ｍまで人力で掘削した。この結果、ローム面に至るまでに礫層が数層介在し、土石流が煩雑に発生していたことが推定できた。遺構・遺物は西斜面で確認され、縄文時代の配石・敷石住居跡（図版３）や、縄文中期後葉～後期の土器・石器（打製石斧・大型粗製石匙・石皿）などが出土した。このため、平成９年度に発掘調査を実施した（上野原町埋蔵文化財調査報告書第９集『原・郷原遺跡』上野原町教育委員会2000）。



第40図　調査地点


方屋川
620
625
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
L'
M
N
640
630
645
0
50m
北半部
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
Z
A'
B'
640
635
630
625
0
50m
南半部

第41図　調査区平面図



第42図　調査区土層図

試掘坑	縄文時代		古墳～奈良・平安	近世以降	礫
	土器	石器			
A					
B					
C		1			
D	13（中期６・後期３）	2（石皿・石匙）			
E	6（後期３）				
F	7	1（打製石斧）			5
G	4（後期３）				
H					
I	9（中期４）				
J	1（中期）				
K～B′					
合計	33	4	0	0	5

第４表　原・郷原遺跡・第１地点出土遺物集計表　（　）は内訳

第２地点

調査目的　NTT ドコモ SS 西原無線基地局建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市西原字向井4399－1他

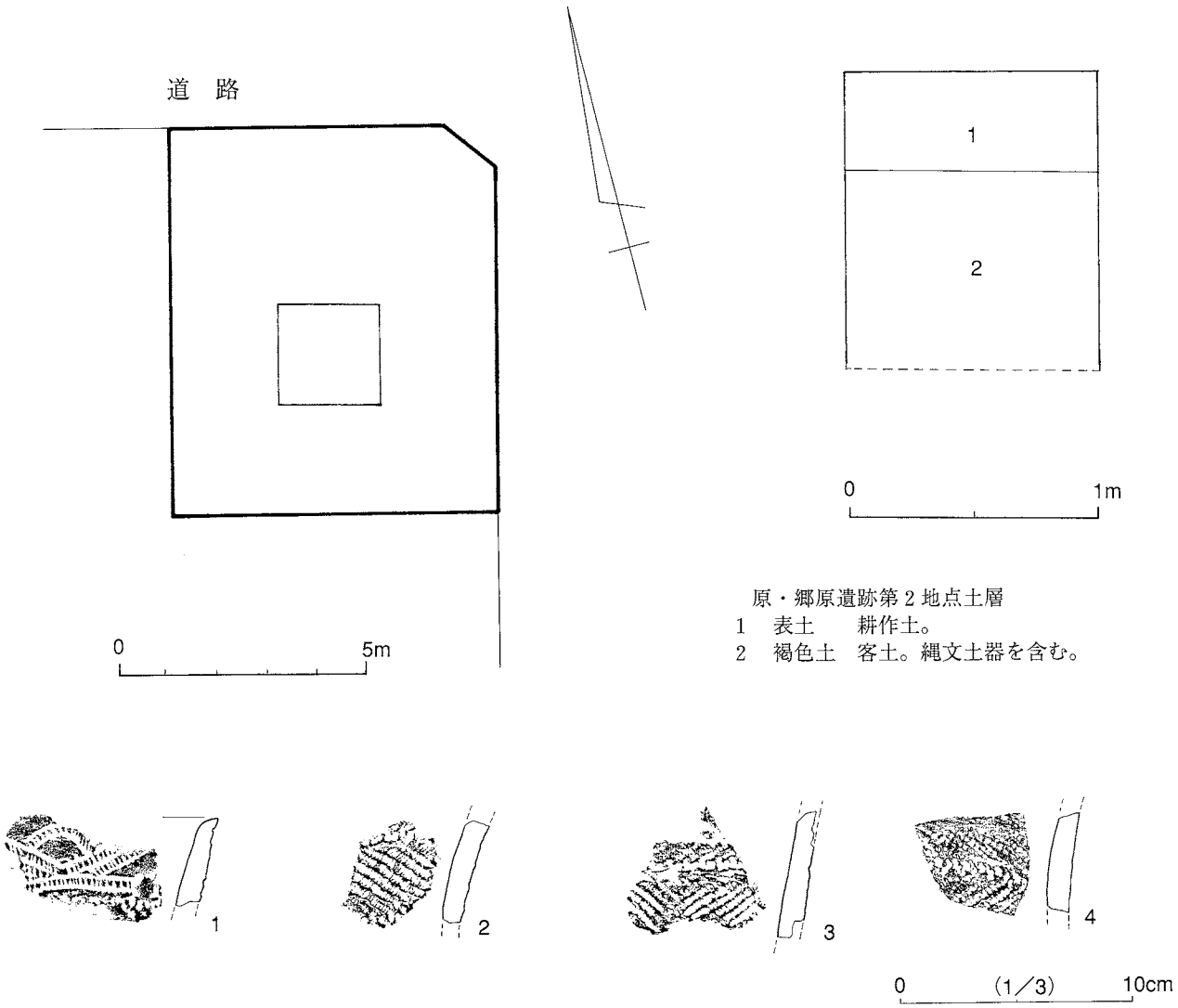
調査期間　平成11年２月24日・25日

調査面積　４m²（対象面積54m²）

概　　要

調査地点は遺跡東端に位置し、ひな壇状に区画された畑の一角にあたる。建設予定地に２m 四方の試掘坑を１ヶ所設定し、深さ1.8m まで人力で掘削した。この結果、表土（耕作土）下の客土がローム層に達する状況で、土木工事による撹乱を受けていることが確認された。地元の話では、調査地に今から20年ほど前まで地区の集会所が建っていたという。遺物は縄文土器片５点が客土中より出土したが、遺構は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

土器は繊維を多く含み、縄文時代前期前半に比定される（第43図・図版３）。



第43図　調査区平面・土層図、出土遺物

13　牧野（まきの）遺跡

牧野遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置し、縄文時代及び土師器の遺物散布地である。昭和52年、段丘南端で時期不明の地下式土坑１基が発掘調査され、平成６年には町立厳中学校建設に伴う試掘調査で時期不明の土坑１基が検出された。今回の調査地点は３ヶ所で、いずれも国道20号南側の平坦面から緩斜面に位置する。

第44図　遺跡位置

第１地点

調査目的　個人住宅建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市四方津字ノジノジ795

調査期間　平成10年９月８日

調査面積　８m²（対象面積181m²）

概　　要

調査は、建設予定地の畑に２m四方の試掘坑を２ヶ所設定し、深さ0.6mまで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土（耕作土）・暗褐色土・ローム層であった。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

第２地点

調査目的　大型店舗（イタヤマメディコ上野原店）建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市四方津字牧野道下424－2他

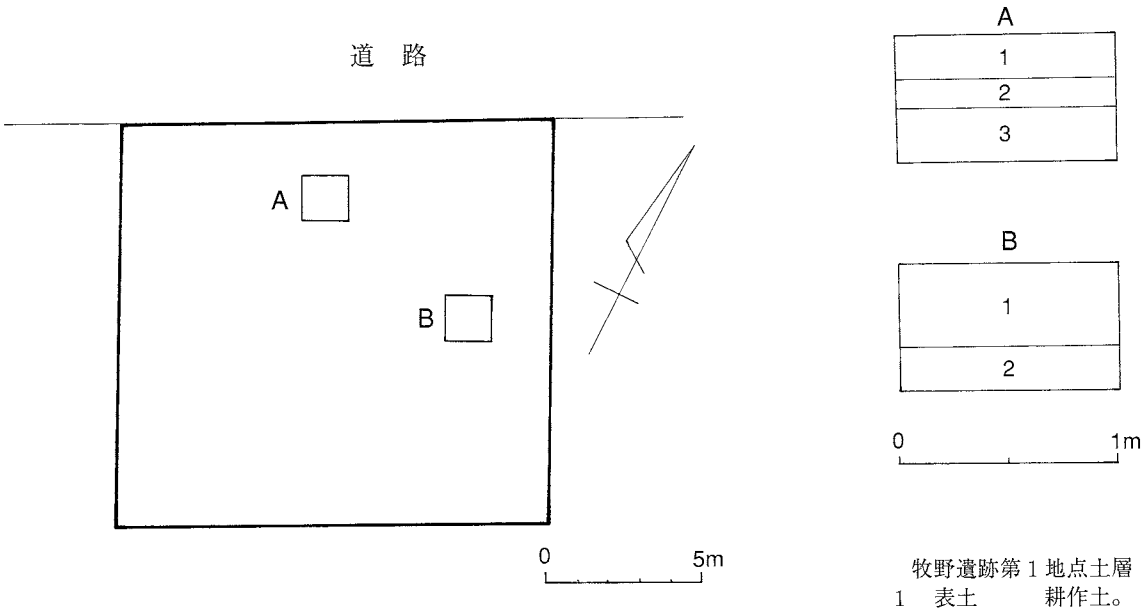
調査期間　平成11年２月22日

調査面積　41m²（対象面積908m²）

概　　要

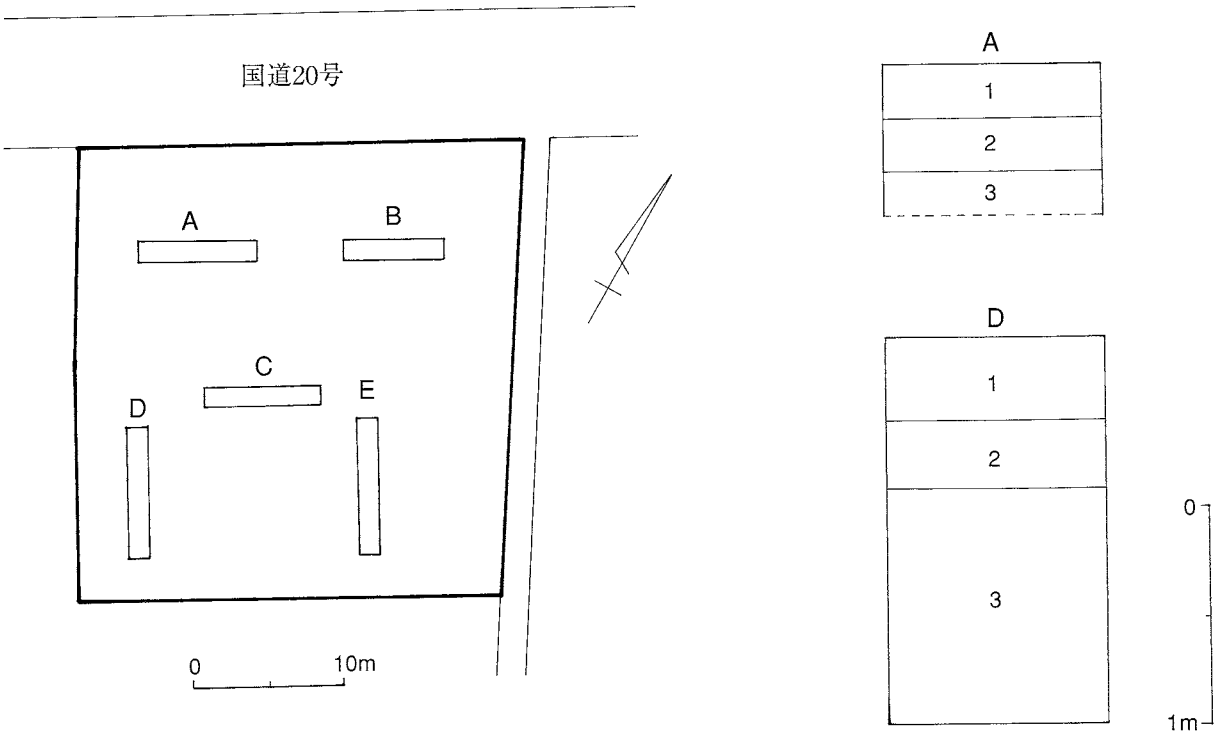
調査は、建設予定地の畑に巾１m・長さ８～９mの試掘溝を５ヶ所設定し、最深1.8mまで重機掘削機を併

第45図　調査地点



牧野遺跡第１地点土層
1　表土　　耕作土。
2　褐色土
3　暗褐色土

第１地点



牧野遺跡第２地点土層
1　表土　　耕作土。
2　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。焼土粒・炭粒を多く含む。
3　暗褐色土　粘性強い。褐色土を斑状に多く含む。

第２地点

第46図　第１～２地点　調査区平面・土層図

用し掘り下げた。この結果、地表下約0.8mから粘土質の黒褐色土が厚く堆積し、ローム層に続いていた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

第3地点

調査目的　大型店舗（ひゅうが四方津店）建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市四方津字牧野道下407他

調査期間　平成12年11月27日～12月15日

調査面積　260m²（対象面積5,186m²）

概　　要

調査は、建設予定地の畑に巾1m・長さ5～40mの試掘溝を7ヶ所設定し、最深2.3mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、国道側の平坦面（B·Cトレンチ）において縄文土器や石器を含む土層が確認された。また、緩斜面（Fトレンチ）において明治時代の中央線鉄道建設工事時に築かれた煉瓦焼成用の登り窯1基が検出され、周辺から多量の赤煉瓦が出土した。当時の煉瓦焼成窯が発見された事例は全国的に少ないため、工事計画を一部変更のうえ、盛り土による現地保存の処置を行った。

試掘坑	縄文時代		近世以降	礫
	土器	石器		
A	1（後期）	1（磨石）		
B	66（中期末～後期18）	2（石皿·台石）		24
C	55（後期11）			3
D	2（後期1）			2
E				
F			煉瓦多数、鉄釘1、鉄製棒1	
G			煉瓦多数	
合計	124	3	多数	29

第5表　牧野遺跡・第3地点出土遺物集計表　（　）は内訳

(1) 基本層序

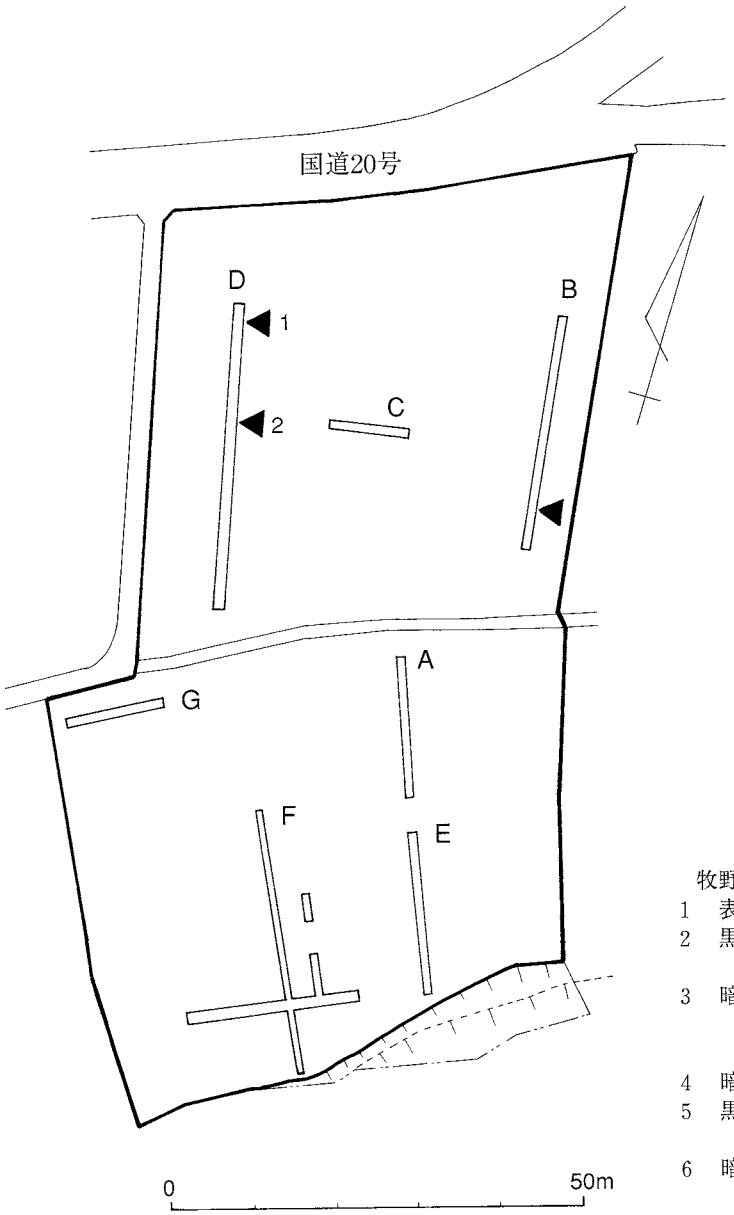
表土（耕作土）・黒褐色土・暗褐色土・ローム層で、平坦面の一部（Dトレンチ北端）では暗褐色土下に粘土層が堆積する。暗褐色土は縄文時代の遺物包含層である。

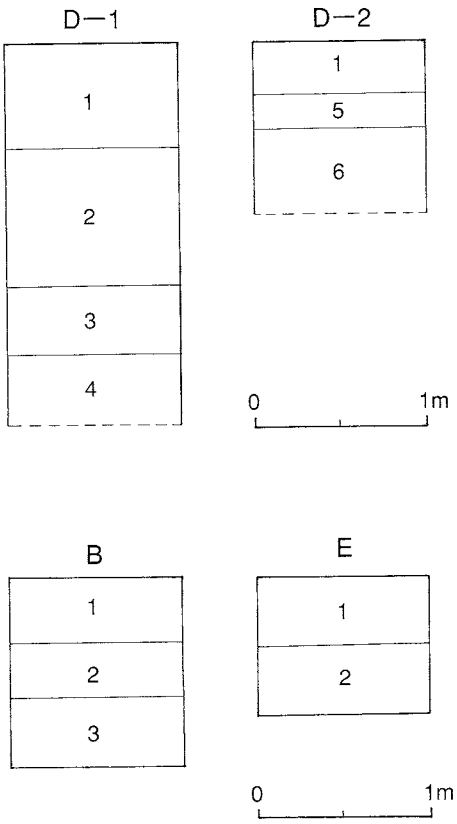
(2) 遺構と遺物

縄文土器、石器が出土した（第47図）。遺構は明治時代の煉瓦窯のみである。

1～7は深鉢で、縄文後期・堀之内式に比定される。1、小突起を有する口縁部で、円形刺突が縦に配される。2～4は平行沈線文が縦に配され、4は縄文を地文に持つ。5は無文。6・7は沈線文が横・斜位・弧状に配される。

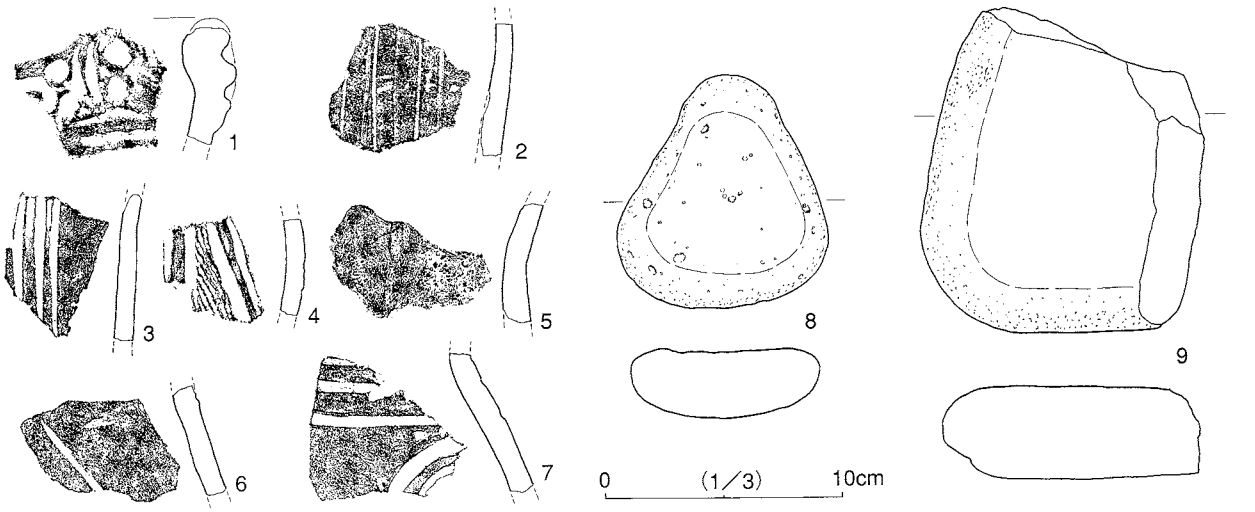
8～9は石器。8、小型の石皿。長さ9.8cm・幅8.8cm・厚さ3.5cm・重さ400g。玄武岩質溶岩。9、台石。平滑な磨面を有する。現存長13.8cm・現存幅11.5cm・厚さ4.4cm・重さ1,132g。閃緑岩。





牧野遺跡第３地点土層

1　表土　　耕作土
2　黒褐色土　粘性強い。黒色スコリア（1cm以下）・褐色土粒を多く含む。
3　暗褐色土　粘性・締まり強い。橙色（3mm以下）・黒色スコリア（1cm以下）を多く含む。
縄文時代中・後期の遺物包含層。
4　暗褐色土　粘性･締まり強い。橙色(5mm以下)を少し含む。
5　黒褐色土　粘性やや強い。黒色スコリア（1cm以下）を多く含む。第４層から漸移的に変化する。
6　暗褐色土　粘性やや強い。黒色スコリア（1cm以下）・褐色土粒を多く含む。



第47図　第３地点　調査区平面・土層図、出土遺物

(3) 煉瓦窯

緩斜面（Fトレンチ）の標高246～250mの間に位置し、床の一部が検出された。窯は斜面にほぼ直交する形で、N26°Eを主軸とする。平面規模は主軸全長約23m、最大幅8mの長方形と推定され、平均傾斜角度は約9°である。複数の焼成室から成る連房式登り窯で、窯の周囲には窯体片を含む多量の煉瓦が散乱していた。

① 焼成室と燃焼室

焼成室10室程度が連なっていたものと推定されるが、上方は遺存状況が悪いため室区分は不明確である。

下から1室目（第51図、図版17）　トレンチ最下端で検出された。この場所は、比高差1m程度の段差が付く地形となっており、公図上の土地境に当たる。燃焼室の可能性がある。平面は東西に長い長方形と推定され、幅8m・主軸方向の長さ0.9mである。前面は煉瓦を交互に積み上げた壁で区画されていた。壁は2段目まで遺存し、厚さは煉瓦1個の長手分約23cmである。床面は平坦で、普通煉瓦が横方向に整然と敷き詰められる。狭間穴(1)は長さ約60cm、幅16cmである。穴に面した煉瓦の表面には砂混じりの粘土が塗布され、一部は火熱の影響でガラス状に硬化している。

下から5室目まで（第51・52図、図版17）　各室の平面は東西に長い長方形と推定され、幅8mである。主軸方向に1.8～1.9mの間隔で段差により区画される。段差は煉瓦2個を平積みにした高さで、13cm前後である。各室の床は平坦で、煉瓦が横方向に整然と敷き詰められる。床に用いられた煉瓦は大半が普通煉瓦であるが、一部に半枡・二五分に加工したものが見られる(2)。段差には2個一対の煉瓦を主軸方向に平積みしたものを15～18cmの間隔で付設し、狭間穴としている。狭間穴の数は、5室目と6室目の間（東西トレンチ）で12ヶ所確認できたが、撹乱等による欠損部を含めれば約20ヶ所が推定される。狭間穴に面した煉瓦の表面には砂混じりの粘土が塗布され(3)、一部は火熱の影響でガラス状に硬化していた。

6室目から上（第51図、図版15・16）　床の煉瓦が乱され、室間の段差や狭間穴は不明瞭であった。このために室区分は明確でない。床には煉瓦を縦横に配置し、空間に細砂や大小の煉瓦片を敷き詰めるなど、5室目までと様相が異なっている。また、煉瓦を主軸の直交方向に溝状に配置し、あるいは長手を下にした煉瓦を等間隔で溝に架け渡した箇所があり、これらはロストルとしての用途が想定される(4)。床に用いられた煉瓦は普通煉瓦の他に、半枡・七五・二五分・羊羹に加工したものが多い。狭間穴は残されていなかったが、段差に当たる煉瓦表面が黒く煤けており、この部分が狭間穴に面していたものと推定される。

一部の焼成室では黄褐色粘土で煉瓦の床面が覆われていた。粘土は主軸方向に1.85mの平坦面を有し、厚さ約15cmである。上面は固く焼土化していた。床面が一部補修された可能性がある。

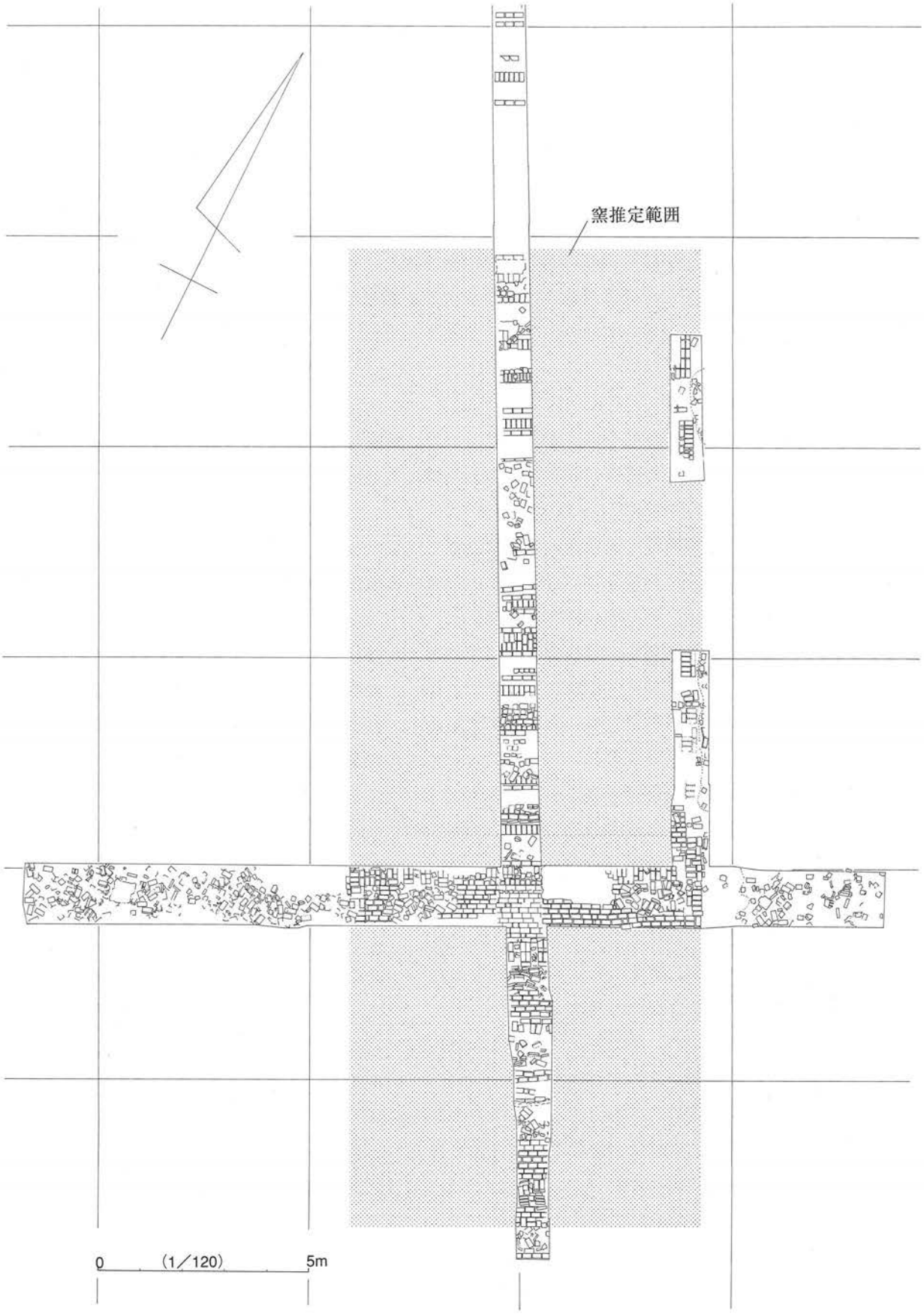
側壁と搬入出口（第52図、図版18・19）　焼成室の東西側壁は煉瓦を交互に積み上げて作られており、2段目まで遺存していた。壁の厚さは約34cmである。なお、窯東端の床の一部に未焼成の黒色煉瓦が用いられていた。このうち外縁に位置する煉瓦は角が取れて丸く摩滅し、その範囲は外縁に沿って最長63cmを測る。この場所に焼成室内部への出入口が推定できる。

(1) 狭間穴は火熱を室から室へ通すものである。穴の大きさは、昇温効果を高めるため窯の中心より側壁側で広くするものとされているが、本事例ではそのような傾向は確認できなかった。

(2) 煉瓦の形状と種類は第57図参照。

(3) 粘土は厚さ5mm前後で砂粒を多く含む。色調は暗褐色あるいは白色。煉瓦の小口あるいは長手面に一定方向に撫で付けられ、端から1cm程度はみ出しているものも多い。壁面や目地を保護するために塗布された可能性がある。中村三郎氏ご教示。中村氏は上野原市大倉に登り窯を築き、作陶に従事しておられる。

(4) 中村氏にご教示いただいた。



第48図　煉瓦窯全体図

② その他の施設（第51図、図版15）

斜面上方で煉瓦を山形に配置した施設が検出された。これを境に上方では煉瓦配置が希薄となり、付近が公図上の土地境に当たることから、この場所が窯の最上端に当たるものと推定される。この施設は、普通煉瓦の小口一端を斜めに持ち上げ山形に並べたもので、幅70cm・高さ15cm。頂部の隙間（幅20cm）に大小の煉瓦片を充填している。煙突等の煙出し関連施設の可能性も考えられる。

③ 窯の基礎（第50図、図版17）

焼成室５室目の床を一部掘り抜いて調査し、窯の基礎を確認した。窯の床面は煉瓦を３段平積みにした基底部から成っていたが、さらに下にも同様の基底部が検出された。各基底部は薄い砂層上に造られていた。基底部は、ローム塊・黒色土を多く含む黄褐色土、未焼成の黒色煉瓦や砂礫を含む薄黒色土、そして黄褐色シルト質粘土を版築状に重ねた上に造られており、シルト質粘土の上面は固く焼土化していた。地山はハードローム層である。

④ 窯の周囲（第48図）

窯の周囲には広範囲に渡って煉瓦や焼土が散乱していた。煉瓦には窯壁に用いられて表面がガラス状に固くなったものや、狭間穴に見られた表面に粘土を塗布した煉瓦も多い。

⑤ 窯壁（第54図12）

複数の煉瓦を積み上げた窯壁片が窯西側の煉瓦散乱部で見つかった。内面は自然釉が厚く付着し、雫となっている。また、内壁がわずかに湾曲していることから、窯の横断面がアーチ形をしていたことが推測される。

⑥ 出土遺物（第54～56図、第６表、図版19・20）

大半が煉瓦で、他に鉄製品がある。棒状製鉄品（第56図２）はＦトレンチ最下端より出土した。

煉瓦はすべて赤煉瓦で、耐火煉瓦（白煉瓦）は含まれない。未焼成品もある。窯体と製品の区分は難しいが、本窯が廃棄後に解体された様相を呈していることを考えると、出土した煉瓦の大半は窯体に用いられていたものと推測される。以下、窯の内外からサンプル採取した29点の煉瓦について観察結果をまとめた。

寸法　煉瓦によってわずかな差異があるが、平均値は長さ227.5mm、幅110.6mm、厚さ57.7mmであった。この寸法は、大正14年に採用され戦後のJIS規格に踏襲された煉瓦の規格210×100×60mmに比べると大型であり、明治38年時点で５種類に分類されていた煉瓦規格と比較すると、東京形（227×109×60.6mm）、作業局形（227×109×56mm）に近似している。このことから、本遺跡の煉瓦は、大正14年の統一規格以前に作られたもので、明治期に遡る可能性を指摘できる。

色調　いわゆるオレンジ色、肌色、赤紫色、灰色とあり、一様ではない。窯体に用いられた場所によって加熱の度合いに差異が生じたことも一因であろう。

胎土　砂礫を多く含むため、煉瓦表面に礫（１cm程度）の脱落痕や、礫の一部が露出しているものも見られ、こうした箇所から亀裂が生じている。

成形方法　すべて手抜き成形である。これは、木製の型枠に粘土塊を入れて叩き締め、取り出し後、平の面を撫で板で平滑に仕上げ、１個単位手作りで行う方法である。出土した煉瓦の多くは、平の一面あるいは両面に、一定方向に撫でた痕跡が残されていた（図版20）。なお、数点の煉瓦に、成形段階で付いたと思われる指頭痕が平一面、あるいは両面の一部に残されていた。

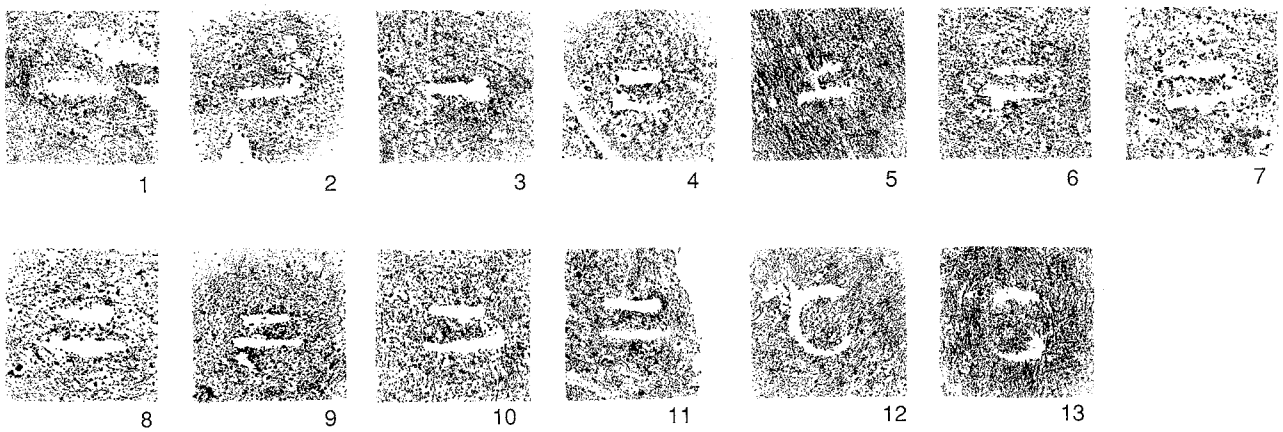
刻印　29点中13点に刻印が押されていた（第49図、図版20）。押された場所は平の一面、一ヶ所に限られる。刻印は「一」、「二」、丸の一端が欠けた「C」字状の３種類である。同じ種類でも字形に微妙な差異があることから、複数の印が想定される。刻印の押された煉瓦は窯の内外から出土しており、字形によって出土地点が

異なるような状況は見られなかった。

目地材　砂目地と呼べるほどに砂の含有が多い土が用いられている。

未焼成の煉瓦　未焼成で黒色の煉瓦がある。窯の床材として用いられていた他、窯の基礎部分への埋め込み材にも用いられていた。第56図22は焼成室の出入口と推定される床面に用いられ、角が取れ丸く摩滅している。

その他　数点の煉瓦に紐状の繊維圧痕が残されていた（第55図25・29、図版20）。繊維痕はすべて長手一面の一部に見られ、煉瓦の端部から斜めに残されていた。先端がほつれているものもあった。成形から乾燥段階で付いた可能性が高い。



第49図　煉瓦刻印

(4) 煉瓦窯に関する考察

今回発見された窯は、地元の言い伝えや各種文献から、明治時代、中央線の鉄道敷設工事に際して築かれた煉瓦生産用の窯であることがわかっている。東京都八王子から山梨県甲府を結ぶ中央線（中央東線）の建設は、明治29年12月～同36年６月にかけて行われた。八王子・甲府間は小仏や笹子峠など「山岳重畳地勢嶮峻」であるため、中央線全線の中でも最難工区とされた(1)。このため、駅舎の他に多数の橋梁や隧道が建設され、建築材として莫大な量の煉瓦が必要とされた。煉瓦は当初、主に埼玉県深谷の日本煉瓦製造会社で製造され、八王子から小仏峠を越えて運搬されていたが、小仏峠以西については中央線沿線の各所に煉瓦製造所が設けられ、現地生産が図られたようである。当時の煉瓦工場は、市内では四方津と八ツ沢に、周辺では山梨県勝沼町奥野田(2)、神奈川県津久井郡相模湖町与瀬が知られている。このうち四方津工場が本遺跡に当たる。

① 四方津工場

工場は今回の調査地にあたり、地元では「レンガ場」と呼ばれている。中央線沿線に位置し、国道20号や桂川・鶴川に近く交通の便が良い地域である。工場は明治32年に大倉土木組（現在の大成建設）が鉄道作業局の請負で操業された。大倉土木組が鉄道作業局に提出した請負契約解除に関する文書『煉化石納入請負契約解除之義ニ付御願』明治33年１月15日（以下、文書と呼ぶ）には、四方津工場に「壱袋五千個入リ弐拾袋アリ合計拾萬個」の煉瓦製造可能な窯を設け、明治32年５月～12月までの契約期間で日夜製造に従事したことが記されている(3)。しかし、工場の操業は予定どおり進まず、排出される煤煙のため周辺の桑園に被害が出るとして地元より操業中止が要請され、さらに10月の暴風雨により工場が損壊したなどの理由で度々操業が中断し、結局、契約不履行を余儀なくされている。

煉瓦の製造工程には、原土の採取・養生（粉砕・ねかせ）、砂との混練、成形、乾燥、焼成がある(4)。先の文書には「煉瓦石焼竈」、「抜小屋」（成形作業用の建物）、「白地乾場」（素地の天日乾燥場）や、薪材や出荷前の煉瓦製品を備蓄したことが記されており、工場で一連の製造を行っていたことがわかる。原土や薪材の採取地は明らかでないが、煉瓦の現地生産体制を考えれば工場の近隣で賄っていた可能性が強い。このことは、これまでの試掘調査で国道側平坦面の地下１ｍ程度に粘土堆積が広範囲に確認されていることからも裏付けられる。

煉瓦製品は、当時完成間もない国道20号（川辺新道）や臨時の軽便鉄道、さらに舟運を利用して、東方の関野村（現在の神奈川県藤野町）にあった鉄道作業局の備蓄施設へ運搬され、途中、上野原駅下の新田河原に留め置かれていた。

② 煉瓦焼成窯

今回の調査は１ｍ幅の試掘で止まったため、窯の全容を把握するには至っていない。幸い、先の文書に窯の様子が断片的に記されていたので、その内容などを援用しながら調査結果を考えてみたい。

窯の平面は長軸約23m・幅８ｍの長方形と推定されるが、主軸方向の両端が不明確となっている。今回の調査では明らかにできなかったが、窯の上端に長大な煙突があったものと思われ、煙突が窯の本体から離れて位置していたことも考えられる(5)。一方、窯の下端では、燃焼室と見られる幅の短い１室目が検出されたことから、この前面の壁を窯本体の南壁と捉えた。しかし、この壁の前面にも煉瓦の配置が見られることから小規模な付属施設の存在も想定できる。

焼成室は２～５室目が同規模で、１室あたりの平面規模は、基底面で1.8～1.9m×８ｍ、狭間穴や壁を除いた内法は約1.3m×7.3m（約9.5m²）と推定される。この規模で窯を均等に割り付けると焼成室は10室程度が想定される。一方、先の文書の中で、窯は「壱袋五千個入リ弐拾袋アリ合計拾萬個也。但し平均一昼夜之焼上

高ハ弐袋ニシテ都合壱万個ハ毎日製造シ得ル総高ナリ」と記され、１室5,000個の煉瓦製造可能な焼成室が20室あったと解釈できる[6]。想定した数と異なるが、あるいは、同規模の窯が複数あった可能性もある[7]。

調査では、焼成室床面を粘土で張り替えたと見られる箇所や、基底部の二重構造など、窯の補修・改築をうかがわせる結果が得られた。文書には暴風雨による四方津工場の被害が記されており、「四方津焼竈ハ其大半ヲ潰崩シ」、抜小屋２棟、白地乾場に被害が生じ、復旧に40日間程度を費やしたとあり、大規模な修復作業のあったことがわかる。このことが調査結果と直接結び付くかは不明であるが、補修・改築の可能性を裏付けるものといえる。なお、11月下旬に復旧が完了して以降は、厳寒時期のために白地（素地）の製造が不可能となってしまい、結局操業を中止している[8]。このことから、本窯の操業は明治32年５月～12月までの極めて短期間だったことがわかる。

今回の調査で発見された煉瓦は、未焼成のものも含めて全般に砂礫が多く含まれており、礫が表面に露出して亀裂の原因となっているものも見られた。とくに未焼成の煉瓦は当工場で製作された可能性が高いことから、本窯で焼成された製品も質の劣るものが多かったことが想定される。このことは、当工場の操業主である大倉土木組が製造した煉瓦が粗悪品であったと伝えられていることからも裏付けられる[9]。

本窯は、郷土の近代化を象徴する遺構として、関係者のご努力により現地保存の措置が図られた。現状で見ることはできないが、近隣民家の庭先等には当時の余剰煉瓦が使われ、往時をしのぶことができる。

なお、この調査にあたり多くの方々からご指導・ご教示を賜った。とくに、㈶鉄道総合技術研究所の小野田滋氏には現地指導から各種文献のご教示にいたるまで種々のご配意をいたただいた。記して感謝申し上げます。

(1) 『日本鉄道請負業史明治篇』鉄道建設業協会1967

(2) 室伏徹氏ご教示。

(3) この文書は鉄道総合技術研究所の小野田滋氏にご教示いただいた。本窯や煉瓦製造の実態を知るうえで貴重な資料である。

(4) 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』1999

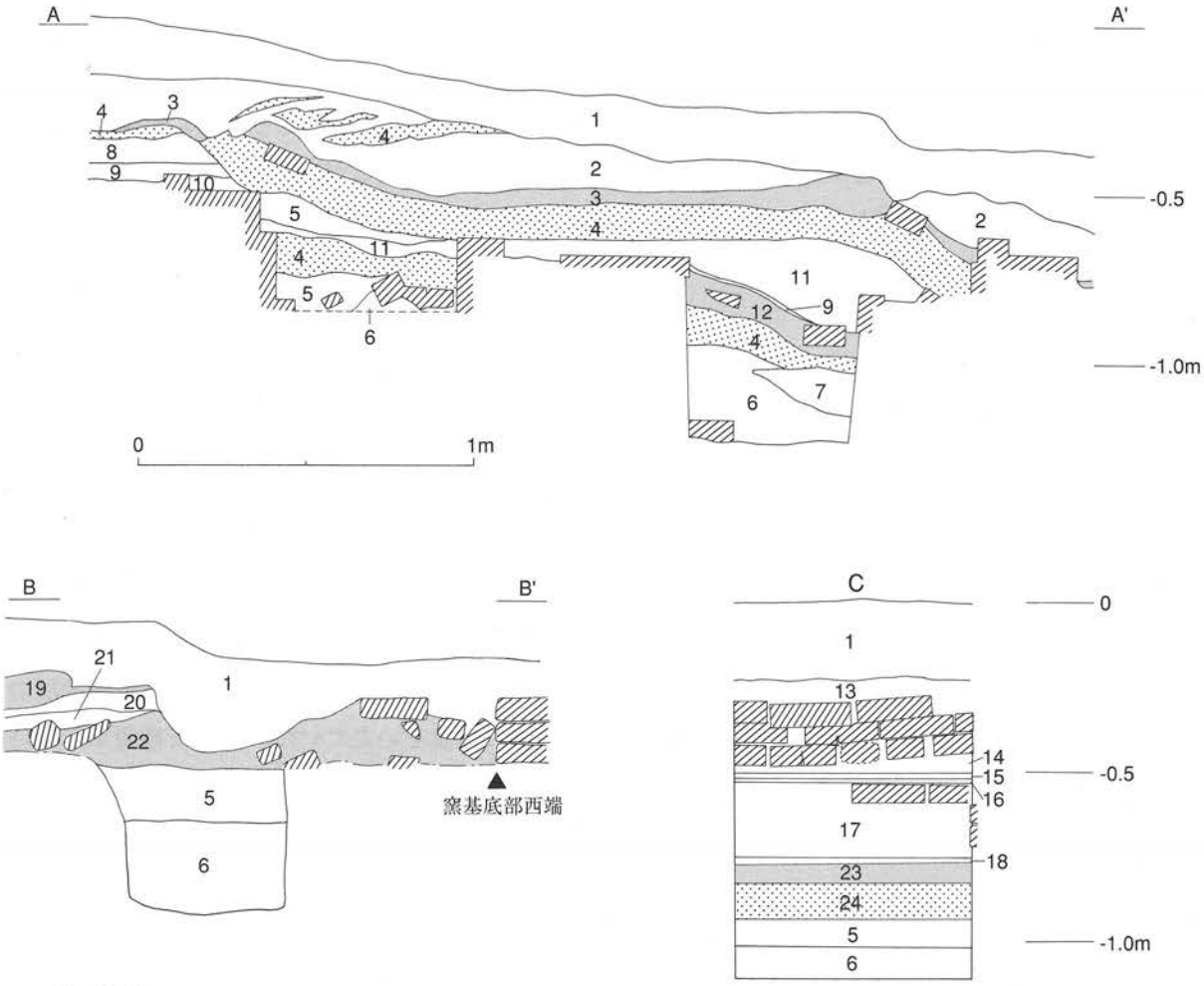
(5) 明治35年発行の『煉瓦要説』や、明治時代から続く福島県喜多方市の三津谷の登り窯（煉瓦・瓦の焼成窯）では、煙突は窯の中軸線の延長に１基設けられ、焼成室とは煙道を通して結ばれている。煙道は『煉瓦要説』では地上に設置されるものとし、三津谷の登り窯は地下に埋設されている。

(6) 本窯で実際に１室5,000個の煉瓦が焼成可能なのかは即断できない。ちなみに福島県喜多方市の三津谷の登り窯は、１室が高さ・幅ともに約1.1m、長さ4.5mの規模で、１室あたり煉瓦約1,000本が焼けるという（北村悦子『喜多方の煉瓦蔵』1989）。これを単純に１室あたりの床面積で比較すると、本窯は三津谷の1.5倍程度となる。

(7) 地元の言い伝えによると、登り窯は２～３基並列していたという。

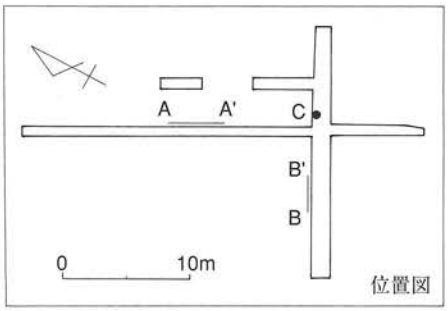
(8) 明治33年３月７日に契約解除が認可されている。

(9) 前掲『日本鉄道請負業史明治篇』、277頁。この中で、与瀬・吉野間（現在の相模湖町と藤野町）の工区に必要な煉瓦製造を大倉土木組が請け負い、「……近くに煉化石製造所を設け附近の土にて製出したのであるが、土質不良にして本質的に煉化製造に適せず、製出煉化石はガサガサにて粗悪脆弱用に堪えず、関係者之を悪口してカステラ煉化と称した位である。」と記されている。当時、大倉土木組の煉瓦製造所は現在の上野原市と相模湖町与瀬にあった。本件は小野田滋氏にご教示いただいた。

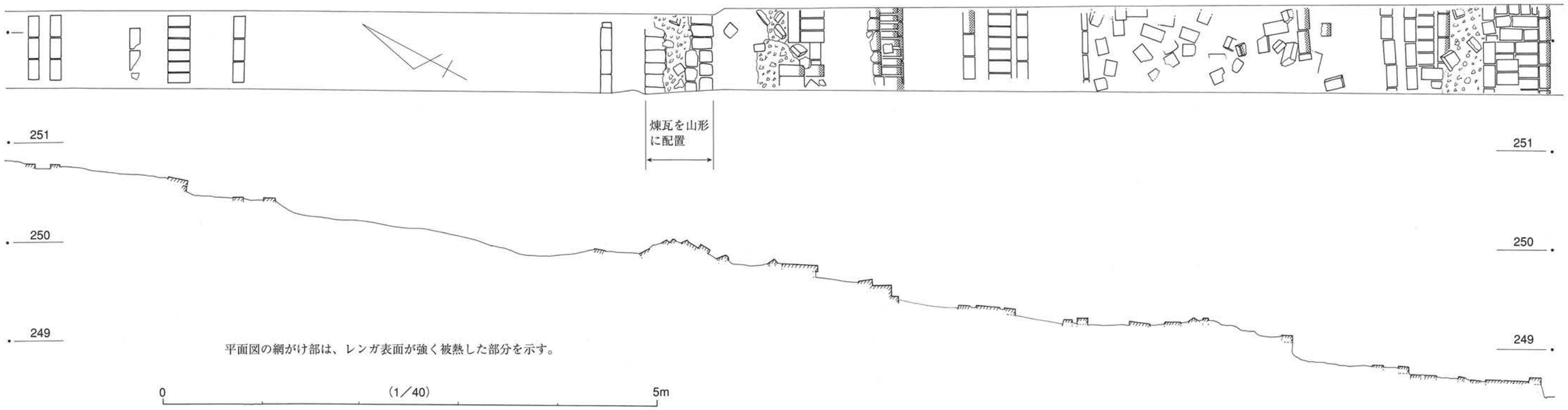


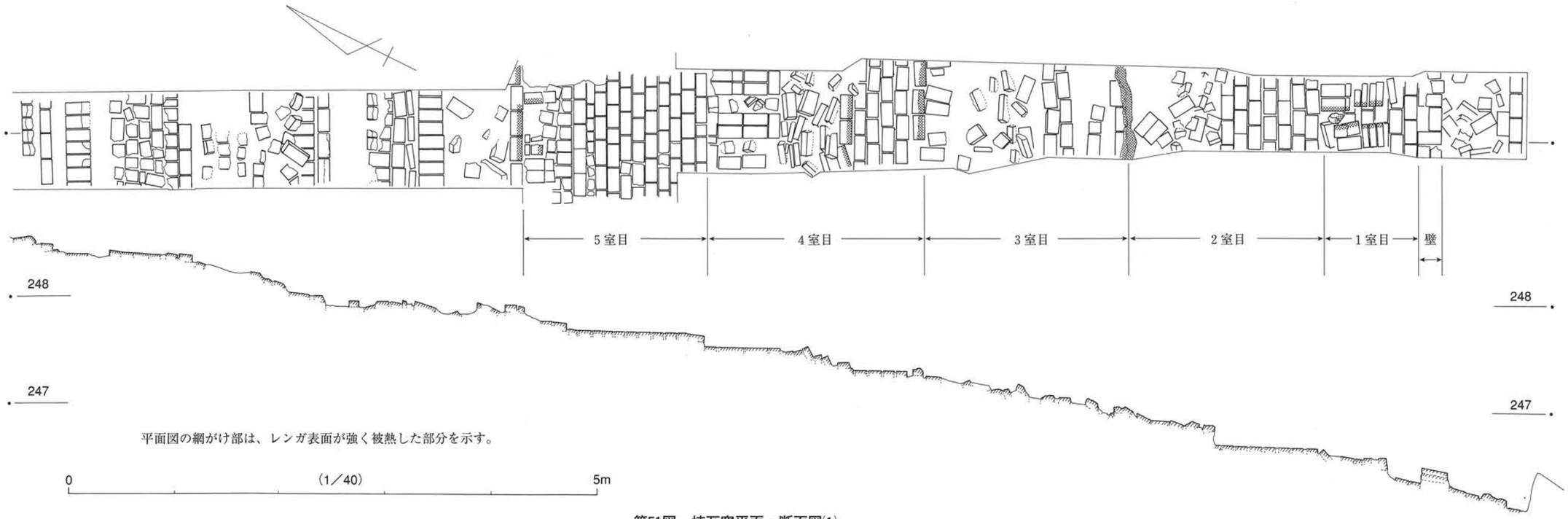
煉瓦窯土層

1　表土　耕作土
2　薄紫色砂層　煉瓦片、焼土塊（1cm以下）多く含む。灰色・紫色砂粒が板状（厚さ5mm～1cm）に弱く固結したものが下層に散在する。
3　焼土　第4層上部が焼土化したもの。
4　黄橙色シルト質粘土
5　薄黒色シルト質粘土　第4層との境は漸移的。白色の粘土粒（1cm以下）を多く含む。石英粒・砂粒（3mm以下）、未焼成の黒色煉瓦片を含む。
6　黄褐色土　粘性・締まりなくパサパサ。第5層由来の黒色土・ローム塊を多く含む。
7　黒色土　粘性・締まりなくパサパサ。
8　赤色砂層　灰色砂粒が弱く固結したもの（5mm～1cm）を含む。
9　赤色砂層　乾燥すると白色化。礫（2mm以下）を多く含む。
10　煉瓦細片
11　薄紫色砂層
12　赤色砂層　砂粒は弱く固結（5mm～7mm）する。
13　砂質焼土　小石を多く含む。
14　赤色砂層
15　灰色砂層　硬質。
16　紫色砂層　砂粒はきめ細かい（1mm以下）。
17　明赤褐色　固く焼き締まる。粒子は粗い。
18　灰色砂層　軟質
19　焼土
20　赤灰色土　締まり強い。
21　にぶい赤褐色　締まり強い。焼土粒・炭粒を含む。
22　焼土　煉瓦片を多量に含む。
23　焼土　第24層上部が焼土化したもの。
24　第4層（黄橙色シルト質粘土）に類似する。粘性なくパサパサ。締まり強い。第5層由来の黒色土（1mm以下）を多く含む。

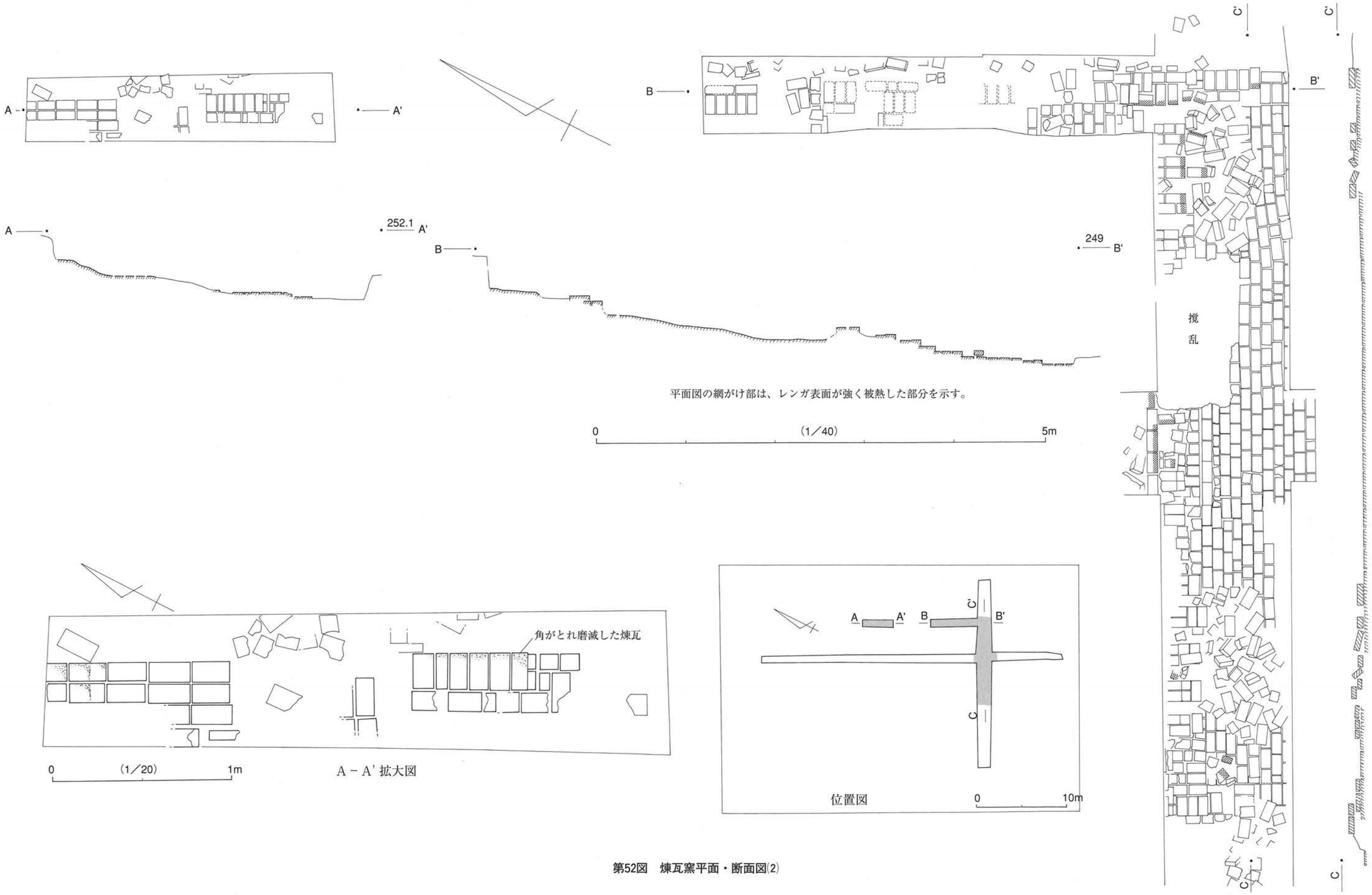


第50図　煉瓦窯土層図

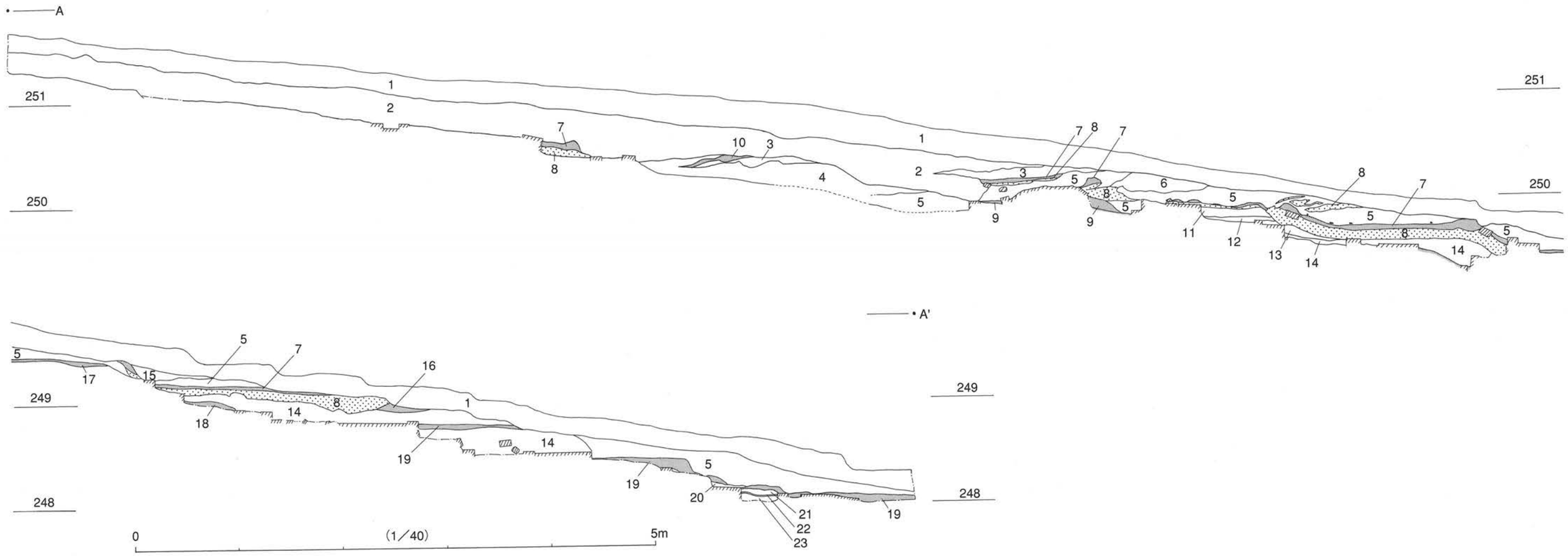


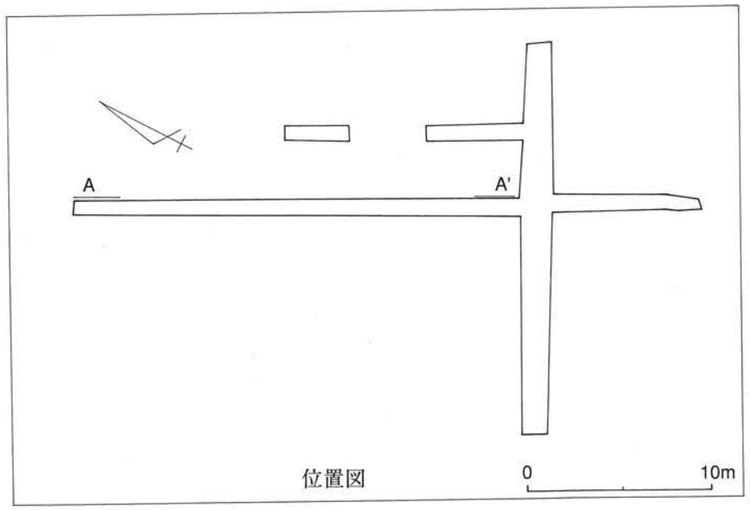


第51図　煉瓦窯平面・断面図(1)



第52図　煉瓦窯平面・断面図(2)





第53図　煉瓦窯土層図

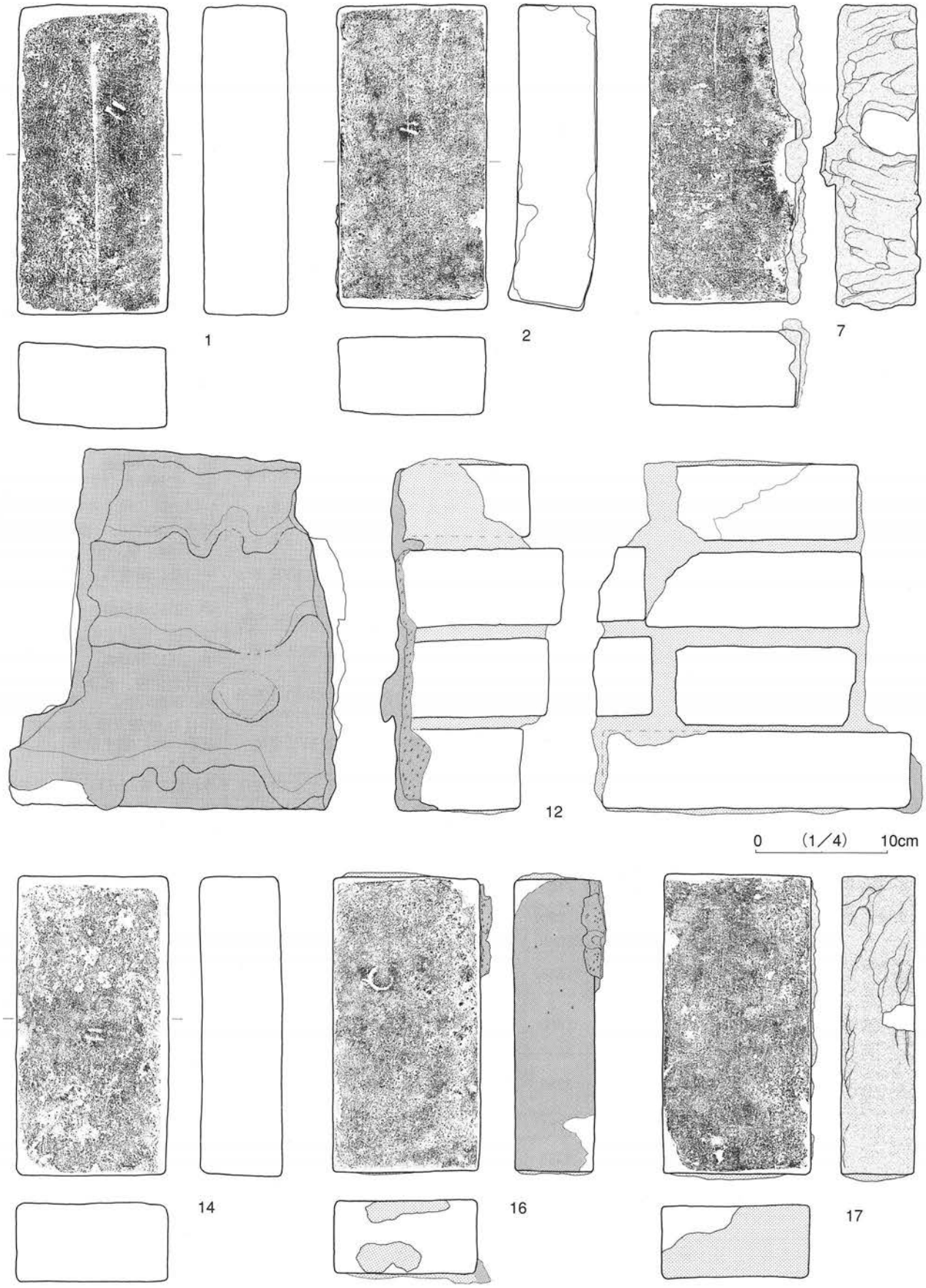
煉瓦窯土層

1　表土　耕作土。
2　砂質焼土　締まりのない黄色土粒・塊を多く含む。煉瓦細片を含む。
3　黒褐色土　締まりない。焼土粒・塊を含む。
4　砂質焼土　第３層由来の黒色土（1cm以下）、黄褐色粘土粒・塊を含む。
5　薄紫色砂粒　煉瓦片、焼土塊（1cm以下）多く含む。灰色・紫色砂粒が板状（厚さ5mm～1cm）に弱く固結したものが下層に散在する。
6　第５層と第８層の混合層。
7　焼土　第８層上部が焼土化したもの。
8　黄橙色シルト質粘土
9　赤色砂層　砂粒は弱く固結（5mm～7mm）する。
10　砂質焼土
11　赤色砂層　灰色砂粒が弱く固結したもの（5mm～1cm）を含む。
12　赤色砂層　乾燥すると白色化。礫（2mm以下）を多く含む。
13　薄黒色シルト質粘土　第８層との境は漸移的。白色の粘土粒（1cm以下）を多く含む。
14　薄紫色砂層
15　赤色砂層
16　焼土
17　赤色砂層　硬質。
18　赤色砂層　砂粒は弱く固結（1cm以下）する。
19　赤色砂層　粗粒。
20　黄褐色砂質土　硬質
21　赤色砂層
22　紫色砂層
23　赤色砂層　粗粒。

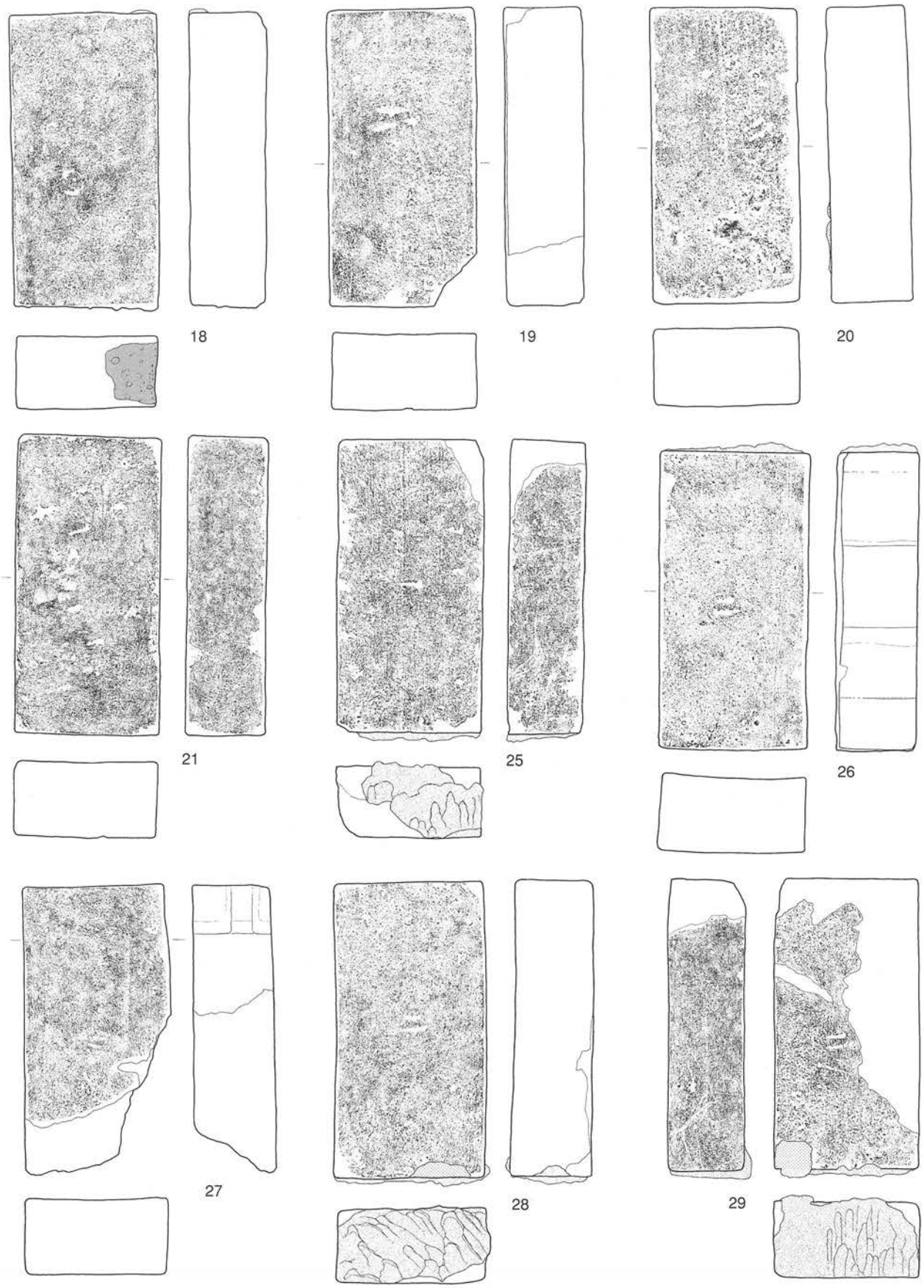
No.	出土地点	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	刻印	焼成	色　　調	備　　考
1	遺構外(西側散乱部)	232	111	60	2520	二	やや不良	橙色 5YR 6/8	
2	〃	224	110	55	2400	二	良	暗赤色 10R 3/4	長手一面に自然釉。変形し亀裂が生じる。
3	〃	223	108	57	2230		やや不良	赤褐色 10R 5/4	長手一面に粘土塗付（厚さ2～5mm)。小口一面に自然釉。
4	〃	227	108	58	2330		不良	鈍い赤褐色 2.5YR 5/4	平二面に調整痕、一面に指頭痕。長手二面に粘土塗布（厚さ3～5mm)。
5	〃	239	152	55	2830		良	赤灰色 2.5YR 5/1	変形し亀裂が生じる。平一面に重ね痕。
6	〃	224	109	57	2140		不良	灰赤色 2.5YR 6/2	平一面に調整痕、二面に指頭痕。小口一面に砂目地（厚さ5mm)。
7	焼成室の床面直上	225	114	59	2375		不良	赤褐色 10R 5/4	平二面に調整痕。長手一面に粘土塗布（厚さ2～15mm)。
8	〃	230	115	59	2280		やや不良	鈍い橙色 2.5YR 6/4	平一面に調整痕。砂目地付着。長手一面に粘土塗布（厚さ3～8mm)。
9	焼成室の床面直上	223	111	58	2150		やや不良	鈍い橙色 2.5YR 5/4	平二面に調整痕。小口一面に粘土塗布（厚さ2～5mm)。
10	〃	235	104	56	2385		良	灰赤色 2.5YR 6/2	平二面に調整痕、一面に指頭痕。変形し亀裂が生じる。
11	遺構外(東側散乱部)	234	111	58	2200		不良	赤褐色 10R 5/4	小口一面に粘土塗付(4～7mm)。
12	〃	－	－	－	－		やや不良	鈍い橙色 2.5YR 6/4	窯壁。縦270mm×横250mm×厚さ125mm。重さ8600g。
13	東壁基底部	228	112	58	2335		やや不良	鈍い橙色 2.5YR 6/4	平二面に調整痕。
14	焼成室床面	225	113	58	2345	二	不良	明赤褐色2.5YR 5/8 鈍い橙色2.5YR 6/3	平一面に調整痕、指頭痕。
15	西壁基底部	226	111	59	2020		不良	橙色 2.5YR 6/8	平二面・長手一面に調整痕。平一面に指頭痕。
16	燃焼室前面	225	111	59	2325	C	不良	鈍い橙色 2.5YR 6/4	砂目地付着。長手一面に自然釉、繊維圧痕。
17	焼成室狭間孔	228	114	57	2210		やや不良	橙色 2.5YR 7/6	砂目地付着（厚さ3mm以下)。長手一面に粘土塗布（厚さ1～5mm)。
18	焼成室の床面直上	225	112	58	2155	C	不良	鈍い橙色 2.5YR 6/4	砂目地付着。小口一面に自然釉。
19	〃	228	110	58	2100	一	やや不良	灰赤色 2.5YR 5/2	平二面に指頭痕。
20	焼成室床面	226	110	58	2290	二	やや不良	明赤褐色2.5YR5/8 赤褐色10R4/3	平一面に指頭痕。砂目地付着。
21	焼成室の床面直上	228	110	58	2125	一	不良	鈍い橙色 2.5YR 6/4	平一面に指頭痕。長手一面に繊維圧痕。
22	東壁基底部	(118)	107	55	(1250)		未焼成	灰褐色 7.5YR 6/2	角が取れ、丸く摩滅する。
23	〃	(113)	114	58	(1085)		未焼成	灰褐色 7.5YR 6/2	角が取れ、丸く摩滅する。
24	窯基底部の掘り方覆土	(156)	110	59	(1245)		未焼成	灰褐色 7.5YR 6/2	
25	焼成室の床面直上	230	110	55	1880	一	不良	淡赤橙色 2.5YR 7/4	平一面に指頭痕。長手一面に繊維圧痕。小口一面に粘土塗布（厚さ3～5mm)。
26	〃	230	109	58	2280	二	やや不良	赤灰色 2.5YR 5/1	平一面に指頭痕。小口一面に粘土塗布（厚さ2～7mm)。長手一面に重ね痕。
27	〃	(220)	110	58	(1785)	二	良	灰赤色 2.5YR 6/2	
28	〃	230	111	58	2365	二	やや不良	淡赤橙色 2.5YR 7/4	平一面に指頭痕。小口一面に粘土塗布（厚さ2～5mm)。
29	〃	229	112	58	2120	二	やや不良	灰赤色 2.5YR 6/2	平一面に指頭痕。長手一面に繊維圧痕。小口一面に粘土塗布（厚さ3～5mm)。

焼成の基準はつぎのとおり。良：緻密で、叩くと金属音がする。やや不良：緻密だが、叩くとやや鈍い音がする。不良：叩くと空虚な音がする。

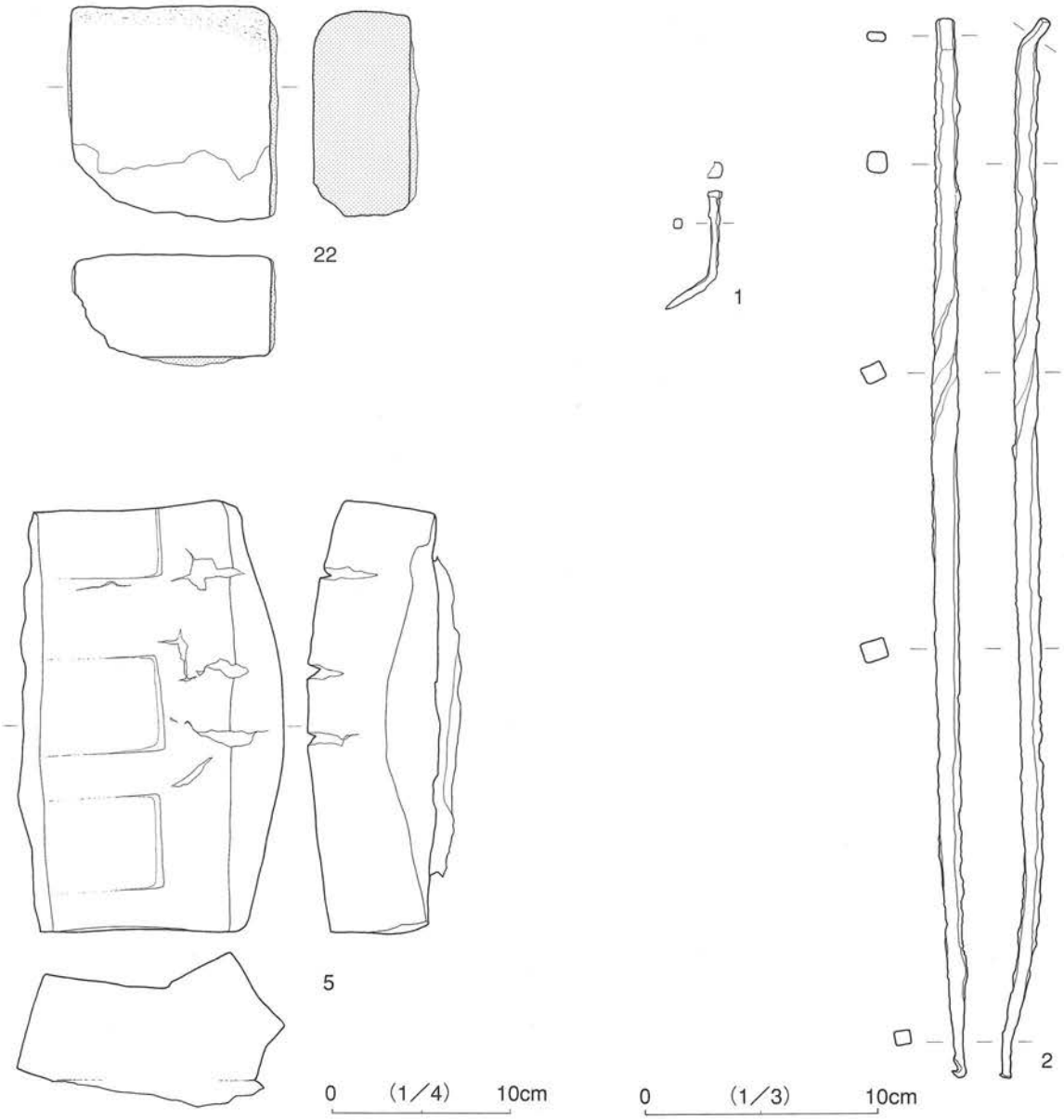
第6表　煉瓦観察表



第54図　煉瓦実測図(1)



第55図　煉瓦実測図(2)



目地土

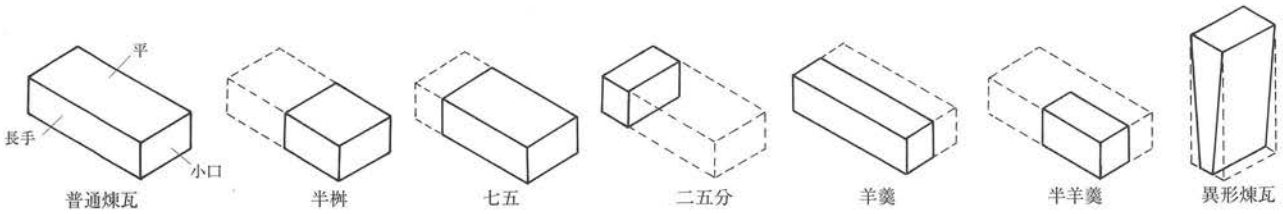
砂混じり粘土

ガラス状に硬化した範囲

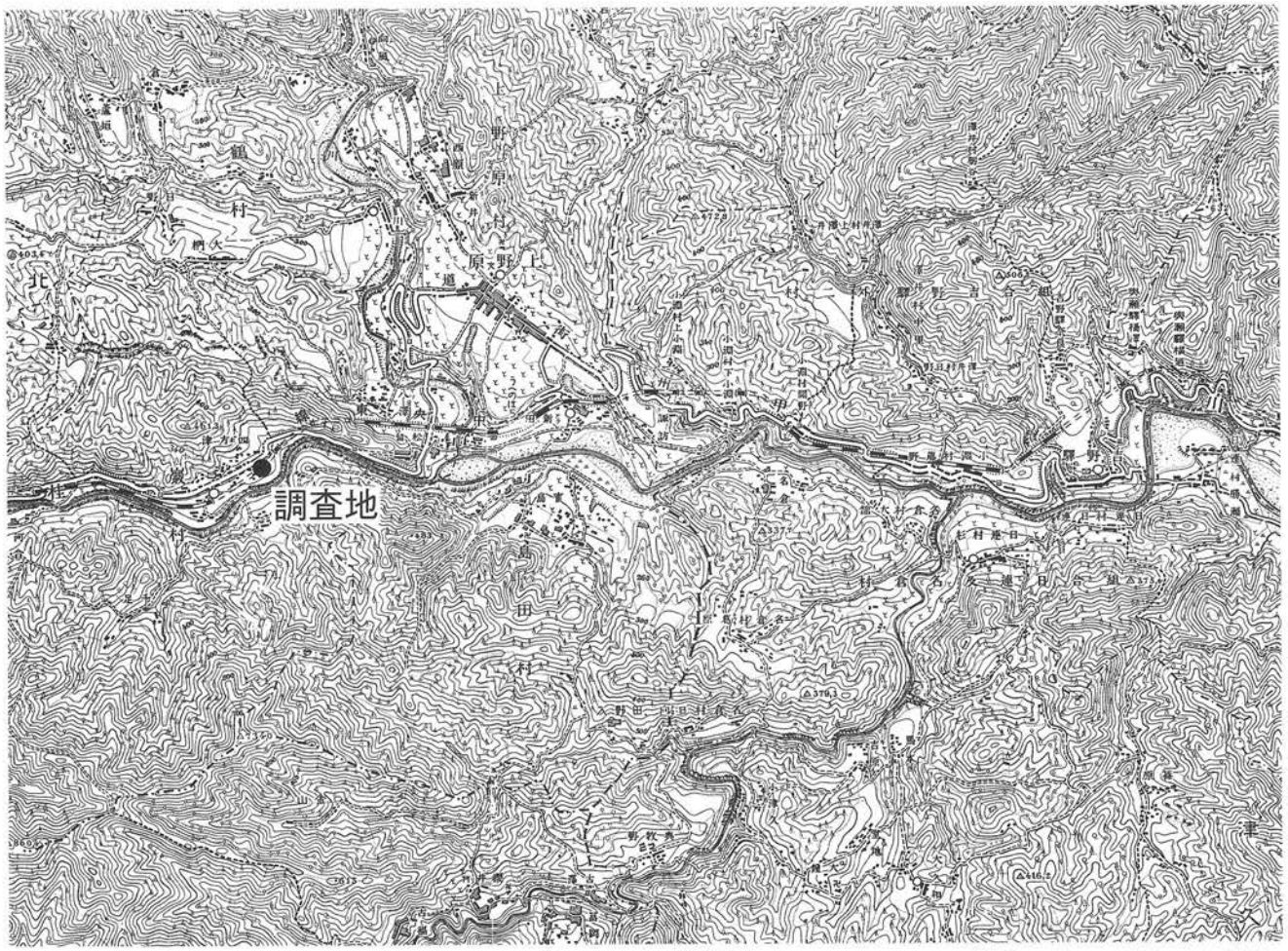
番号	出土区・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備　考
1	窯西側の煉瓦散乱部	釘	6	0.3	0.3	1	頭方形
2	燃焼室前面の煉瓦散乱部	不明	46	0.9	0.9	150	火かき棒？

鉄製品

第56図　煉瓦実測図(3)、鉄製品



第57図　煉瓦の形状と種類



第58図　中央線沿線図　　明治43年　5万分の1地図

14　根本山遺跡（ねもとやま）

根本山遺跡は市街地の背後にある根本山（標高322m）南斜面に位置し、縄文・平安時代の遺物散布地である。今回の調査地点は４箇所で、これ以前の発掘調査例はない。

第59図　遺跡位置

第１地点

調査目的　分譲宅地造成工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字新町1364－1他

調査期間　平成10年10月28日～11月13日

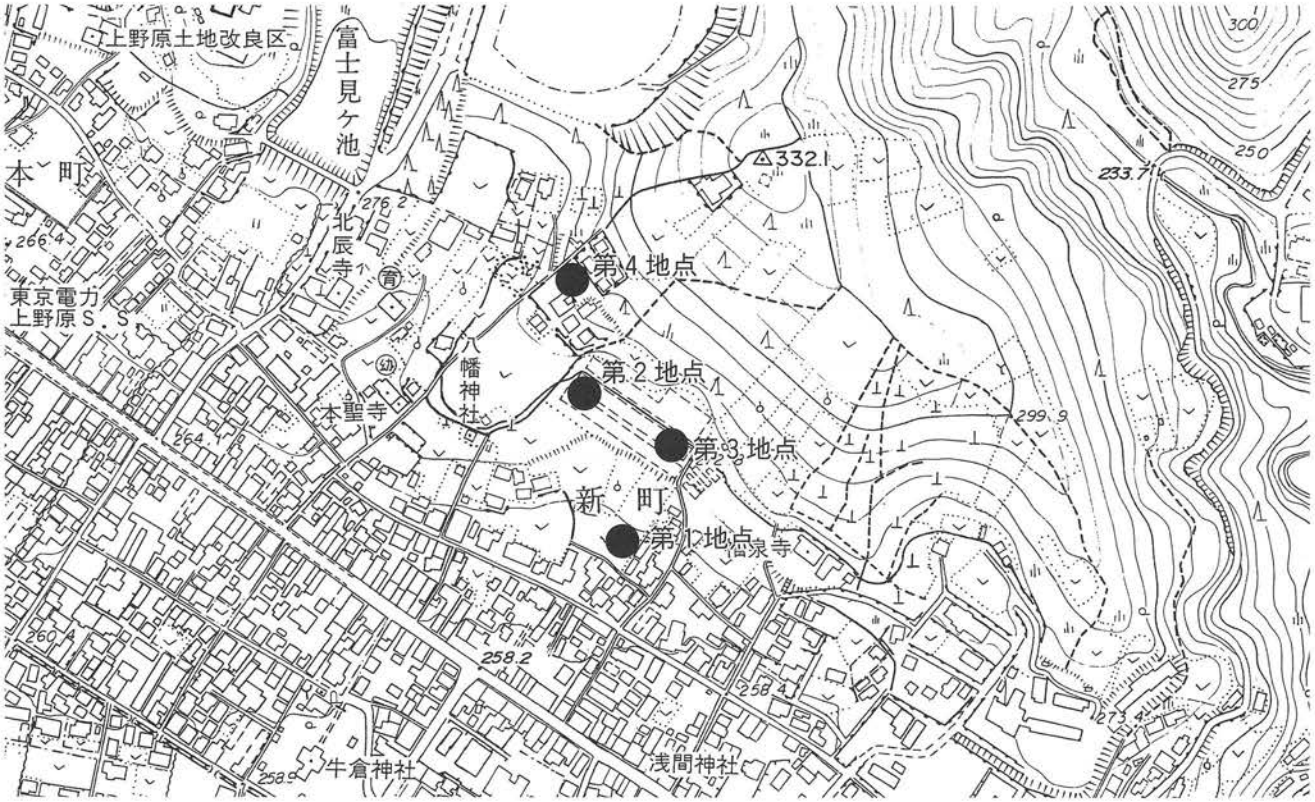
調査面積　130m²（対象面積2,200m²）

概　　要

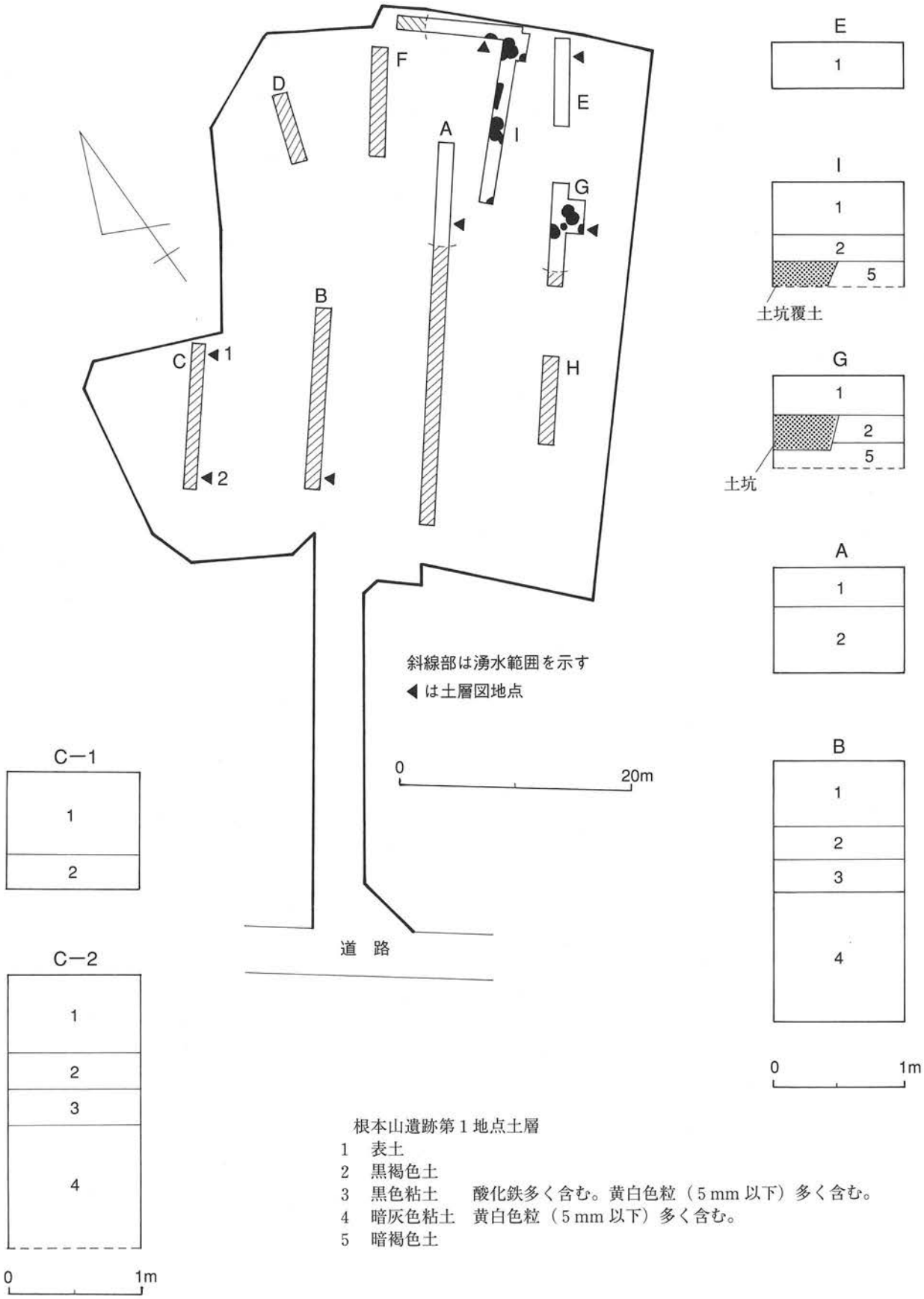
調査地点は遺跡南端の緩斜面に位置する。工事予定地の畑地に巾１m・長さ10～40m の試掘溝を９ヶ所設定し、最深２m まで重機掘削機を併用して掘り下げた。多くの試掘溝で湧水が確認されたため、湧水部以下の掘り下げは行わず、一部深掘りして層序を確認するに止めた。調査の結果、湧水がない斜面上方で縄文及び古墳～平安時代の遺構・遺物が集中して確認されたため、事業者と協議の上で遺跡範囲を盛土保存とした。

(1)　基本層序

層序は湧水の有無で異なった。斜面上方では湧水がなく、表土（耕作土）・黒褐色土・ローム層の順で堆積が見られたが、湧水地では黒褐色土とローム層の間に黒褐色粘土および黒色粘土が介在する。層厚は全般に斜面下方に向かって厚くなり、ローム層まで最深２m であった。



第60図　調査地点



根本山遺跡第１地点土層

1　表土
2　黒褐色土
3　黒色粘土　　酸化鉄多く含む。黄白色粒（5 mm 以下）多く含む。
4　暗灰色粘土　黄白色粒（5 mm 以下）多く含む。
5　暗褐色土

第61図　第１地点調査区平面・土層図

(2) 遺構と遺物

遺構（第62図・図版４）

円形土坑８基、方形土坑２基を検出した。この他、Ｉトレンチで円形土坑が複数重複したものと思われる黒色プランを１ヶ所、円形プランを１基確認した。すべて斜面上方に偏在する。

検出した土坑は１号～10号土坑である。以下、発見されたトレンチ別に説明する。

Ｇトレンチ

１号～６号土坑が、ローム層上面に集中して確認された。互いに重複するものが多い。４号土坑を除きすべて円形基調の平面で、直径は0.9m（５・６号）、1.2m（３号）、1.3m（１号）、1.6m（２号）である。確認面からの深さは0.1～0.3mだが、２号土坑は表土直下から黒褐色土を掘り込んでいて最深0.6mを測った。壁はいずれも急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は地山のローム塊・粒を含む暗褐色土が主体で、１号土坑は多数の礫（５～20cm大）を伴う。

４号土坑は平面長方形を呈すると思われ、主軸の長さは残存値で1.5m・幅0.7mである。確認面からの深さは0.1mを測る。断面形や覆土は円形土坑と共通する。

１号～６号土坑を通して、礫以外の出土遺物はない。

Ｉトレンチ

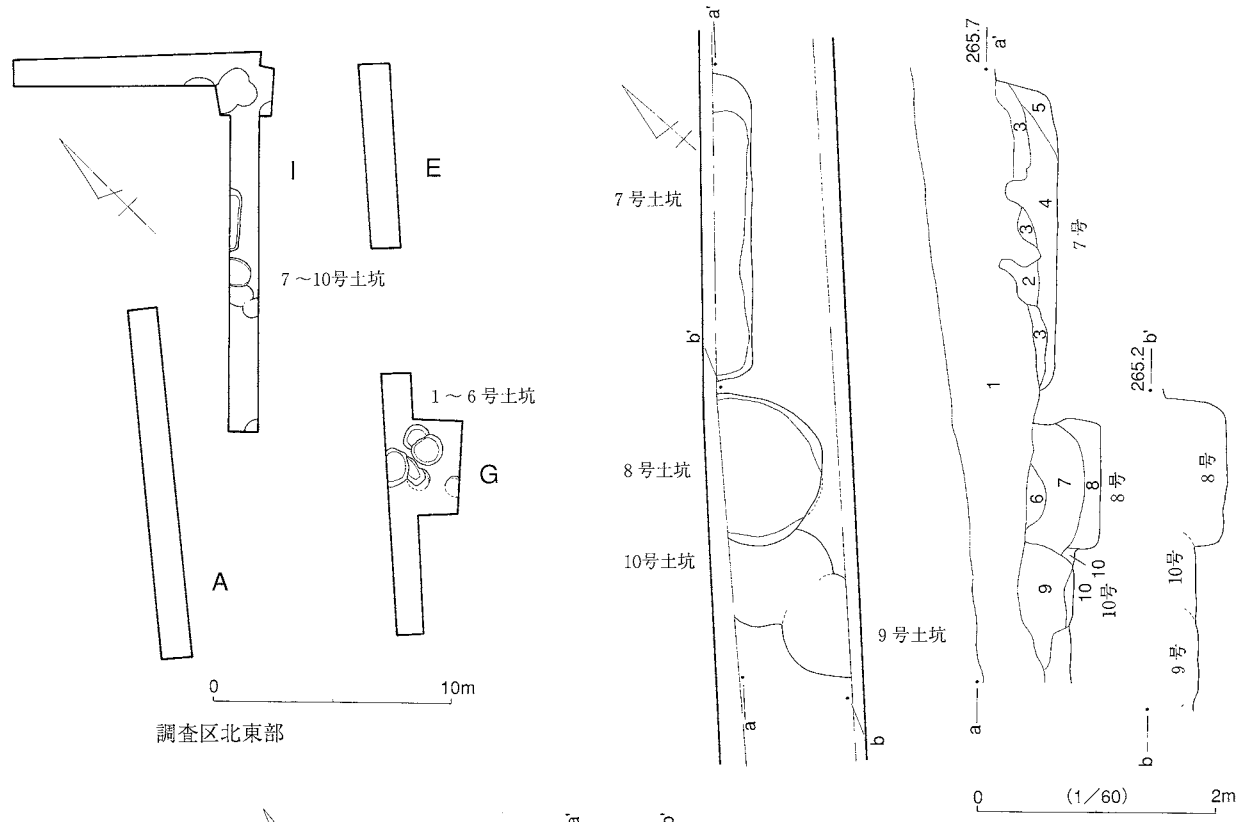
７号～10号土坑が、ローム層上面に集中して確認された。

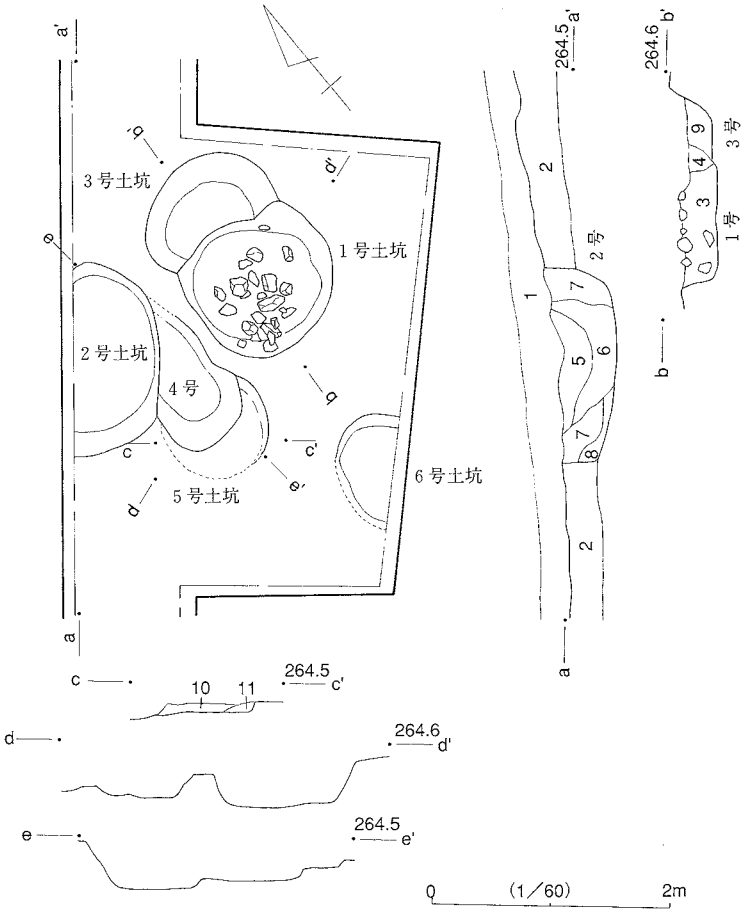
７号土坑は大半が調査区外にかかるため平面規模は不明確だが、方形を呈するものと思われる。竪穴状を呈する可能性もある。壁の１辺は2.6mであった。壁は急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は地山のローム塊・粒を含む暗褐色土が主体である。出土遺物は、覆土中から土器の細片６点が出土し、この中には縄文土器、土師器が含まれる。

８号～10号土坑は７号土坑に近接し、互いに重複する。すべて円形基調の平面で、直径は約0.9m（９・10号）、1.3m（８号）であった。確認面からの深さは８号土坑が0.6m、９号・10号は0.1mである。８号土坑の壁はオーバーハング気味に立ち上がる。底面は平坦である。９号・10号の壁はいずれも急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、８号土坑が黒色スコリアを含む黒色・暗褐色土、９号・10号土坑は地山のローム塊・粒を含む暗褐色土が主体である。出土遺物は、８号土坑の覆土中層で縄文土器の細片３点、下層中の床面から数cm上で土師器の細片２点が出土した。

なお、Ｉトレンチには、プラン確認に止めた遺構があるが、これはすべて平面円形を基調とするもので、覆土や規模・立地から、検出済みの円形土坑と同種のものと推定される。

以上の遺構は、平面規模や覆土の類似性、群集して立地するなどの点から斉一性の強さが指摘できる一方、多量の礫を伴う１号土坑や、掘り込みが深く覆土を異にする８号土坑のように異質な要素も認められる。遺物は少なく、唯一遺物を伴う土坑（７号・８号）では縄文土器と土師器の細片が覆土中に混在する状況であった。土器片は微細であるため詳しい時期区分は困難である。このため、遺構の性格や時期については現段階で不明といわざるを得ない。





根本山遺跡７・８・10号土坑土層

1　表土
2　撹乱層
3～5　７号土坑覆土
3　暗褐色土　締まりやや強い。
4　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。ローム塊（5cm以下）やや多く含む。
5　褐色土　粘性強く、締まり弱い。
6～8　８号土坑覆土
6　暗褐色土　粘性・締まり弱い。ローム塊・粒子(1cm以下)多く含む。
7　暗褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。ローム塊・粒子（1cm以下）、黒色スコリア（5mm以下）やや多く含む。
8　暗褐色土　黒色味を帯びる。粘性やや強く、締まり弱い。ローム塊（3cm～5cm）、黒色スコリア（5mm以下）含む。
9～10　10号土坑覆土
9　暗褐色土　粘性・締まり弱い。黒色スコリア（5mm以下）やや多く含む。

根本山遺跡１・２・３・４・５号土坑土層

1　表土
2　黒褐色土
3～4　１号土坑覆土
3　暗褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。ローム塊・粒子（1cm以下）多く含む。
4　褐色土　暗褐色土・ローム塊を多く含む。
5～8　２号土坑覆土
5　暗褐色土　粘性・締まり弱い。粗粒。
6　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。ローム塊（5cm以下）多く含む。
7　暗褐色土　第５号に類似。
8　暗褐色土　ローム塊・粒子（１cm以下）多く含む。
9　３号土坑覆土
9　暗褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。ローム塊・粒子（1cm以下）多く含む。
10～11　５号土坑覆土
10　暗褐色土　粘性・締まり弱い。ローム塊・粒子(1cm以下)やや多く含む。
11　褐色土　粘性やや強く、締まり弱い。ローム塊(3～4cm)多く含む。

第62図　第１地点遺構平面・土層断面図

遺物（第63図・図版４）

縄文土器、弥生土器、土師器・須恵器・灰釉陶器、石器がある。黒褐色土中の出土が多く、とくに無湧水地で目立った。

１～19は縄文土器の深鉢片である。１、円筒形を呈し、矢羽状の集合沈線文が施される。胎土に金雲母を含む。器厚９mm。２、横位のキャタピラ文。３、低平な隆帯上に三叉文。４、条線地に屈曲・蛇行する粘土紐を貼付。５、縄文地に半裁竹管による横位の平行沈線文。６、直線的に大きく開く口縁で、端部は内折する。７、波状口縁で、微隆起線による区画内に縄文が施される。８、波状口縁で、弧状の沈線による区画内に縄文が施される。沈線上に円形刺突文。９～15、沈線区画の縄文を屈曲、弧状に配する。16、口縁部に突起を有し、幅広の沈線・円形刺突文が施される。17、多条の沈線文を縦位に配する。18、球状に張る胴部に沈線区画の縄文が施される。19、波状口縁で、端部上面に刻みが連続して加えられる。器厚５mm。

以上のうち、１、中期初頭・五領ヶ台式。２～３、中期中葉。４～６、中期後葉・曽利式期。７～15、中期末～後期初頭・称名寺式期。16～18、後期前葉・堀之内式。19、後期後葉・加曽利Ｂ式にそれぞれ比定される。20は縄文土器の浅鉢と思われる底部で、内外面に赤彩を有する。

21は弥生土器と思われ、Ｉトレンチ黒褐色土から出土した。外面に斜位の条痕文が交錯する。胎土は礫（１～３mm大）を含む。色調は外面黄橙色、内面橙色。器厚４mm。

22は須恵器甕の頸部。土器は、この他に土師器や灰釉陶器が出土しているが、細片のため図示できない。

23～25は石器で、いずれも縄文時代に比定される。23、礫器。側面を両側から大きく打ち欠き整えている。一端は欠損している。現存長14.0cm・幅13.3cm・厚さ6.0cm・重さ1555g。ホルンフェルス。24、石匙。長さ13.0cm・幅11.0cm・厚さ4.0cm・重さ410g。凝灰岩。25、磨石。磨面中央に点状打痕が集中する。長さ9.5cm・幅8.7cm・厚さ4.4cm・重さ525g。玄武岩質溶岩。

以上の出土地点は、多くがＩトレンチである。この他は、Ａトレンチ（２・９・10・14)、Ｂトレンチ（15)、Ｄトレンチ（６)、Ｅトレンチ（11)、Ｇトレンチ（３・22）である。

試掘坑	縄文時代		古墳～奈良・平安	近世以降	礫
	土器	石器			
A	23（中期１・後期３）	2（打製石斧・磨石）	7（土師器６・灰釉陶器１）		10
B	4（後期２）	2（加工痕ある剥片）	2（土師器）		1
C	2				2
D	4（中期１・後期２）				1
E	9（後期２）	1（石匙）	1（土師器）	1（陶磁器）	7
F	2（中期末～後期１）		2（土師器）		
G	10（中期１・中期末～後期２）		4（土師器３・須恵器１）	1（瓦）	2
H	2（後期１）		1（土師器）		1
I	75（中期10・後期13）	2（石皿１・黒曜石剥片１）	19（土師器18・須恵器１）	7（陶磁器）	37
合計	131	7	36	9	61

第７表　根本山遺跡・第１地点出土遺物集計表　　（　）は内訳

第63図　第１地点出土遺物

第２地点

調査目的　道路造成工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原1391他

調査期間　平成11年６月29日、７月１日

調査面積　20m²（対象面積404m²）

概　　要

調査地点は遺跡南端の養鶏場跡地である。工事予定地に巾１ｍ・長さ10ｍの試掘溝を２ヶ所設定し最深1.5ｍまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、養鶏場造成時のものと見られる客土がハードローム層にまで達しており、大きく撹乱を受けている状況が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、遺跡の可能性は低いものと判断された。

なお、養鶏場跡地の北西側に隣接する畑地で縄文土器、石器を表採したので併せて報告する（第64図）。１、口縁が大きく開く深鉢で、頸部に波状の貼付文を有する。２、縦位の沈線区画内に条線・蛇行沈線文。３・４、櫛歯状の刺突文。５、微隆起線区画の縄文が配される。６、沈線区画の縄文。以上のうち、１～５は中期後葉・曽利式期。６は後期初頭・称名寺式にそれぞれ比定される。７は台石で、平滑な磨面に凹み１孔を有する。縄文時代に比定される。現存長27.2cm・幅18.4cm・厚さ10.8cm・重さ6940g。

第３地点

調査目的　分譲宅地工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字新町1334－2他

調査期間　平成13年11月26日

調査面積　８m²（対象面積2,552m²）

概　　要

調査地点は遺跡南端の養鶏場跡地である。工事予定地に巾0.5m・長さ16ｍの試掘溝を１ヶ所設定し、深さ1.0ｍまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、養鶏場造成時のものと見られる客土がハードローム層にまで達しており、大きく撹乱を受けている状況が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、遺跡の可能性は低いものと判断された。

第４地点

調査目的　個人住宅建設に伴う試掘調査

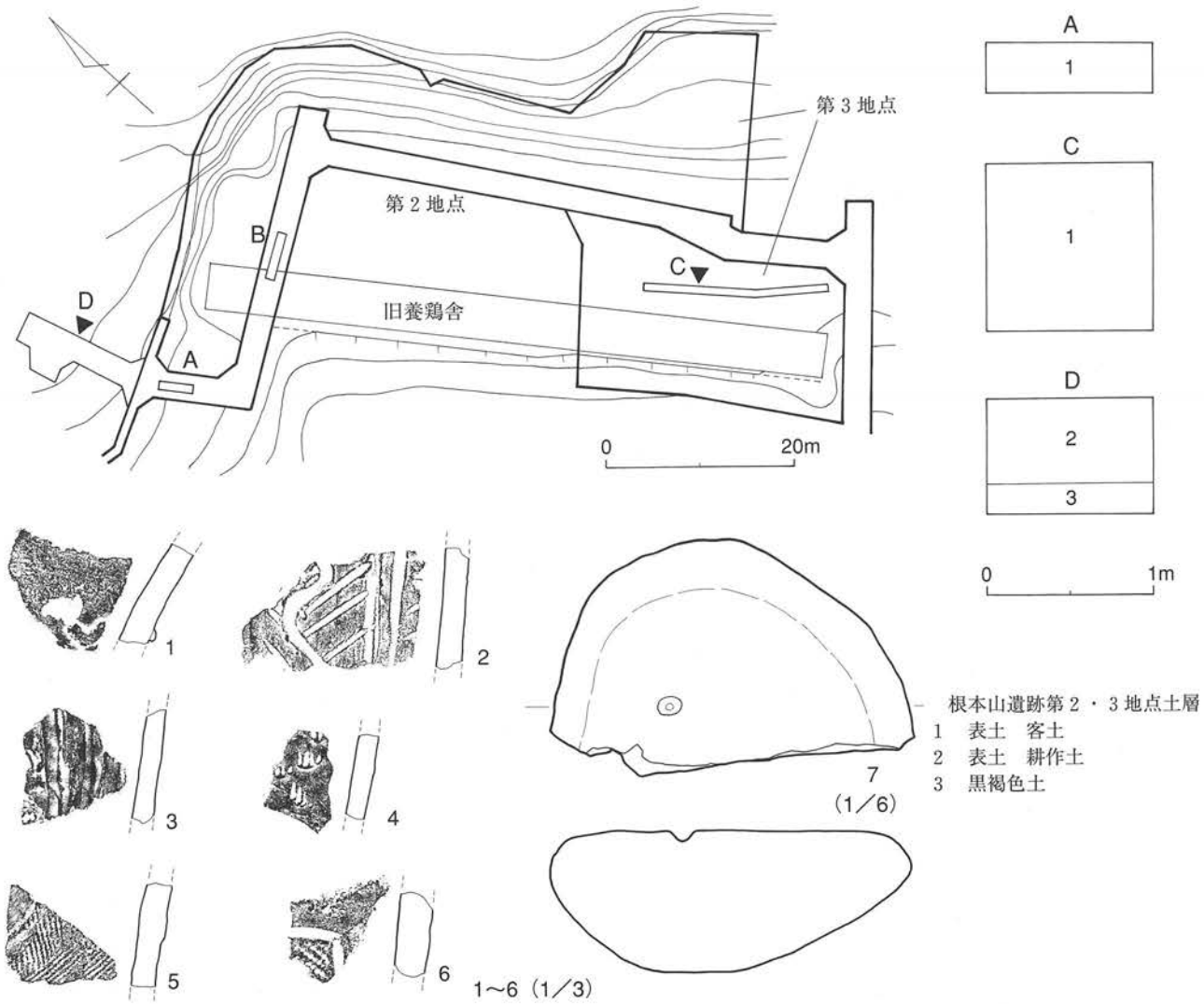
調 査 地　上野原市上野原字新町1435－1他

調査期間　平成14年５月13日

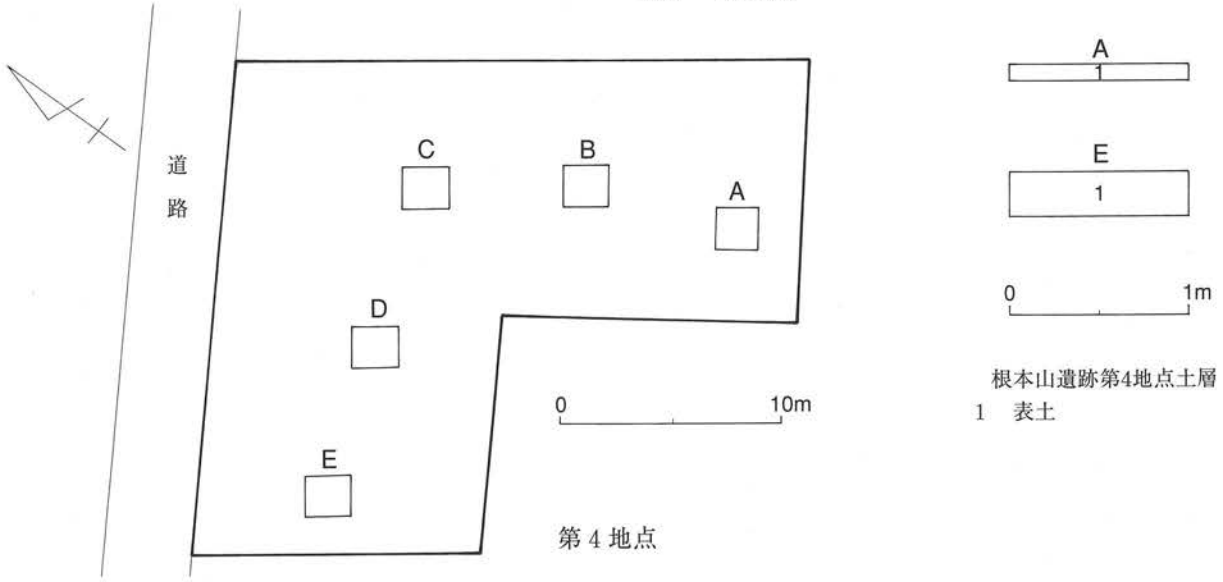
調査面積　20m²（対象面積434m²）

概　　要

調査地点は遺跡西端に位置し、ひな壇状に区画された宅地の一角に当たる。建設予定地に２ｍ四方の試掘坑を５ヶ所設定し、深さ0.1ｍまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、薄い表土の直下にハードローム層が検出され、土木工事による撹乱を受けていることが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、遺跡の可能性は低いものと判断された



第2～3地点



第4地点

第64図　第2～4地点調査区平面・土層図、出土遺物

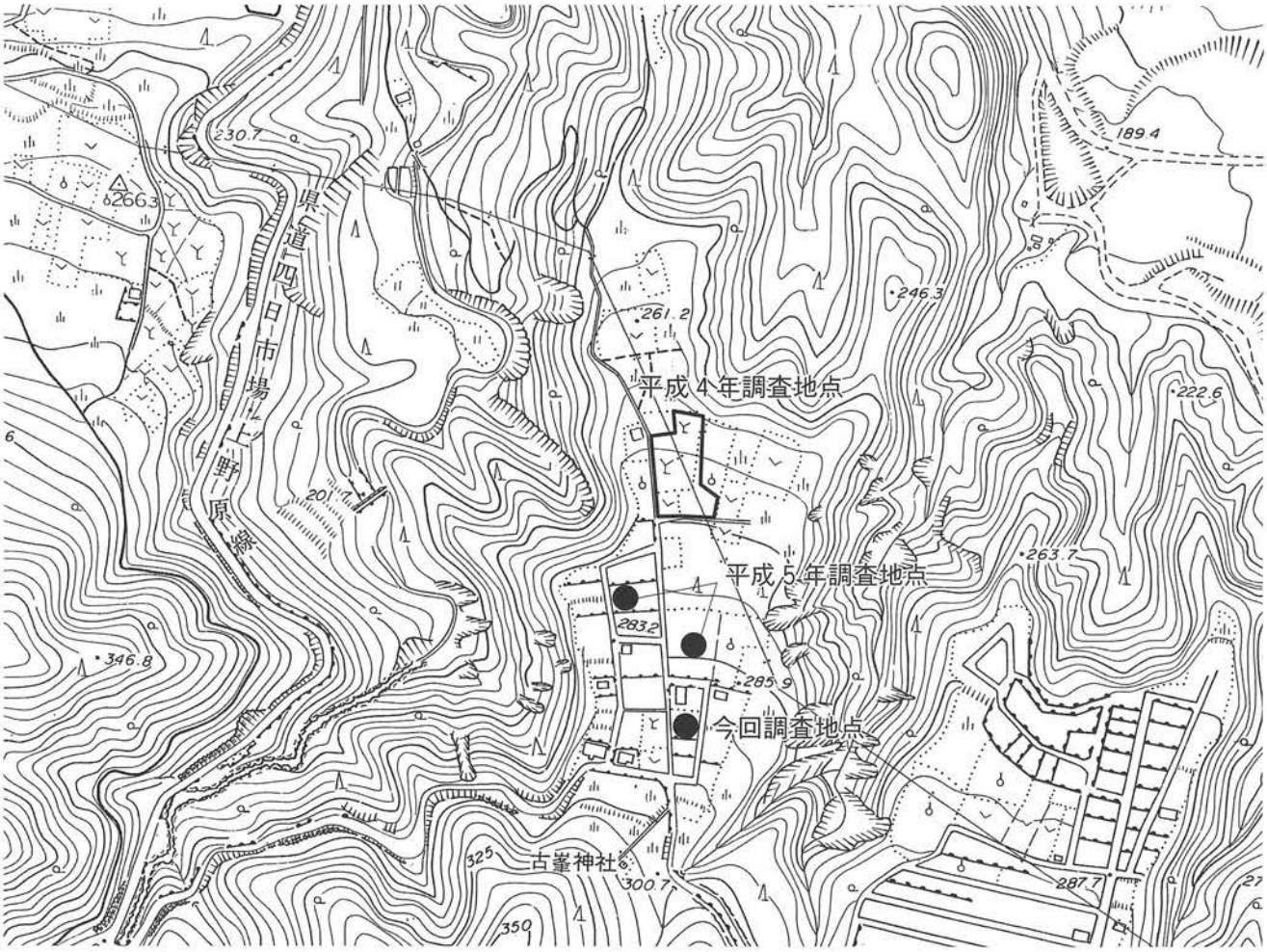
15　黒ノ木（くろのき）遺跡

調査目的　会社保養所建設に伴う試掘調査
調 査 地　上野原市鶴島字黒ノ木3283－12
調査期間　平成10年12月24日
調査面積　8 m²（対象面積372m²）
概　　要

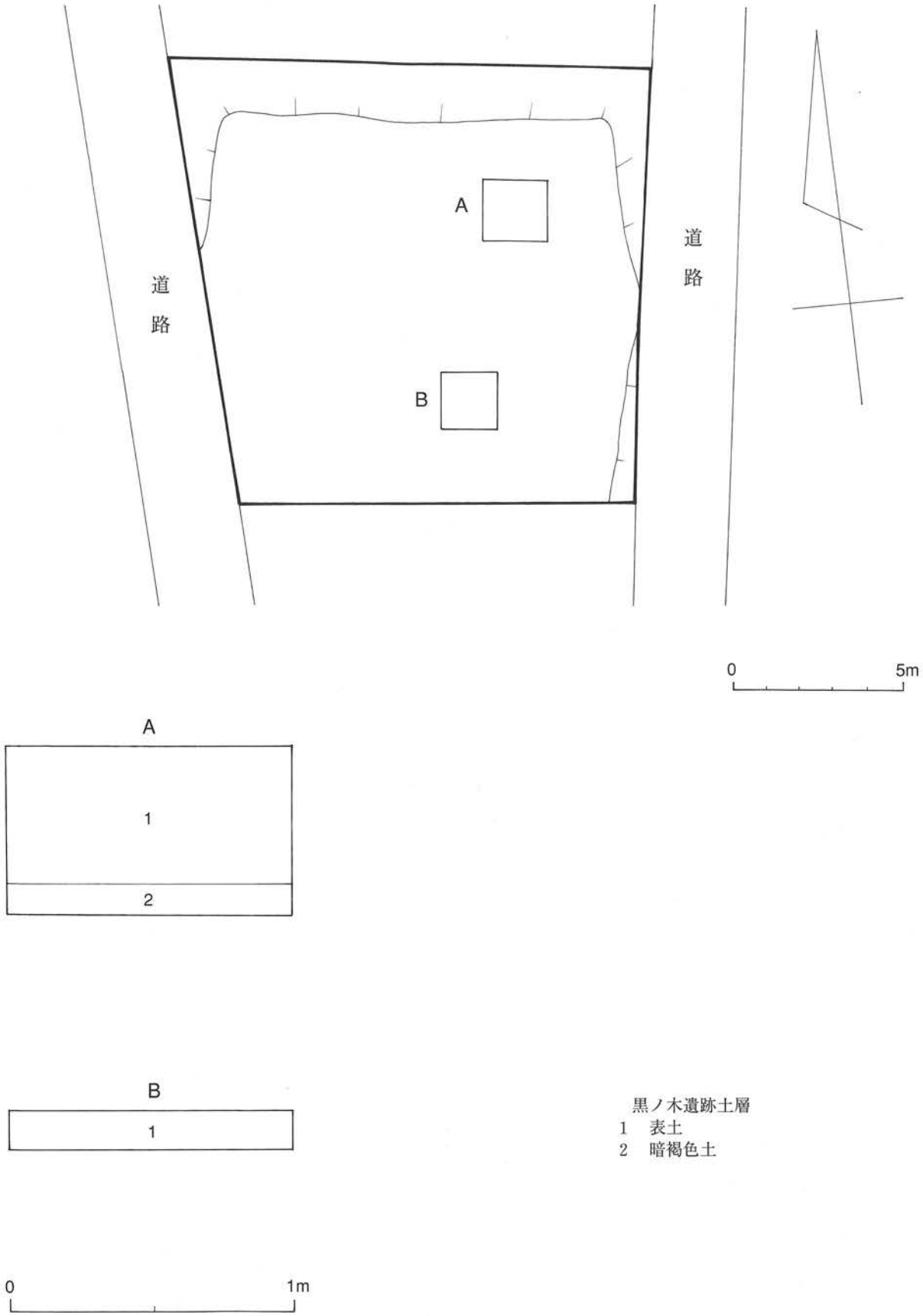
第65図　遺跡位置

黒ノ木遺跡は桂川南岸の台地上に位置し、縄文時代及び土師器の散布地である。遺跡の大半は湖南団地にあたり、ひな壇状に区画整備されている。これまでの試掘調査では、遺構・遺物は発見されていない。

今回の調査地点は湖南団地の一角にあたる。建設予定地に2m四方の試掘坑を2ヵ所設定し、最深0.6mのローム面まで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、表土下の一部に暗褐色土の薄い堆積が確認されたが、全般に地表近くでハードローム層が露出する状況であり、区画造成時に大きく削平された状況が確認された。遺構・遺物はなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第66図　調査地点



黒ノ木遺跡土層
1　表土
2　暗褐色土

第67図　調査区平面・土層図

16　西ノ原古墳（にしのはら）

第Ⅰ次調査

調査目的　不時発見に伴う現況確認調査

調 査 地　上野原市大野字西ノ原5372

調査期間　平成11年４月26日～６月22日

調査面積　８m²

概　　要

西ノ原古墳は扇山（1137.8m）南東麓の斜面に位置し、標高は427m である。畑の耕作中に横穴式石室１基が偶然発見され、土地所有者である大神田貢一氏のご協力で現況確認調査を実施した。石室は調査後に埋め戻され、同年12月、市の史跡に指定されて現地保存された。

第68図　遺跡位置

第Ⅱ次調査

調査目的　古墳の分布調査

調 査 地　上野原市大野字西ノ原5404

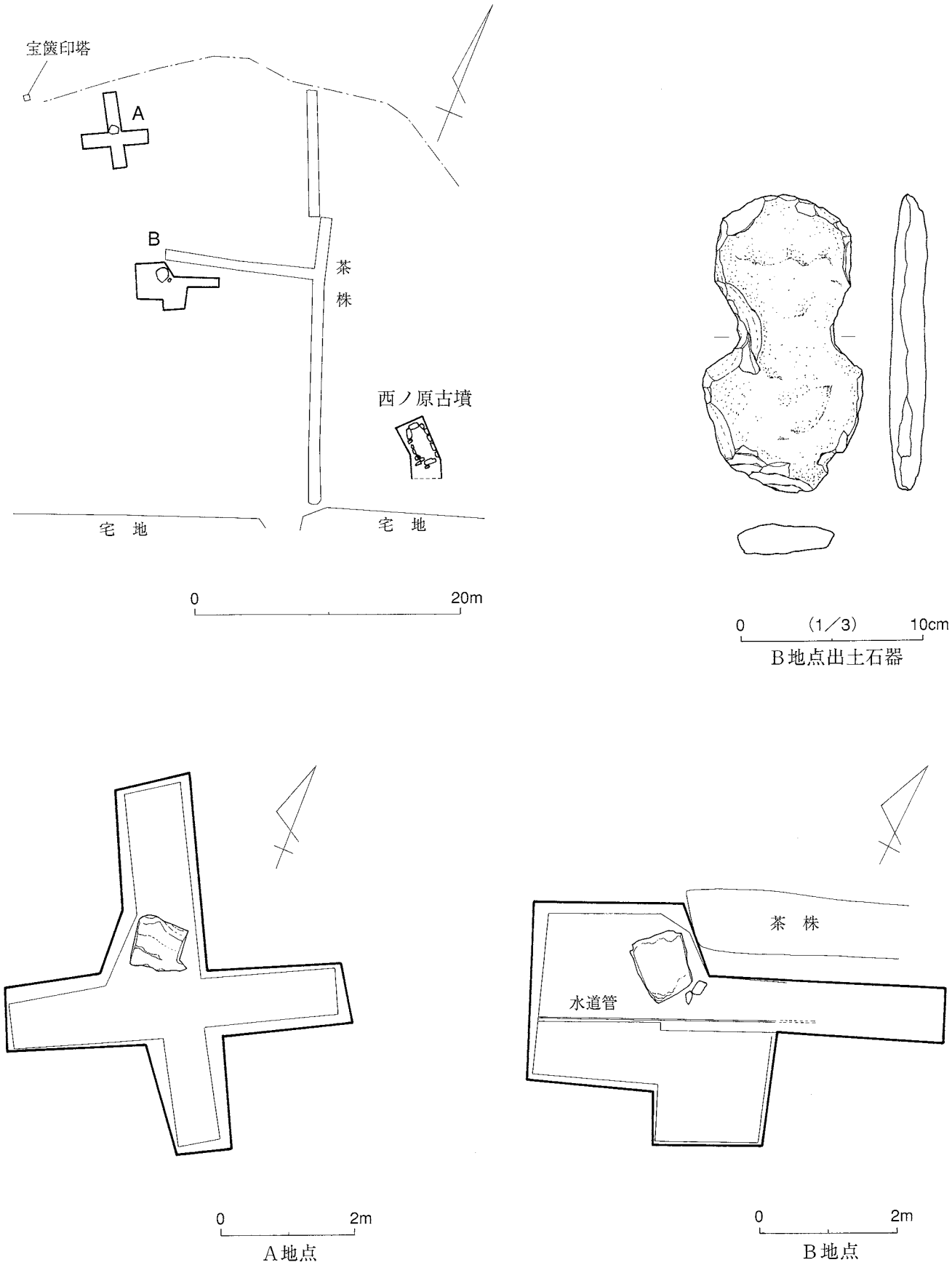
調査期間　平成12年２月21日～28日

調査面積　20m²

概　　要

西ノ原古墳の調査後、地元住民より、周辺の畑を耕作すると特定の場所で地下の石に当たるという話をうかがった。古墳が周辺にも分布している可能性が考えられたため、石に当たるという箇所を２ヶ所特定し、それぞれ約10m²の試掘坑を設定して人力で掘り下げ調査した。この結果、各試掘坑で表土直下に巨大な礫を確認した。Ａ地点の礫は、長さ0.85m・幅0.7m・最大厚0.3m であり、Ｂ地点の礫は、長さ0.95m・幅0.75m・最大厚0.4m であった。いずれも横転した状況で出土し、両側面は平坦面を有する。石材は泥質片岩である。各試掘溝とも範囲を拡張したが、Ｂ地点で約10cm の礫が数点と縄文時代の打製石斧１点が出土した以外に遺構・遺物は検出されなかった。新たな古墳の発見には至らなかったが、出土した巨大な礫はいずれも西ノ原古墳に用いられた奥壁と形態・規模・石材の点できわめてよく類似し、石室の構築材に用いられた可能性が高い。

第69図　調査地点



第70図　調査区平面図・出土遺物

(1) 西ノ原古墳の構造（第71～72図・図版５・６）

横穴式石室で、墳丘、及び石室の天井部と側壁の大半はすでに失われ、石室の基底部が現存する。前庭部はすでに削平され遺存しない。調査開始時点では床面付近まで掘削された状況であった。

石室の全長は3.6mで、主軸方向はN42°Eである。胴張り形態であるが、東壁の張りは西壁に比べ弱い。側壁は基底部１段のみが残され、最大高は0.3mである。内壁には平坦な面が用いられる。奥壁は巨大な礫一枚が用いられ、高さ0.8m・幅0.7m・最大厚0.4mを測る。床は礫床で、全般に0.3～0.5mの比較的平坦な礫を敷き、隙間に拳大の礫を詰めている。側壁・奥壁の石材は泥質片岩を主体とする。

石室の床面における全長は3.3m、最大幅は1.2mである。奥壁から1.0～1.8mの範囲に最大幅を有し、胴張り形を呈する。石室は玄室と羨道が明確に区分されない無袖型の構造であるが、床面の石材によって室区分を認識することができる。奥壁から1.7mまでの床には黄色の砂岩系ホルンフェルスが用いられ、この範囲が玄室に相当するものと考えられる。これより閉塞部にかけての床材は泥質片岩が用いられ、この相違に対応するように西壁の内面ライン（奥壁から２列目と３列目の間）は弱く屈曲している。

閉塞部は西壁が失われているが、幅は約1.0mと推定される。床上に大型で横長の礫が残され、最大幅0.4m・長さ0.9mを測る。

石室の周囲にサブトレンチを設定して調査したところ、石室の掘り方と見られる黒色プランが、奥壁から0.６m斜面上方と東壁側で確認された。掘り方は未検出だが、地山の暗褐色土を掘り込んで石室が構築された、いわゆる半地下式構造である可能性が強い。

(2) 遺物

床面直上の土壌をすべてフルイにかけて精査したが、出土遺物は検出されなかった。

(3) 西ノ原古墳に関する考察

西ノ原古墳は、上野原市内で古墳の実態が明らかになった初例である。市内では桂川北岸の塚場古墳群（上野原古墳群）と鶴川西岸の上ノ山古墳群が知られているが、未調査のため詳細は不明である[1]。

桂川流域の古墳は上野原市と大月市に数ヵ所知られ、これより上流域では確認されていない。また、下流域では神奈川県津久井郡城山町に後期古墳や横穴墓群が確認されている程度であるため、上野原市・大月市域が相模川上流から桂川流域における古墳の主要な分布域となっている。この地域の古墳は形態や出土遺物から後期古墳に位置付けられ、７世紀代の所産と推定されている。このうち石室構造が把握された例は少ないが、西ノ原古墳から約９km上流の大月市・子の神古墳（市史跡）は、直径６m・高さ３mの墳丘を有し、胴張り形態の無袖型横穴式石室である。石室は河原石積みで、長さ５m・最大幅1.6m・高さ２mの規模を有する。須恵器の甕・長頸瓶、直刀・鉄鏃などが出土した。同市内の金山古墳や鳥沢古墳も胴張り形態の無袖型横穴式石室である。石室の長さは４m前後で、最大幅1.5m程度の規模を有する。鉄鏃・直刀・鐔などが出土した[2]。

西ノ原古墳の石室は自然石を用いた胴張り形態の無袖型横穴式石室で、半地下式の構造を採るものであった。この石室形態は、半地下式の点を除くと大月市内の古墳と共通するものであり、桂川流域における特徴と言うことができる。また同様の石室は相模川上流域や多摩川流域にも見られる。

相模川上流域では、西ノ原古墳から約20km下流に神奈川県津久井郡城山町・八幡神社古墳がある。７世紀前半頃に推定される河原石積みの無袖型横穴式石室で、張りの弱い胴張り形態を採る。半地下式構造で、石室規模は推定全長３～４m、石室幅は最大1.1mを測る。

多摩川上流域では東京都あきる野市瀬戸岡古墳群がある。このうち、瀬戸岡30号墳は河原石積みの無袖型横穴式石室で、張りの弱い胴張り形態を採る。半地下式構造で、石室規模は長さ3.15m、石室幅は最大1.1mを測る。時期は出土遺物から7世紀中葉に比定されている。

このように西ノ原古墳の石室構造は相模・武蔵地域に類例が求められるが、当古墳がどの地域の影響のもとに造られたかは即断できない。西ノ原古墳を含めた桂川流域は、相模・武蔵・駿河・甲府盆地と接する交通の要衝と捉えられており、当古墳の系譜や出自については広範な地域のもとで検討が加えられる必要がある(3)。

当古墳の造営時期は、周辺事例と同様7世紀代と考えられるが、詳細は出土遺物がなく確証に欠ける。なお、近年における瀬戸岡古墳群の発掘調査では、胴張り形態の無袖型横穴式石室について年代的位置付けの再検討が行われている。この中で、同古墳群の石室形態は、短冊型・胴張Ⅰ型・胴張Ⅱ型・小石室の4つに大別され、このうち西ノ原古墳と同様、玄室側壁にわずかな胴張りをもつもの（胴張Ⅰ型）は、瀬戸岡30号墳の出土遺物から少なくとも7世紀中葉には出現していたことが想定されている(4)。西ノ原古墳造営の上限もおおむね7世紀前半代に求められる可能性は高いものと考えられる。

当古墳は、他地域の事例を考え併せれば群集墳であった可能性が考えられる。このことは、奥壁にきわめて類似した礫が近隣で検出されたことや、市内の古墳群がいずれも2～3基から構成されていることからも想定され、今後、古墳造営の母体となった集落址の確認と併せて検証を進めていく必要がある。

なお、西ノ原古墳は、土地所有者のご理解と関係者のご努力で市史跡に指定され、現地保存されている。

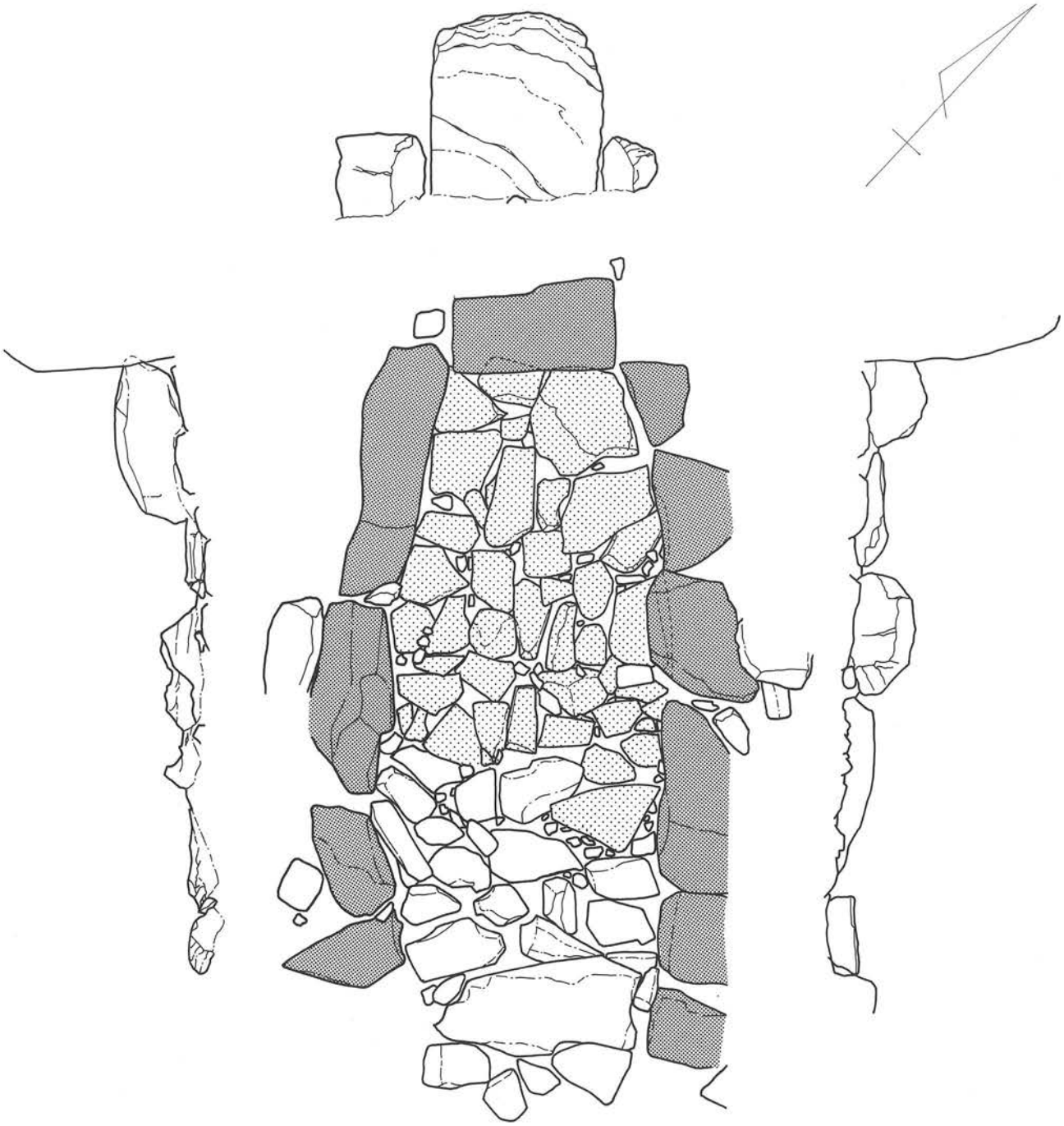
(1) 両古墳群については『上野原町誌』1975に詳述されている。

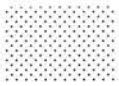
(2) 大月市の古墳については、山本寿々男『山梨県の考古学』1968、『大月市史』1978を参照した。

(3) 瀬戸岡古墳群の系譜については、従来考えられてきた北武蔵地域以外に、石室構造の類似性などから静岡県愛宕山周辺など東海地方の影響が想定されている。西ノ原古墳も地理的な位置から東海地方との関係についても視野に入れる必要があろう。東京都埋蔵文化財センター松崎元樹氏にご教示いただいた。

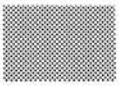
(4) 松崎元樹他「瀬戸岡古墳群の再検討」『天神前遺跡・瀬戸岡古墳群・上賀多遺跡・新道通遺跡・南小宮遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第95集　2001

第71図　西ノ原古墳平面・断面図





砂岩系ホルンフェルス



側壁

0　(1／30)　1m

第72図　西ノ原古墳展開図

17　山風呂（やまぶろ）遺跡

調査目的　分譲住宅の取り付け道路工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字山風呂原5354－1他

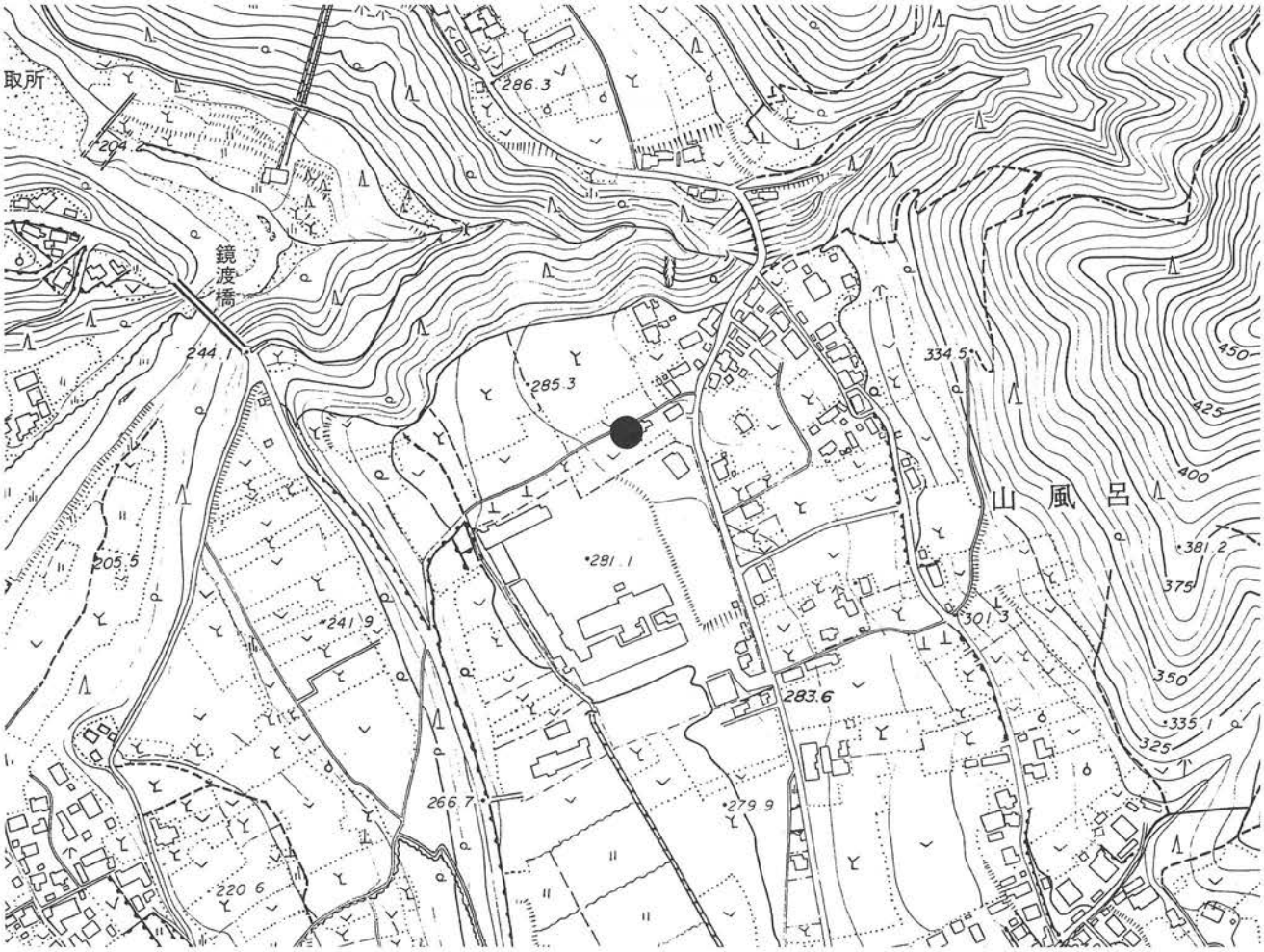
調査期間　平成11年７月28日

調査面積　18m²（対象面積360m²）

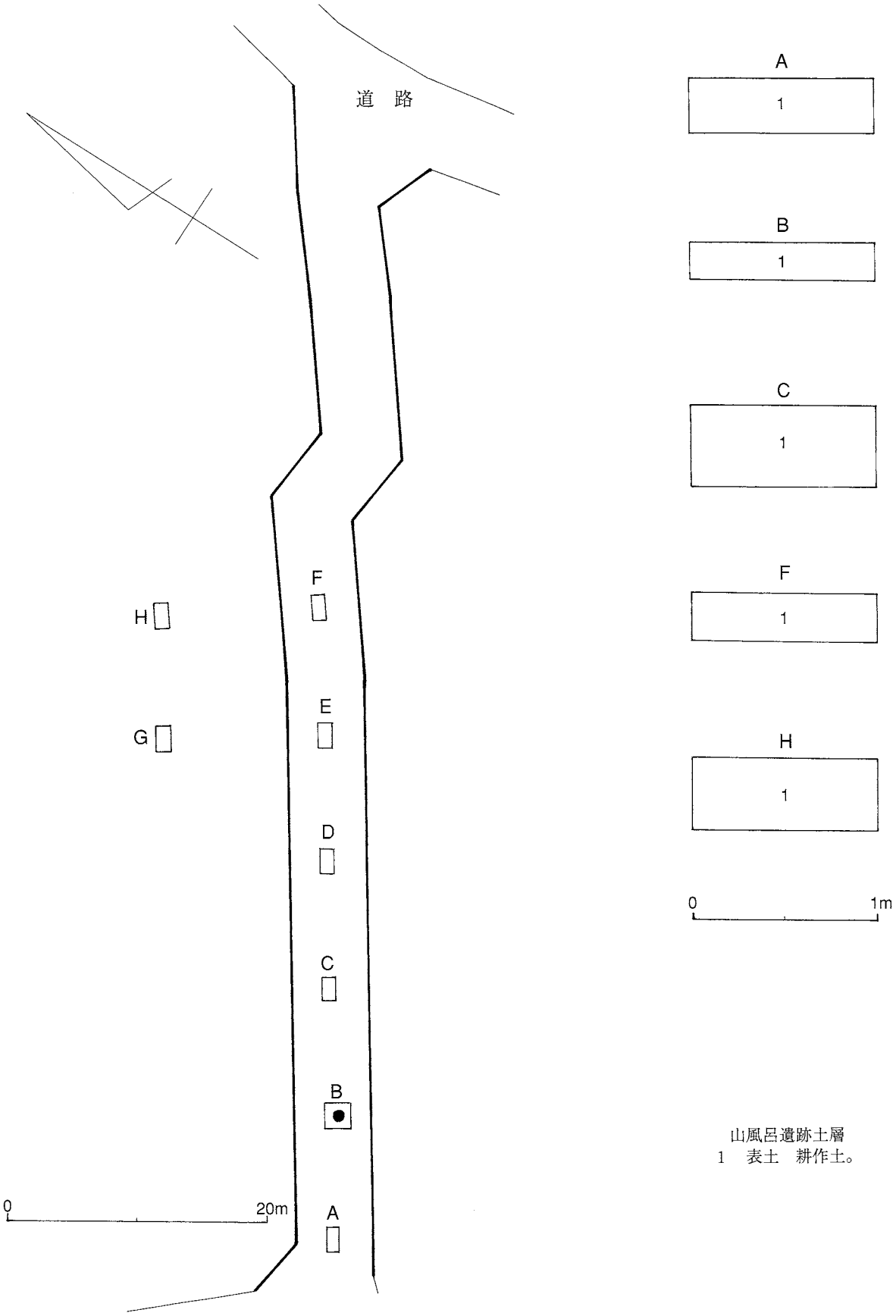
概　　要

第73図　遺跡位置

山風呂遺跡は鶴川東岸の河岸段丘面に位置し、縄文時代の遺物散布地である。調査は、工事予定地の畑に巾１m･長さ２mの試掘溝を８ヶ所設定し、最深0.4mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、表土（耕作土）直下がローム層で、耕作による撹乱を受けていた。遺構は、時期不明の土坑１基がローム層上面で確認されたのみである。土坑は直径1.0mの平面円形で、壁は失われていた（図版７）。覆土はローム塊や黒色スコリアを多く含む暗褐色土であった。出土遺物はない。以上の結果から、工事予定地では全般に深耕の影響が認められ、遺構・遺物の分布は希薄であった。



第74図　調査地点



山風呂遺跡土層
1　表土　耕作土。

第75図　調査区平面・土層図

18　用竹神戸遺跡（ようだけごうど）

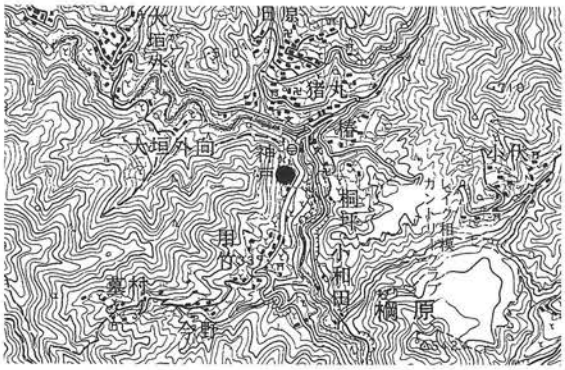
調査目的　上野原市棡原支所建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市棡原2367－9

調査期間　平成12年３月９日

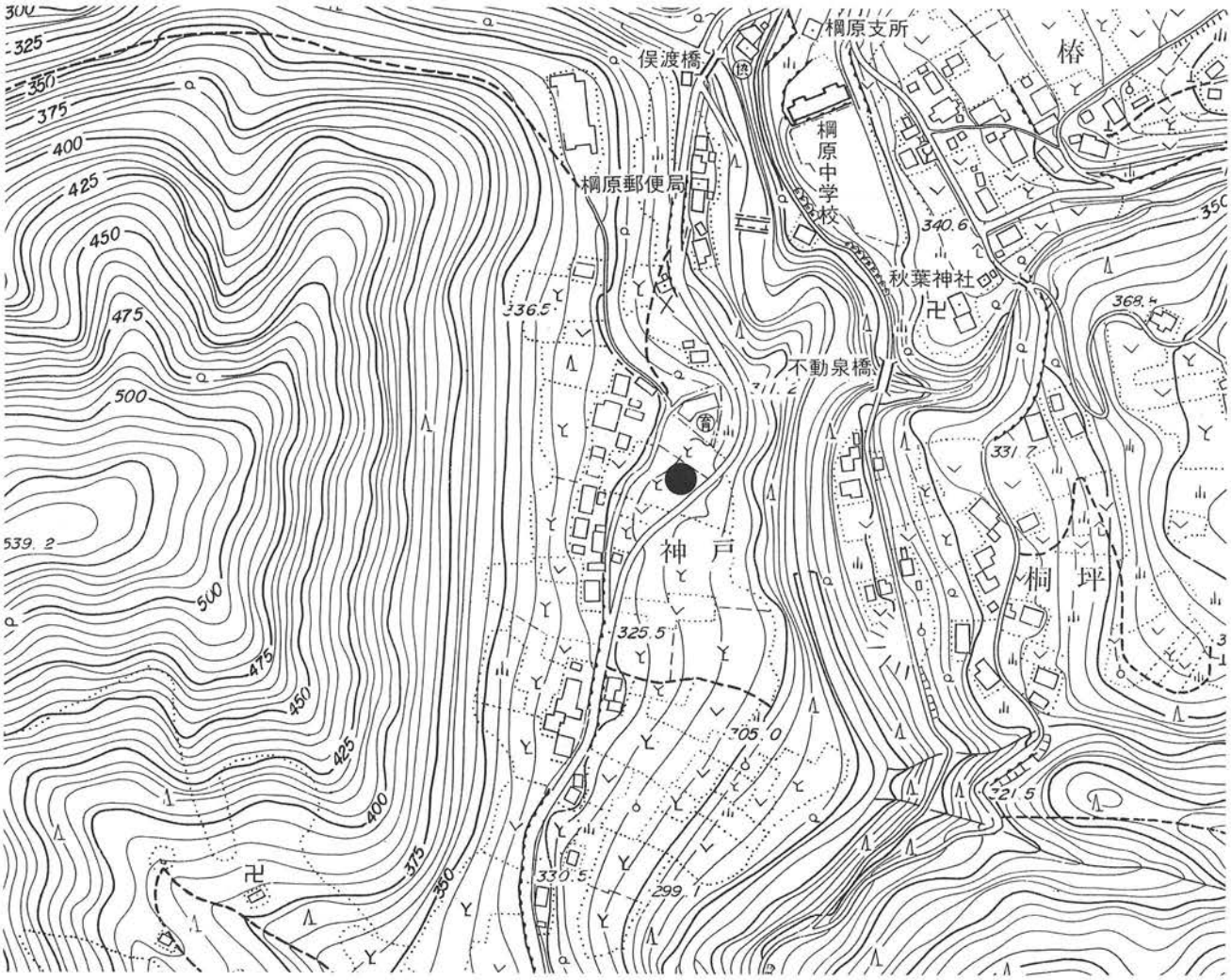
調査面積　23m²（対象面積226m²）

概　　要

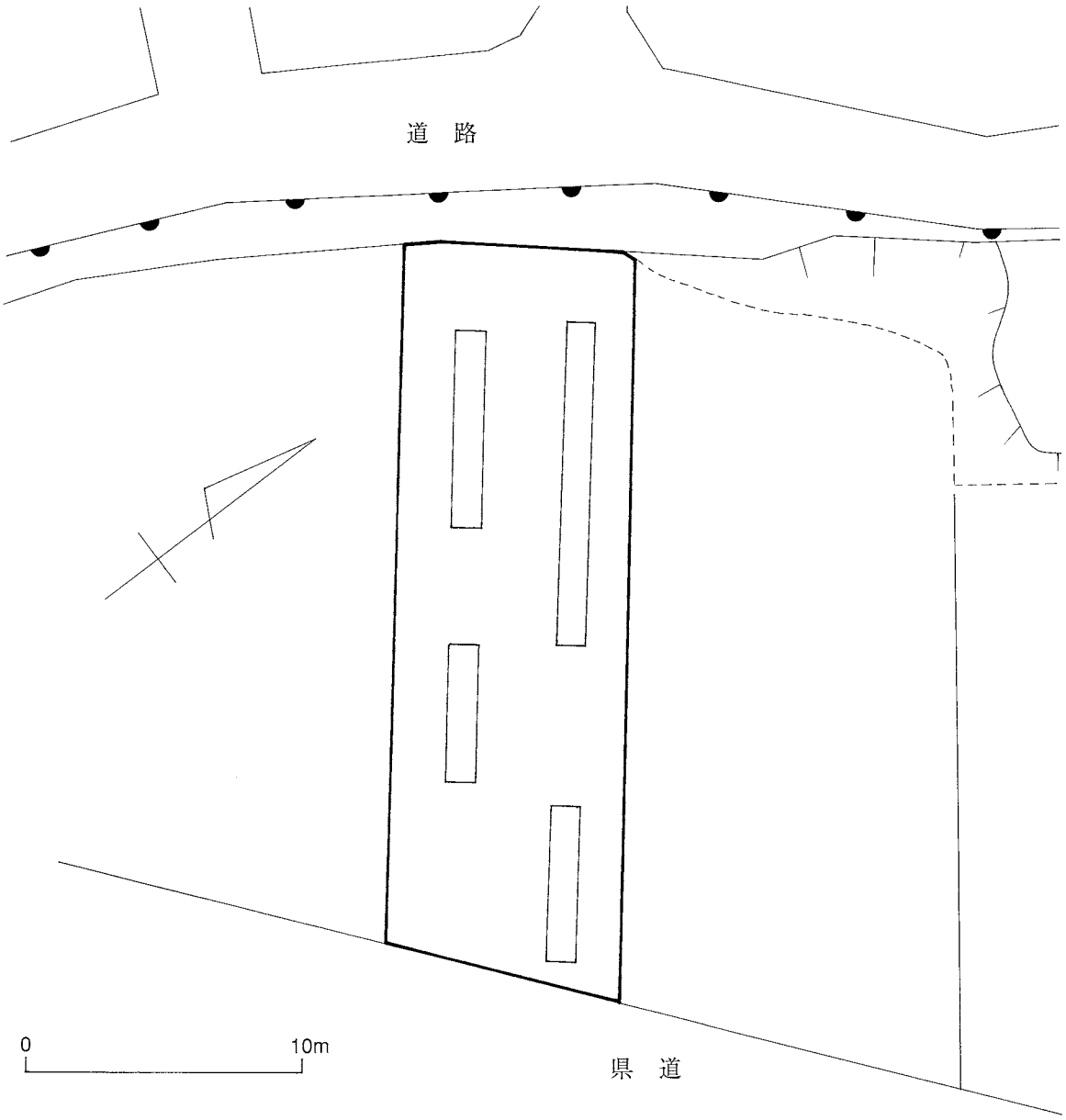


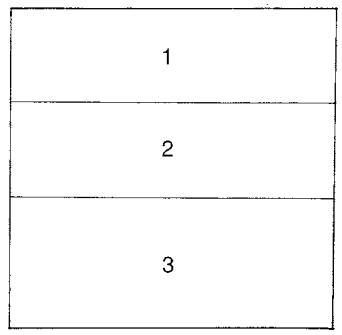
第76図　遺跡位置

用竹神戸遺跡は鶴川西岸の斜面地に位置し、弥生時代の遺物散布地である。建設予定地の畑に巾１ｍ・長さ約４～10ｍの試掘溝を４ヶ所設定し、深さ１ｍまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、基本層序は表土（耕作土）・暗褐色土・礫混じりのハードロームローム層で、一部で表土下に客土が介在していた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。なお、隣接地区で実施された山梨県埋蔵文化財センターによる試掘調査でも、今回と同様の結果が得られている。



第77図　調査地点





用竹神戸遺跡土層
1　表土　　耕作土。
2　黒褐色土　客土。礫・ローム塊多く含む。現代遺物含む。
3　暗褐色土　粘性・締まり弱い。礫・ローム塊やや多く含む。

0　1m

第78図　調査区平面・土層図

19　中群（なかむれ）遺跡

調査目的　林道改良工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市西原1159他

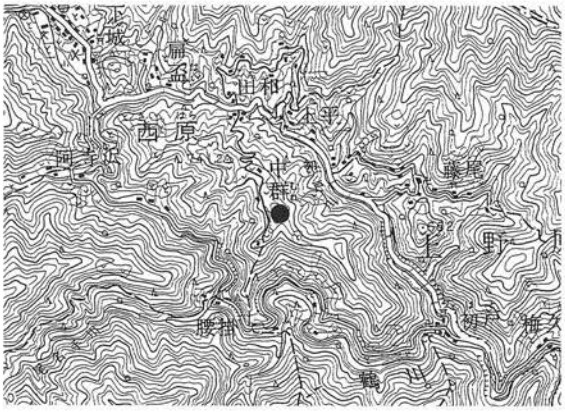
調査期間　平成12年９月６日

調査面積　６m²（対象面積90m²）

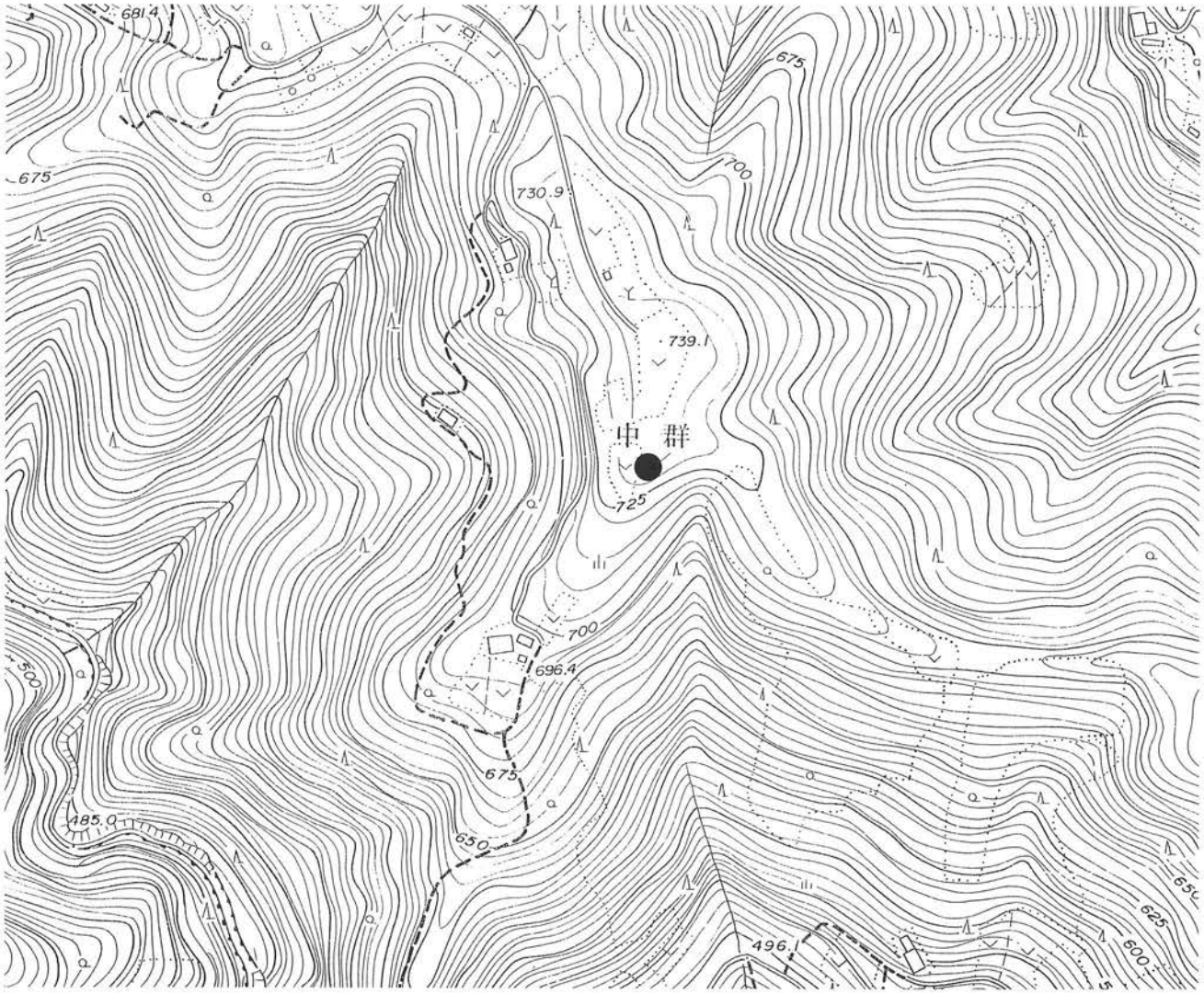
概　　要

中群遺跡は中群山（739m）山頂に位置し、縄文時代の遺物散布地である。調査地点は遺跡南端の山林に位置する。

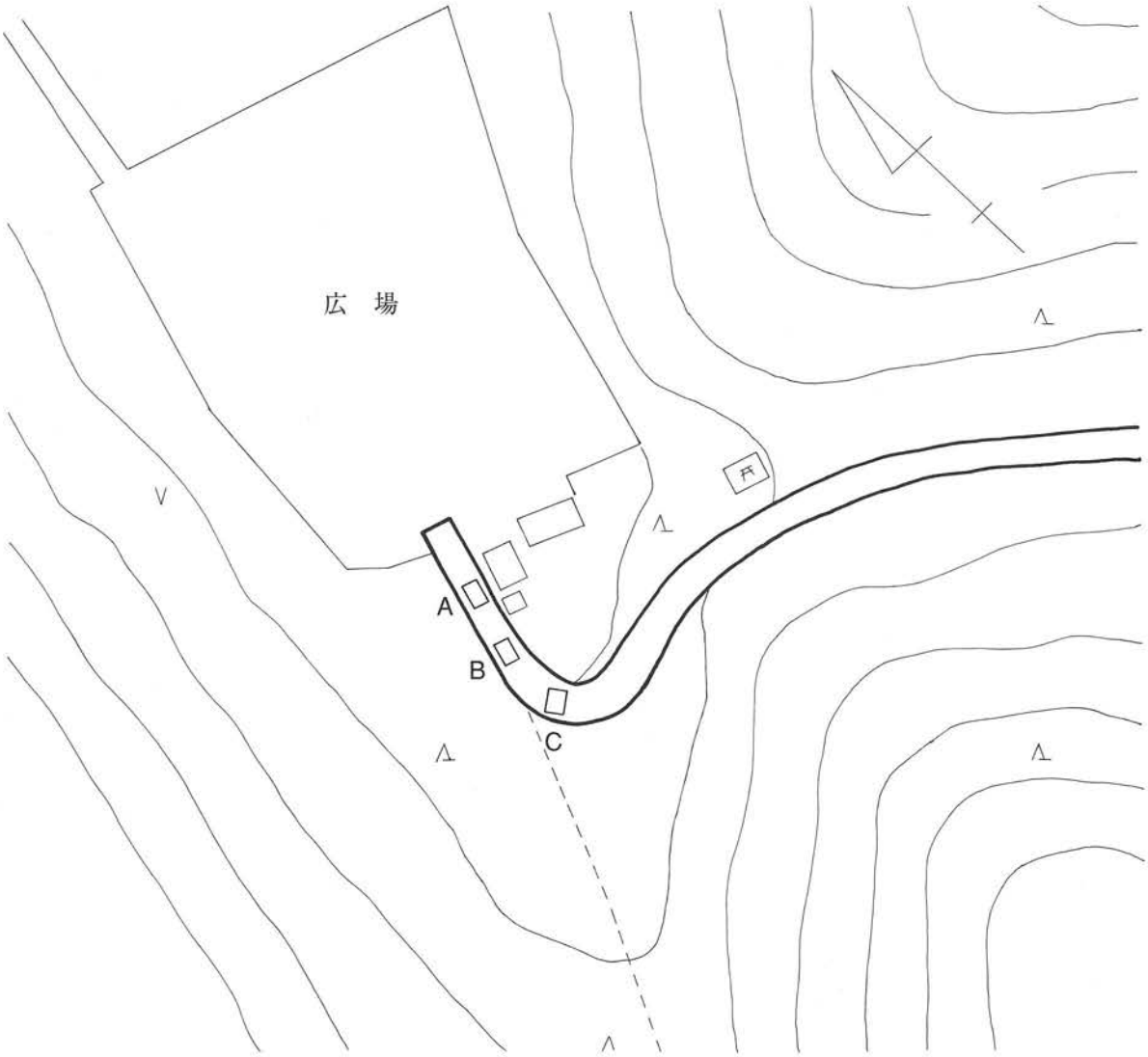
工事予定地に巾１m・長さ２mの試掘溝を３ヶ所設定し、最深１mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果表土は薄く、直下にローム層が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、工事予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



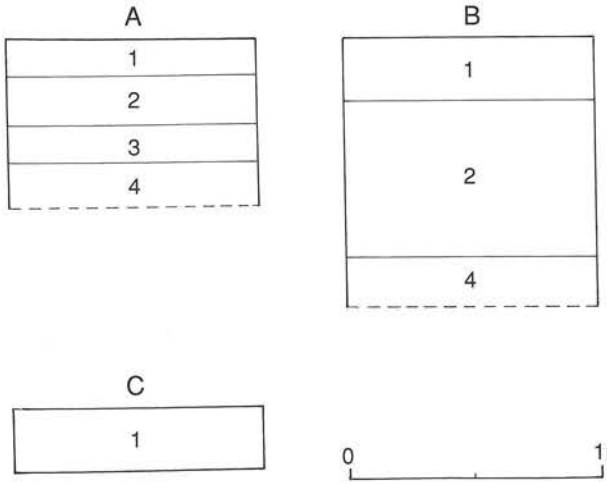
第79図　遺跡位置



第80図　調査地点



0 50m



中群遺跡土層
1　表土　草木根が多く混じる。
2　ソフトローム層。
3　第2層と第3層の混合層。
4　ハードローム層。

第81図　調査区平面・土層図

20　大間々（おおまま）遺跡

調査目的　上野原市役所・文化ホール建設に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字大間々3832－1他

調査期間　平成12年10月30日～11月６日

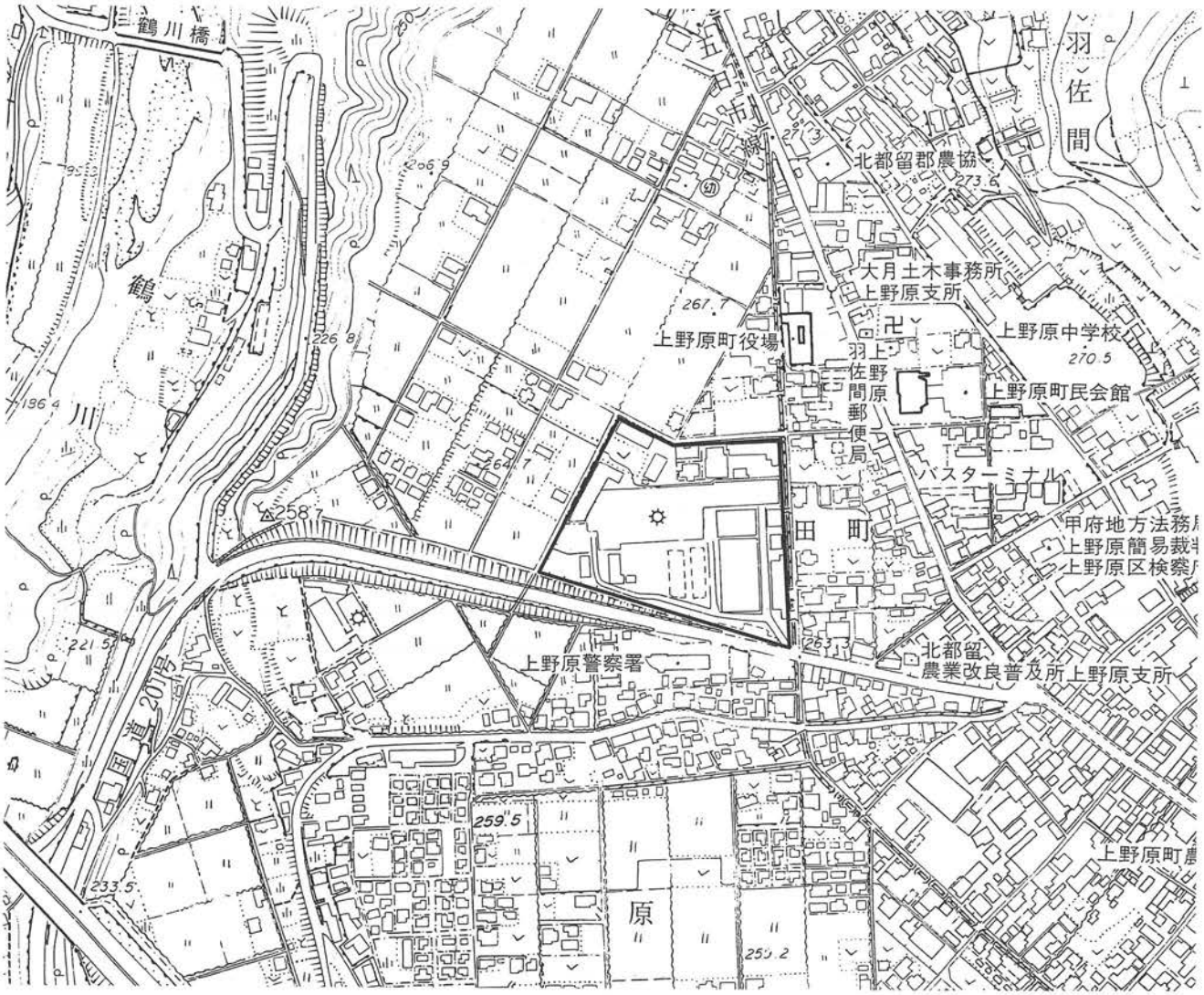
調査面積　845m²（対象面積19,220m²）

概　　要

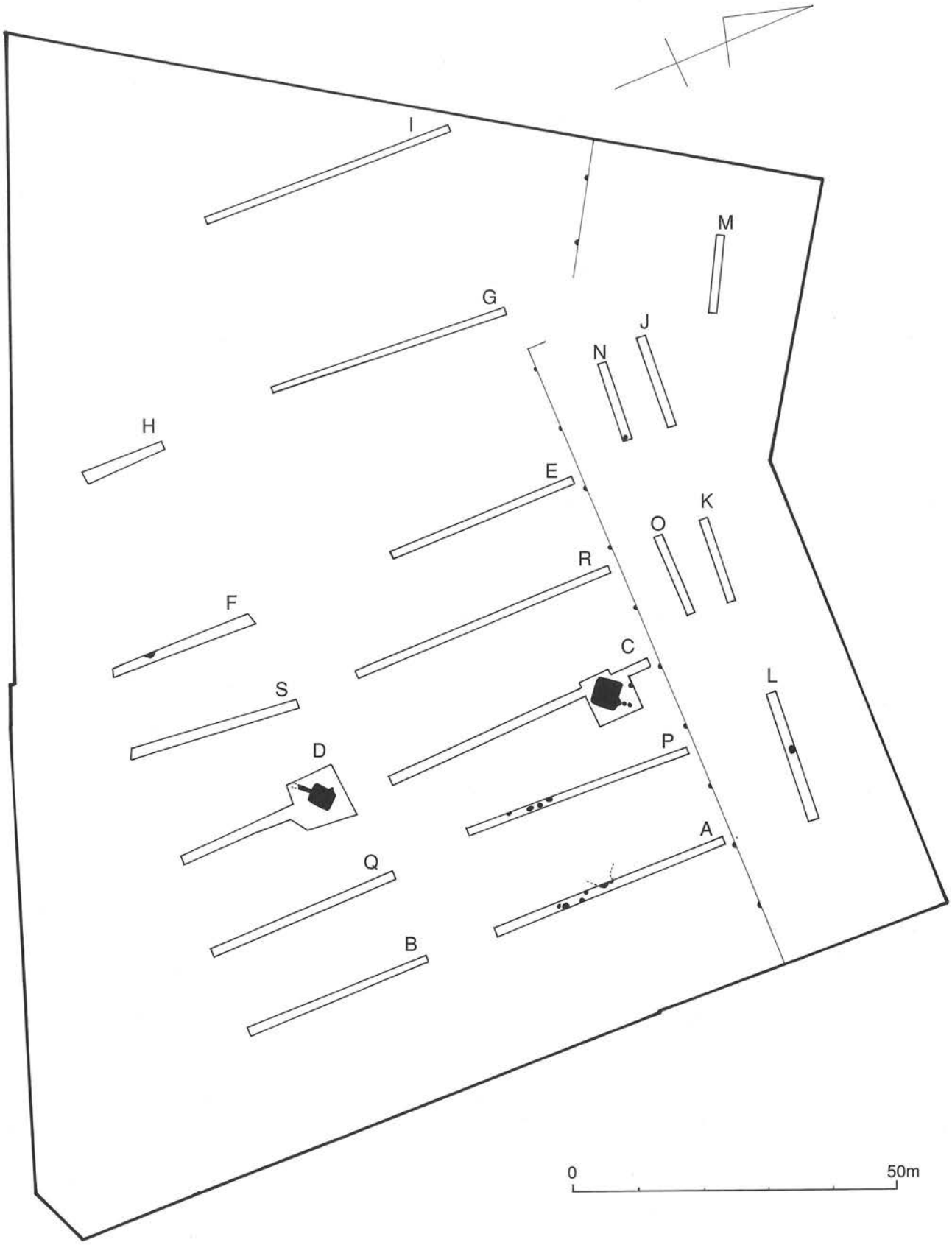
大間々遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置する。市街地一角の工場跡地にあたり、遺跡は知られていなかった。

建設予定地に巾１m・長さ15～40m の試掘溝を19ヵ所設定し、重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、コンクリート基礎などがローム面まで達し、土層の旧状をとどめている場所は少なかったが、一部で平安時代の竪穴住居址や柱穴列が確認され、土師器などの遺物が出土した。このため、翌年に発掘調査を実施した。

第82図　遺跡位置



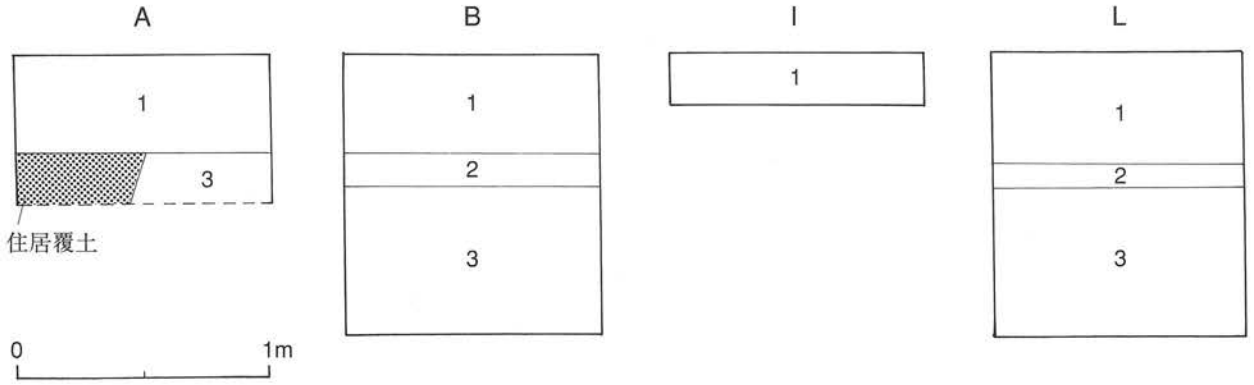
第83図　調査地点



第84図　調査区平面図

(1) 基本層序

基本層序は表土（整地層）・黒褐色土・にぶい褐色土・ローム層であったが、土木工事による撹乱が広範囲、かつ地下深くに及んでいたため、土層の旧状をとどめている場所は少なかった。このうち、黒褐色土は平安時代の遺物包含層であり、該期遺構覆土の基調となっている。



大間々遺跡土層

1　表土　　整地層。コンクリート塊・砂利を含む。
2　黒褐色土　　黒色スコリア（5mm以下）やや多く含む。平安時代の遺物包含層。
3　にぶい褐色土　粘性・締まりやや強い。橙色スコリア（3mm以下）やや多く含む。

第85図　調査区土層図

(2) 遺構と遺物

確認された遺構は、竪穴住居跡３軒、ピット（小穴）９基、土坑１基、焼土址１基である。竪穴住居跡は１辺３～４ｍの平面方形で、北寄りにカマドを有する。

遺物は総数30点出土し、すべて土器の細片であった。大半が土師器である。

出土遺物（第78図）

１は縄文土器。円筒形の深鉢口縁で、隆帯上に連続爪形文が施される。中期中葉に比定される。

２～９は土師器。２、台付甕の脚部。内外面に櫛歯状工具による刷毛目が見られる。色調は褐色。器厚５mm。

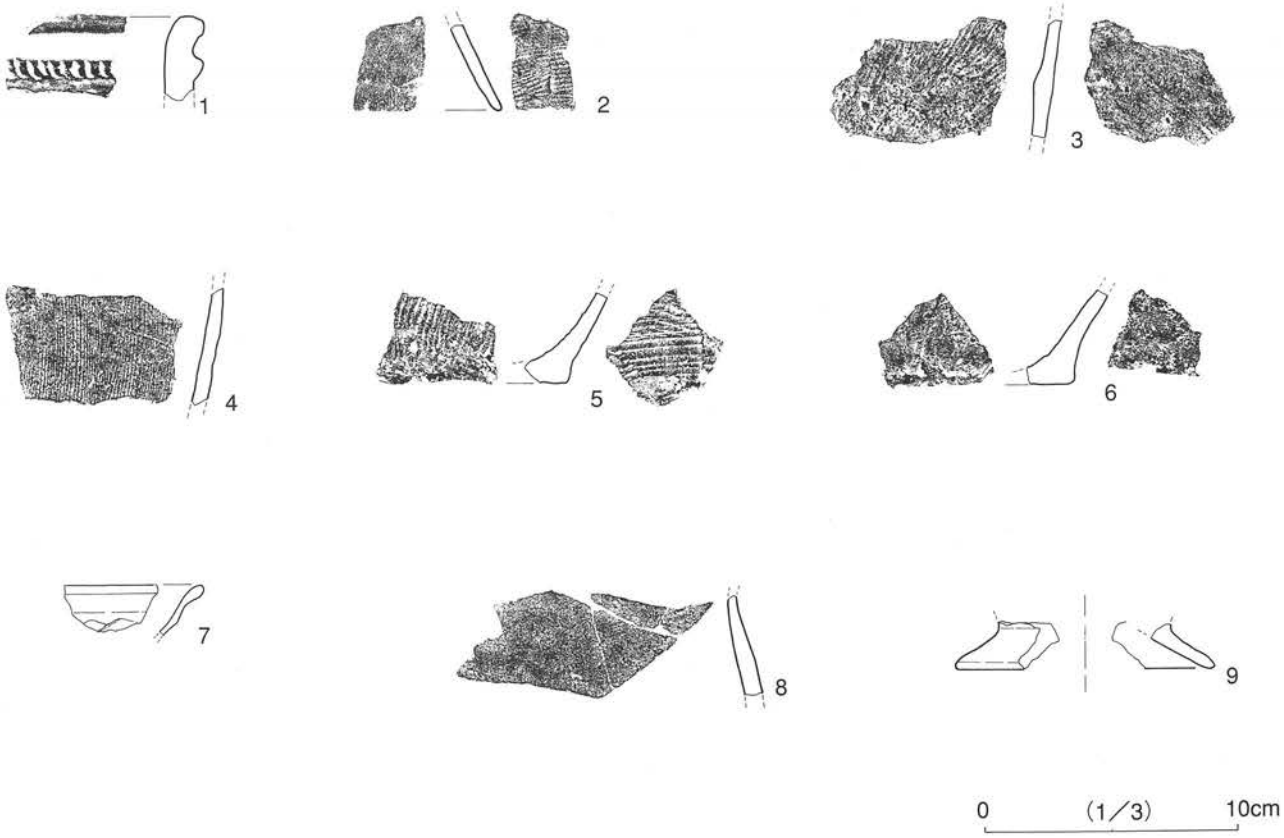
３～６は内外面に刷毛調整が施される。色調は暗褐色・黒褐色を呈し、胴部の器厚は６mm程度である。

７、坏の口縁部。口縁端部は肥厚し、体部に斜めのヘラ削りが施される。色調は橙色で、器厚は３mmである。

８、甕の胴部。内外面とも撫で調整が施される。色調はにぶい褐色を呈し、器厚は３～６mmである。

９、台付甕の脚部。色調はにぶい褐色を呈する。

以上のうち、２は古墳時代前期、３～９は平安時代に比定され、とくに３～７は甲斐型、８～９は相模型と呼ばれるものである。



第86図　出土遺物

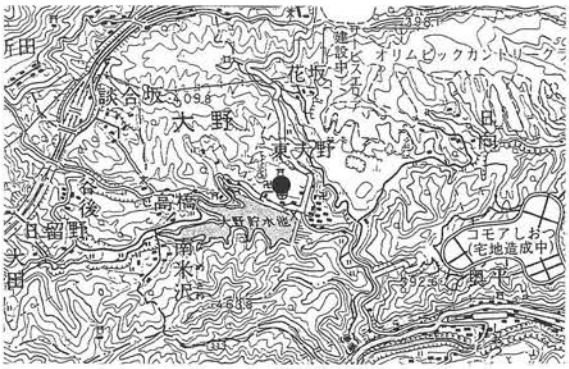
試掘坑	縄文時代	古墳～奈良・平安時代	近世以降	礫
A		2（土師器）		
C		13（土師器）		
D	土器2（中期）	12（土師器）		
F		1（土師器）		
L		7（土師器）		
O		2（土師器）		
P		2（土師器）		
Q		3（土師器）		
合計	2	42	0	0

（　）は内訳。試掘坑で表記がないものは出土遺物なし。

第8表　大間々遺跡出土遺物集計表

21　東大野（ひがしおおの）遺跡

調査目的　東大野集会所建設に伴う試掘調査
調 査 地　上野原市大野字熊野前1341－1
調査期間　平成13年12月17日
調査面積　8㎡（対象面積1,019㎡）
概　　要

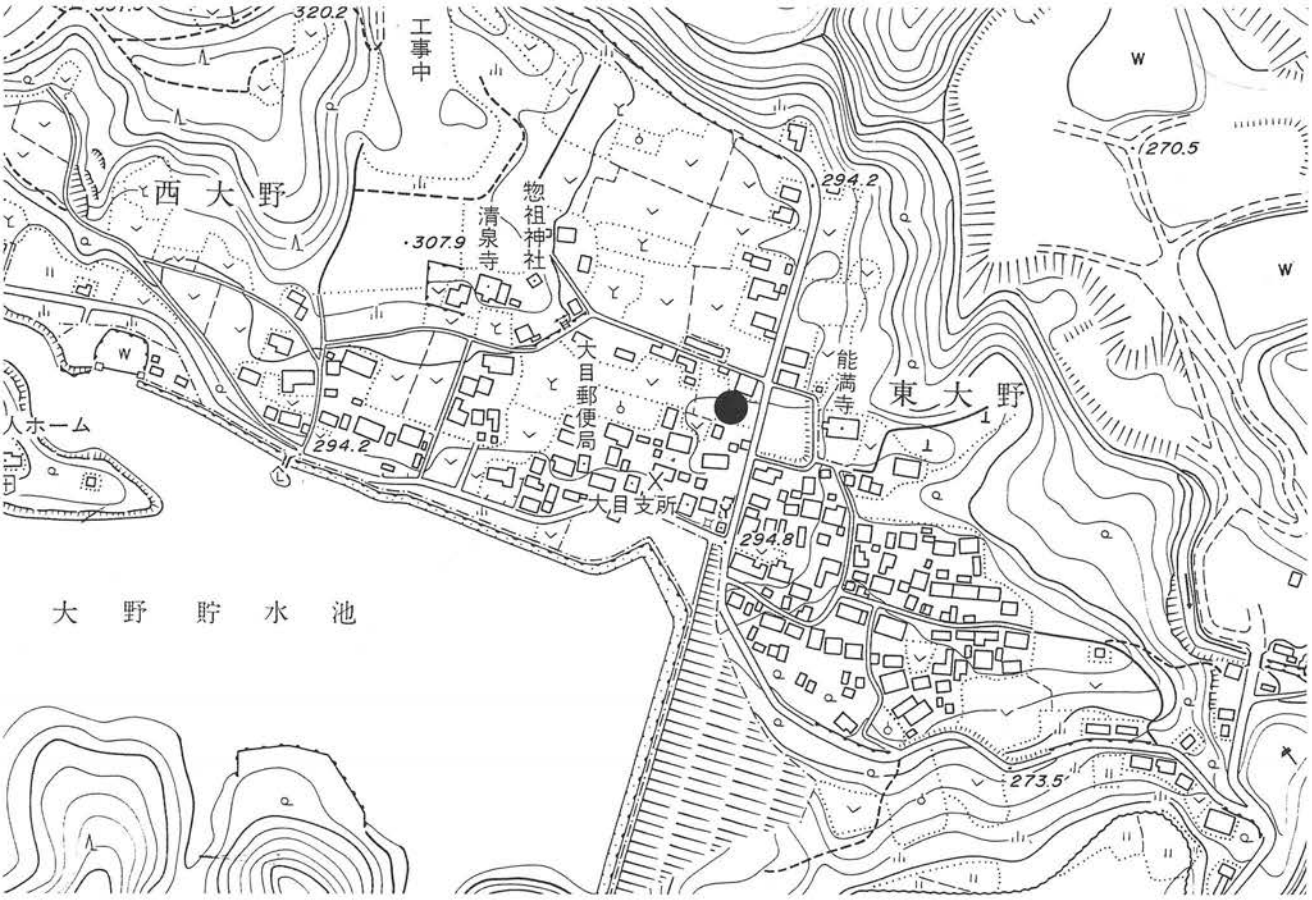


第87図　遺跡位置

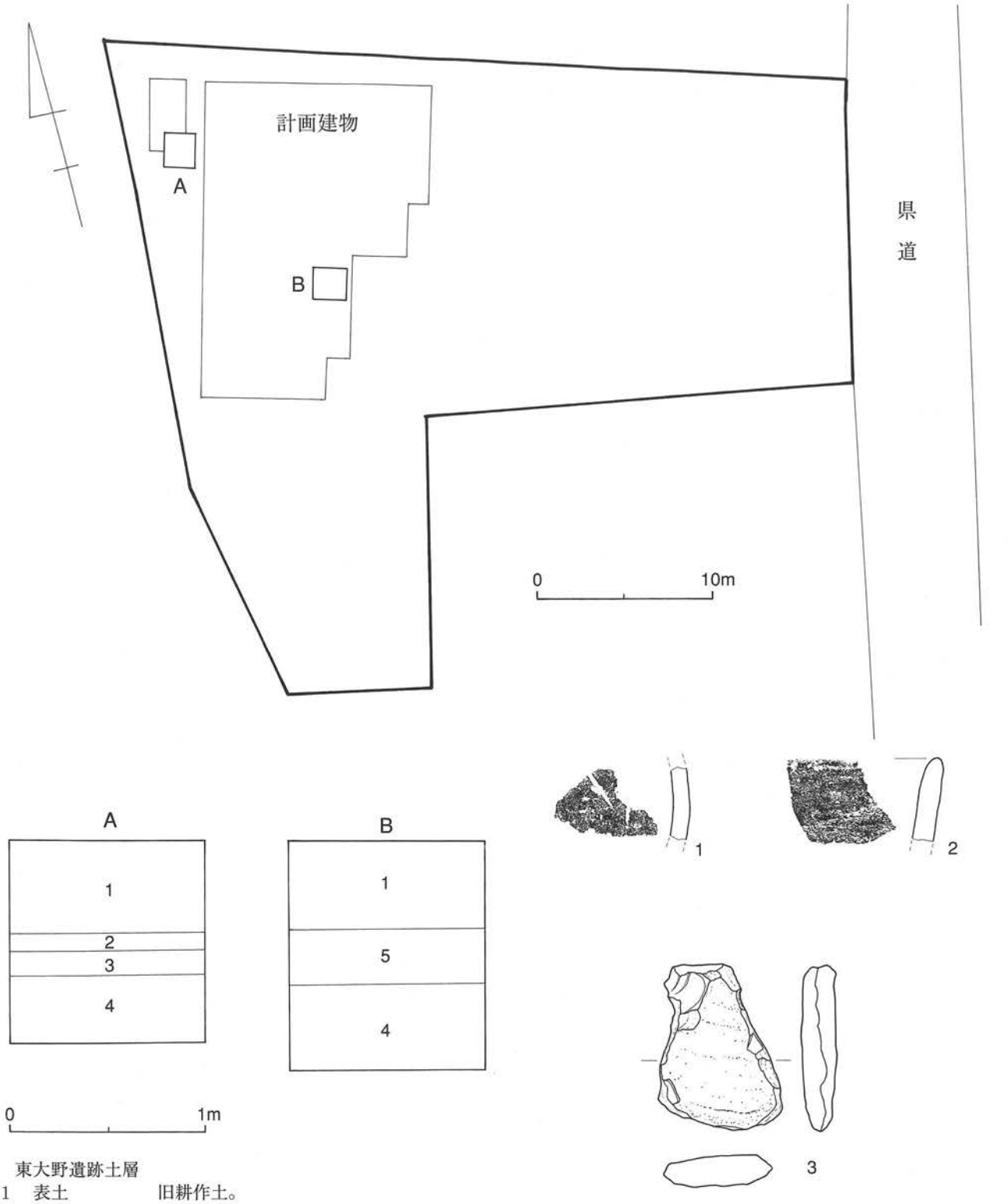
東大野遺跡は大野貯水池北側の台地に位置し、縄文・平安時代の遺物散布地である。建物予定地の畑に2m四方の試掘坑を2ヶ所設定し、深さ1mのローム層まで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土・にぶい褐色土・暗褐色土・ローム層であった。遺物は縄文時代中期の土器片と打製石斧が数点出土したが、遺構は確認されなかった。

出土遺物（第80図）

1～2は縄文土器でAトレンチ第2層～3層出土。1は深鉢の胴部で、短沈線がまばらに施される。2は深鉢の口縁部で、端部は丸い。いずれも中期に比定され、1は曽利V式にあたる。3は打製石斧でBトレンチ第5層出土。撥形を呈する。長さ8.7cm・幅5.9cm・厚さ0.6cm、重さ100g。石材はホルンフェルス。



第88図　調査地点



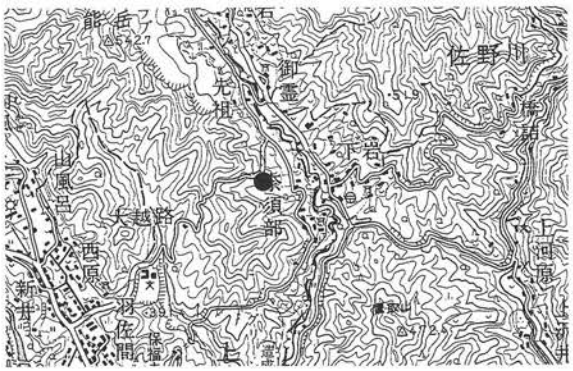
東大野遺跡土層

1	表土	旧耕作土。
2	黒褐色土	粘性・締まり弱い。黒色スコリア（5mm以下）やや多く含む。
3	にぶい褐色土	粘性・締まりやや強い。黒色スコリア（3mm以下）・橙色スコリア（1mm以下）を多く含む。第2層由来の黒褐色土が斑状に混じる。
4	黒褐色土	粘性・締まり強い。橙色スコリア（5mm以下）やや多く含む。
5	黒褐色土	第2層と第3層の混合層。

第89図　調査区平面・土層図、出土遺物

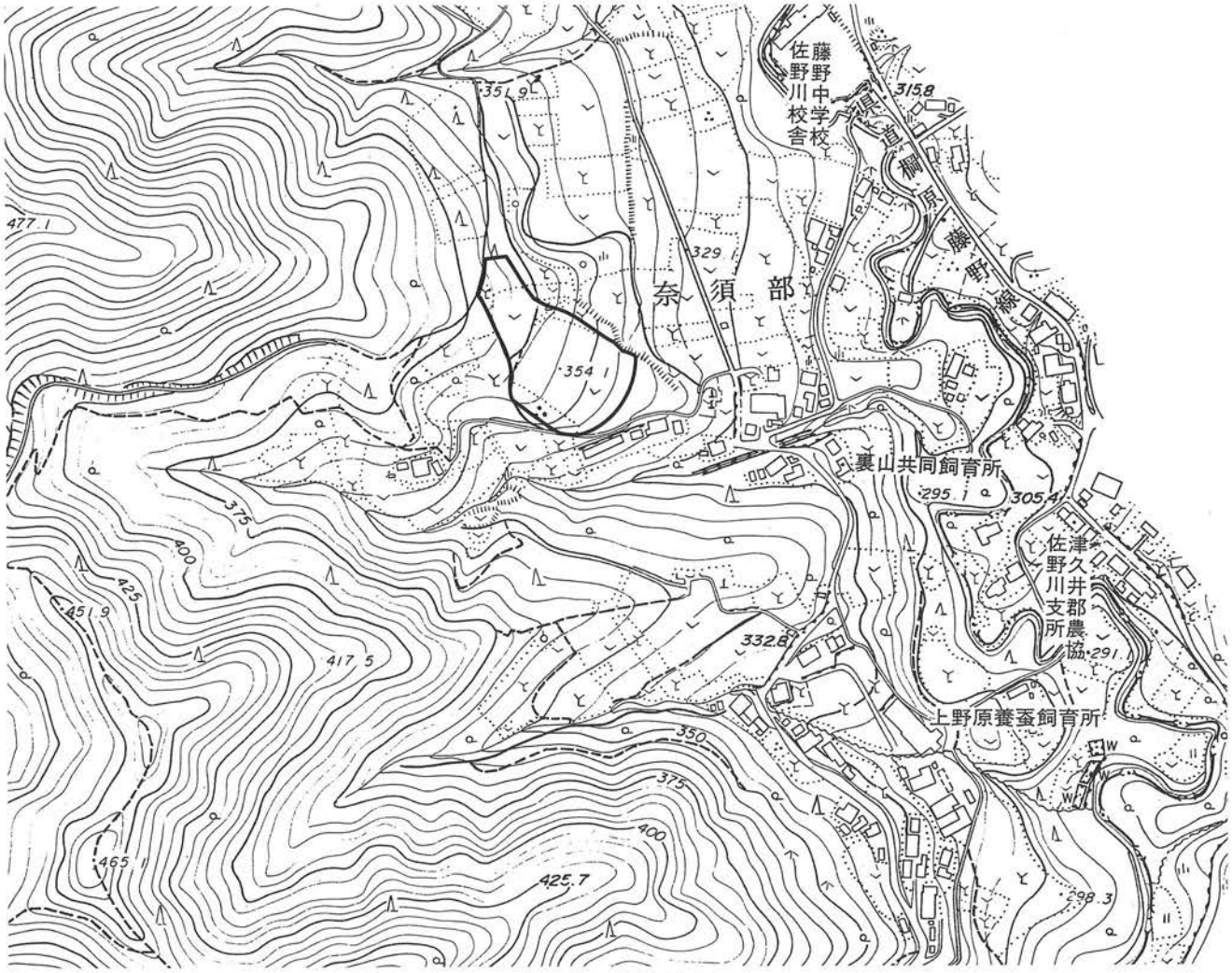
22　裏大越路遺跡（うらおおこうじ）

調査目的　老人保健施設建設に伴う試掘調査
調 査 地　上野原市上野原字裏大越路7806他
調査期間　平成15年３月３日～６日
調査面積　320m²（対象面積7,918m²）
概　　要

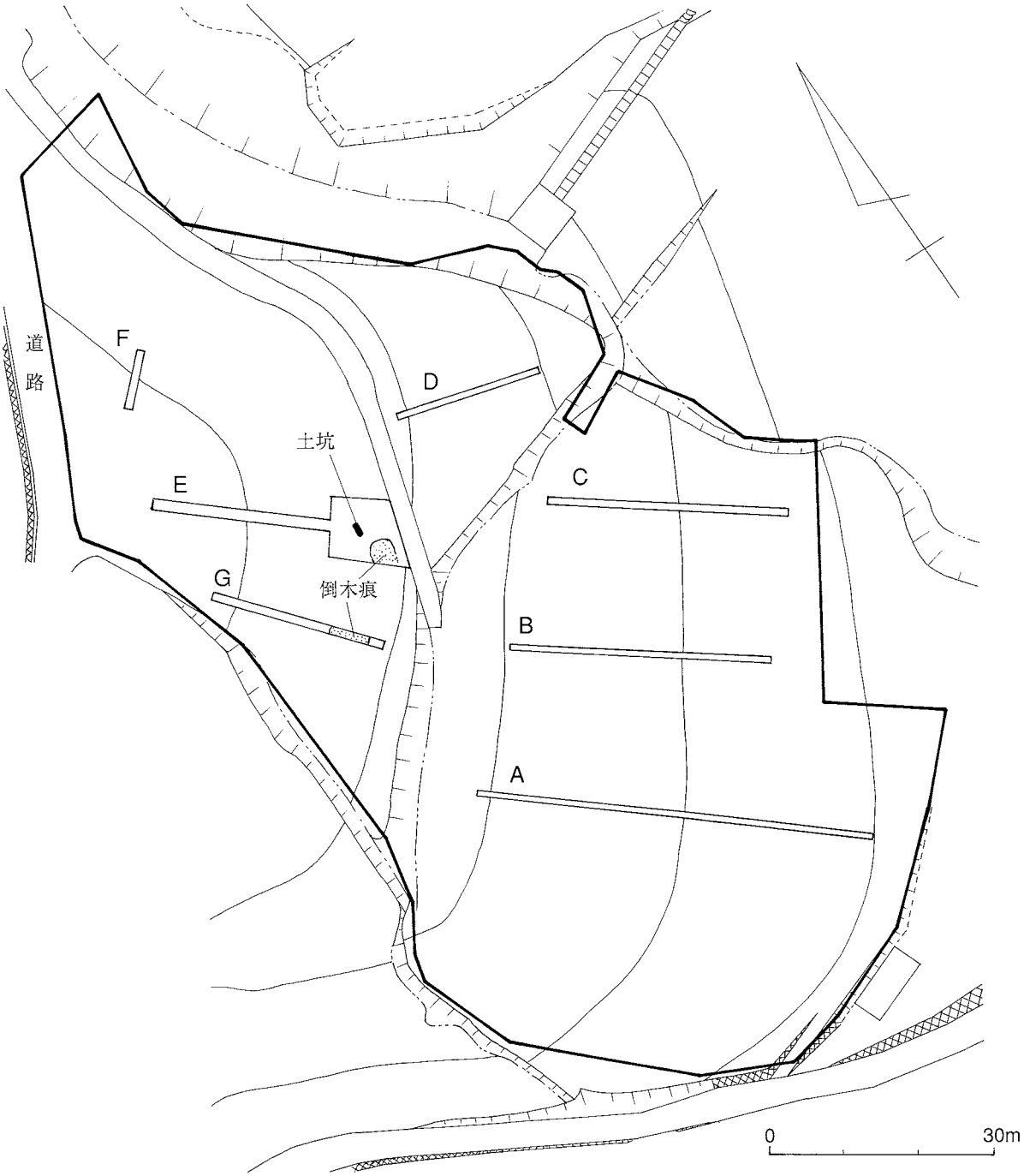


第90図　遺跡位置

調査地は神奈川との県境である境川西岸に位置し、畑や草木地が混在する斜面地である。建設予定地に巾１m・長さ30～50mの試掘溝を８ヶ所設定し、最深1.0mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果，全般に表土（耕作土）直下にローム層が確認され、斜面縁辺部で暗褐色土が介在する。遺構は縄文時代早期の陥し穴状土坑１基が発見され、覆土中から縄文土器片１点、土坑周囲で石鏃１点が出土した。これ以外の遺構・遺物はなく、他に風倒木痕と思われる落ち込みが数箇所で確認された。



第91図　調査地点



第92図　調査区平面図

(1) 基本層序

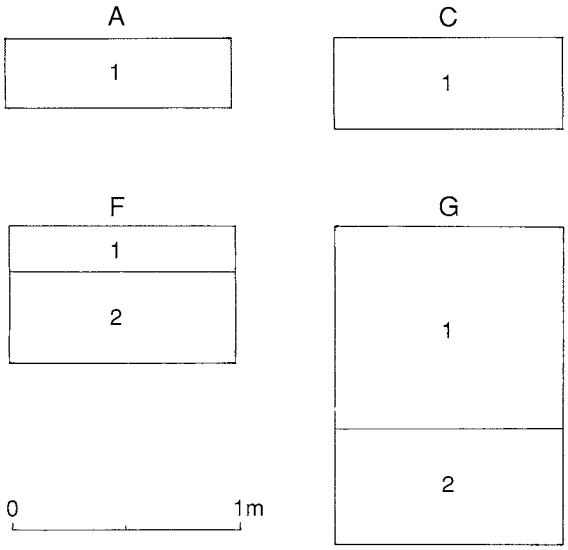
全般に表土（耕作土）直下がローム層で、耕作による撹乱を受けていた。

(2) 遺構と遺物

陥し穴状土坑（第94図・図版８）

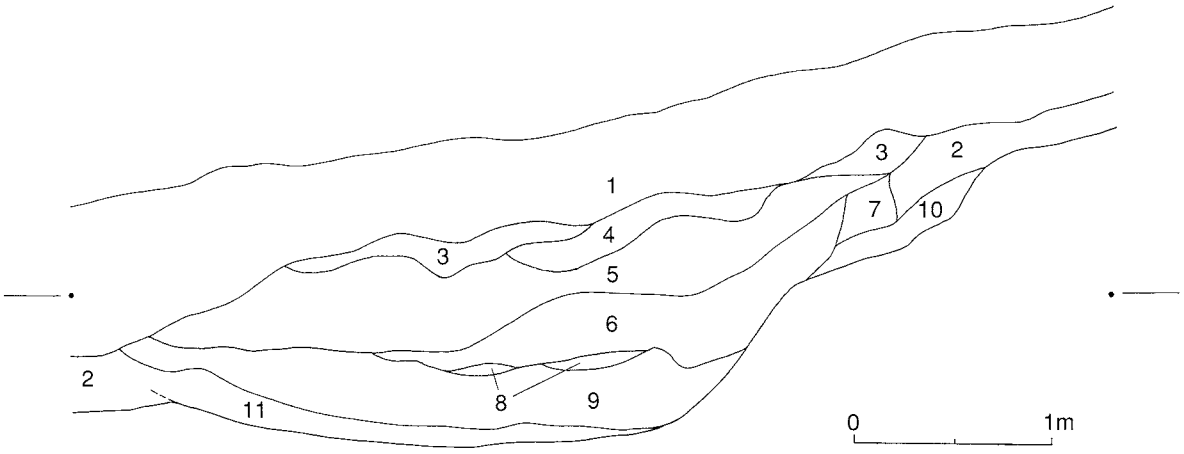
Ｅトレンチのローム層上面で１基確認された。平面は不整長方形を呈し、長軸1.55m・短軸0.6m、底面までの深さは斜面上方で最も深く0.75mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、斜面上方にピット１基が検出された。ピットは直径0.26m、深さ0.3mである。土坑の覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。縄文土器片１点が覆土中層から出土した。土器は深鉢胴部で、底部に向かってすぼまる器形である。無文。内外面とも剥落が目立ち、胎土に石英などの粒子を含む。色調はにぶい褐色。器厚は1.1cm。縄文早期に比定される。本遺構は出土遺物から縄文時代早期に位置付けられる。

石鏃が、土坑から2.5m西側のローム直上で１点検出された。長さ1.6cm・最大幅1.4cm・厚さ３mm。石材は黒曜石である。



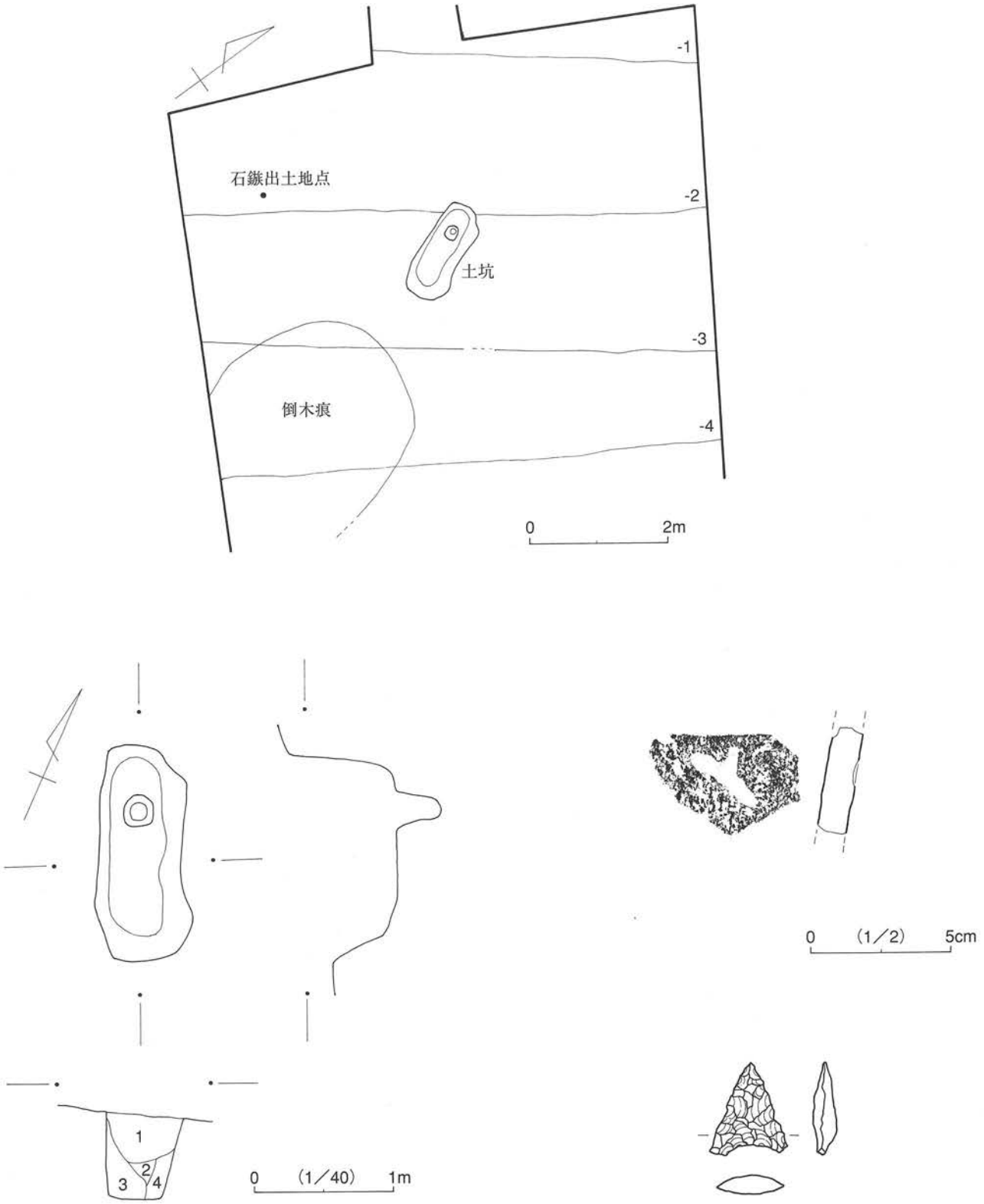
裏大越路遺跡土層

1	表土	旧耕作土。
2	暗褐色土	粘性・締まりやや強い。橙色・青灰色スコリア（5mm以下）・褐色土粒・炭粒を含む。
3～11	倒木痕覆土（全般に粗粒で、粘性やや強い）	
3	暗褐色土	第３層と同質だが、褐色味を帯びる。
4	暗褐色土	褐色土粒を多く含む。
5	暗褐色土	褐色土粒・小礫を含む。
6	暗褐色土	黒色味を帯びる。褐色土塊（1cm～2cm）・拳大の礫を含む。
7	暗褐色土	黒色味を帯びる。粗粒。
8	黒褐色土	粘性強い。
9	褐色土	地山のハードローム層に似るが粗粒。暗褐色土塊・拳大の礫を含む。
10	暗褐色土	粗粒。
11	漆黒色土	第２層との境は漸移的である。



倒木痕（Ｇトレンチ）

第93図　調査区土層図

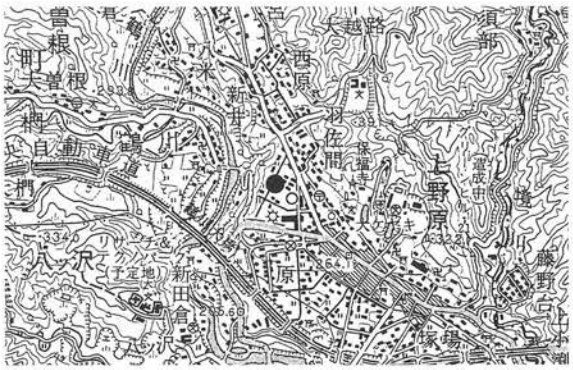


裏大越路遺跡土坑土層
全般に粘性強く、締まり弱い。橙色・青灰色スコリア（5mm以下）を少し含む。
1　暗褐色土　ローム粒子やや多い。　2　黒褐色土　ローム粒子やや多い。
3　暗褐色土　ローム粒子多い。　4　褐色土　地山のロームと同質。

第94図　遺構平面・土層断面図、出土遺物

23　寺畑（てらばたけ）遺跡

調査目的　分譲宅地工事に伴う試掘調査
調 査 地　上野原市上野原字寺畑4014－7他
調査期間　平成15年９月16日～18日
調査面積　148m²（対象面積1,322m²）
概　　要



第95図　遺跡位置

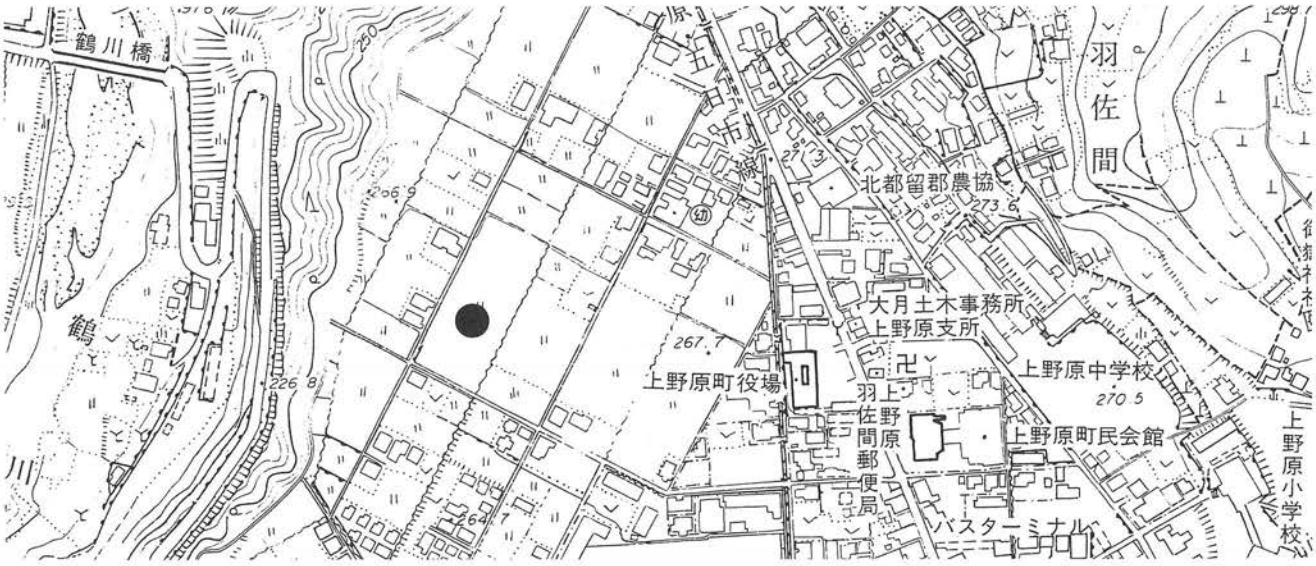
調査地は鶴川東岸の河岸段丘面に位置する。工事予定地の休耕田に巾１m・長さ10～20m の試掘溝を７ヶ所設定し、最深1.0m まで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、基本層序は表土・黒褐色土・暗褐色土・ローム層であった。遺構は、古代以降の土坑４基・ピット１基、及び縄文土器片・石器等を含む遺物集中部１ヵ所を検出した。遺物は縄文時代の遺物集中部から、中期中葉の土器、磨石・打製石斧・石匙・スクレイパー・加工痕のある剥片、被熱痕のある礫が出土した。この他の遺物は、土坑・ピット覆土から土師器の細片がわずかに出土し、遺構外では縄文土器片が数点出土した。

(1)　土坑

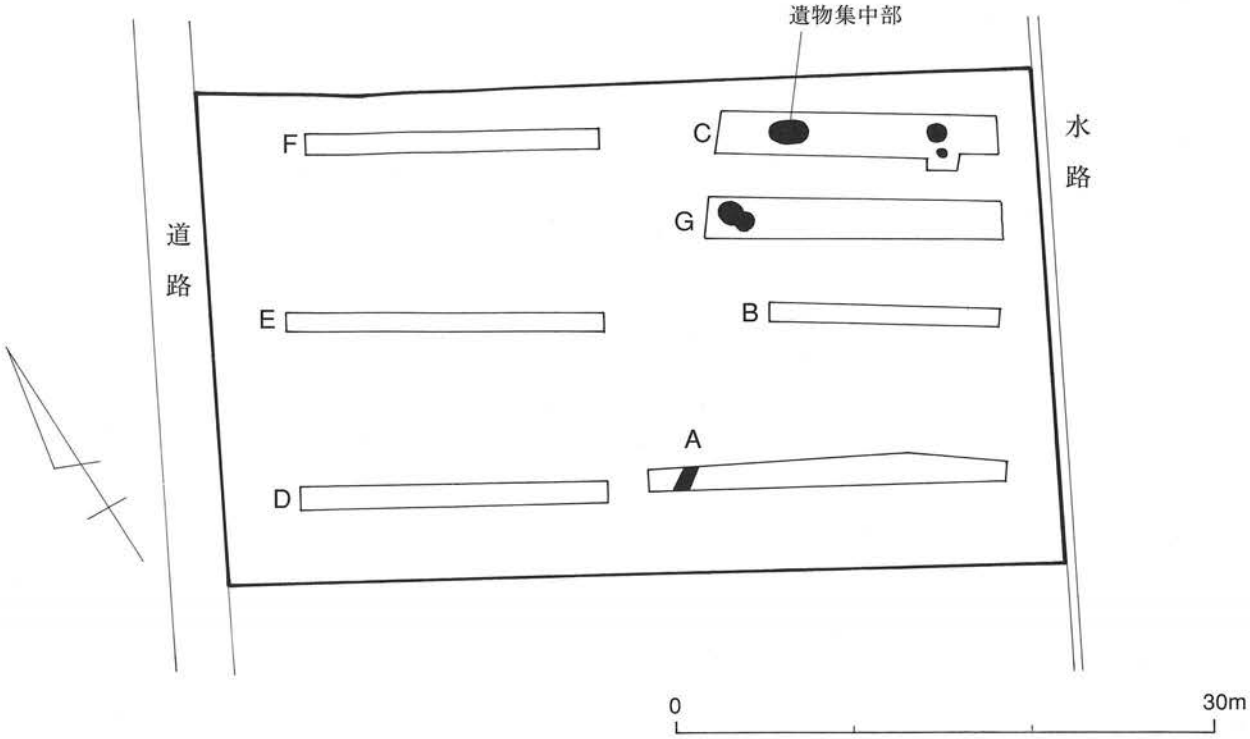
１号～４号土坑があり、第Ⅲ層上面で確認された（第98図）。覆土は第Ⅱ層を基調とした黒褐色土である。平面が円形と長方形の２種類に大別でき、このうち、円形タイプの２～４号土坑は、直径1.2～1.5m、最深0.31m の規模を測る。３・４号は重複する。出土遺物はない。長方形タイプは１号土坑のみで、主軸長1.0m・幅0.8m・深さ0.5m を測る。遺物は、覆土上層から土師器と思われる細片１点が出土した。遺構の時期は、層位や出土遺物から古代以降に位置付けられる。

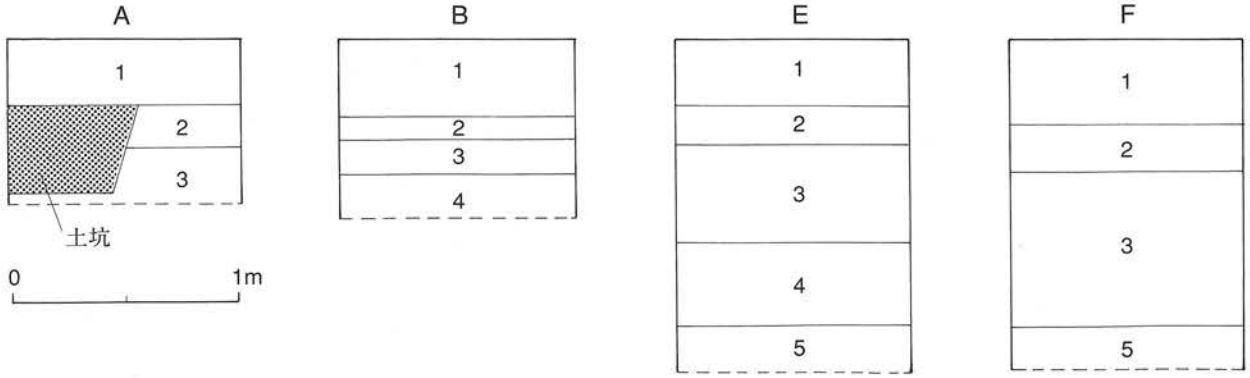
(2)　ピット

１基検出された（第98図）。平面は不整楕円形で、覆土は第Ⅱ層を基調とした黒褐色土である。規模は長軸0.95m・幅0.65m・最深0.67m を測る。遺物は、覆土下層から土師器と思われる細片２点が出土したが、微細のため時期区分は困難である。遺構の時期は、層位や出土遺物から古代以降に位置付けられる。



第96図　調査地点



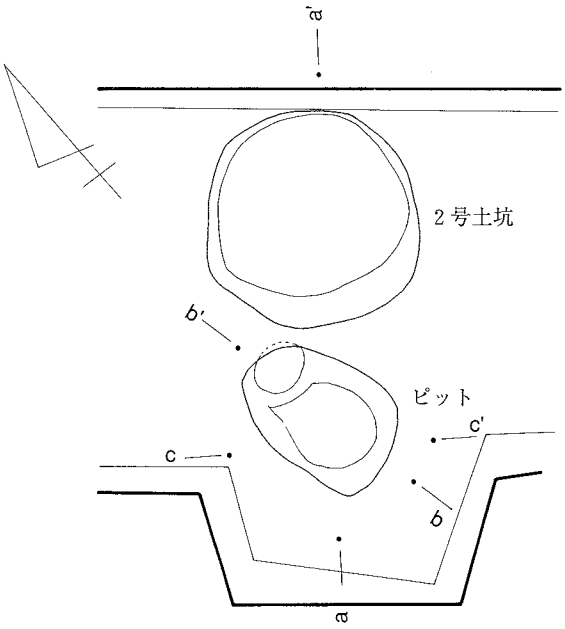


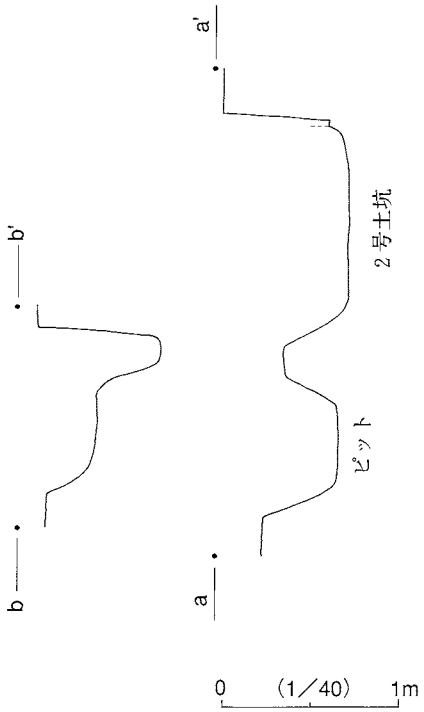
寺畑遺跡土層
1　表土　　旧耕作土
2　黒褐色土　黒色スコリアを含む。
3　暗褐色土　橙色スコリアを含む。下層ロームとの境は漸移的である。
4　ソフトローム
5　ハードローム

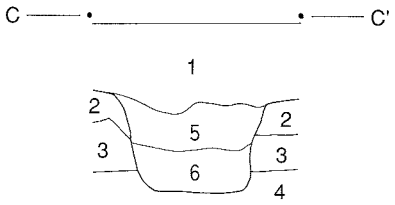
第97図　調査区平面・土層図

試掘坑	縄文時代		古墳～奈良・平安	近世以降	礫
	土器	石器			
A			1（土師器）		
B	4（中期1）	2（加工痕ある剥片）			6
C	139（中期）	14（打製石斧8・磨石・石匙）	4（土師器）		276
D	3（中期）				1
E	2（中期）				
F	2				2
G		1（打製石斧）			1
合計	150	17	5	0	286

第9表　寺畑遺跡出土遺物集計表　　（　）は内訳

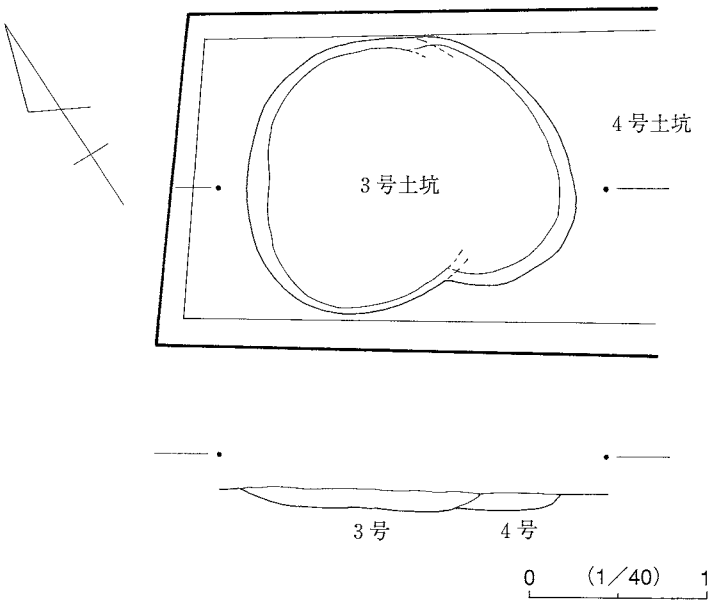






寺畑遺跡ピット土層

1　表土
2　黒褐色土
3　暗褐色土
4　ローム
5　黒褐色土　黒色スコリア・褐色土を多く含む。ピット覆土。
6　黒褐色土　黒色スコリア・褐色土をやや多く含む。ピット覆土。



寺畑遺跡3号土坑土層

1　暗褐色土　黒色スコリア・褐色土をやや多く含む。

寺畑遺跡4号土坑土層

2　暗褐色土　黒色スコリア・褐色土を多く含む。

第98図　遺構平面・土層断面図

(3) 遺物集中部

調査区東側のＣトレンチに位置し、第Ⅲ層中で確認された。約２ｍ四方の範囲に多量の縄文土器、石器、礫が混在して出土した。遺物の平面分布は周囲に拡散することなく限定的なあり方を示し、垂直分布は最大0.４ｍの幅があった。掘り方は確認されなかった。遺構の時期は層位や出土遺物から縄文時代中期中葉に位置付けられる。以上から、本遺構は窪地等を利用した小規模な遺物廃棄場(いわゆる土器捨て場)の可能性がある。

① 土器（第99図、図版９）

すべて縄文土器の破片で、総数139点である。１、角押文が斜位・波状に施される。２、口縁突起部にキャタピラ文・ペン先状工具による三角押文が施される。３、わずかに波状を呈する口縁部で、キャタピラ文・玉抱三叉文が施される。４～７は隆帯脇にキャタピラ文が施される。４、口縁部に重三角区画文を配し、区画内に三叉文が施される。６、三角形の隆帯区画が配され、隆帯沿いに三角押文が施される。７、横位楕円の隆帯区画が配され、区画内に波状沈線が施される。８～11は半裁竹管による半隆帯で横・縦・斜位の区画を有し、区画内に集合沈線が施される。このうち８は、屈曲する無文口縁部に円環状の把手を有し、把手側面の一部は連続する刻みが加えられる。12、平行沈線による三角区画内に、集合沈線、及び三叉状・波状の沈線を施す。13、口縁の波頂部で円形の孔を有する。口縁と孔は隆帯で縁取られ、隆帯側面は連続する刻みが加えられる。14・15は縄文地の胴部で、14の縄文は波状沈線で区画される。16～19は深鉢胴部に鎖状隆帯が施されたものである。16は波状口縁で、口縁と胴部を鍔状の隆帯で区画する。隆帯上や区画内には交互の刻みや連続爪形文が加えられる。17・18は区画内に集合沈線が施され、18は隆帯上に交互の刻みが加えられる。19の鎖状隆帯は弧状に垂下する。20、隆帯上に連続する刻みが加えられる。21、半隆帯、及び半裁竹管による刻みが加えられた隆帯が斜位に施される。21・22は丸く内湾する口縁部。21は胴部と沈線によって区画され、22は眼鏡状の把手が付く。以上の土器はすべて中期中葉に位置付けられ、１は狢沢式期、２は新道式期、３～23は藤内式・井戸尻式期に比定される。

② 石器（第100図、図版９）

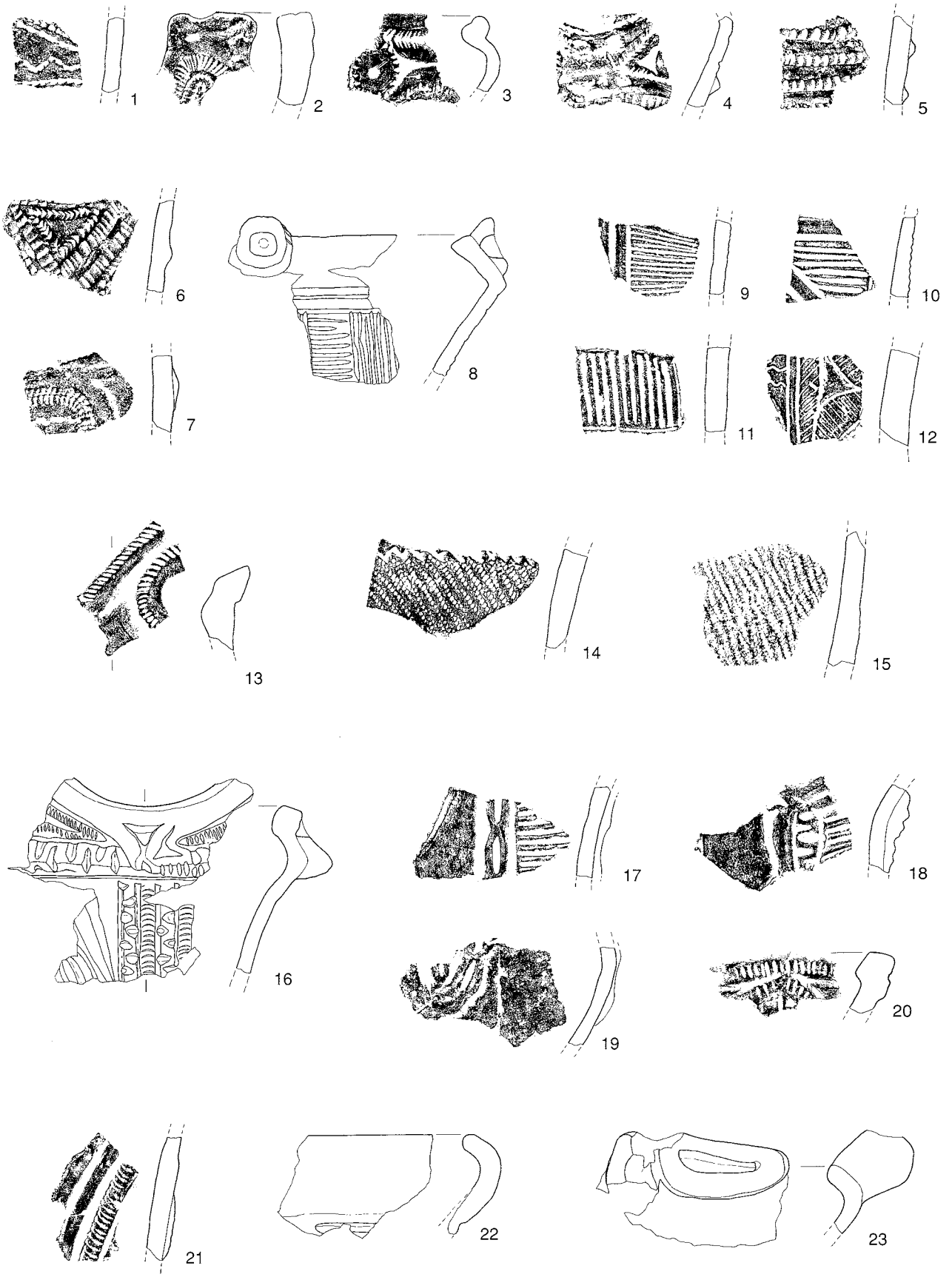
打製石斧９点、石匙１点、スクレイパー１点、磨石類３点が出土した。

番号	出土区・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	遺物集中部一括	打製石斧	8.1	6.0	2.9	140	泥質片岩	
2	〃	〃	(9.4)	5.3	1.7	110	ホルンフェルス	
3	〃	〃	11.0	5.1	1.4	95	ホルンフェルス	
4	〃	〃	11.5	4.9	1.9	120	ホルンフェルス	
5	〃	〃	12.9	4.6	2.1	154	泥質片岩	
6	〃	〃	(11.4)	5.3	1.6	128	泥質片岩	
7	〃	〃	12.0	5.3	2.0	185	泥質片岩	
8	〃	〃	14.3	6.0	1.6	170	泥質片岩	
9	〃	〃	15.0	8.2	2.0	300	ホルンフェルス	
10	〃	スクレイパー	8.5	7.1	1.8	110	緑色凝灰岩	
11	〃	石　匙	10.8	9.5	2.4	205	ホルンフェルス	
12	〃	磨　石	14.1	7.7	3.6	564	砂岩	
13	〃	〃	12.2	3.2	2.4	153	砂岩	
14	〃	〃	10.6	6.3	5.2	545	砂岩	

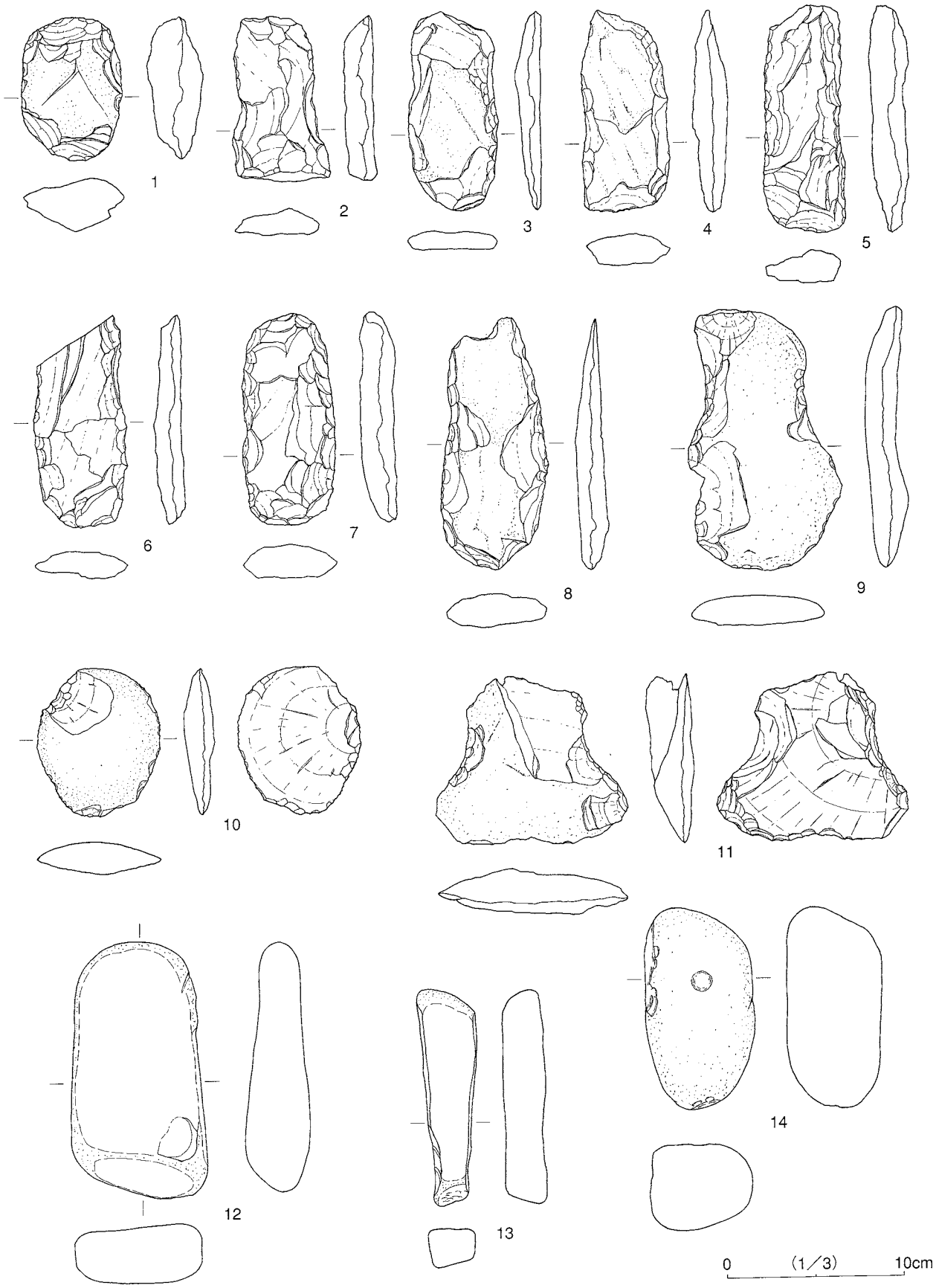
第10表　　寺畑遺跡出土石器一覧表

③ 礫

総数276点（総重量16kg）出土し、このうち約60%は破損していた。赤化や吸炭など被熱痕跡が明瞭に認められたものは37点（全体の13%）あった。



第99図　出土土器



第100図　出土石器

24　当月（とうづき）遺跡

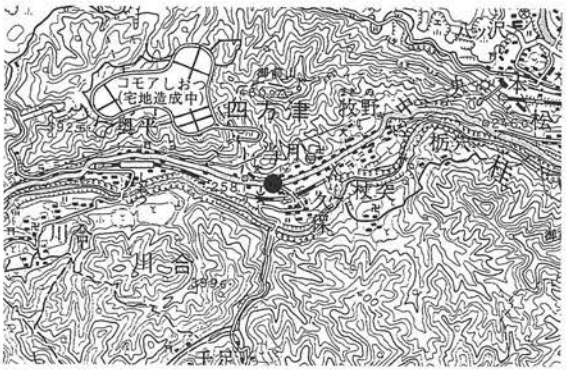
調査目的　店舗建設（セブンイレブン四方津店）に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市四方津字当月979－1他

調査期間　平成15年９月29日～10月１日

調査面積　136m²（対象面積2,159m²）

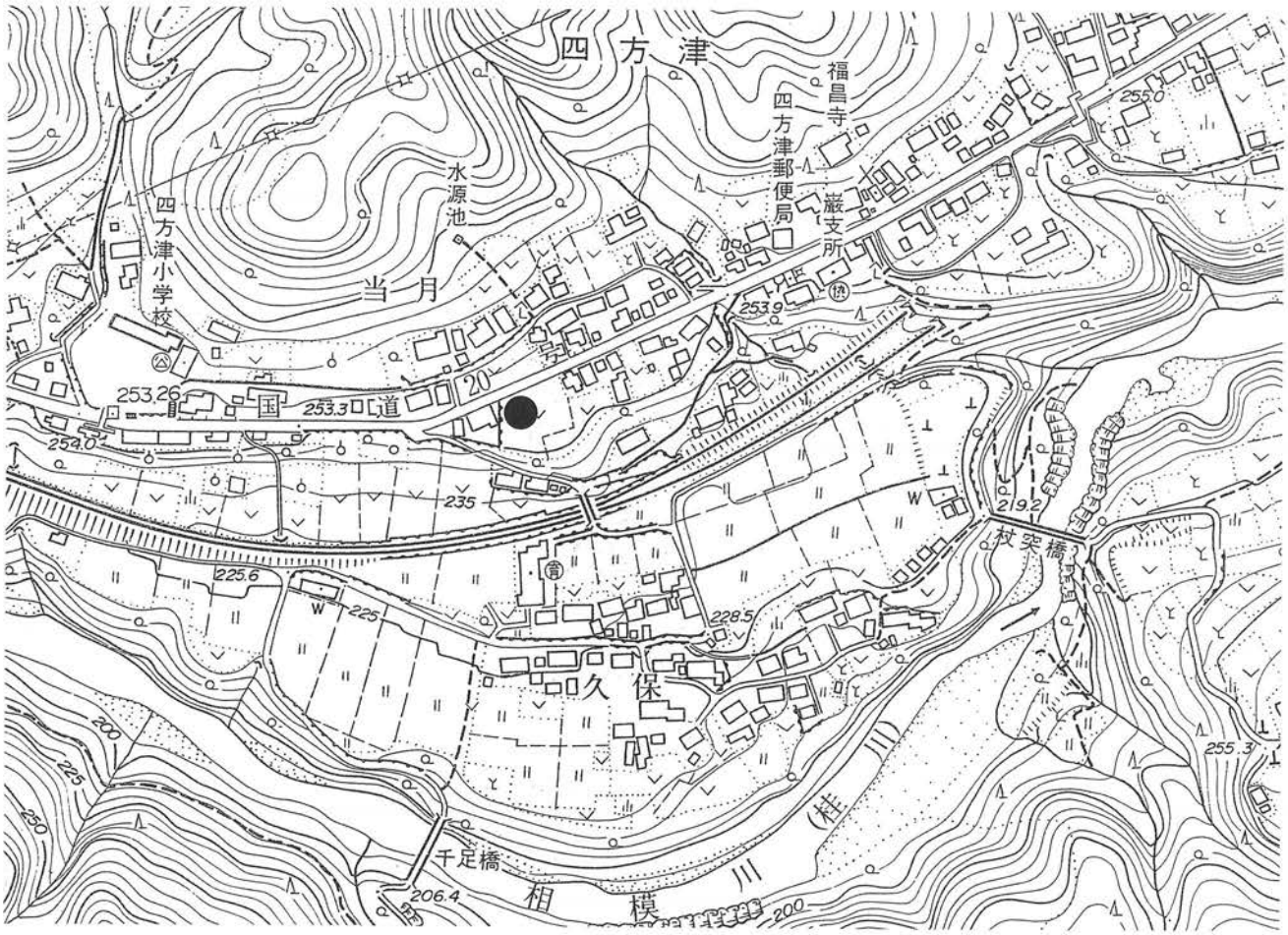
概　　要



第101図　遺跡位置

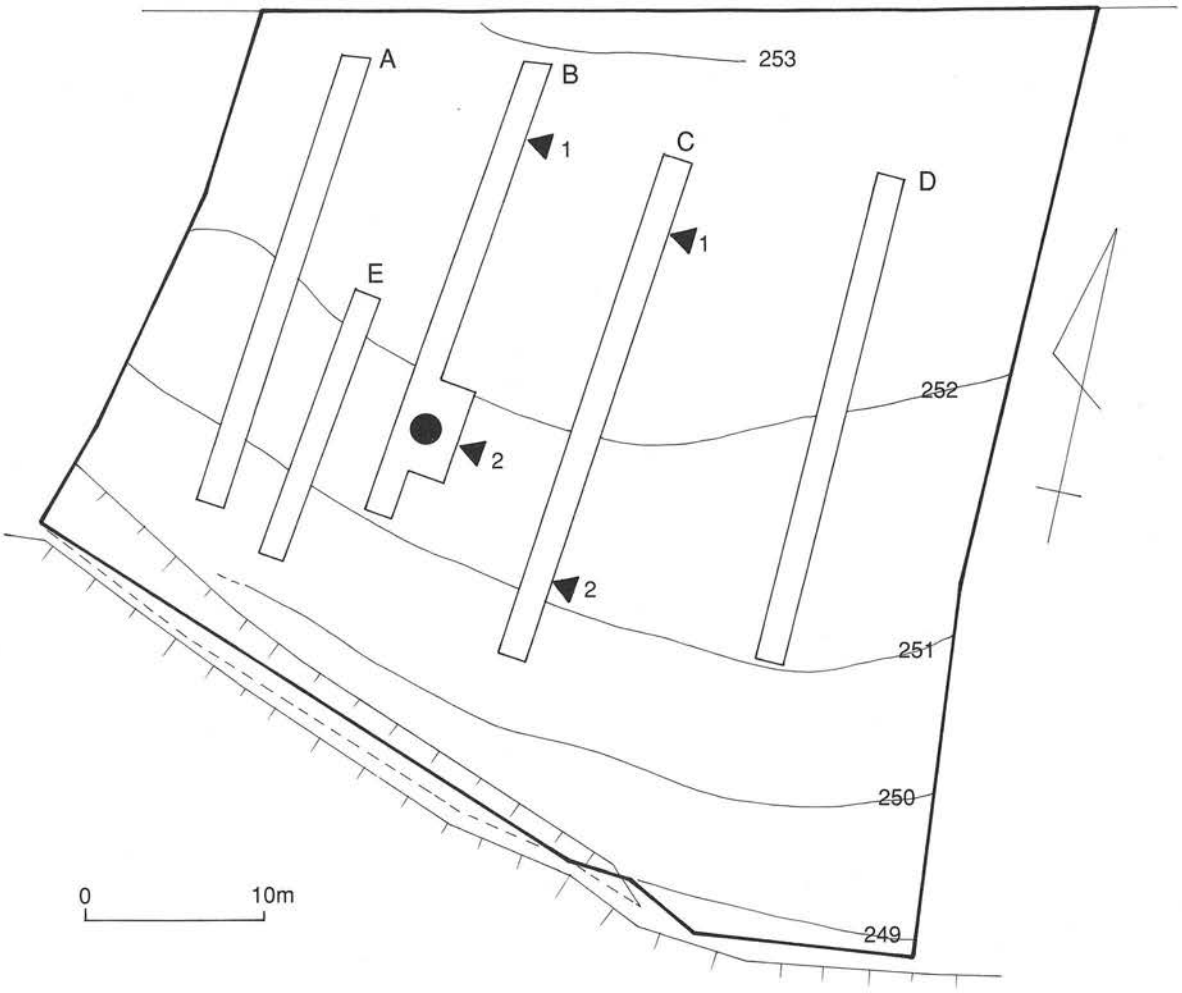
当月遺跡は桂川北岸の河岸段丘面から背後の山際に位置し、縄文時代の遺物散布地として知られている。調査地点は国道20号線南側に位置し、段丘平坦面から縁辺の畑地に当たる。建設予定地に巾１m・長さ15～30m の試掘溝を５ヶ所設定し、最深1.6m まで重機掘削機を併用し掘り下げた。

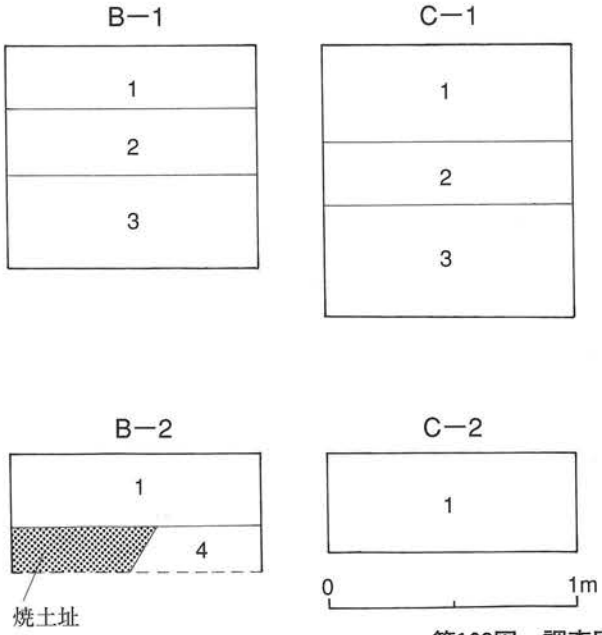
調査の結果、平坦地の基本層序は表土（耕作土）・暗褐色土・粘土質の黒褐色土・ローム層で安定していたが、斜面地では層厚が減少し、表土直下がローム層となっていた。遺構は縄文時代中期後葉に推定される配石１基、焼土址１基を確認した。遺物は縄文時代早期・中期の土器片、石器（加工された不定形の礫・スクレイパー・石匙・磨石類・台石・石棒）が出土した。



第102図　調査地点

国道20号





当月遺跡土層

1　表土　　旧耕作土。

2　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。橙色スコリア・白色礫の粒子をやや多く含む。

3　黒褐色土　粘性強く、締まりやや強い。粘土特有の臭気がある。橙色スコリア・白色礫の粒子・ローム塊を含む。

4　ローム層

第103図　調査区平面・土層図

(1) 遺構

Bトレンチで配石1基、焼土址1基が近接して検出された（第104図・図版10）。確認面は地表下約40cmの第Ⅱ層中である。

配石は比較的大型の平石5枚で構成されるが、石の大半を掘削作業中に取り上げてしまったため、詳細な出土状況は不明である。石表面の一部に被熱による赤化が認められた。

焼土址は平面円形で、直径0.4m・深さ0.18mを測る。覆土は2層に分けられ、上層にやわらかい焼土が堆積する。壁面は焼けていない。出土遺物はない。

配石や焼土址の周囲には、ほぼ同レベルで縄文土器片や破損した礫が比較的多く分布し、この中には石匙や加工痕のある剥片もわずかに混在する。なお、被熱礫はわずかであった。

これら遺構の時期は、周囲の出土土器から縄文時代中期後葉に推定される。

(2) 遺物

B·Cトレンチを中心に縄文土器片・石器・礫が出土した。出土層位は第Ⅱ層～第Ⅲ層上位である。礫は333点出土し、大半は拳大以下の破損礫であった。以下、土器と石器について説明する。

試掘坑	縄文時代		古墳～奈良・平安	近世以降	礫
	土器	石器			
A	1	1			8
B	49（早期3・中期6）	5（黒曜石剥片1）			215
C	20（早期14）	6			84
D	4	1			15
E		3			11
合計	74	16	0	0	333

第11表　当月遺跡出土遺物集計表　（　）は内訳

① 土器（第105図・図版11）

すべて縄文土器の破片で、総数74点が出土した。

1～3は深鉢の無文土器で、出土土器の大半を占める。1、口縁部で端部は平坦。胎土に微細な金雲母や石英などの粒子を含む。色調は褐色で、器厚1.2cm。2、胴部。表面には縦位に擦痕が見られる。色調は褐色で、器厚1.2cm。3、胴部で、底部に向かってすぼまる器形である。胎土に金雲母（1mm）などの粒子を含む。色調は褐色で、器厚1.0～1.3cm。出土地点は、1がDトレンチ、2がCトレンチ、3がBトレンチである。

4～6は縄文が施された深鉢で、底部に向かってすぼまる器形である。4、縦位の縄文がまばらに施される。胎土に金雲母（1mm）などの粒子を含む。外面の色調は暗褐色。器厚1.0～1.3cm。5、縦・斜位の縄文が密に施される。胎土に金雲母や石英などの粒子を多く含む他、繊維痕が見られる。色調は黒褐色。器厚1.2cm。

6、斜位の節の太い縄文が施される。胎土に金雲母や石英などの粒子を含む。色調は褐色で、器厚1.2～1.6cm。出土地点はすべてBトレンチである。

7、多条の沈線が横位に施される。胎土に礫（5mm）がやや多く含まれる。色調はにぶい褐色。器厚1.3cm。出土地点はBトレンチ第Ⅱ層中である。

8～10は深鉢胴部で、擦痕状の条痕文が内外面に施される。外面の条痕文は、8が波状・縦位、9は不定方向、10は不明瞭だが横位に、それぞれ施される。また、10の外面には絡条体圧痕文が伴う。胎土にはいずれも砂粒や繊維痕が見られる。色調は褐色（8）、橙褐色（9）、暗褐色（10）である。器厚は1.2～1.3cm（8・

9)、0.9cm（10）である。出土地点はすべてＣトレンチ第Ⅱ層～第Ⅲ層上位である。

11～14は配石に近接して出土した。11～13は深鉢口縁部で、接合しないが同一個体と推定される。口縁端部は平坦である。縦位の条線が施される。胎土に石英などの粒子を多く含む。色調は橙色・にぶい褐色。器厚は約1.0cm。14、壺の胴部と思われ、沈線による大型の渦巻文が配される。胎土に石英などの粒子を含む。色調はにぶい褐色。器厚は0.8～1.0cm。

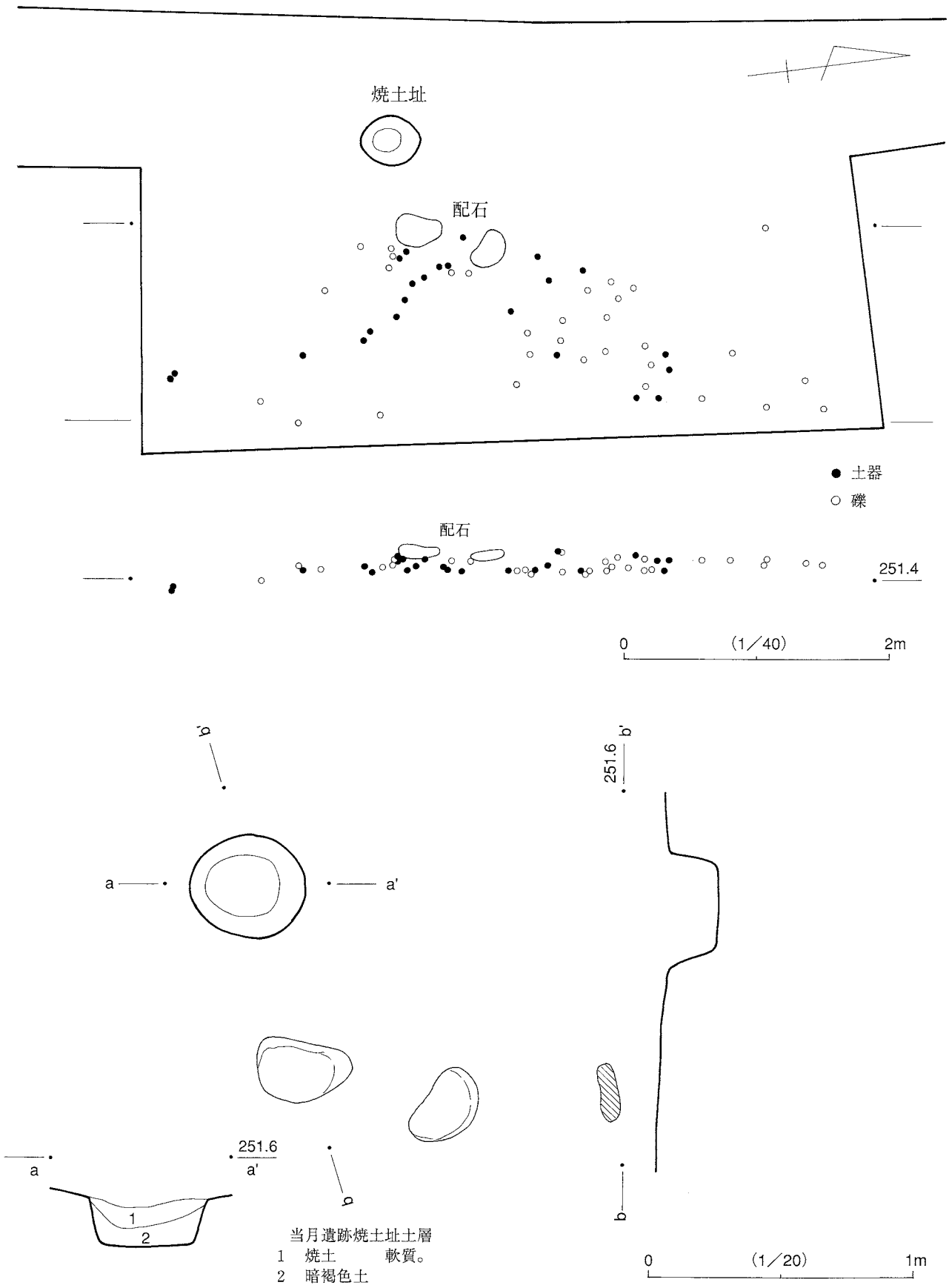
以上のうち、１～７は縄文早期前半、８～10は早期後半で、このうち４～６は撚糸文系、７は沈線文系、８～10は貝殻条痕文系土器に、それぞれ位置付けられる。また、11～14は中期後葉・曽利式期に比定される。

② 石器（第105図～107図・図版11）

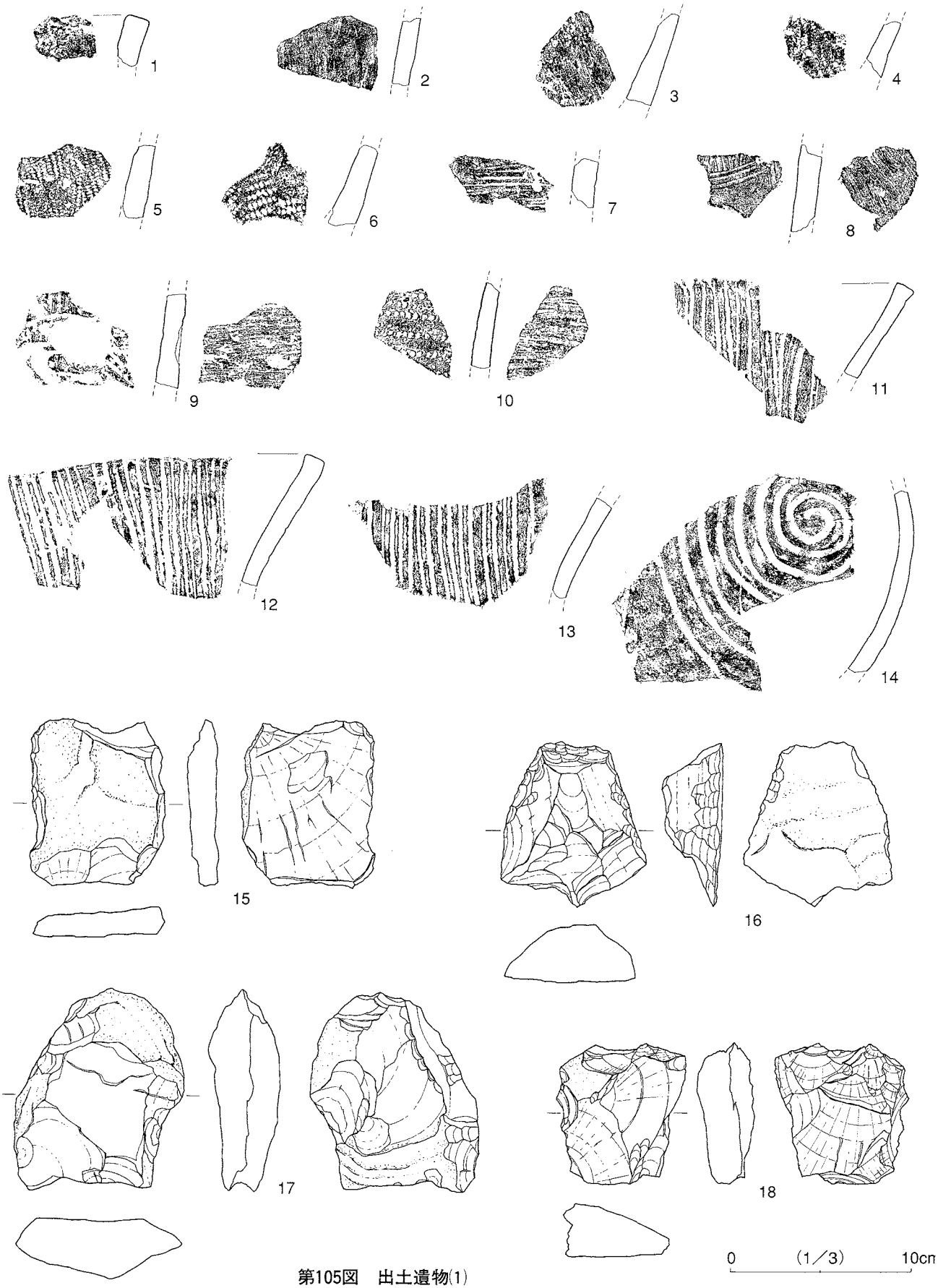
総数16点出土した。加工された不定形の礫が多く、他にスクレイパー・石匙・磨石類・台石・石棒がある。

番号	出土区・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材
15	Ｃトレンチ Ⅱ～Ⅲ層上部	礫　器	9.3	7.5	1.7	150	ホルンフェルス
16	Ｄトレンチ Ⅱ～Ⅲ層上部	〃	8.9	8.1	3.1	207	ホルンフェルス
17	Ａトレンチ	〃	11.1	9.4	3.3	358	ホルンフェルス
18	Ｃトレンチ Ⅲ層	〃	7.8	7.1	2.7	165	凝灰岩
19	Ｃトレンチ Ⅱ～Ⅲ層上部	〃	(8.0)	7.4	2.3	220	細礫岩
20	Ｂトレンチ Ⅱ～Ⅲ層上部	〃	(8.4)	9.3	3.2	300	凝灰岩
21	Ｃトレンチ	〃	(20.4)	18.1	5.6	2400	ホルンフェルス
22	Ｂトレンチ Ⅱ層・配石周辺	石　匙	7.1	6.7	2.0	98	凝灰岩
23	Ｅトレンチ・ローム層直上	スクレイパー	5.1	4.2	1.2	24	チャート
24	Ｃトレンチ Ⅱ～Ⅲ層上部	〃	6.7	4.3	1.1	35	凝灰岩
25	Ｃトレンチ Ⅱ～Ⅲ層上部	磨石類	7.4	4.9	2.2	115	玄武岩質溶岩
26	Ｂトレンチ Ⅱ層・配石周辺	〃	9.2	7.5	3.6	377	細粒砂岩
27	Ｂトレンチ配石	台　石	38.5	28.0	12.0	17200	玄武岩質溶岩
28	〃	〃	35.0	31.0	17.0	28000	細礫岩
29	Ｂトレンチ	石　棒	57.0	23.0	19.0	30500	花崗岩

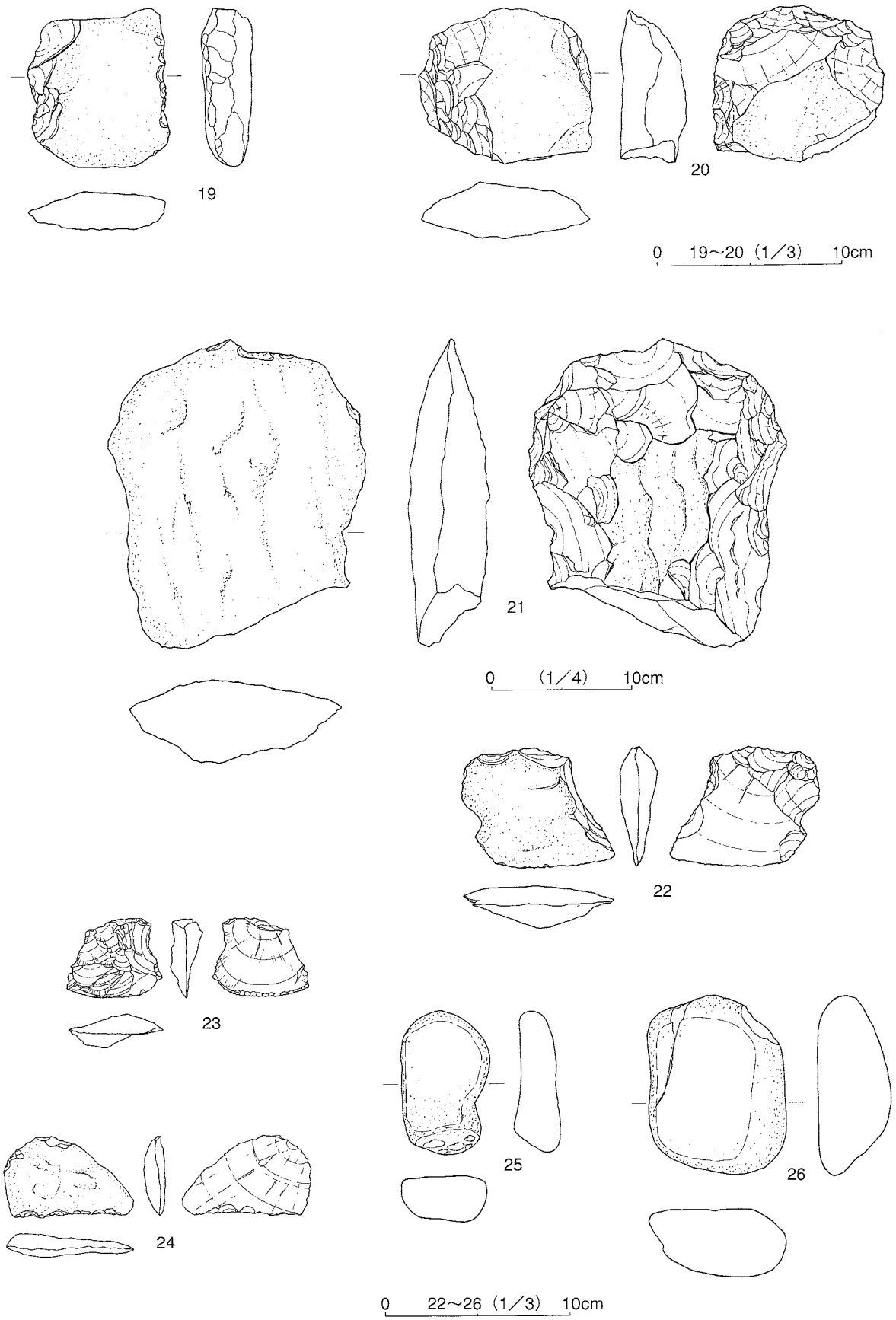
第12表　　当月遺跡出土石器一覧表



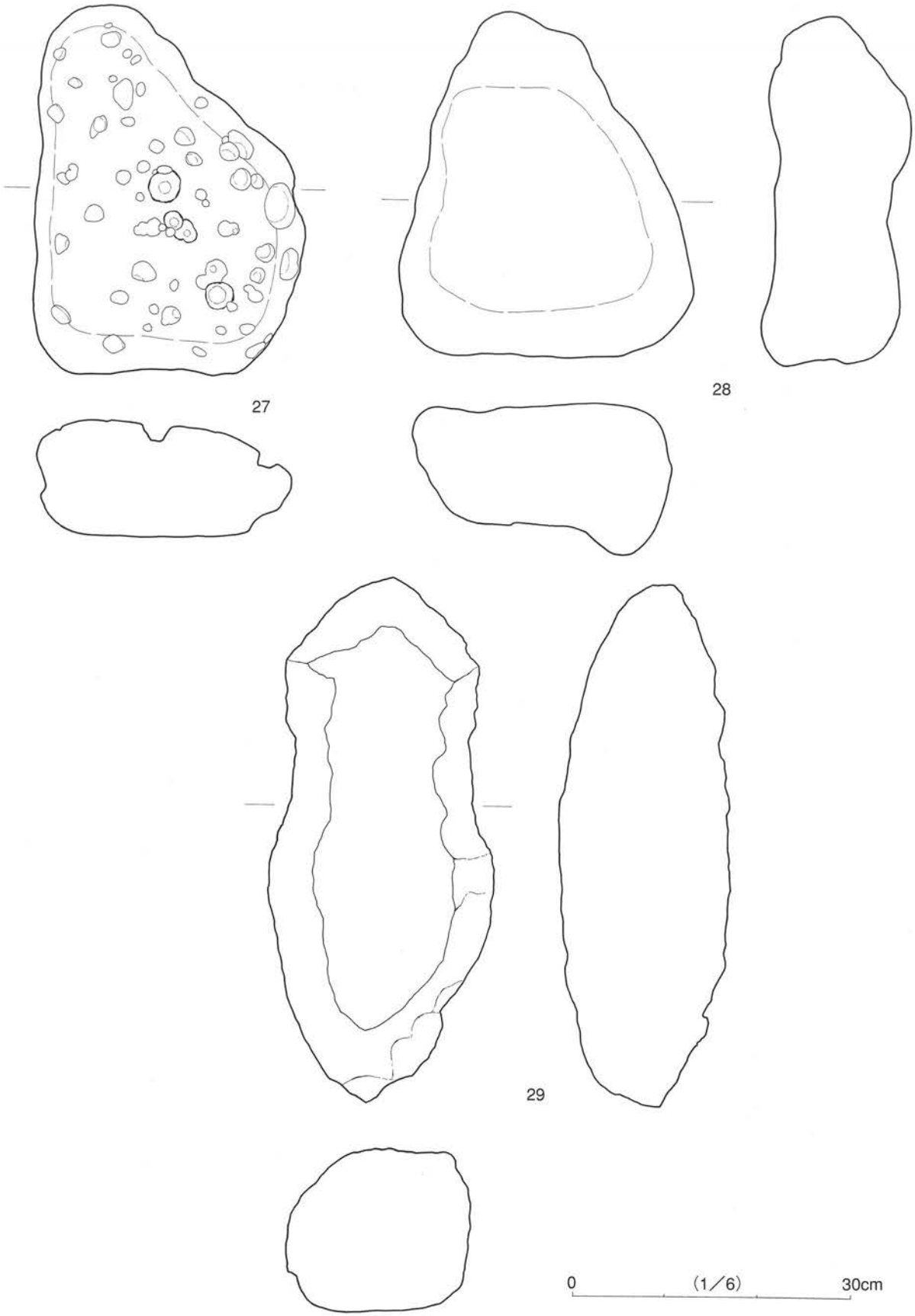
第104図　遺構平面・土層断面図



第105図　出土遺物(1)



第106図　出土遺物(2)



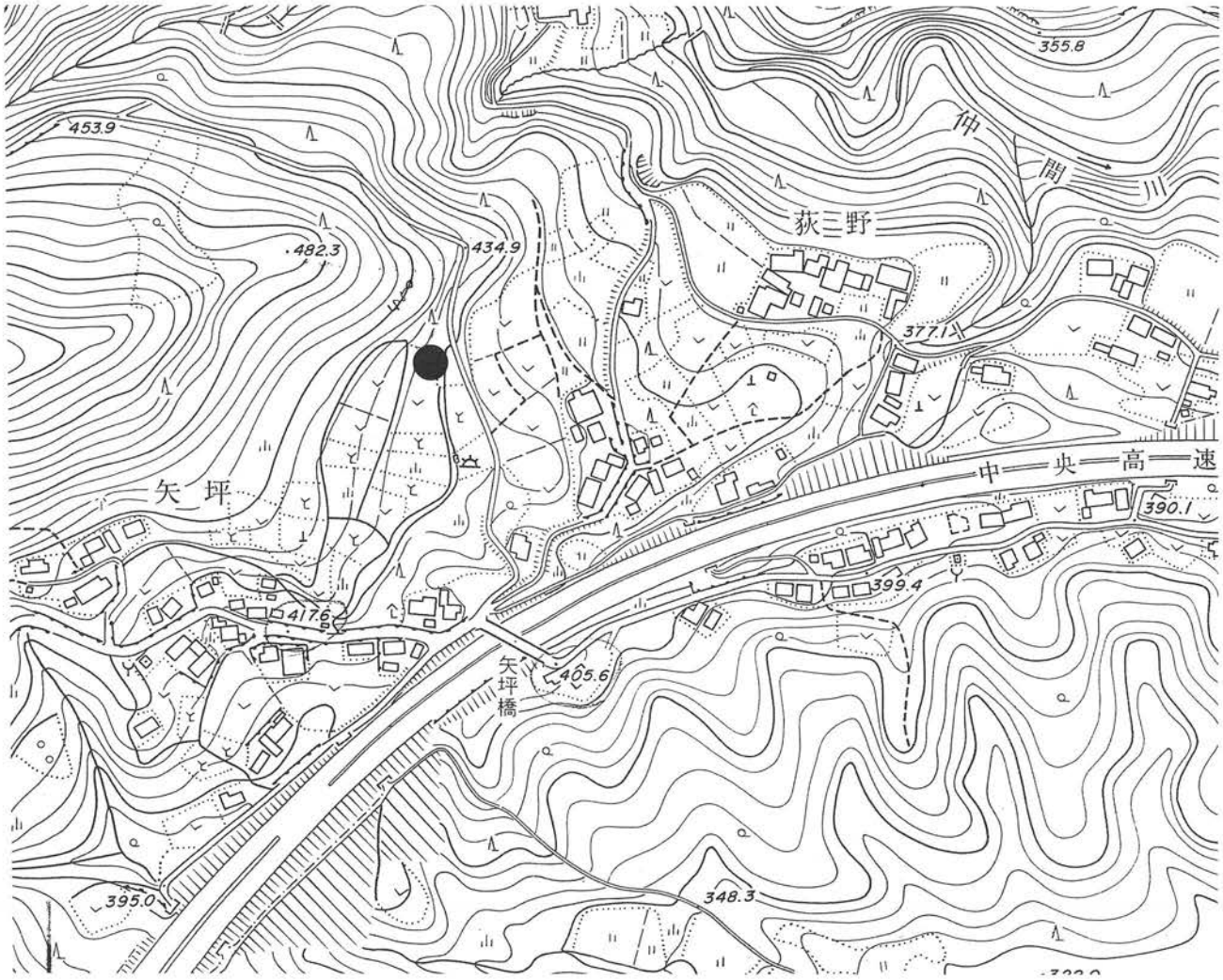
第107図　出土遺物(3)

25　荻野（おぎの）遺跡

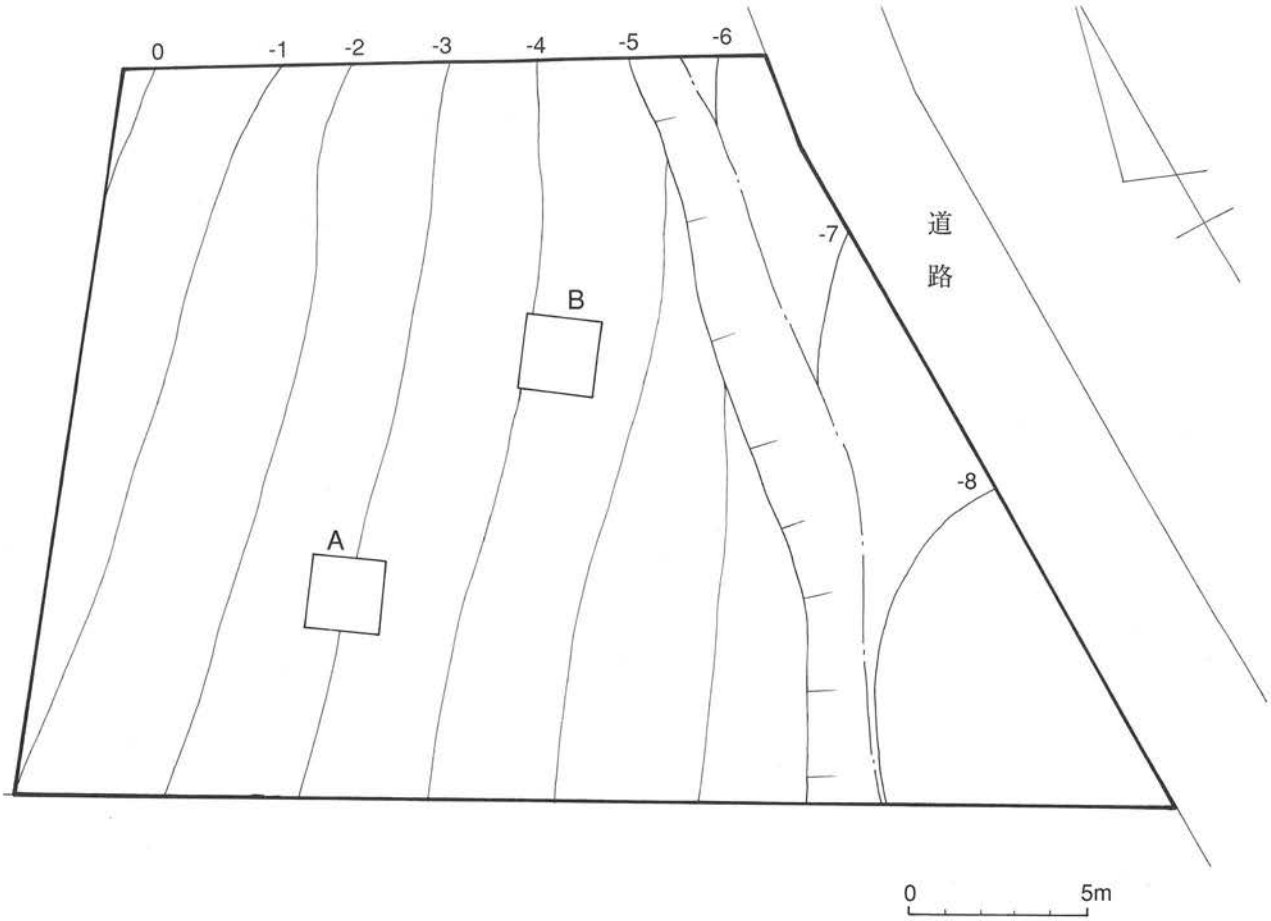
調査目的　給水用減圧槽建設に伴う試掘調査
調 査 地　上野原市大野字下ノ原5422他
調査期間　平成15年12月８日
調査面積　８m²（対象面積450m²）
概　　要

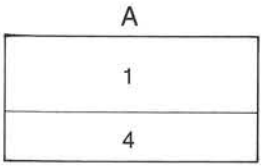
第108図　遺跡位置

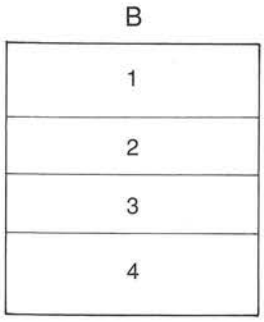
荻野遺跡は扇山（1,137.8m）東麓の斜面地に位置し、縄文・平安時代の遺物散布地である。調査地点は遺跡北端の山際に当たる。建設予定地の荒蕪地に２m四方の試掘坑を２ヵ所設定し、最深１mまで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土・暗褐色土・ローム層であるが、一部で土石流による再堆積と思われる小礫・ローム塊を多数含む土層が介在する。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第109図　調査地点







荻野遺跡土層

1　表土

2　にぶい褐色土　粘性・締まり弱い。黒色スコリア（5mm以下）・小礫を含む。

3　にぶい褐色土　第２層にローム塊（10cm以下）がやや多く混じる。

4　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。橙色スコリア（5mm以下）・小礫・ローム塊（2cm以下）をやや多く含む。

0　1m

第110図　調査区平面・土層図

26　上野原字大道地点

調査目的　分譲宅地工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字大道2391－1

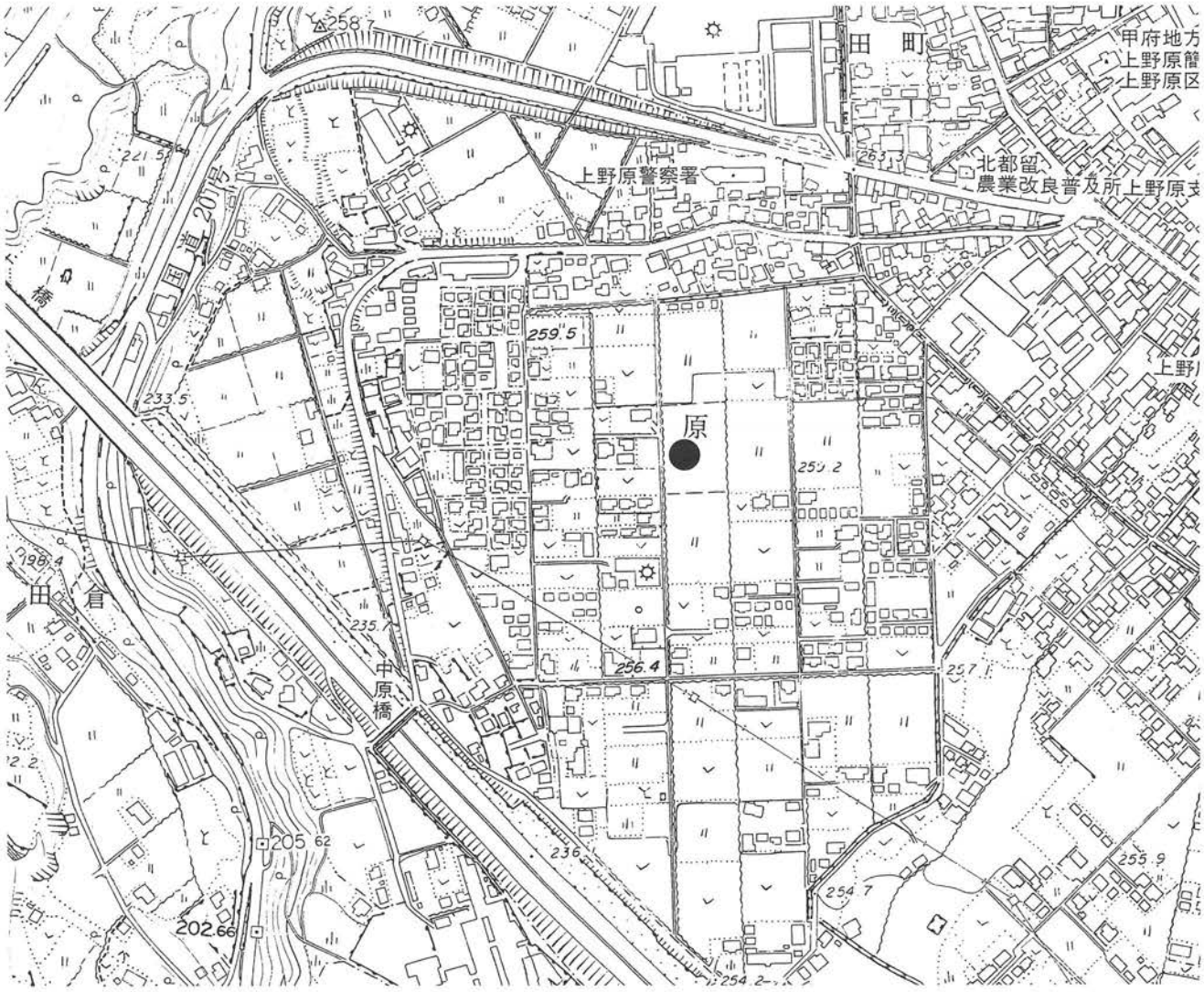
調査期間　平成15年12月15日

調査面積　37m²（対象面積885m²）

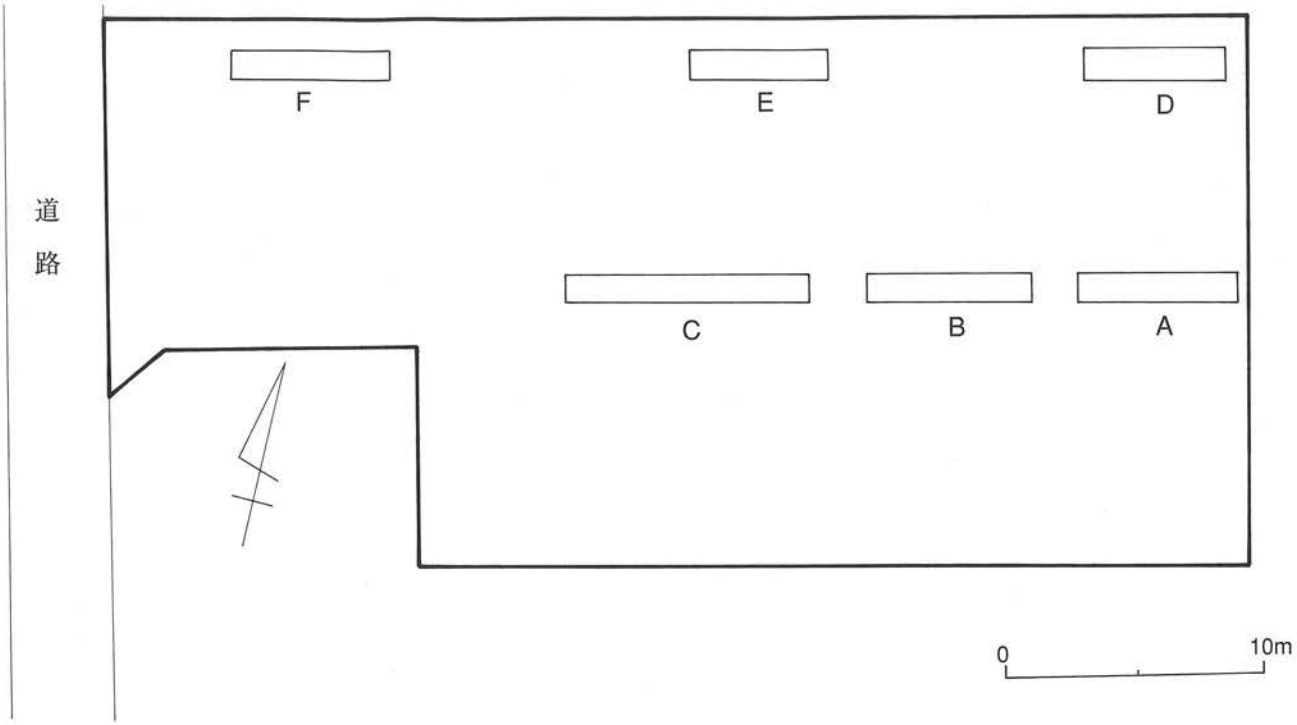
概　　要

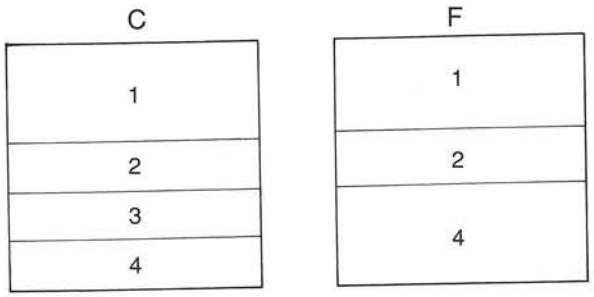
第111図　調 査 地

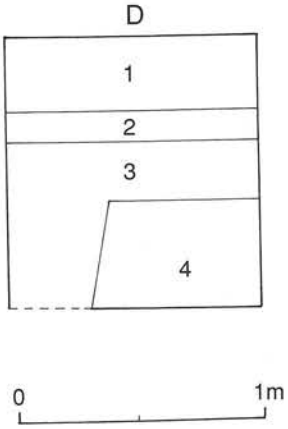
調査地点は桂川北岸の河岸段丘面に位置する。工事予定地の荒蕪地に巾１m・長さ６～10m の試掘溝を６ヶ所設定し、最深1.0m まで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、表土（整地層）下の客土がローム層まで達しており、土木工事による撹乱を受けていることが確認された。遺構はなく、遺物は客土中で土師器の細片１点が出土したのみであった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第112図　調査地点







上野原字大道地点土層

1　表土　　整地層。砂礫・コンクリート塊を含む。
2　灰褐色土　客土。小礫を多く含む。
3　黒褐色土　客土。
4　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。橙色スコリア（3mm以下）やや多く含む。下層ロームとの境は漸移的である。

第113図　調査区平面・土層図

27　桐原字井太家地点

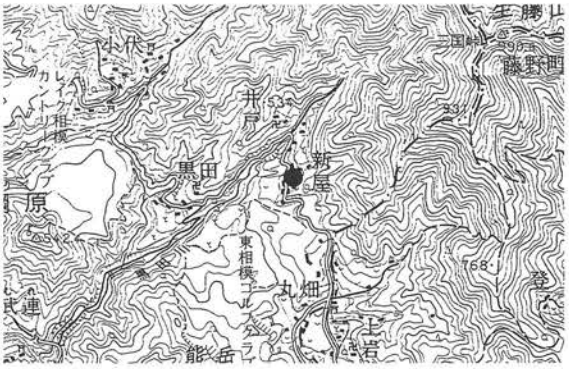
調査目的　県道桐原・藤野線道路改良工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市桐原字井太家3966他

調査期間　平成16年６月16日

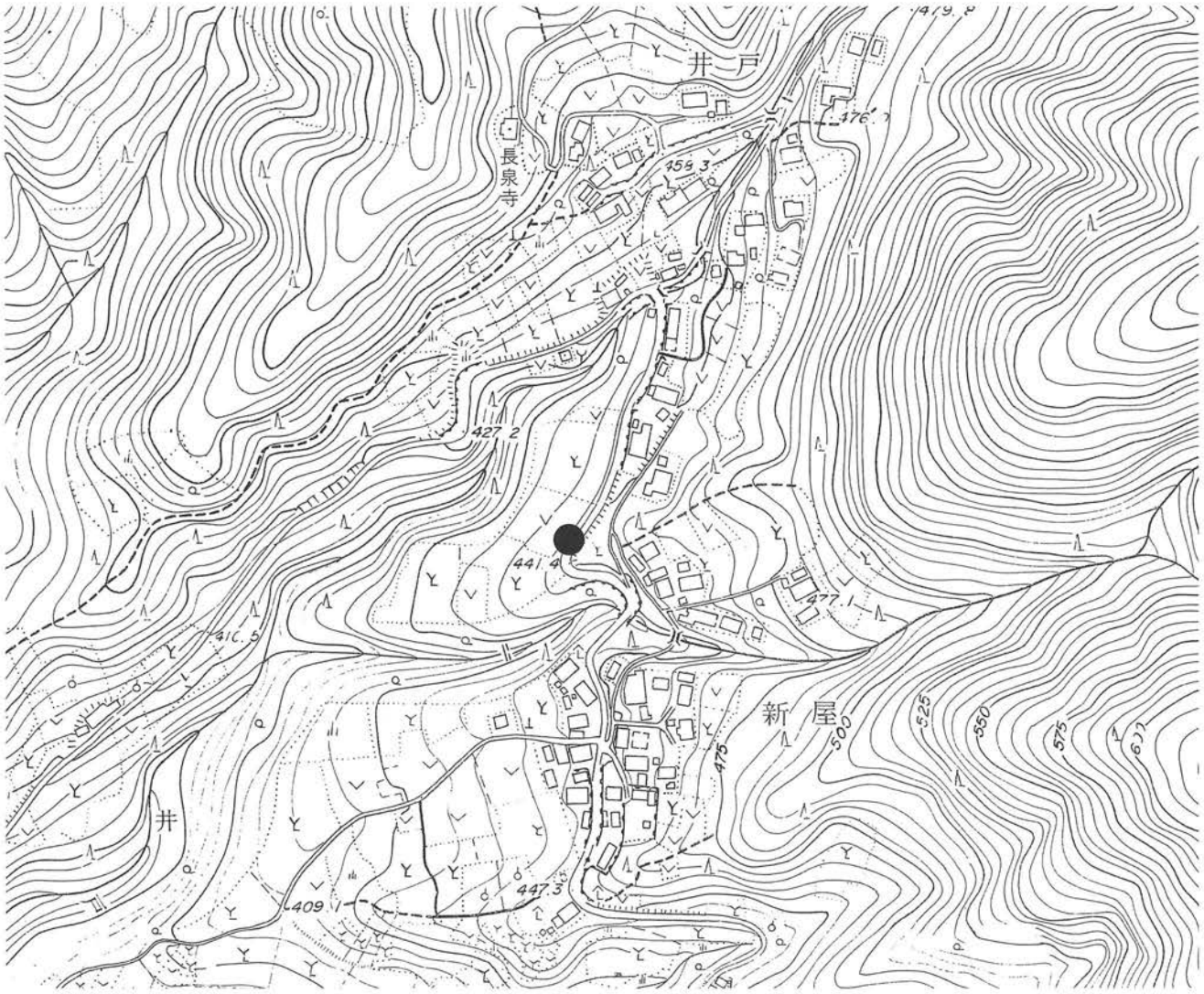
調査面積　20m²（対象面積760m²）

概　　要

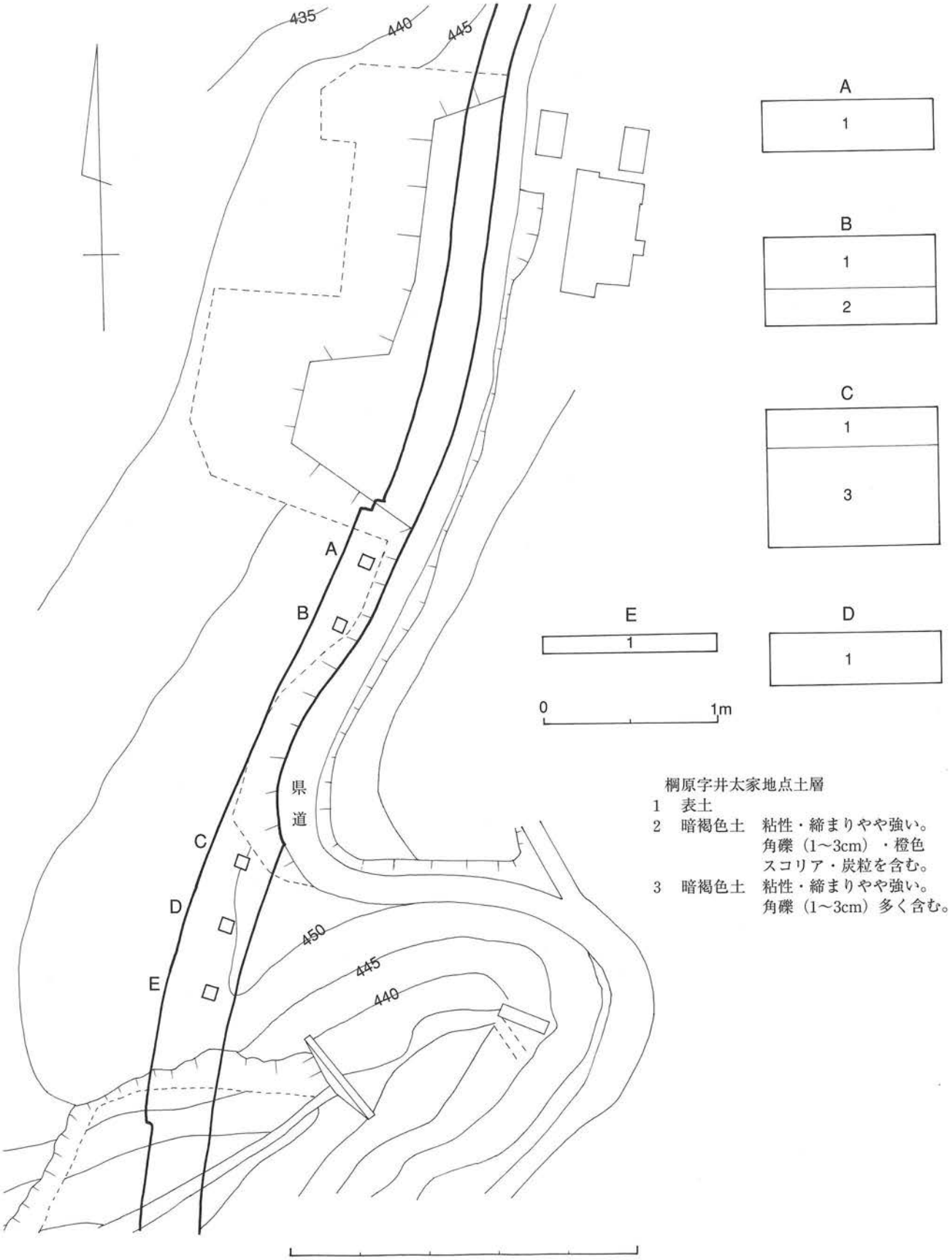


第114図　調 査 地

調査地点は生藤山（990.3m）南西麓の緩斜地で、県道桐原・藤野線西側の畑地に位置する。工事予定地のうち北側の盛土範囲を除いた南側斜面地に２ｍ四方の試掘坑を５ヶ所設定し、最深0.8mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、概ね表土直下がハードローム層で、一部に暗褐色土が介在していた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第115図　調査地点



第116図　調査区平面・土層図

28　上野原字エビ沢地点

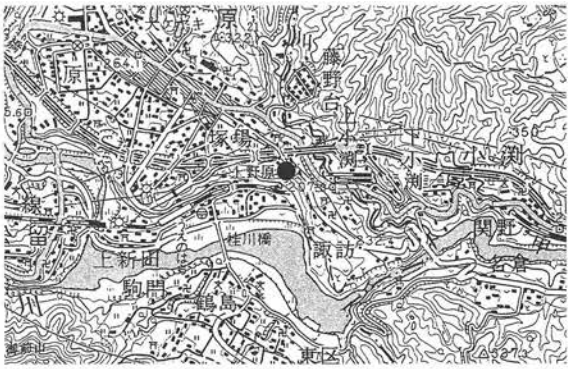
調査目的　分譲宅地工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字エビ沢360他

調査期間　平成16年９月22日

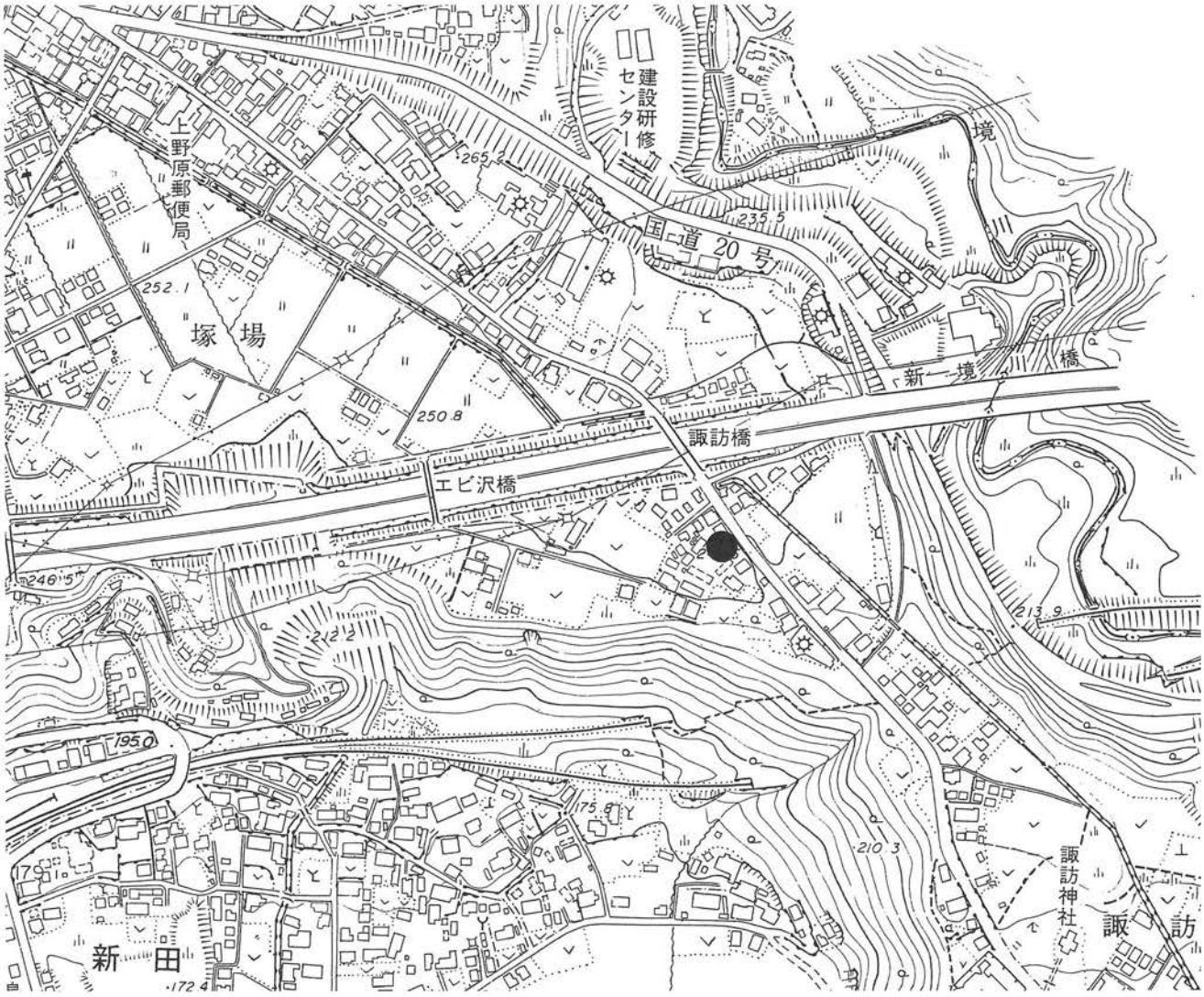
調査面積　16m²（対象面積1,240m²）

概　　要

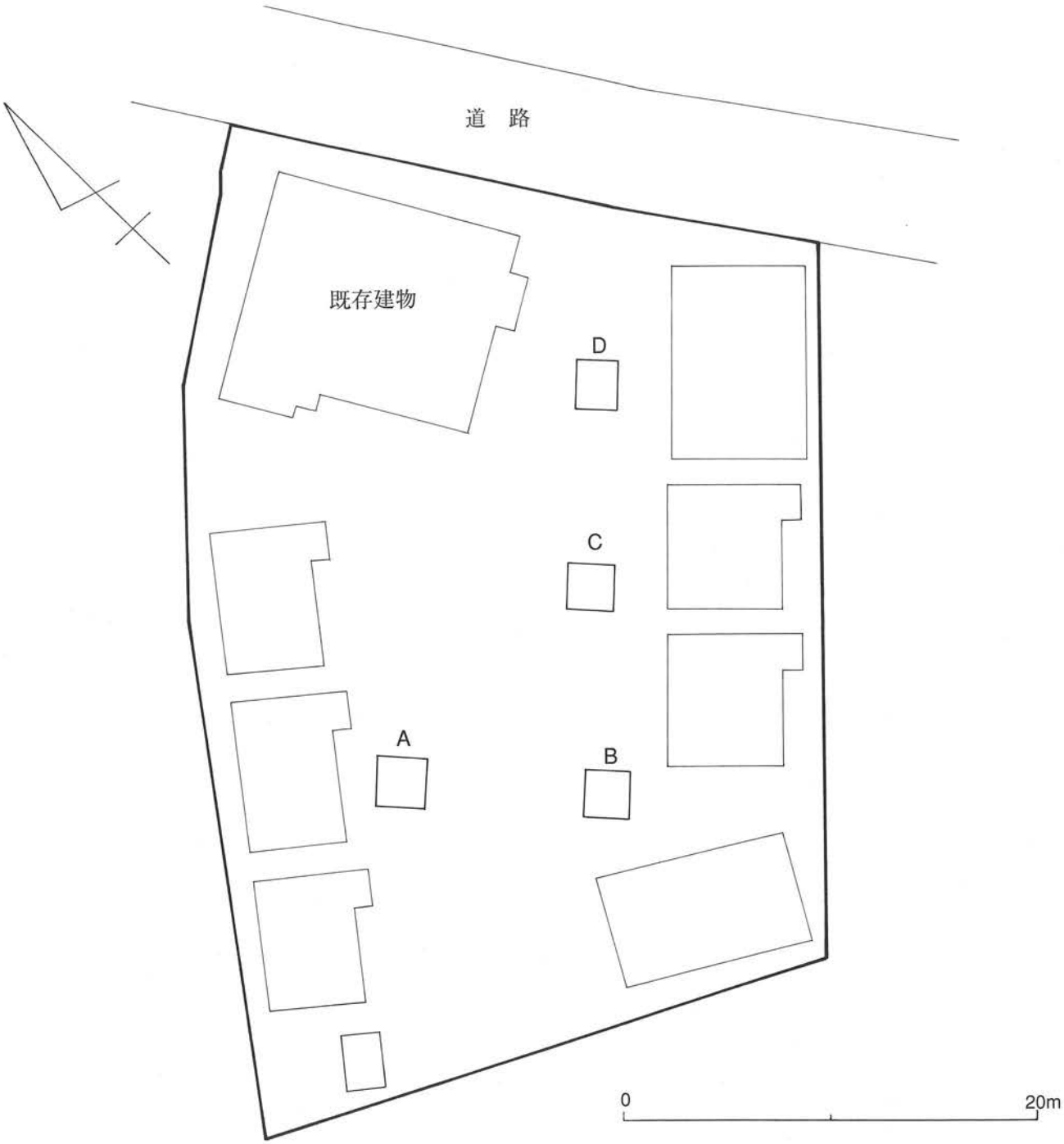


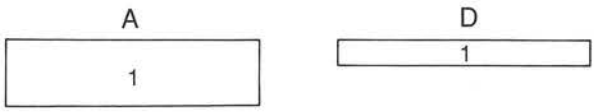
第117図　調 査 地

調査地点は桂川北岸の河岸段丘面で、県道吉野・上野原停車場線の諏訪橋南側の宅地に位置する。工事予定地のうち既存の建物を除く範囲に２ｍ四方の試掘坑を４ヶ所設定し、最深0.4ｍまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、表土（整地層）直下がハードローム層で、土木工事による撹乱を受けていることが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第118図　調査地点





上野原字エビ沢地点土層
1　表土　整地層。砂礫・コンクリート塊を含む。

0　1m

第119図　調査区平面・土層図

29　上野原字下新町地点

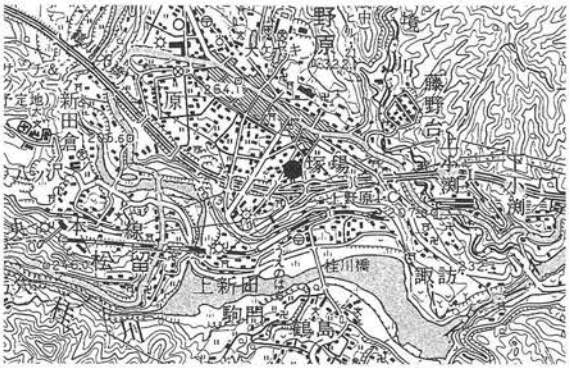
調査目的　分譲宅地工事に伴う試掘調査

調 査 地　上野原市上野原字下新町654他

調査期間　平成17年８月18日

調査面積　44m²（対象面積1,433m²）

概　　要

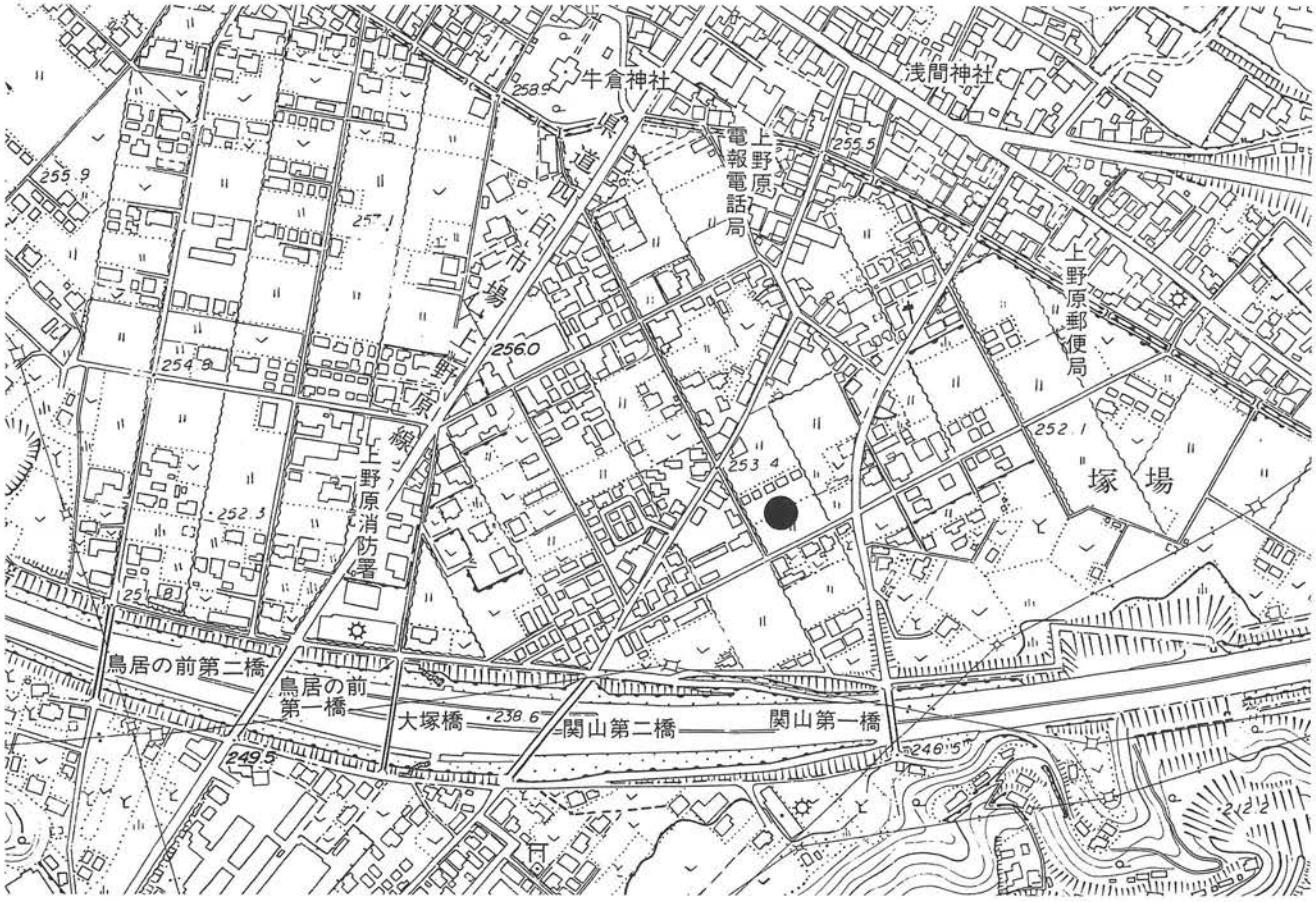


第120図　調 査 地

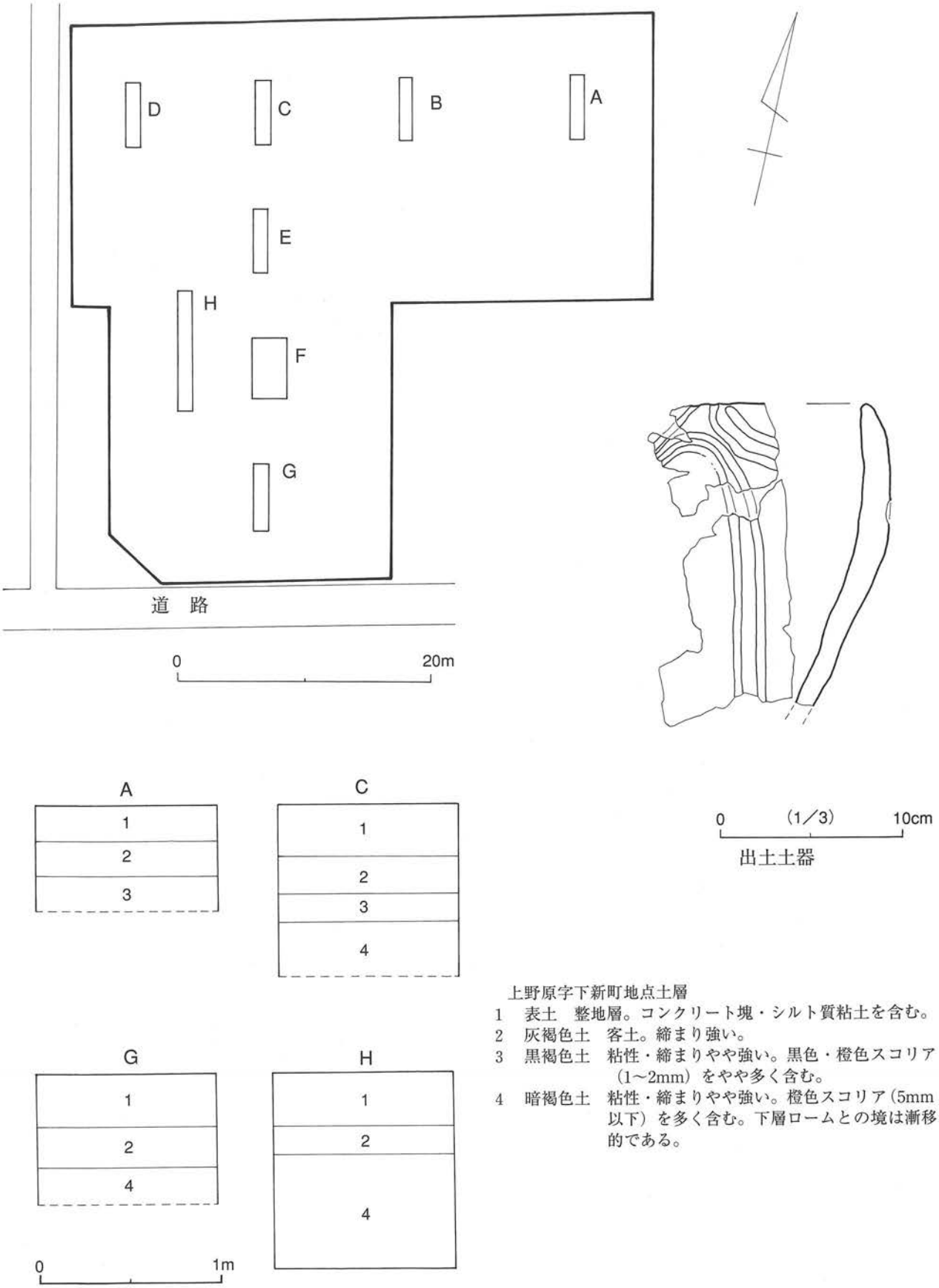
調査地点は上野原市街地にあり、中央自動車道上野原I.Cの北約70mに位置する。地形はほぼ平坦である。近年まで木造平屋造アパートが立ち並ぶ住宅地であったが、調査時は雑草が茂る空き地となっていた。工事予定地に巾１m・長さ４～10mの試掘溝を８ヶ所設定し、最深１mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。

調査の結果、表土（整地層）下に客土があり、土木工事による撹乱を受けていることが確認された。遺構は確認されず、遺物はローム層上の暗褐色土中で縄文時代中期後半～後期前半の土器片が数点出土した。遺構・遺物の分布が希薄であることなどから、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

土器（第122図）は深鉢で幅広の沈線文が施される。胎土に黒雲母や赤色・白色の砂粒を含む。色調は暗褐色で、器厚は最厚1.4cm。後期前半・堀之内式期に比定される。Ｆトレンチ第４層出土。



第121図　調査地点



上野原字下新町地点土層

1　表土　整地層。コンクリート塊・シルト質粘土を含む。
2　灰褐色土　客土。締まり強い。
3　黒褐色土　粘性・締まりやや強い。黒色・橙色スコリア（1～2mm）をやや多く含む。
4　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。橙色スコリア（5mm以下）を多く含む。下層ロームとの境は漸移的である。

第122図　調査区平面・土層図、出土遺物

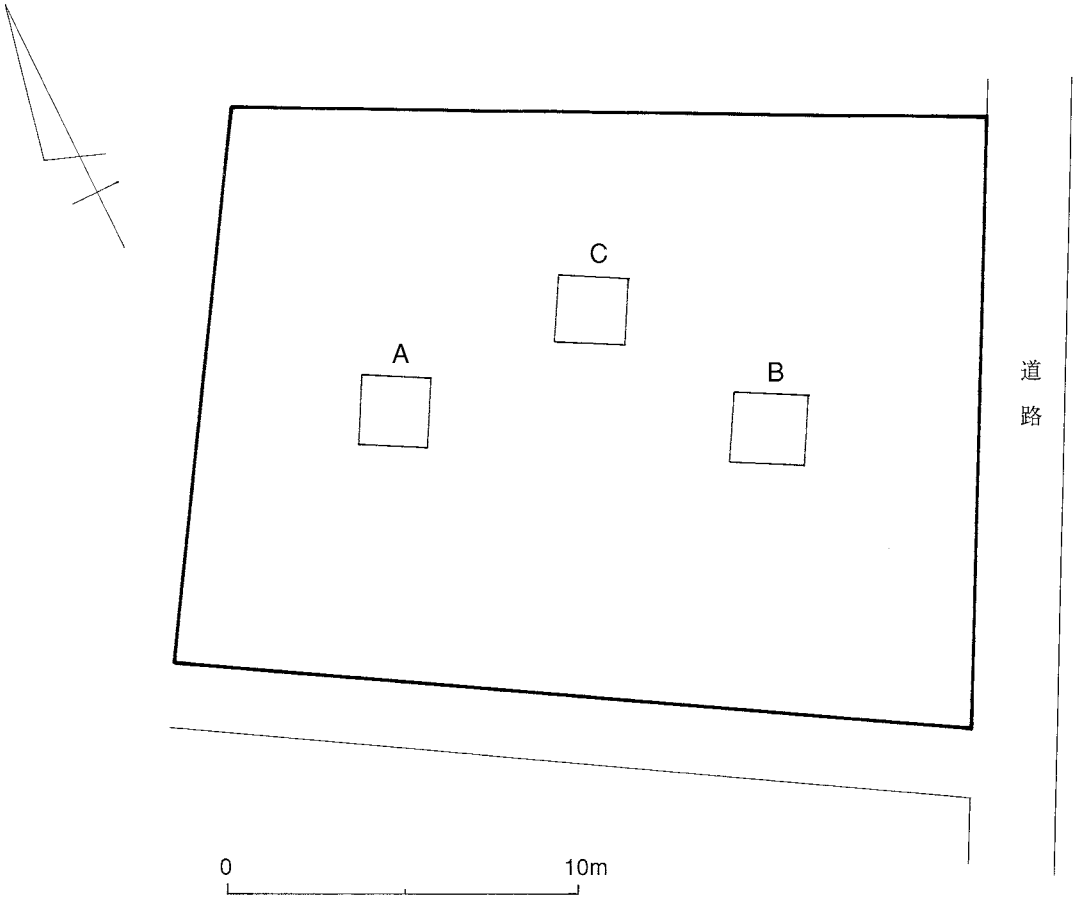
30　東区遺跡

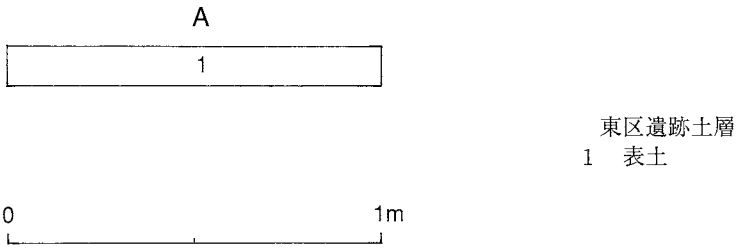
調査目的　個人住宅建設に伴う試掘調査
調 査 地　上野原市鶴島字反保1855－3
調査期間　平成17年９月２日
調査面積　12m²（対象面積315m²）
概　　要

第123図　遺跡位置

東区遺跡は桂川南岸の河岸段丘面に位置する。縄文時代中期の遺物散布地で、これまでに敷石遺構や土器片・石棒・石皿・打製石斧などの遺物が出土しているが、発掘調査の事例がないため詳細は不明である。今回の調査地点は遺跡の西縁に位置する。工事予定地に２ｍ四方の試掘坑を３ヶ所設定し、重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、薄い表土の直下がハードローム層で、遺構・遺物は検出されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

第124図　調査地点

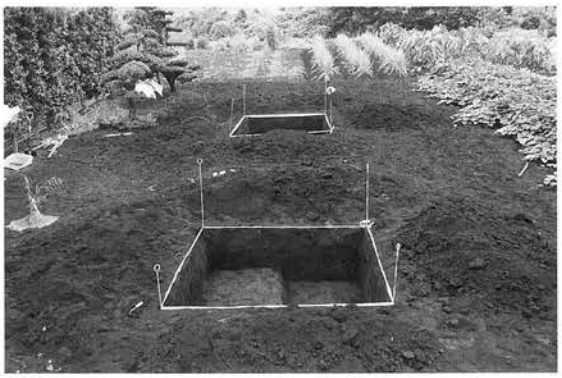




第125図　調査区平面・土層図

図　　版

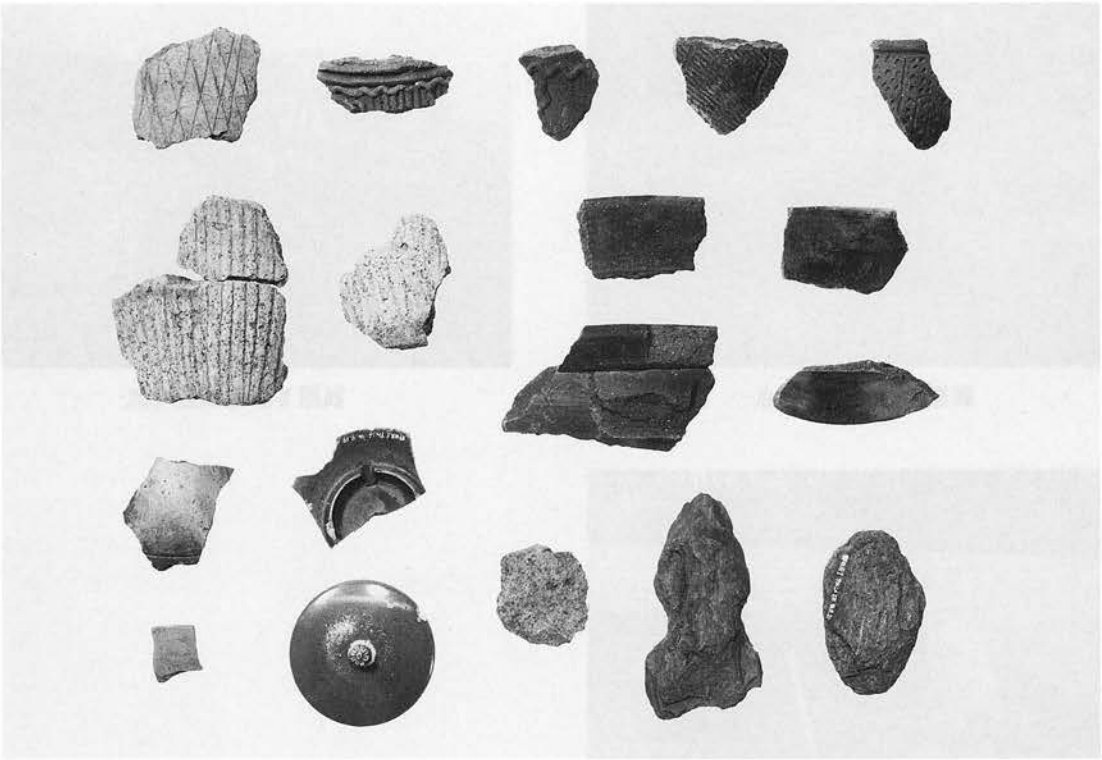
関山遺跡第 1 地点



関山遺跡第 2 地点

野田尻 I 遺跡調査地点

野田尻 I 遺跡調査状況



野田尻 I 遺跡出土遺物

図版 2

大野字上ノ久保地点

椛原字向山地点 B トレンチ

田代遺跡第 1 地点

田代遺跡第 2 地点

狐原 I 遺跡調査地点

狐原 II 遺跡調査地点

塚場古墳群調査地点

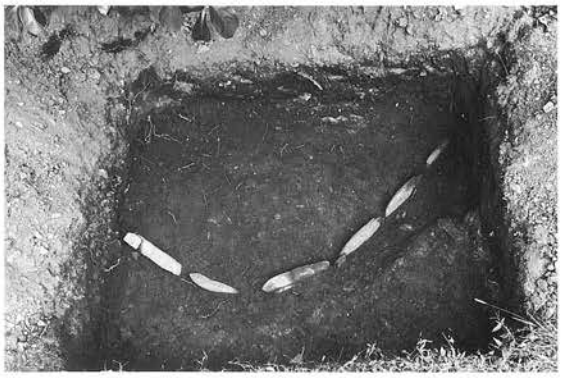
沢渡Ⅱ遺跡調査地点

桐坪遺跡調査区南端

新井遺跡調査地点

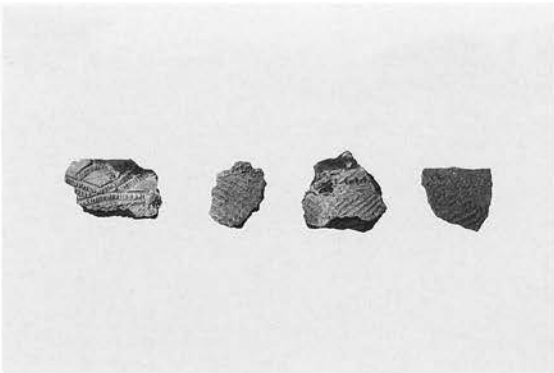
Aトレンチ遺構確認状況

原・郷原遺跡全景



原・郷原遺跡Ⅰトレンチ遺構確認状況

原・郷原遺跡第2地点



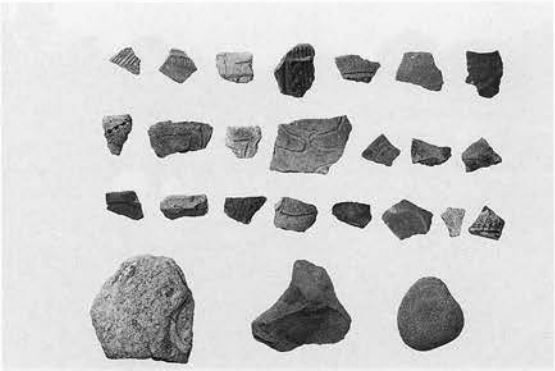
原・郷原遺跡第2地点出土土器

図版 4

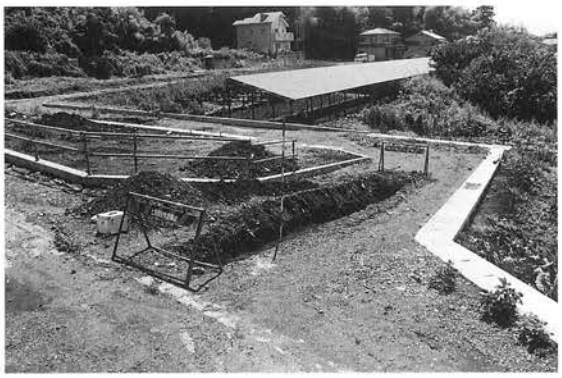
根本山遺跡第 1 地点

Ⅰトレンチ遺構確認状況

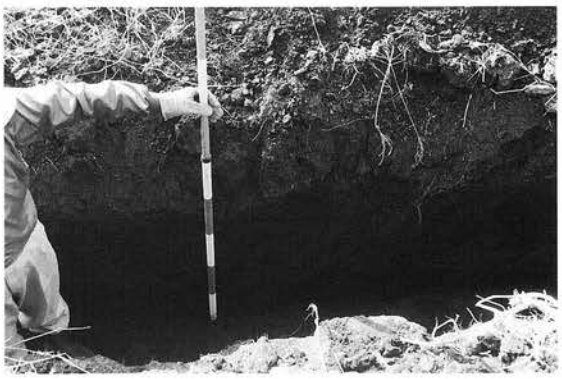
1 号土坑



出土遺物



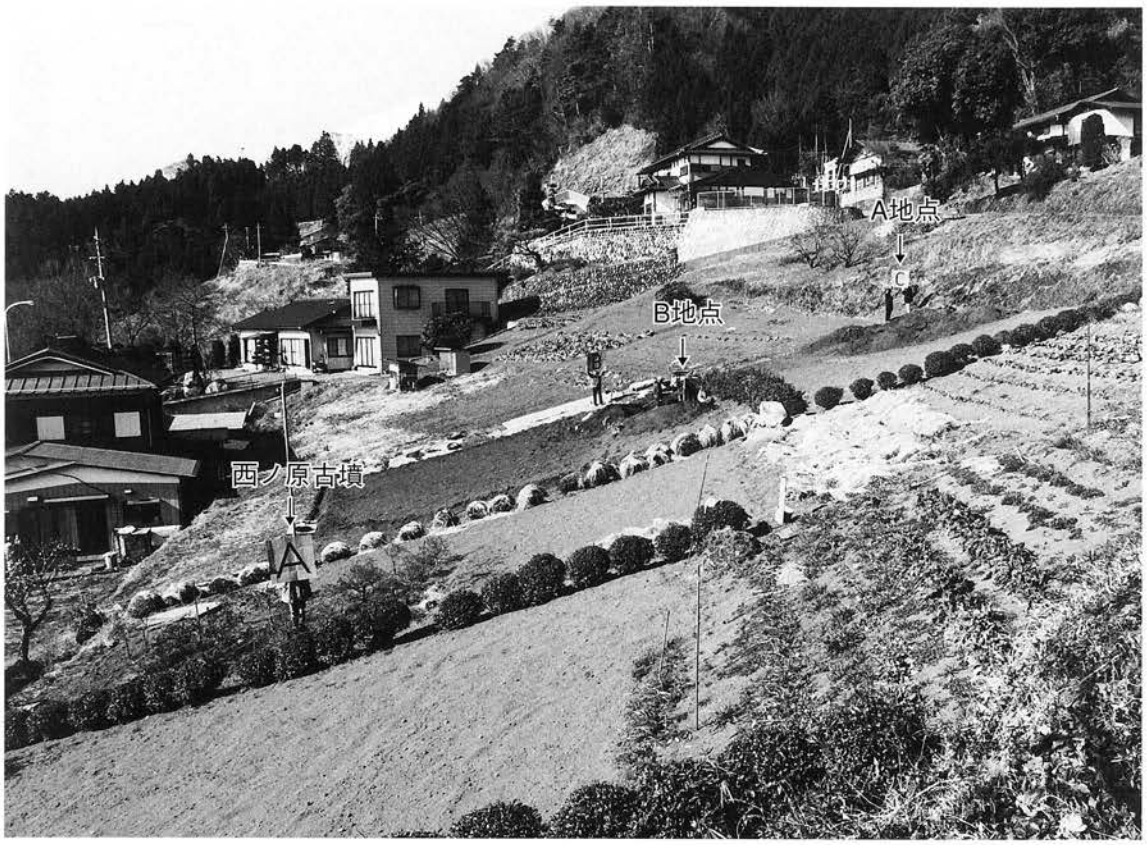
根本山遺跡第 2 地点



根本山遺跡第 3 地点土層断面

根本山遺跡第 4 地点

黒ノ木遺跡調査地点



西ノ原古墳調査地全景

西ノ原古墳石室全景

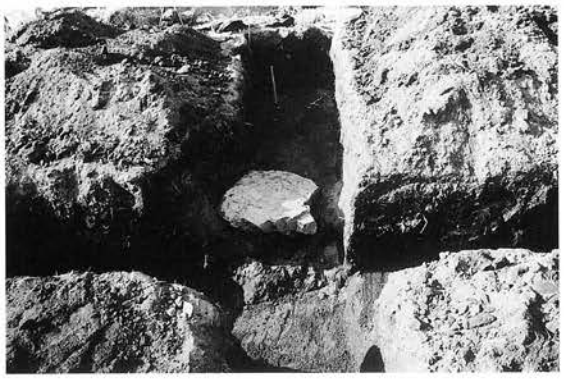
図版 6

奥　壁

石室全景

石室床面

閉塞部付近



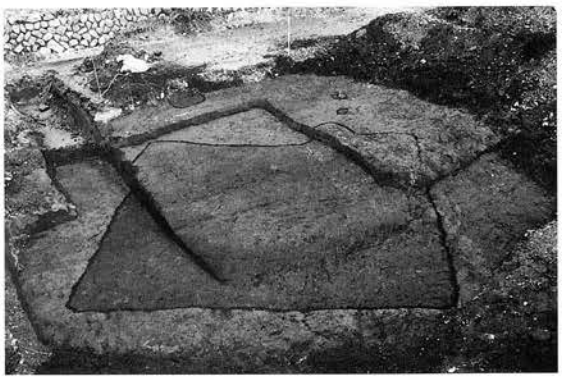
西ノ原古墳第Ⅱ次Ａ地点

西ノ原古墳第Ⅱ次Ｂ地点

山風呂遺跡Ｂトレンチ土坑確認状況

用竹神戸遺跡調査地点

大間々遺跡調査地点



大間々遺跡竪穴住居確認状況

中群遺跡調査地点

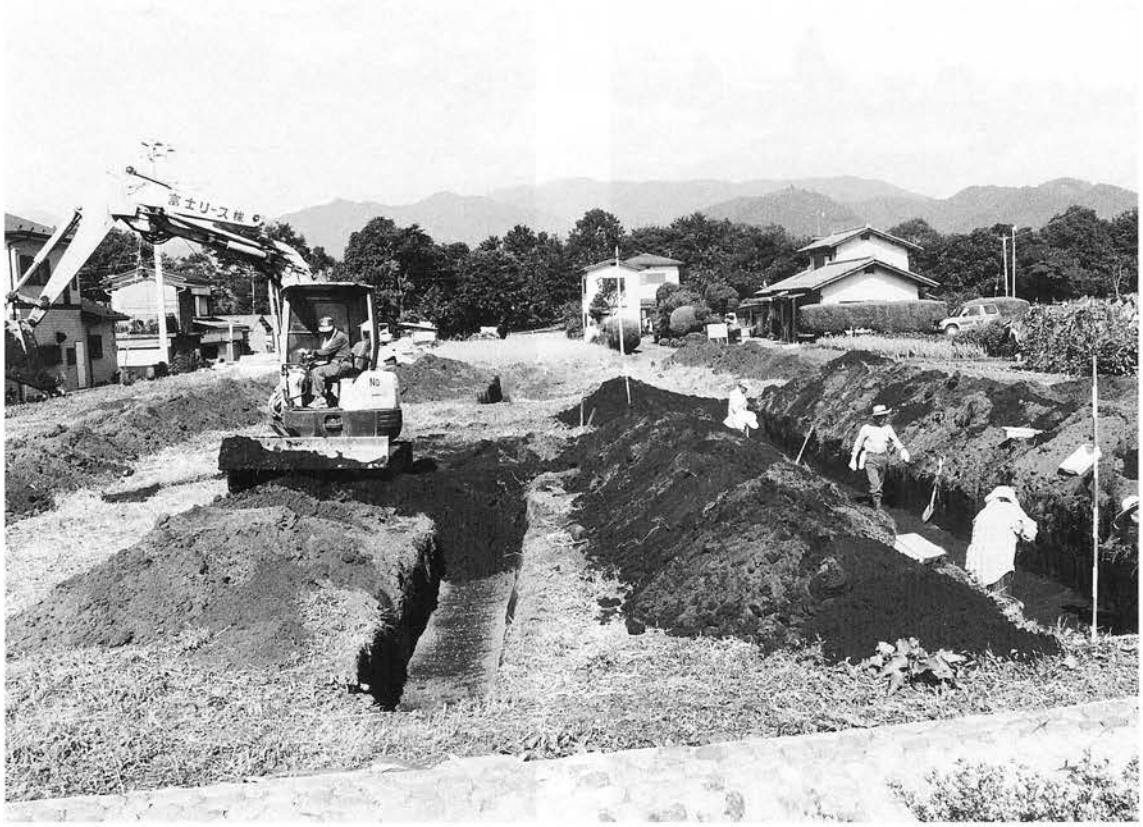
東大野遺跡調査地点

図版 8

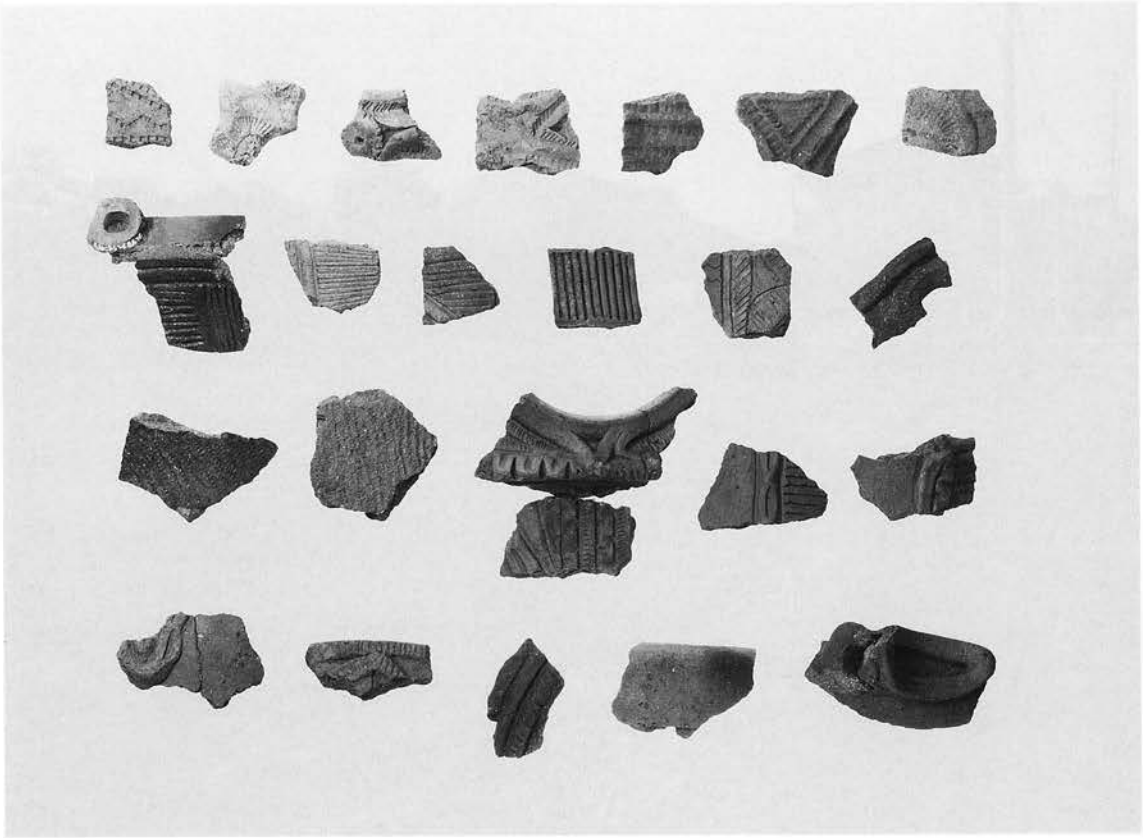
裏大越路遺跡調査地点

同　調査状況

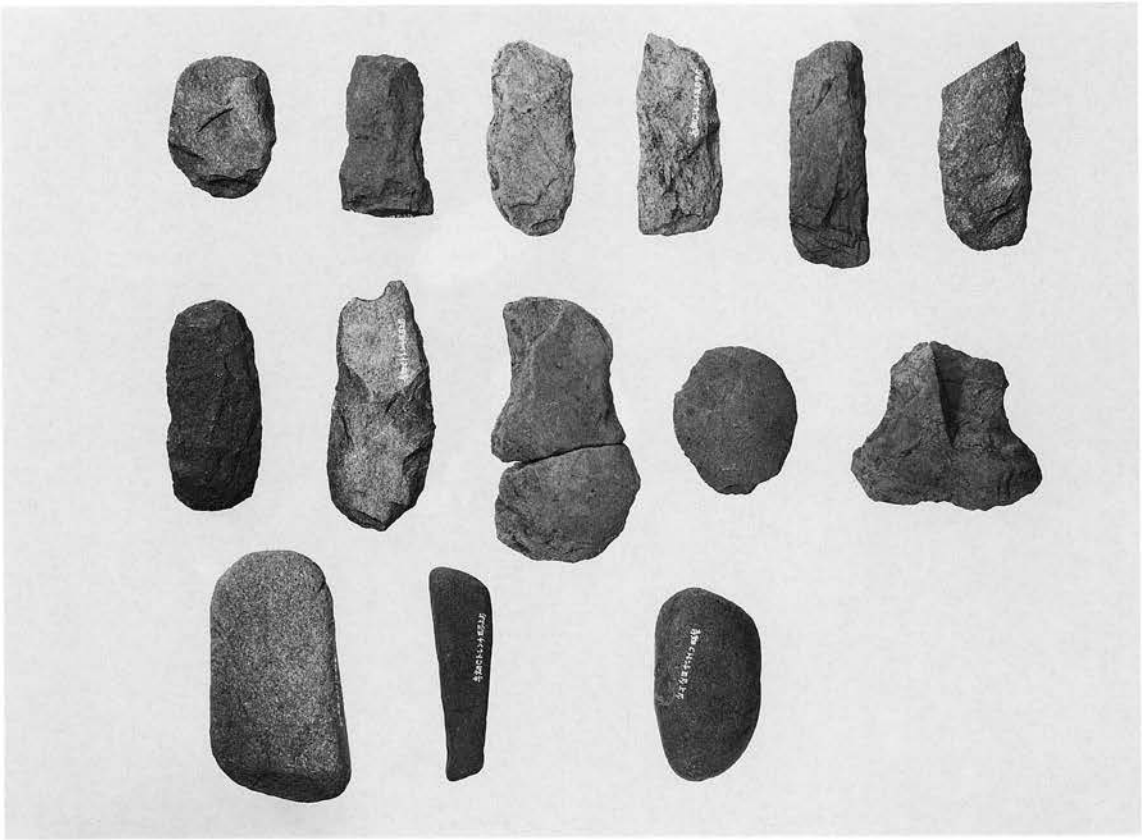
陥し穴状土坑全景



寺畑遺跡調査地点



寺畑遺跡出土土器

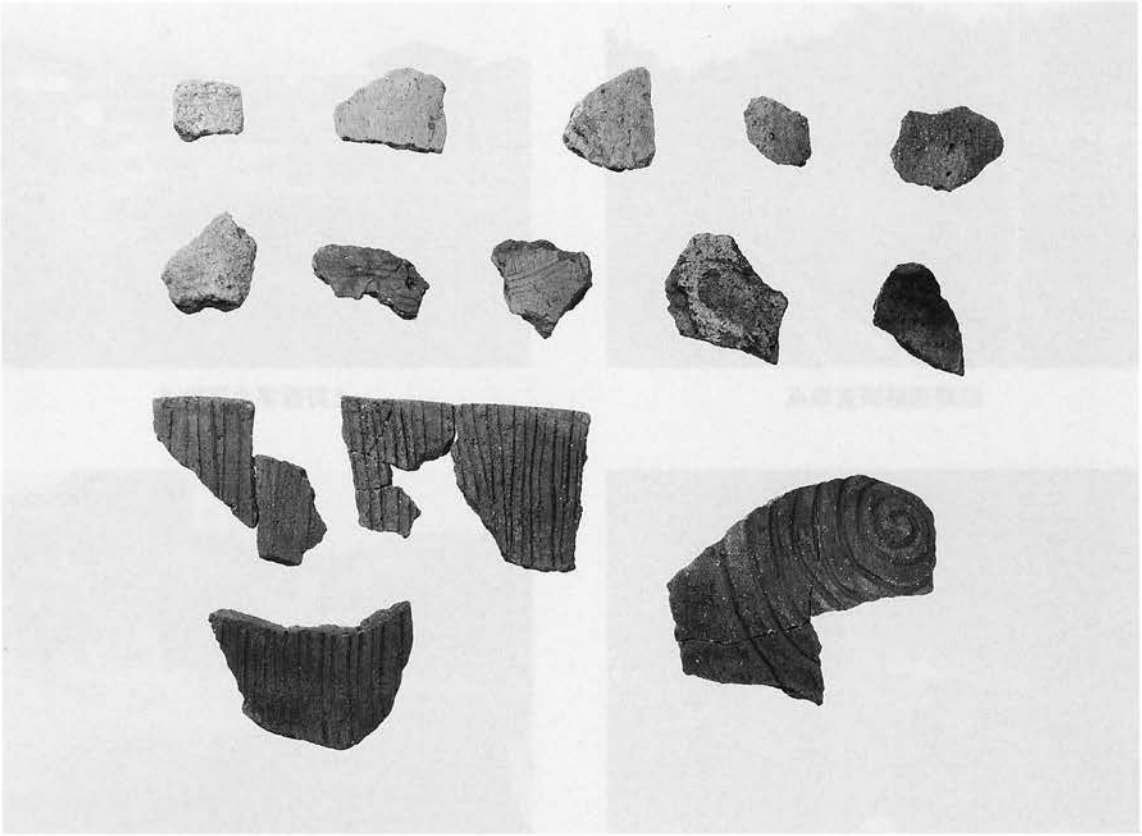


寺畑遺跡出土石器

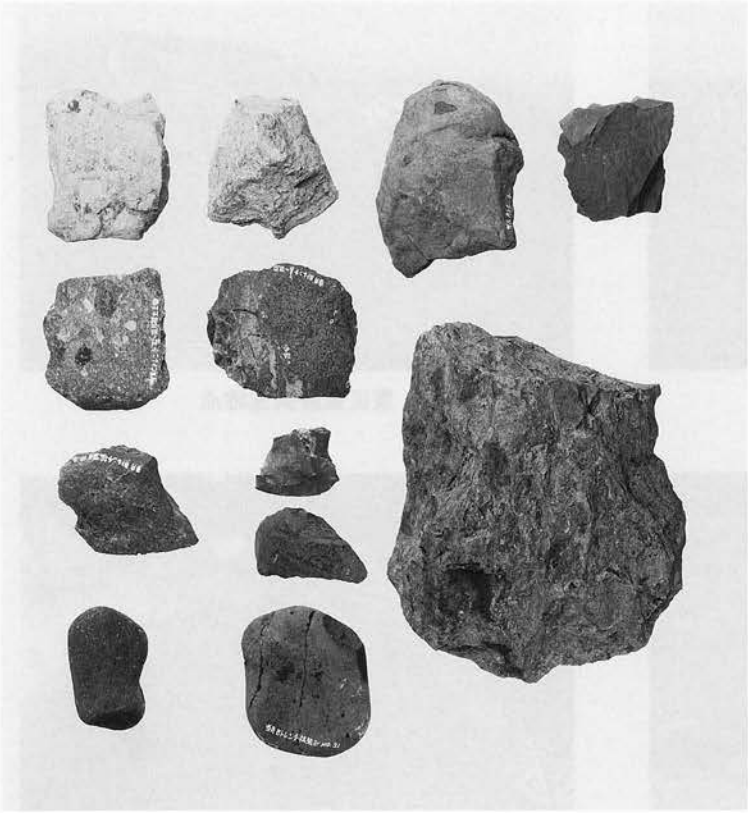
図版10

当月遺跡調査地点

当月遺跡配石・焼土址検出状況



当月遺跡出土土器



当月遺跡出土石器

図版12

荻野遺跡調査地点

上野原字大道地点

桐原字井太家地点

上野原字エビ沢地点

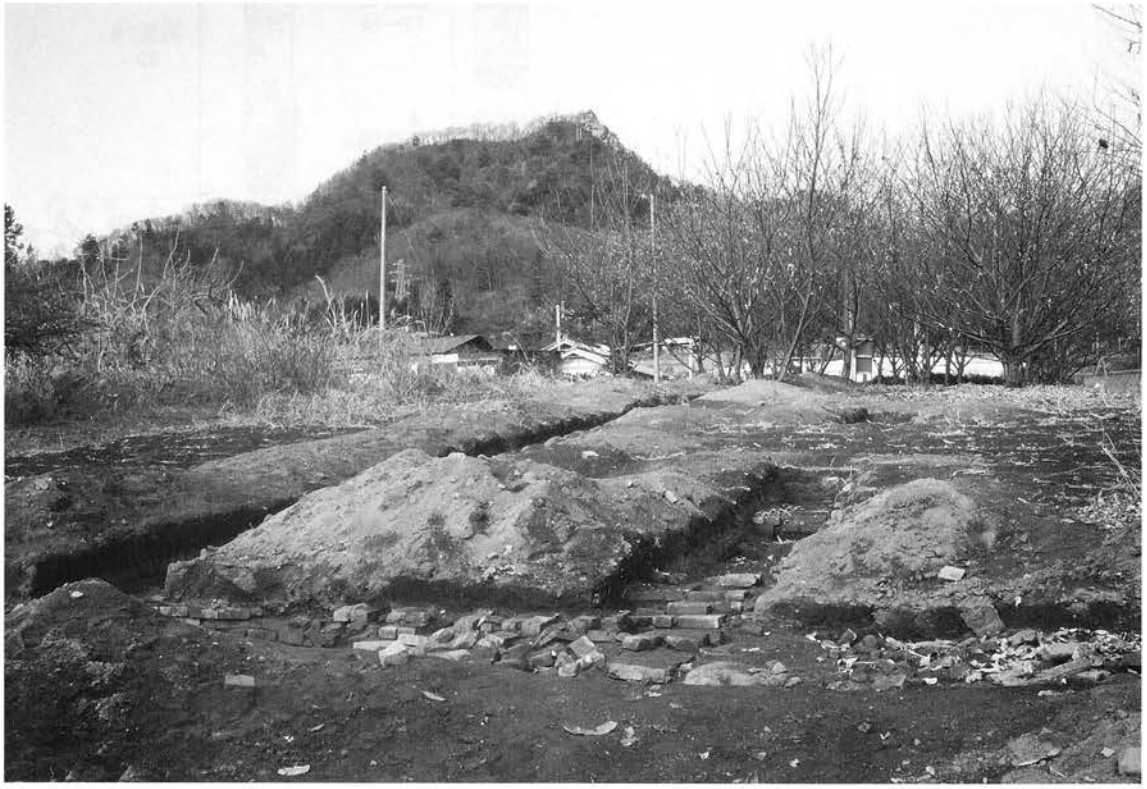
上野原字下新町地点

東区遺跡調査地点

牧野遺跡第１地点

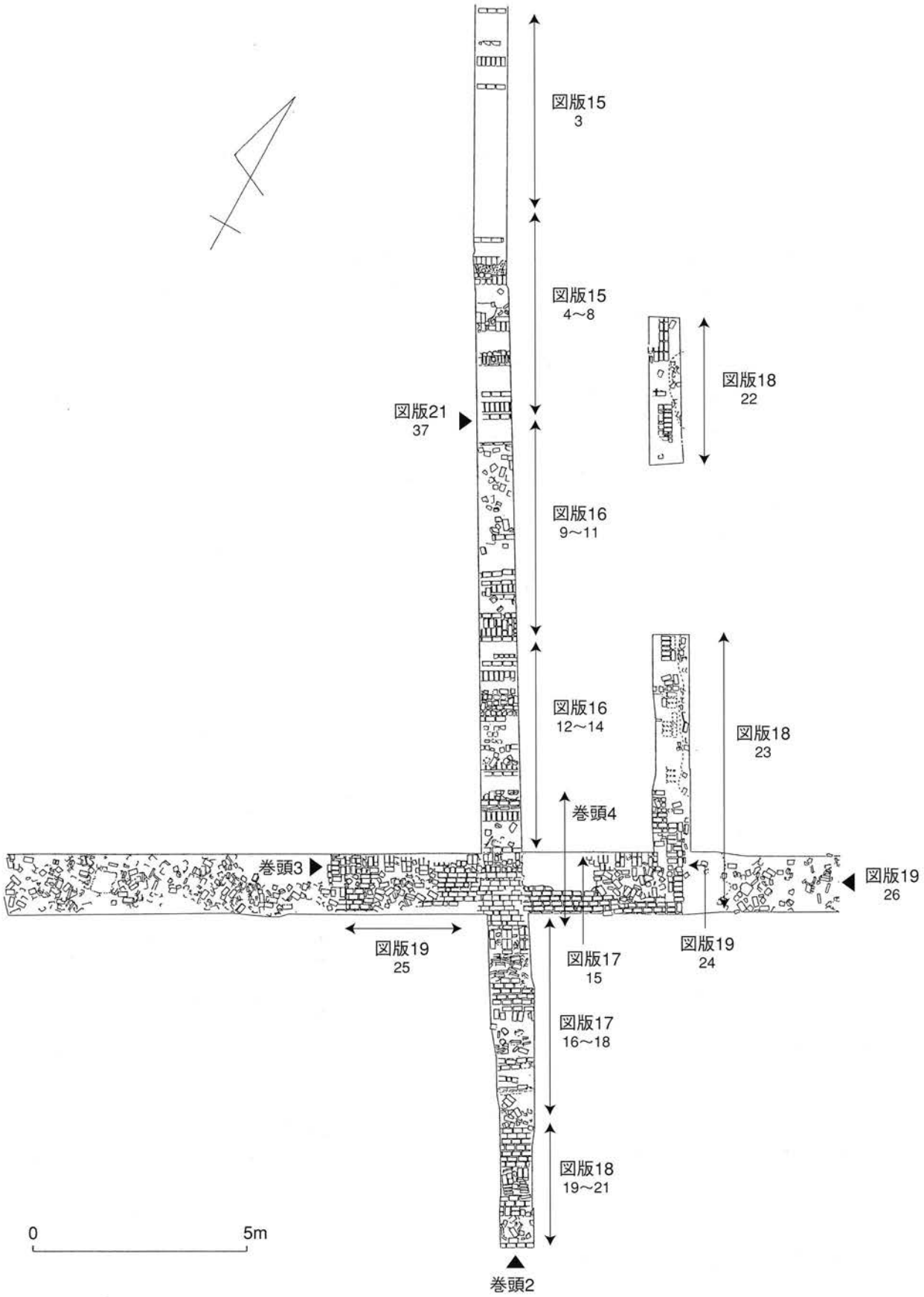
牧野遺跡第２地点

1　牧野遺跡遠景（北東から）
写真中央の白い建物が第３地点。左側に桂川が流れる。



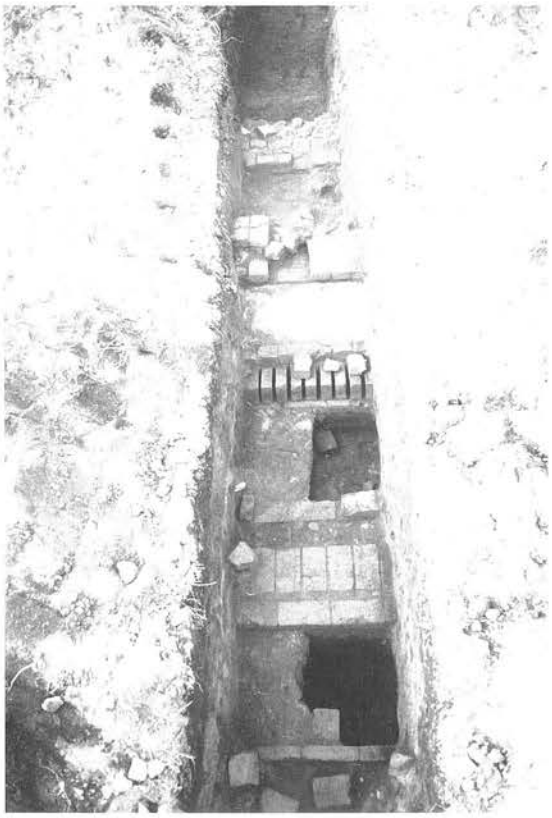
2　第３地点煉瓦窯発見地近景（南から）

図版14



煉瓦窯写真図版撮影位置図

3　トレンチ北側（南から）

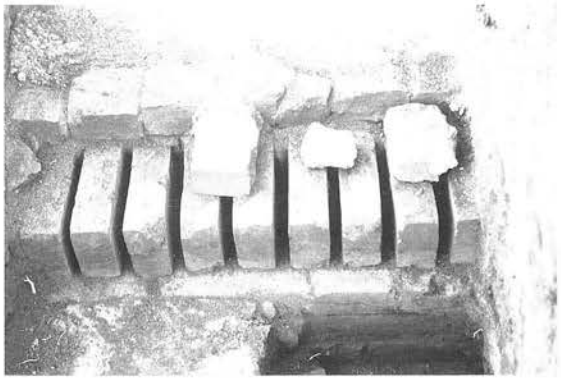


4　窯上段（南から）

5　窯最上段（西から）

6　窯上段（西から）

7　煉瓦配置状況（南から）



8　煉瓦配置状況（南から）

図版16

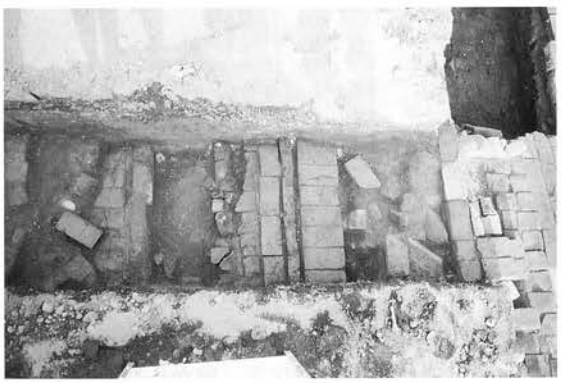
9　窯上段（南から）

10　同　近景（西から）

11　同　近景（西から）

12　窯中段（南から）

13　同　近景（西から）



14　同　近景（西から）

15　基底部断面

16　窯下段（南から）

17　同　近景（西から）

18　同　近景（西から）

図版18

19　窯最下段（南から）

20　同　近景（西から）

21　同　近景（南西から）

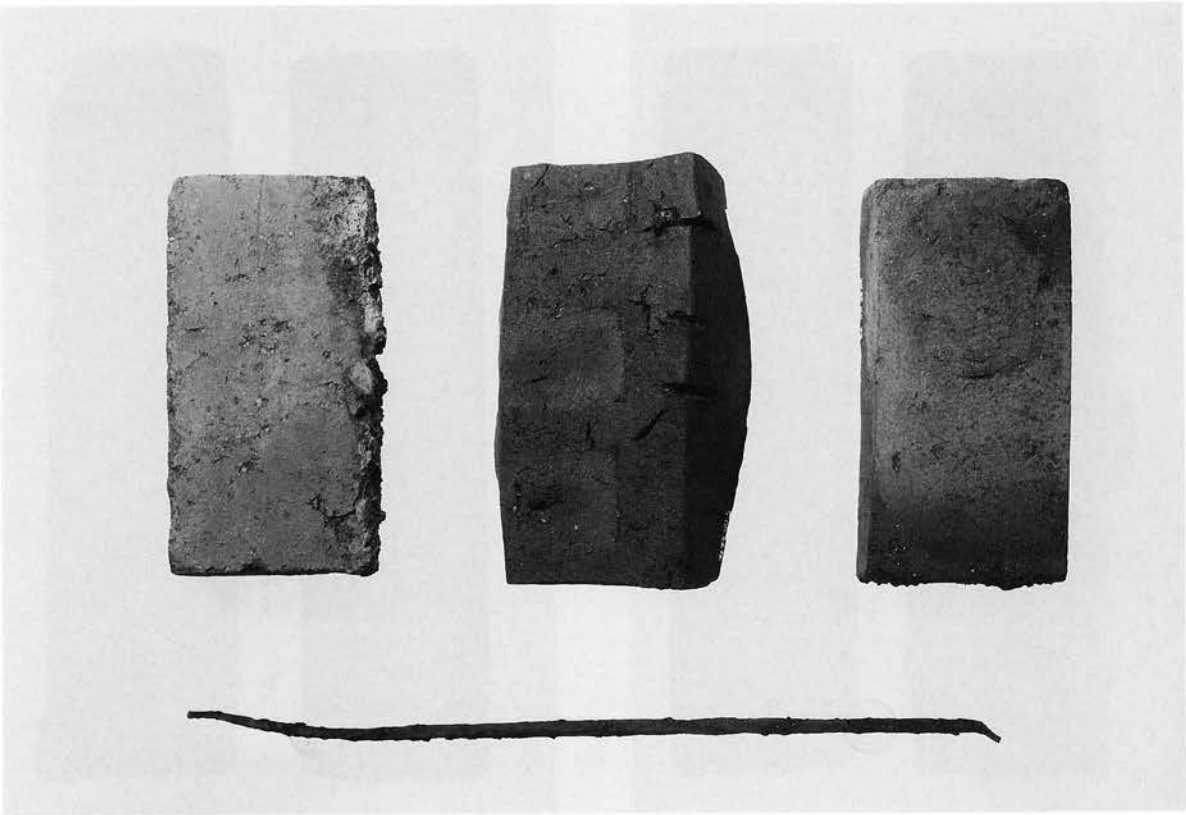
22　窯東端（南から）

23　窯東側（南から）

24　窯東端（東から）

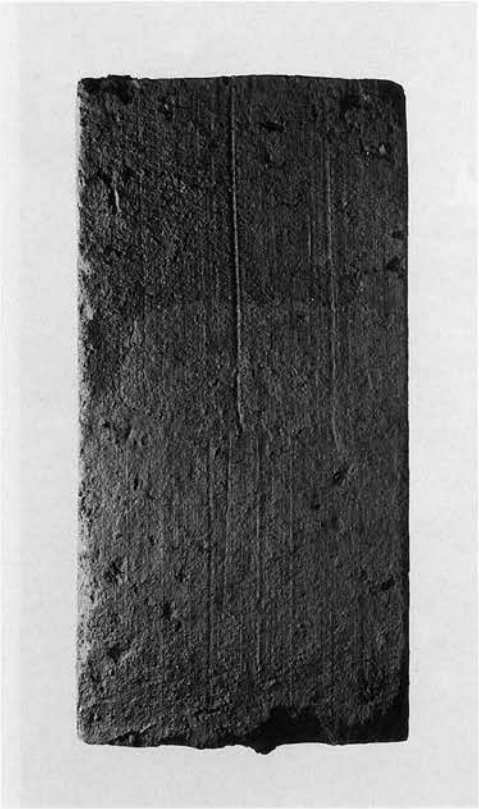
25　窯中段の床面状況（南から）

26　窯中段（東から）

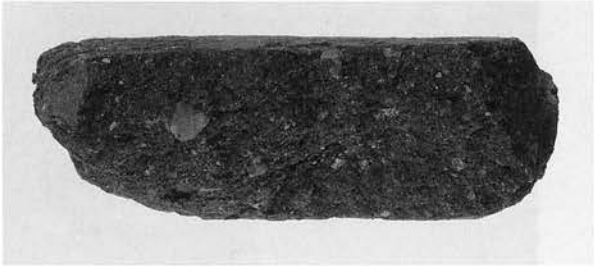


出土した煉瓦と鉄製品

図版20

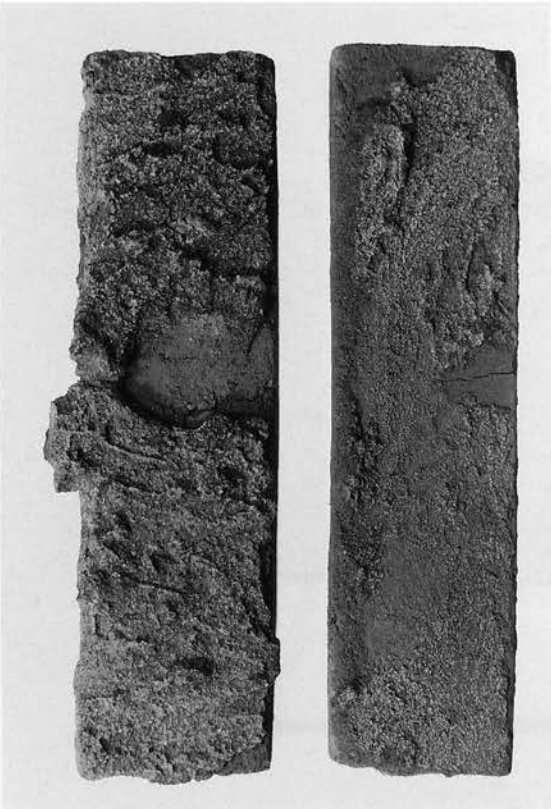


煉瓦表面の撫で付け痕

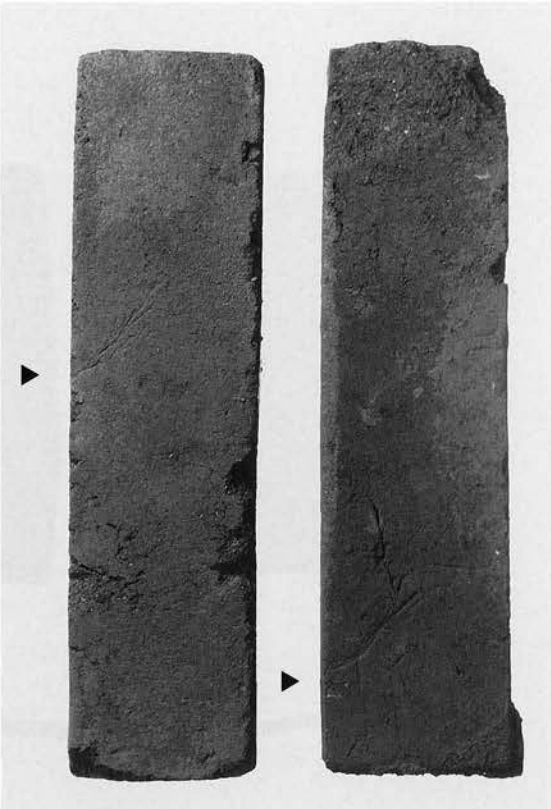


未焼成煉瓦の断面

刻　印



粘土塗布面



繊維圧痕

報告書抄録

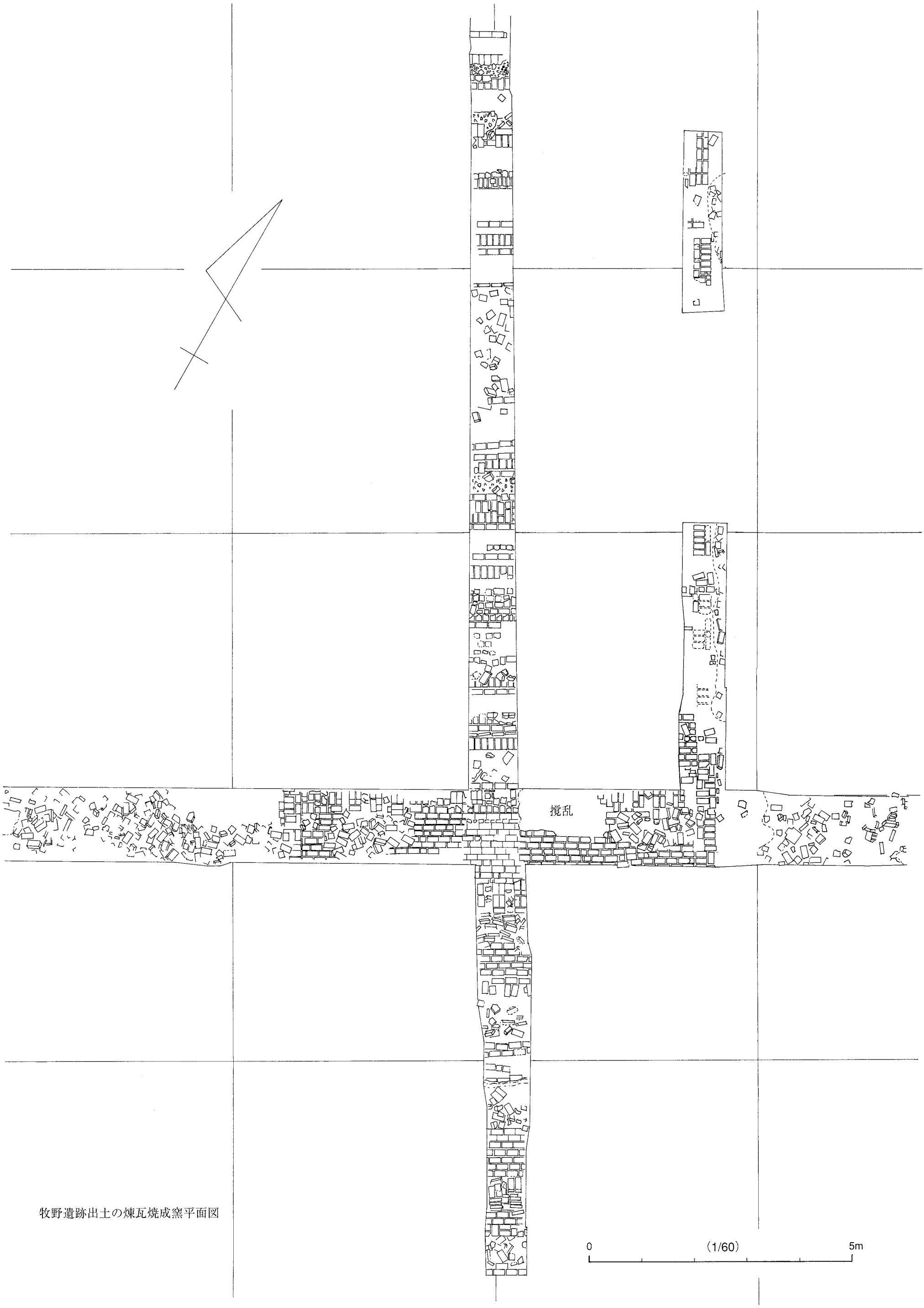
フリガナ	ヤマナシケンウエノハラシシナイイセキハックツチョウサホウコクショ
書　　名	山梨県上野原市市内遺跡発掘調査報告書
シリーズ	上野原市埋蔵文化財調査報告書第１集
編著者名	小西直樹
編集・発行	上野原市教育委員会
所在地	〒409－0112　山梨県上野原市上野原3832　電話0554－62－3111
印刷所	㈱サンニチ印刷
発行日	平成18年（2006）３月31日

遺跡名	所在地	経緯度	調査期間	主な時代、遺構・遺物
野田尻Ⅰ遺跡	上野原市野田尻378他	北緯 35°38′ 5″ 東経139° 3″47″	940919～941001	縄文時代、竪穴住居址・土器・石器
狐原Ⅱ遺跡	上野原市新田22－1他	北緯 35°36″59″ 東経139° 7″38″	961204～970128	奈良時代、竪穴住居址・土器
新井遺跡	上野原市上野原4511他	北緯 35°38″ 5″ 東経139° 6″24″	970918～970922	平安時代、竪穴住居址・土器
原・郷原遺跡	上野原市西原4666他	北緯 35°42″31″ 東経139° 0″56″	971006～971013	縄文時代、敷石住居址・配石・土器・石器
牧野遺跡	上野原市四方津407他	北緯 35°36″56″ 東経139° 5″29″	001102～001215	縄文時代、土器・石器。 明治時代、煉瓦焼成登り窯・煉瓦・鉄製品
根本山遺跡	上野原市上野原1364－1他	北緯 35°37″34″ 東経139° 7″ 5″	981002～981113	縄文時代、土器・石器。 時代不明、土坑
西ノ原古墳	上野原市大野5372	北緯 35°37″56″ 東経139° 2″45″	990426～990622	古墳時代、古墳石室
大間々遺跡	上野原市上野原3832－1他	北緯 35°37″47″ 東経139° 6″31″	001030～001106	平安時代、竪穴住居址・土器
裏大越路遺跡	上野原市上野原7806他	北緯 35°38″38″ 東経139° 7″21″	030303～030306	縄文時代、陥し穴状土坑・土器・石器
寺畑遺跡	上野原市上野原4014－7他	北緯 35°37″54″ 東経139° 6″25″	030916～030918	縄文時代、遺物集中部・土器・石器 古代以降、土坑。
当月遺跡	上野原市四方津979－1他	北緯 35°36″47″ 東経139° 5″ 3″	030929～031001	縄文時代、配石・焼土址・土器・石器

上野原市埋蔵文化財調査報告書　第１集

山梨県上野原市 市内遺跡発掘調査報告書

平成１８年（2006）３月３１日発行
編集・発行　上野原市教育委員会



牧野遺跡出土の煉瓦焼成窯平面図